
小さな祈り

早稀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

小さな祈り

【Zコード】

Z5946C

【作者名】

早稀

【あらすじ】

高校一年生の「俺」こと晃彦は、帰宅部、彼女なし、バイトあり、という平凡な日常を生きる小市民的少年。文化祭実行委員に半ば強制的にさせられたことから、彼の日常がひつそりと変わって行く。学校のスターにして別世界の住人・綾華さんや、中学生からの同級生なのに接点が無かつた由紀とともに、仕事に、恋に、調子に乗つたり凹んだりの日々が始まる。

俺は高校に入るとすぐにバイトを始めた。
バイト先は親父のつてで知り合った、同じ高校のOBが勤める会社。

ガテン系の、肉体労働ね。土木作業つてやつ。

中学出たばつかの貧弱小僧でも、現場にはこまごました作業も多いから、手先が器用な俺は意外に重宝がられた。

作業員はけつこうじいちゃんが多くて、若いってだけで重宝されてたかもしれない。道具の使い方とか現場の手順とか、じいちゃんたちに比べれば全然覚えるの早かつたから。

まあ、夏休みになる頃にはかなり体も鍛えられてきたけれどね。

バイトの目的はパソコン。

昔から憧れてたけれど、親は買ってくれない。

欲しけりや働いて買え、と中学生の俺にも本気で言つてのける親。實際、パソコン買う金なんかうちには無かつたし、本気で欲しい物があつたら働いて買わないと、という覚悟は、ガキのころからあつた。

入学早々、親父が、緊急工事で土日でも現場がある会社で、知り合いが人手を欲しがってるというネタを仕入れてきた。俺は迷わずその知り合いという人に連絡を入れてもらつた。

バイトは体的にはかなりきつかったけれど、楽しかった。バイト先のOBさんにも可愛がられてたし。

クラス屈指の貧弱君だった俺だけれど、中3の頃から伸び始めた背に、バイトの肉体労働で筋肉が追いついて行く感じで、自分でも、ひょろかつた体が少しづつがっしりしていくのがわかつて、うれしくて筋トレまで始めたりした。

小児喘息だつたから、それまで体を鍛えるとかいう発想がそもそも無かつた。

肌が白くてひょろいから「幽靈」とか言われてた俺が、いつの間にか現場焼けに薄くても筋肉が付いた体になつた夏休み近く、ついに念願のパソコン購入。

デスクトップの安いモデルだけれど、すげーうれしかつた。

親をひたすら口説いて光を導入させ、その親がPC禁止令出すぞつて脅すほど、毎日ネットにふけつてた。もちろんHロサイト巡回が多かつたわけだが。

現場とPCの前とベッドの中で一日が終わるような微妙に寂しい夏休みを終えると、俺はガテン系のネットヲタクという、よくわかんない物体になつていた。

俺がバイトしてたところ、じいちゃんも多いけれど、なにしろ田舎だから、ヤンキーも多かつた。いわゆる不良、ね。元族の人も現役もいた。

OBの人、カケスさんも元はぱりぱりのヤンキーで、俺が入学した頃でもうちの高校じゃ有名人だつた。そんなにレベル高い学校じゃないけれど、周り見たら不良ばっかって程でもないから、カケスさんクラスのヤンキーはかなり珍しかつたらしく。

この頃はもう2児のパパで、いい人だつたから信じられなかつたけれど。

うちの親父は別にヤンキーでもなんでもないけれど、カケスさんは前に親父と同じ会社に勤めていて、めちゃくちや世話になつてたんだといつ。

確かに俺が中学生の頃も、よくうちに麻雀しにきてたから、仲は良かつたんだろうけれどね。

で、カケスさんはなぜかうちの親父を尊敬していて、それもあって俺のことをかなり可愛がってくれてた。

それがなぜかうちの高校のヤンキーたちにも知られるようになつていて、

「カケスさんの義弟」

みたいな捉え方をされていたらしい。後で聞いてびびった。

そのおかげで、俺は喧嘩なんかしたこともないヘタレなのに、同級生の不良どころか、3年のヤンキーにまで親しまれるという、ちよつと恐ろしい状態になつていた。

高校生活での力関係つて、中学生の頃より、外の力が影響する。なんことはわかつっていたけれど、おとなしく隅っこでささやかに生きていたい俺としては、かなりストレスのかかる状況になつてた。目をつけられずにする利点はあるけれど、それ以上に、ヤンキーたちのやばめな日常につき合わされるのはきつい。

いきなり始まつた喧嘩に付き合わされた時は本当に怖かった。連中、俺が部外者だとと思つてないし。

傍観しようとしていると、いきなり殴りかかってきたりする。夏休み明けしばらくしてからだったと思うけれど、そういう喧嘩に巻き込まれて、何発か殴られたこともあった。顔一発、腹とか腕に何発か。

翌日熱出たけれど、母親が心配するのがうざかつたから無理して学校行つた。

そしたら、なんか周囲の見る目が変わつてた。

ただのおとなしいやつじやない、キレると怖いらしい、みたいな噂があつた、と知ったのは怪我も治りかけたころ。小学生の頃から連れが教えてくれたところによる。

なんでも、その喧嘩で俺が相手したやつが、わりと喧嘩の強さで知られていたらしい。

カケスさんに色々やりかたは教わっていたから、それに従って、でも目の前が真っ暗つてくらいぶつ飛んだ意識で死に物狂いで反撃してたんだけれど、実は喧嘩のことはよく覚えてなかつた。

それだけ怖かつたんだけれど、相手は俺の前に一人相手してて、疲れてたところに俺の相手で、予想外の狂つた攻撃に呆れたのか、それともカケスさんの「親父さんには内緒な」という指導がよかつたのか、一応俺が勝つたつて事になつた。

生まれて初めて喧嘩した結果は、周囲にヤンキー認定されるという嬉しくないオマケつき。

それでも俺がヤンキー街道をひた走らずに済んだのは、まずは俺がヘタレだつたこと。

喧嘩なんか一度としたくないつて思つたし、巻き込まれるのも勘弁。

それから、DQNカコイイ！ とか思つたことは一度も無かつたつてのもある。

あからさまに不良ですつてかつこしてた同級生を呼び捨てで呼ぶのつてかなり抵抗あるけれど、俺は普通に呼べた。だって、連中の方がそれでいいよつて雰囲気になるんだから。

そのせいで連中のグループの人間みたいに見られることもあつたけれど、でも決定的な違いがあつた。

今、こうして文章書いてるけれど、これ。

文章書くことに抵抗感がなくて、それがひそかに自慢だった。
何か取り得があると、人間なかなか墮ちては行かないようで。落ちこぼれの逃げ込む先というヤンキーの姿に、あはなりたくないつて思つていた。

今考えると嫌な奴だけれど、でもその考え方があつたから、俺は

そこそこ勉強も頑張つたし、不良との付き合いも距離感を保つていられた。

一学期も後半になると、夏休みデビューした奴が結局落ち着いてみたり、逆に弾けてみたり、夏の恋が終わつて次の恋を探す奴が出てきたりして、色々と人間模様が面白くなる。

俺はというと、喧嘩騒ぎ以来の不良デビュー説も「なんかやつぱ普通じやん」と薄れはじめ、恋があるわけでもなく、地味で波風の立たない生活に少し物足りなさも感じつつ、でもそれが心地良かつたりという毎日。

進学校じゃなかつたから、校内行事がわりと多めなうちの高校。伝統的に校内行事には本気で取り組む空氣があつて、梅雨前にあつた体育祭も異様に盛り上がつてた。

特に、名物なんていわれてる騎馬戦。毎年病院送りが出るという恐ろしい競技で、今年も一人骨折者が出ていた。

それでも学校側がプログラムから削除しないのは、なにしろ地元のO.Bたちがそれを楽しみにしていたから。O.Bの市会議員たちが腕組みしながら見物していれば、学校側だつて簡単に中止できないらしい。さすが田舎。

一学期後半になると、今度は文化祭の準備で盛り上がりがつてくる。その盛り上がりも、帰宅部で委員会活動にも参加していない俺にはあまり関係がなくて、素通りできるはずだった。

そういう中に入つていけないのは寂しいけれど、だからといって自分から手を上げて入り込むとする積極性も無かつた。

「麻雀しねー？」

というヤンキーの誘いを受けたり断つたりという生ぬるい日常の中に埋没していたし、休みの日は相変わらずバイトをしていたから、平日くらいだらだらしていたい、という矛盾したことばかり考えていた。

帰宅部の学生の平日なんて、だいたいそんなもんだと思つし。

そんな事もいつていられなくなってしまったのは、いよいよ本格的に文化祭準備が始まろうとしていた頃。

うちの学校では、クラスから一人、文化祭の実行委員というものを選んで、生徒会に差し出すのが決まりになつていて。クラス委員二人のうちの一人も同時に差し出されて、生徒会執行部の手足となつて働かされる。

だいたい文化部員は部活にかかりきりで実行側に回るなんて不可能で、体育会系だってその時期は何かしら大会があつたり、文化祭に独自の企画を持ち込んだりで忙しい。

生徒会だって部活持ちが多いから、どうしても手薄になる。

そこを、帰宅部の人数で埋めようというわけだ。

なんか嫌な予感はしていたけれど、見事的中。

「どうせお前放課後とか暇だろ」

という担任の鶴の一聲で、俺は文化祭実行委員という称号を頂戴するはめになつた。

そりや暇だけれど。

文化祭実行委員の初会合は、雨の金曜日。

自転車通学の俺にはきつい天気で、多分帰りは田も落ちてしまつて、一層みじめさに拍車がかかるだらうなつて簡単に想像がつく。場所は生徒会室じゃ手狭だということで第2会議室。特別教室や職員室が入っている校舎。

俺が入ると、もう席は半分くらい埋まつていて、黒板の前に並んだひな壇には、生徒会長を初めとする生徒会執行部幹部の人々。俺とは縁もゆかりも無かつた人々。

まだ会議前ということで、私語が禁止されたりしているわけではないけれど、微妙な緊張感が流れていた。なんでだろう、と思いながら、空いている席を探す。

みんなそれぞれに隣がいなさそうな席を選んで座つたようで、両隣が空いている席は無い。仕方なく、知つていそうな人を探すと、いた。会議室に並ぶ長い机の列、その後ろから3番目に、隣のクラスの女子。

「渋谷さん、隣、いいかな」

声をかけられた方は、びっくりしたように顔を上げた。

「あ、ああ、晃彦くん」

俺は1年4組、渋谷由紀は3組。中学が一緒だった。

「……どうだ」

同じクラスになつたことはないけれど、口をきいたことがないわけでもない。体育祭の時は合同のチームだったし、共通の友達もある。

「じゃ遠慮なく」

俺のことを名前で呼ぶのは、別に親しいからじゃない。うちの田舎には掃いて捨てるほどいる「佐藤」という苗字のおかげで、佐藤姓の人間は容赦なく名前で呼ばれる。この会議室の中にも何人か佐

藤がいるはず。

俺が座ると、渋谷さんは居心地悪そうにすの上で身じろぎした。急に俺みたいなのが隣に座っちゃって、悪かったかな、と少し自己嫌悪に陥りかける。

そこで、部屋に流れる緊張感の正体がつかめた気がした。そりゃ、わほど親しくもない人間がじいちゃんじいちゃん集まっているからか。

渋谷さんはあからさまに俺をつとましがることはなかつたけれど、それでも何となく強張つてこようのような気配が伝わってくる。かといって、別の席を探しに行くのも、今さら難しい。

仕方無い。

今日一日へりこは、居心地の悪さに耐えよう。渋谷さんは迷迷惑かもだけれど。

渋谷さんは、黒いまつすぐな髪を伸ばして、前髪は眉にかかるないうらいのところでそろえている。化粧つけもなく細い銀フレームのメガネをかけている姿は、どこを切つても地味という印象。あるいは、おとなしい優等生。

色が白くて顔立ちも整つてこゆから、渋谷さんさえその氣になれば、男子を手玉に取るくらいのことは簡単にできそつだけれど、中学生時代から今まで、彼女が男子とともに喋つてている姿を見た記憶が無い。

引っ越し思案、とこうやつか。

同じおとなしい系……とは最近周囲は見てくれなくなつたけれど、自分ではおとなしい系だと信じてこいる俺も、今までそういう渋谷さんに興味が湧かなかつたわけじゃない。高校に入つて、中学時代よりずっときれいになつたような氣もしていたし。

でも、なにしろ縁が無かつた。さすがに、ちょっと口がきけたくらいで「こいつ俺に気があるんじゃねーの」「とか「実は運命の『』」とか考えられるほどめでたい性格でもない。

机の上に並べてあるプリントの類をペラペラとめくしながら、何となく黙つてこると、それが気まずかったのか、渋谷さんが口を開

いた。

「……晃彦くんも、押し付けられたんですか？」

よほどつまらなさそうな態度に見えたのか、そんな事をいつ。俺はちょっとびっくりした。渋谷さんから話しかけてくるとは思っていなかつたから。

「うん。そういうことは、渋谷さんも？」

行儀悪くズボンのポケットに突っ込んでいた左手を出して、座り直しながら聞くと、渋谷さんは髪を揺らしながらこくりとうなずいた。

「帰宅部だから放課後は暇だらうつてさ。いい迷惑だ」

「そうですか」

「渋谷さんも帰宅部だっけ」

「は」

そう、敬語が彼女の癖だつた。

「まあ、どうせ言われたことやつてりやいいんだらうつから、適当にサボつて気楽にやうかなつて思つてゐけどさ」

「はい」

自分から話を振つた割りに、受け答えは短い。その上声も小さい。そもそも俺を見てない。

隣に座られてうつとうしいのかな、ならシカトしてくれた方が気楽なんだけどな、なんて思つたり。

俺が黙つたら、渋谷さんも口を閉じた。

一人してプリントを見ながらじつと時間が過ぎるのを待つてゐるなんだか気が重い。

定刻になつた頃、会議室はほぼ満員。人数分の席しか準備していないらしい。

俺の右隣は渋谷さん、通路を挟んで左隣は空席。

そろそろかな、という感じで、ひな壇の生徒会長たちが動きかけ

たとき、その左隣の席に遅刻寸前のタイミングで人が現れた。

何となくそつちに視線を移す。

うつむき加減で動いた視線の先に、まず短いスカートの下に伸びる白くて細い足が飛び込んできた。

ちょっと驚きながら、目は上へ。

指定の制服では絶対にないグレーのポロシャツ、その上にノースリーブのパークーを羽織ったその姿は、俺とは別世界の人種。ギヤル系。ブレスが光る手首と指輪が、住む世界の違いを見せつける。

人をじろじろ見る趣味はないから、俺はそこで視線を外した。

それに、それが誰だか、顔を見なくてもわかつた。校内では有名な人だ。

2年の永野綾華さん。

美形で、派手で、社会人の彼氏もちで、友人関係も華麗で、度々教師と衝突しつつ、それでも成績だけは落とさないから学校側もあまり強くいえない、という無敵な人。

ここまで世界が違うと、たとえば俺みたいな一般大衆の男子は、憧れの感情すら持たない。異次元の人。遠くから鑑賞することはあっても、同じ空気を吸っている人間という実感は持てない。

当然、口を聞いた事もなければ、そもそも声を聞いた記憶が無い。だいたい、見なくとも、ろくに知らないはずの俺ですら雰囲気でわかつてしまふこの存在感。

スターとかカリスマとかいうのって、こういう人のことをいうんだろうな。

生徒会長を初めとする人々、あまり気合が入っていない感じ。

文化祭が、事実上最後の仕事になる今期の執行部のはずだけれど、学校行事が盛んなのに、生徒会は活気が足りないというのが俺の実感。

生徒会の顧問をしているわが担任も、いつだつたか嘆いていた。

「自分たちの生徒会なのに、どうしてこうやる気がないかねえ」

んなこと1年の俺たちにいわれても、とその時は思つた。生徒会

役員を出していない1年生じゅ、がんばりようがない。

文化祭の仕事はプリントの中にあるチェックシートやタイムテーブルで把握できるから、この会合はここに来た時点で終わっているようなもの。だらだら説明をしている執行部の面々をぼんやり見ていてもつまらない。

むしろ、この人たちのやる気の無さと、それでも運営できている生徒会について考える方が面白かった。

そんな事でも考えていないと、隣にいる渋谷さんが、やっぱり俺なんかが横にいたら居心地悪いだろうなあ、とか、逆隣にいる永野先輩はやっぱ俺の事なんか虫けらくらいにしか見えてないんだろうなあ、とか、鬱になることしか頭に浮かんでこない。

まず、この会議の無駄さ。

なにしろ、配付したプリントを執行部の面々が順に読み上げていくだけ。特別なコメントが入るわけでもなく、声も小さくて後ろにいるとよく聞こえない。

集まっている人数は、一学年8クラス、全学年で24クラスからクラス委員一人のうちどちらかと文化祭実行委員一人の一人ずつ、計48人プラス執行部10人ほど、といいたいところだけれど、うちのクラスはクラス委員一人がどちらも手が離せなかつたということで俺だけ出席、そういうクラスがいくつかあって、でも総勢50人くらい。

これだけの人数を集めておいて、なんでこんな会議なんだろ。誰かが意見をいうわけでもなく、時々ひそひそと私語が目立つくらいで、異様な盛り下がりぶりを見せる場内。

最後列に近い席から見回すと、誰もが、自分が文化祭を背負つて行くんだという覚悟を担つた背中じゅない。どう見てもお客様。バイト先で、たとえばカケスさんたちが見せてくれる、自分が仕

事をするんだといつ责任感を漂わせた背中とは、比べものにならない。そりや社会人と高校生を比べちゃいかんだりうにしても。

俺もやる気なんかかけらもない。それにしたって、中心になるべき執行部まであの覇氣の無さってのは、やばいんじゃなかろうか。

なんて思つていたら、両隣で同時にため息がもれた。右の渋谷さんはひつそりと、左の永野先輩はわざとらしいほど大きく。大きいため息に引っ張られて、左に注意を向けてみると、永野先輩は、貧乏搖すつこそしないものの、この退屈な会議に明らかにいらだつている。

まさか爆発はしないだろうけど、ちと怖い。同じ机で並んでいる逆隣の人、ご愁傷様。通路を挟んでいる、この偶然に感謝。

それから右に注意を向けてみると、渋谷さんは頬杖をついてタイムテーブルのプリントに落書きをしている。何を書いているのかと目だけを動かしてのぞいてみると、視力2・0の俺の目に、やけに上手いアンパンマン。その隣に食パンマンがあるということは、そつちを先に描いていたということか。

落書きに選ぶ題材が微妙なら、描く順番も微妙、しかもあの尋常じゃない技術。

なんて恐ろしい子……！

退屈この上ない会議が終わると、俺はなんなく渋谷さんと一緒に言った。

なんとなくつてのはちと違うか。

渋谷さんと俺は、文化祭実行委員の仕事の割り振りで、同じ仕事を担当になつた。各クラスで開かれる企画物の管理担当。責任者は一人いる副会長のうちのひとりで、伝統的に一人は三年生から、一人は二年生から選ばれる副会長のうち、二年生の先輩。その人を中心に話を進めて行くんだけれど、今日は顔見せだけだつた。全体会議が長すぎたからだ。

正直、授業をまともに6限食らつた後での会議はしんどかった。この上、担当者会議までやるなんて言い出したら、たぶん全員怒るか無言で帰つっていたと思う。

席が隣で仕事も一緒になつたから、その流れで俺は渋谷さんと一緒に歩いていた。

校内は部活上がりの生徒たちがうるさいしていたりして、それほど寂しい様子でもなかつた。俺たちは肩を並べるようにして、だらだらと自分たちの教室に向かつて歩いていた。なにしろクラスが隣だから、向かう方向は一緒。

「クラスの企画を管理するつていつたつてさ、企画を審査するのは執行部だし、予算管理は会計係だし、別にやることないじゃんなあ」「ちんたら歩きながら、プリント眺めていて会議中に思つたことをいつてみる。

渋谷さんは、真ん中よつ少し後ろ、といつ身長順だから、それほど小柄とはいえないけれど、うつむき加減で歩くから実際より小さく見える。

「雑用係、でしょうか」

小さく首をかしげながらこう。

「ありそつ」

たぶん、そういうことなのだろつ。

各クラスへの資材の貸し出しやその管理は、基本的にはクラスが自分たちでやることになつてゐる。でも、その書類を作つたり、チェックしたりする人間は必要。そういう意味での管理だつたら別に構わないけれど、たぶん、それだけじゃ終わらないだろつ。

「どうせ自分らで管理するなんて約束、どこも守らないだろつ。結局俺らが全部やつた方が早い、みたいな感じになりそう」

だとすると、書類作りはわざと済ませてしまわないと、後で必要になつてから、なんて考えていたら追いつかなくななりそうだ。

「各クラスの企画が出来た前にも書類作つて、使い方の簡単なマニュアルも作つちやつて配付して、ついでに自分たち用のチェックリストも作ろうか」

俺は、考えてこゝ事をそのまま口に出しながら歩いた。俺がしゃべつていないと、渋谷さんはきっと一言も喋らないから。
気まずいからな、そういうの。

「資材のリストは去年のがあるけど、数とかチェックしなきゃいけないし、そのあたりもちやけちやけと終わらせないと、後が怖そだね」

もうすぐそこに渋谷さんの教室。その奥が俺の教室。

「新規購入分の予算配分なんかはどうなつてるんだろつ。購買分は会計と相談なのかなあ。確認しとかないと」

渋谷さんの教室の扉がすぐ横に来た。

もうこれで今日はお別れだと思つたから、俺はひょりやく渋谷さんを見て、「そんじや今日はお疲れ」とでもあこがれつて行つてしまおうと思つた。

渋谷さんは、顔を上げていた。俺を見ていた。整つてはいるけれど表情にだしそうな顔が、微妙に変わつていて。

「そんじや……どうかした?」

思わず俺があせると、渋谷さんはさつと視線を外してうつむいた。

「……ううん、すういなあ、と思つて」

「なにが？」

何かすごいことをしてしまっただろ？か。とりあえず自覚は無し。

「仕事、できる人なんだなあって」

「始まつてもいいのに、んなのわかんないだろ」

「ううん、始める前からそうやって仕事の先が読めるの、すういと
思ひます」

渋谷さんは聞き取りにくくない限界の小声でいう。

「ああ」

そういうことか、と俺は納得した。

「バイト先でさ、ううんやつて仕事の先を考えてる人がいるんだ
よ」

親父の友達でバイト先の社員、カケスさんのことを考える。

土木工事の監督さんは「段取り8割」だ、とカケスさんはよくい
う。事前の段取りがきちんとできれば、仕事は8割方成功したよう
なものなんだって。

「後で苦労するのが嫌なら、とかいう問題じゃなくてさ、大人が仕
事やつって、段取りが上手くいかなくて失敗したら、自分以外の他
人に迷惑がかかるだろ。金だってばかばか出て行くし、土木工事な
んかだと下手すりや死人が出る」

だから、仕事に責任を持つ人間は、始まる前にきちんと手順を考
えて、準備して、問題が起つてもわたわたしなくて済むようにし
てないといけない。

カケスさんはたかが高校生の俺に、そんな事をよく話してくれる。
まあ、ちょっとうざい話なのも事実だけれど。

一人で廊下の端に並んで立つたまま、俺たちは話を続けている。

「……でも、自分で選んだ仕事じゃないですよね、実行委員も、ク
ラスの管理担当も」

渋谷さんは、プリントを挟んだルーズリーフを抱くよつとして持
ち、まだうつむいたまま話している。

「なのにやめられた仕事の」と考へてゐる

「うーん」

それってすごいことだったのか、と、ちょっと俺は感心した。
それが当然だと思っていたから。

というとかつこつけていいるみたいだな。

「確かにそうだけどさ、実行委員だつて断らうと思えば断れたんだ
し。それをしなかつたんだから、やる」とはやんないとなあ」
それに、と俺は付け加えた。たぶん、これが一番本音に近い。
「誰かにいわれて動くだけなの、俺嫌いなんだよね。バイトで大人
に囲まれて仕事してるとか、学校で高校生」ときに使われるの、な
んかむかつくんだわ」

そういうと、渋谷さんばびっくりしたように俺を見た。

「……そういう物の見方もあるんですね」

不思議な感想を漏らすと、渋谷さんはまたうつむいて、
「バイトしてるの、すごいですね」

とつぶやいた。

「すごいかなえ」

単にしがらみなんかもできりつてしまふ、やめにへくなつてるだけ
なんだが。

休日の俺は勤労少年なわけで。

会社が暇な時はバイトの俺なんかいてもかえつて邪魔だから、呼ばれもしないで休みになる。でも秋になると工事関係は忙しいようで、土日祝日は入れるだけ入って欲しい、と頼まれていた。

体的にはかなりきつかったけれど、慣れつてのは怖いもので、毎週末にぼろ雑巾になつても、次の週末には「さあ、ここからが今週の本番だ」みたいな気合が入るようになつていた。

その分、学校があるそかになりがちで、月曜日なんかは本氣でサボろうかと何度も思つた。

サボらず遅刻寸前でもどうにか通つていたのは、親や教師に何か言わるのが嫌という小心からで、学業が学生の本分だと考へていたわけじゃない。

まあ、自転車で10分もこげば着いてしまつところに学校があれば、それほど通学に苦労なんかない。

それはともかく、文化祭の会議があつた翌日の土曜日、天気も回復して残暑の名残のように蒸し暑い感じになつたその日、俺はとなりの街にいた。

現場は片側2車線の国道。その横にある小さな道、側道といふらしいけど、その側道と国道の歩道との間にある細くて掘つたままの水路を、コンクリート製の水路に直す工事。

生い茂つたやけに背が高い雑草をかき分けながら、高さを測つたり幅を測つたりしていたのは夏休みのこと。今では水路はすっかりコンクリート製に変わり、今日はそこに蓋をかける仕事だった。

監督は力ケスさん。俺は完全に力ケスさんチームの一員で、朝7時半過ぎに会社に着くと、何もいわれなくとも機材を現場車に積み込んで、後部座席の荷物に埋もれるようになりながら乗り込むのが当たり前になつていて。

社員の人や作業員のじいさんたちに、「お前、進路の心配だけはねーな」とかいわれる始末。

一応進学したいんですけど、ぼく。

「冗談抜きに、お前、卒業したらうち来いよ」

社長の息子さんは会社で営業をしていて、つい最近そういうわれたりもしている。

「工業高校じゃないから資格取れないですよ」

と答えたら、

「んなもん少し勉強すりゃ誰でも取れるから」と返された。

土木業界はどこも厳しいはずなんだけど、使える人間はやっぱり確保しておきたい、特に若手で使えそうな人間は減ってきているから、今のうちにつば付けときたい、というのが息子さんの考え方らしい。

カケスさんがそういっていた。

「ジユニアのいうこと、真に受けるなよ」とカケスさんはいう。

「お前、大学行きたいんだろ?」

「ええ、まあ、行ければ」

「行つとけつて。俺みたいな頭悪い奴じゃどうにもなんないけど、お前頭いいんだからさ。親父さんだつてお前が大学入つたらすぐえ

喜ぶぜ」

「はあ……」

カケスさんはもともと地元じゃ有名な不良だった（当時はバリヤンといつたらしい）けれど、今じゃ俺のことをこんな風に考えてくれる、真面目ないい兄貴みたいな人。

「勉強の邪魔になるんなら、こんなバイトすぐ辞めちまつていいいんだからな。まず自分のこと考えろよ。お前人がいいから、頼まれると断れねえから心配なんだよな」

昼前、俺は自動的に仕事から外される。
使いつ走りをするためだ。

現場が車でも使わないと買い物もできない場所だつたら別だけれど、今日はすぐ近くにコンビニもある。そうなると俺の出番。お茶やら弁当やら雑誌やらの注文を取つて、お金を預かって、メモをポケットに入れて歩き出す。

コンビニに入ると、外の蒸し暑さが嘘のように涼しい。もう一ヶ月にも入ろうつて時期にこれだけ暑いと、コンビニの涼しさがあらためて天国に感じられる。

かごを持つてさつさとメモに書かれたものを集めてしまつと、自分のお昼を選ぶ。

から揚げ弁当ととんかつ弁当のどちらにしようか迷つていると、ふと、となりでサンディッシュを手に取つた背の高い女性と目が合つた。

あ、と思つた。

私服で、帽子をかぶつていたから、とつそにはわからなかつた。でも顔を見てわかつた。

永野先輩だつた。うちの学校の有名人、高嶺の花の象徴、そしてちと怖い人。

ピンクのチェックのウェスタンシャツと黒いキャミソール、ミニのデニムスカートにスウェードのブーツといつ格好。細いネックレスを重ねがけしていて、胸元できらきら光つている。

「あ

と、先輩も俺の顔を見て声を上げた。

じつは、会議のあと、渋谷さんと肩を並べて教室に戻る前、永野先輩とは言葉を交わしていた。

実行委員のそれぞれの担当が決まって、俺と渋谷さんはクラス企画の管理担当になつた。

その同じ担当に、永野先輩もついていたんだ。

それは偶然といつわけでもなく、要は、永野先輩が2年の4組で、俺も4組、クラスごとに仕事を割り振つた結果、そういうことになつた。

クラス企画担当は1年と2年の3組4組の実行委員。

永野先輩が、もう一人の2年生が担当のリーダーにならなきやいけないけれど、どちらも渋つた。当然だけれど。

「わたしはやだから」

あからさまに不機嫌に宣言した永野先輩は、いつも潔い。

もう一人の2年生は男子で、永野先輩とは明らかにそりが合わない感じ。俺以上の小心者という印象で、正面切つて永野先輩に何かいえる雰囲気じゃなかつた。

もちろん俺も渋谷さんも永野先輩に何かいえるはずもなく、「適当にやつてよ。手が必要なら手伝つくらいはするけどさ」とのたまつ永野先輩のいうことを、黙つて聞いているしかなかつた。

といって、しょぼんとしている先輩も渋谷さんも、このままの状態だとかわいそうな気がする。仕事始めの前からこんな有様じや、俺も氣分が良くない。

なんとなく、仕事モードになつてしまつた俺は、あまり深く考えずに口を開いていた。

「リーダーがどうとかはともかく、手分けしてやりましょうよ。誰かが犠牲になつて仕事抱え込むんじや、寝覚めが悪いし」

俺がそういうと、永野先輩は少し意地悪そうな顔になつた。

「じゃああんたがリーダーやんなよ。寝覚め良くなるよ?」
かちん、ときた。

俺は小心者だけど、人に苦労押し付けて平然としていられるような下衆に笑顔をくれてやれるほどの間抜けでもない。

あんた、という呼ばれ方もむつときた。

「こき使いますよ。わざわざ指名するくらいだから、従つてもうられるんでしょ？」

今考えると、よくまあいえたもんだけれど、その時は一瞬で頭が熱くなつていた。

永野先輩は驚いたような顔をした後、落ち着けよ、とでもいわんばかりに笑つた。

「オッケー、従うよ。じゃリーダーはあんたって事で」「構いませんよ。先輩もそれでいいですか」

と、俺は萎縮しきつている男子の先輩に聞いた。先輩は小さくなつたまま、うなずいた。渋谷さんは無表情なまま、俺と永野先輩とを見比べていいようだつた。

「とりあえず仕事がどんなもんだか全然わかつてないんで、今指示出せつていわれても困ります。だから今日は解散といつこといいですか」

俺は一刻も早く永野先輩から離れたくなつていたから、とつとと終わらせることにした。

「さんせー」

永野先輩は能天気な声を出して右手を上げた。

なんか上手く乗せられてしまつたような氣もするけれど、やる氣が無い人の相手はむかつくばかりだし、この後渋谷さんと一緒になつていたときに話した、「学校で高校生」ときに使われるの、なんかむかつくんだわ」という気持ちもあつたから、リーダーになつたこと 자체はどうでも良かった。

「それじゃ解散しましょ。次のミーティングとかは、後で連絡しますんで

「よろしくー」

永野先輩はどこまでものんきそつな顔をしていました。

気まずい、と思ったのは俺だけじゃないはずだ。

でも、意外に永野先輩は大人だったらしい。

「あれ、どしたの、そのかつこ」

「氣さくに声をかけてきた。

たぶん、何もしていらない休日なら、俺は声も出せずにあらおりしていただろう。そんなに外向的な性格じゃないし、ただでさえ美人の前では上がつてしまつのが男の哀しい也が。まして、昨日のこともある。

でも、この日は仕事中で、さんざん声を出している。「冗談を飛ばしながら仕事をするのがカクス組のモットーだから、俺も頭がそういうモードに切り替わっている。つまり、会話して当然という気分になつていて。

「どんな風に見えます?」

下は作業ズボン、上は長袖の作業用シャツ、といづ姿は、ビリ見たつて土木作業員だらう。

「ガテン系の奴隸労働者?」

「すごい表現を使ってきた。

「奴隸……まあ、そんなもんです」

合つてなくはない。使いつ走りのガテン系アルバイト君だし。

「バイトかなんか?」

「バイトです。すぐそこに現場があつて」

「ああ、もしかしてその道の下のところ? 水路の工事してるよね」

「当たりです。よくわかりましたね」

「だつてうち近所だし」

永野先輩がノーメイクだということに、この時気付いた。

ギャル系だから化粧が濃くて、すっぴんじや顔わかんないだらうな、なんて思つていたけれど、意外に昨日とあまり変わらない。だとすると、ごく薄いメイクであれだけ目立つてているということか。いや待て、順番が逆だ。ノーメイクでこんなにきれいな顔してるのは、相当すごいんじゃないかなうか。

とか何とか考えつつ、へえ、この辺なんですか、と生ぬるい返事をする。

「まだ暑いのに大変だねえ。もしかして夏の間とかずっとここで働いてたり？」

「そうでもないです。あちこちの現場行つてたし」

「そりなんだ。もしかしたら知らずに通り過ぎてたかもなあ、なんて思つたんだけど」

「そんなに近いんですか」

「だからすぐそこだつてば」

昨日とは違うブレスがかかった腕を上げて、永野先輩が外を指差した。その指が長くて、きれいだつた。

不思議な感じだつた。

つい昨日までは、話す事はおろか正面に立つことすらありえなかつた永野先輩が、こうして俺と話している。

というより、永野先輩みたいなタイプと話すなんてことが人生においてあつうるなんて考えたこともない俺が、妙に落ち着いて、ごく普通に話している。

「梅雨のときとか台風のときとか、あの辺つてすぐに水浸しへなつてたんだよね。工事で水路ができたら、少しましになるかな」

「なると思いますよ。水路と川との合流も付け替えで改善されたし、水路の掃除だけちゃんとやつてくれれば、簡単にはあふれませんよ」

「へえ、それ助かるわ」

ここまで話したところで、俺たちは立ち話を中断した。
店が混んできていた。

そりやそうだ、お昼時なんだし。

弁当なんかが置いてあるところで立ち話していた俺たちは、どうみてもかい障害物。先輩はたぶん170近い身長だし、俺も180近い。二人とも細身だけれど、ピザ（体格のよろしい方々のこと）じゃないから邪魔にならないってことはないわな。

「とりあえずレジ済ませようか

「そうつすね」

永野先輩と俺は同時に苦笑した。

その後先輩と話すことはなく、俺は使いつ走りの任務を無事完了。近くにある木陰でから揚げ弁当を食べ、土木工事の現場では欠かすことが出来ないお昼寝の時間に入。

弁当のごみを片付け、さてごろりとしようかな、といつとこりうど、カケス組で顔なじみになつた作業員に声をかけられた。

「晃彦、お前、なんかいいことあつたのか？」

「はい？」

「妙に機嫌よさそうな顔してるからよ」

「別に、特には無いっすけど」

大あり、だつたんだろうな。

美人の先輩と親しく話す、というシチュエーション自体が俺にとつちやすごい幸運だつたけれど、それは大きな問題じゃない。

気が合わなさそうで、顔を合わせる機会がこれからもあるだろうと思うと、ずーんと気分が沈んで行くような感じがして、いた永野先輩と、ああしてごく自然に話せたのが嬉しかったんだ。

なにか、頭の上にぶら下がっていた石が取り除かれて、いつ落ちて来るか気が気じゃないという状態から解放されたような、ほつとした気分も混じっていた。

生徒会で管理している文化祭用の備品チェックは、思っていた以上に大変だった。

「なあ、これ終わんないじゃね？」

生徒会室横の倉庫代わりに使われている部屋の中へ、永野先輩の

だるそうな声が響く。

去年の担当が残したチェックリストはいい加減で、どれが残つていてどれが捨てられてしまつていいのか、わかりやしなかつた。おかげで一から数えなおし。

「終わらせるんですよ、綾華さん」

なんていってはみたけれど、いつてゐ俺自身がうんざりしてゐるんだから。

永野先輩の場合、いつてちゃんと作業に参加しているだけで立派なものかもしれない。どう見たつて、素直に作業に出てくれるようなタマには思えないし。

そうそつ、永野先輩を「永野先輩」とは呼べなくなつてしまつていゐ。

理由は簡単。

『あのさあ、永野先輩とか呼ばれるひとあ、なんかむかつくんだよねー』

という理不尽な怒りをぶつけられ、俺と渋谷さんは、強制的に先輩を「綾華さん」と呼ばれていた。あまり永野という姓の響きがお好みではないらしい。

で、ついでといふか、渋谷さんは先輩から「由紀」と呼ばれるようになつた。自分が名前で呼ばれるんだから、他の人間も名前で呼ばれるべきだ、という理屈らしい。

渋谷さん、なんて俺が呼ぶと、『なに同級生にさん付けしてんの？ 気もあるわけ』とかいわれる。理不尽だ。

もつと理不尽なのは俺の呼ばれ方。

「先輩とか呼ぶなつていつてんだるー、アキちゃん」

晃彦だからアキ。

いや、わかるんだけどさ、なにもそんな女みたいな呼び方しなくてもさあ。受け顔のひょろ系ならともかく、そこそこ体格もいいガテン系捕まえて、アキちゃんつて。

ちなみにもう一人の2年生、ここまで名前すら出でこなかつたかわいそうなあの人は、担当から外れている。

原因はやっぱり綾華さん。

初めての担当のミーティングが開かれたときのこと。

備品チェックで三人が悲鳴を上げる、一日前のことだ。リーダー役が俺になつて、事前に生徒会の会計や副会長から指示を受けたり、わからない部分を聞いたりして準備して、担当の3人を招集した。

ミーティング場所に借りた化学室には、意外にも綾華さんが最初に来ていた。

「早いですね」

思いつきり意外そうな声をしてしまったからか、綾華さんはむつとした顔をしていた。

「なんか勘違いしてるみたいだけどさあ、別に私はやる気がないわけじゃないんだよ」

資料を机におきながら、俺はまだ意外そうな顔を崩せなかつた。

「そうなんですか？なんかこの前、私はやんないと何かいつてましたけど」

なにげにすげすげものをいう奴だ、俺も。綾華さんはその口は怒らなかつた。

「あれは、先にああいつておけば、私がリーダーになつたときに指示を出しやすいだらうなつて思つたんだよ」

「へ？」

今度こそ、俺は意外に思つていてるとしか取りようが無い声を出した。

「だつて2年は私とあの変な奴しかいないしさあ、あんなのにリーダーになられたら仕事する気無くなるじゃない。なら私がなるしかないけど、先にああやつてガツンとつておけばや、私だつてやりたくてやつてるんじゃないんだから、あんたたちもしつかりやってよねつていえるじゃない」

「……策士だつたんですね、案外」

タイプ的に、学校行事なんて鼻くそ以下にしか思つていなさそうな人なんだけれど、決してそうでは無いらしいということを知つた。「でもさ、あんたがやるつていつたでしょ。ちょっとやばいかなつて思つたんだけど」

綾華さんはふつと笑いながら続ける。

「すぐに話を切り上げて解散したじゃない。あれで見直したんだよね」

「はあ」

よくわからない。

「変な下級生にリーダーになられたならおそれやる氣失せるけどさ、ああやつてちゃんと状況見てさ、やること無いなら解散しようつてきちんと判断下せる奴だつたら、問題無いやつて思つたんだよ」

褒められているらしい。

まさかあなたの顔をあれ以上見ていたく無かつたから解散したんですね、とはいえないから、

「そりや光栄です」

「じこまかすこと」にした。

それにしても、これは一体誰なんだろう。

綾華さんの噂を聞くと、行事の担当をまじめに務めるようなイメージは、どうしたって浮かんできやしない。

渋谷さん改め由紀ならともかく。

美形で、派手で、社会人の彼氏もちで、友人関係も華麗で、度々教師と衝突しつつ、それでも成績だけは落とさないから学校側もあり強くいえなし、という無敵な人……。

人間つて、直接話したりしてみないとわかんないもんだなあ、と思わされた。

それはまあ描くとして、だ。

このミーティング、俺のすぐ後に渋谷さん改め由紀も来たから、残る一人の到着待ちになつた。

気位が高くて庶民なんかとは話もしないんじゃないかと思つていた（俺が勝手にね）綾華さんは、地味、の一言で片付けられがちな渋谷さん改め……しつこいか、由紀とも、『ごく当たり前のよう』言葉を交わした。

これまた意外だったのは、由紀も『ごく普通に綾華さんと話していたこと。

俺と話す時はせいぜい単語が3つも続くかどうかだつてのに、綾華さんとだと、おとなしい印象の範囲内だけど、けつこう楽しそうに話している。

なにかしたか、俺。
いじけるぞ。

一人の会話に加わるのもなんか気が引けた、というより、女同士の会話に入れるほど女慣れしてもいなけりや一度胸も無いヘタレ君は、昼休みに生徒会の副会長や会計から仕入れた情報を書きなぐつたメモをまとめ始めた。

何があるとすぐ仕事に逃げ込むのが男の悪い癖だ、とかいうセリフを思い出した。

俺は疲れたサラリーマンか。

一人で突っ込みながら仕事をしていると、時間はあつといつ間に過ぎていく。

気がつくと30分以上経つていたらしい。

いつの間にか化学室は静かになっていた。

メモをまとめ終わって顔を上げると、綾華さんと由紀が俺を見た。

「……？」

なんでしょう、と首をかしげると、一人とも一緒に首をかしげた。やばい、かわいい、などと思っていると、綾華さんが口を開く。「あいつサボりっぽいしさあ、おなかも減ってきたし、早く帰りたいわけ。そろそろミーティング始めるかい？」

ああ、そういえば来てないな、もう一人の先輩。初日からばっくれか。いい度胸だな。

「そうですね。んじゃ、始めましょうか」

俺がいふと、二人とも姿勢を正した。

由紀はきちんと座り直し、俺の向かい側の席で背を伸ばす。メガネの奥の目が、きりつとしていた。

綾華さんは足を組んだまま腕だけをほどいて、左腕を机において斜めに座っている。この人にしてみれば姿勢が正されている方なのだろう。そう思い込むことにする。

ミーティング自体は1時間もからなかつた。やるべきことはまとめていたし、手順はもう考えてあつた。後はそれを実際にどうやって行くかの相談で、生徒会作成のプリントや俺がまとめたメモに書き込みしながら、3人で淡々と進めていった。

楽しかつた。

なにがといって、女子一人、タイプは違うけど間違いなく美形の

女子一人を相手に回して、1時間も一緒に仕事ができたら、誰だつて楽しいだろ？。

ああ、楽しいさ。

もう人生にこんな機会は訪れないかもしね、とすら思つたさ。相変わらず由紀は俺と目を合わせないし、綾華さんは高嶺の花だし、一人どうなりたいとか思うわけじゃないけれど、女の子たちと、同じ目的に向かつて仕事をするというのは、人間関係がこじれたりしていなければ、男にとっちゃ楽しいことに決まっている。

仕事始めは備品チェック、それは明日にまわすことにして、この日は帰ることにした。時間的に出来ないことはなかつたけれど、ガテン系の俺の体力やらなにやらで判断すべきじやないわけで。

んで、帰ろうとしたわけだけれど、俺は今日のこととこれからのお計画を報告しに、生徒会室に行かなきやいけない。

一人で行こうとしたら、「んな寂しいこというなよ、最後まで付き合つて」と強引に綾華さんが付いてきた。

由紀もなんとなく流れで、という顔で付いてくる。実際、彼女の場合は綾華さんに乗せられているだけっぽい。

これはあまり嬉しい事態じゃなかつた。なぜか。食欲の分野の下心が見え見えだから。

俺がバイトしていることはばれています。家が多少貧乏でも、俺自身は高校生にしちゃ小金もちだつてことは一人とも知つてゐる。そして綾華さんはおなかが減つてゐる。

絶対、たかる気でいる。

それくらいはわかる、俺だつて。

でなきやわざわざ付いてくるなんていうもんか、あの人が。

そして生徒会室に向かつ途中で事件は起きた。

ミーティング後。生徒会室に向かう途中。

「ラーメンが私を呼んでるんだよね」

とかなんとかいいながら、はきつぶした上履きのかかとをぺたぺた床に当てて歩く綾華さんが、不意に立ち止まつた。

つられて一年生一人も立ち止まる。綾華さんは厳しい目で斜め前方を見ていた。俺も由紀もその方向を見る。

視線の先に、もう一人の仲間、であるはずの先輩がいた。

こちらには気付いていなかつた。情報処理技術研究同好会、通称パソコン同好会の遊び場と化している、情報処理教室の入り口近くで、その会員らしき誰かと話しこんでいた。

確かあの先輩も帰宅部だけれど、友達が同好会の一員なんだろう。俺は、その姿を見ても特に感想は無かつた。ああ、サボつてこんなところにいたのか、と、ぼんやりとそう思つただけ。

さつきまで楽しく仕事ができていたから、正直あの先輩のことなんかどうでも良かつた。来ないなら来ないでいいや、空氣壊されたくないし、とか考えていた俺は、リーダー失格かもしない。

一方で、綾華さんはそういうのは許せないらしい。

いきなりつかつかと歩き出すと、まっすぐ先輩のところに向かつた。思わず由紀と顔を見合わせると、俺たちもすぐに後を追つた。

綾華さんの姿に気付いた先輩は、ぎょっとした顔をして一步引いていた。綾華さんはそのまま田の前までいくと、近くの壁にどんと右腕を打ち付けて、それに寄りかかるようにしながら低い声でいつた。

「おとなしく帰ってるかと思えば、まだ学校にいたのかよ。度胸いいなあ、あんた」

「こういう場面でさやあさやあ騒ぎ立てるタイプの女なら、俺も知つていい。でも、低い声でごむ女は初めて見た。怖い。

当然、傍観している俺より、当の本人のほうが何百倍も怖いわけ
で。

「あつ……」

一声「うめく」と、あとは何もいえずに硬直している。

綾華さんは今にも先輩を蹴つ飛ばしそうな殺氣を発しつつ、片足
をぶらぶらさせている。

「連絡は聞いてたよな、今日、ミーティングがあるって

「……」

先輩は答えもせずに硬直。

聞いているのは間違いない。だつて、昼休みに、俺が直接伝えた
んだから。あの時点で、来ないかも知れないな、という予感はあつ
た。視線を合わせようとしたしかつたから。

同情の余地は無い気もするけれど、衆人環視の中での綾華さんが先
輩をたこ殴りにしそうな風景を放置するのも、面白いけれどやばい
気がする。でも、この人を止められる度胸が俺にあるだろうか。
あるわけないじゃん。

まして由紀にそんな事ができるはずもなく、俺と並んで綾華さん
の背後に立ちながら、おろおろとすらりと不動の姿勢で見つめ
ていた。

綾華さんはじばりく無言で先輩にプレッシャーをかけ続けていた。
ウェーブがかかった髪がじやまで、斜め後ろからじや顔は見えなか
つたけれど、肩から立ち昇る殺氣は隠しようもない。

その内、先輩が、耐え切れなくなつたとでもいうように後ずさり
し始めた。同じタイミングで、綾華さんがいう。

「あんた、もう顔見せるな。その顔見ると吐き気がしそうだ」

ぐいっと腕を伸ばし、壁から離れ、くるりと回転する。

「さ、とつとと仕事終わらせなよ、アキちゃん。ラーメンが私たち
を待つているよ」

顔に殺氣は無かつた。至極機嫌よさそうに微笑んでる。

本気でこの人に恐怖感を抱いたのは、むしろこの瞬間だったかも

しれない。

というわけで先輩は担当から外れ、俺はラーメンをおいたられた。
「みつそみつそー」

店に入る前から味噌ラーメンの名を歌のよに口にしながら、綾華さんは上機嫌だった。

一緒に歩く下級生一人は、なんともいいがたない気分でついていく。高校に入つて以来、どう見ても不良だよという野郎どもとラーメン屋に入つたことは何度もある。でも、女子と放課後に何かを食べにいくというシチュエーションとも無縁なら、よりによつて駅前でもかなり親父臭さ満載の店に入ろうというのも初めてだった。

聞けば、この店は綾華さんの親父さんの知り合いがやつている店なのだそうだ。

「綾ちゃんが生徒会ねえ」

カウンターの奥で、タオルを頭に巻いた中年のおじさんが感心したように声を上げていた。

「生徒会じゃないって、文化祭の実行委員」

「似たようなもんだろ」

「全然違うし」

時間がまだ早いからか、店内はそんなに混んでなくて、うちの学校の生徒は俺たちだけだった。あと一時間もして、体育部が切り上げてくる時間帯になれば、それなりに入つてくるだろう。

席は、カウンターの右に綾華さん、真ん中に由紀、左に俺という配置。綾華さんが店主やパートだといつおばさんとばかり話しているから、俺と由紀は仕方なく一人で会話することになる。

ネタは色々あるんだろうけれど、あえて綾華さんことを話すのは一人とも避けた。わざわざ、隣にいるのに地雷に触れる必要もない。

「メガネ、外しても大丈夫なの？」

と俺が聞いたのは、席についてすぐ、由紀がメガネを外してしまつていたから。

「はい」

と、由紀はうなずくだけ。まっすぐ伸びた髪が揺れるのはきれいだつたけれど、会話が続かないつたりやありやしない。もつと、こう、キヤツチボールしようよ。

「全然見えなくなつたりするわけじゃないんだね」

「はい」

「そんなに悪いわけじゃないんだ」

「はい」

「このやうひ。

「じゃ、別に四六時中かける必要も無かつたりする？」

「……視力的には

ようやく食いつくポイントが見えてきた。

「といつど、もしかしてそれ以外の理由でメガネかけてたり？」

そこ今までいって、俺は急に後悔した。ああ、余計なこといつたな、
と。

由紀が俺のことを見ているらしいことは、充分承知している。これからいやでも仕事で一緒になるんだから、しつこく聞いたりして険悪になる必要なんか無いじやんか。

由紀が黙り込んでしまうんじゃないかと思つたけれど、意外にも由紀はストレートに答えてきた。

「安心するんです」

「……安心、ですか」

「素の自分を出すみたいで、人前でメガネ外すのが得意じゃないんですね」

です

その言葉を出したときの由紀の顔が真摯で、俺は思わず言葉の意味を深読みしそうだった。

じゃあ、素の自分を見せてくれるってこと？

でも、ラーメン屋でメガネを外す理由なんて、ひとつふたつしか

ない。曇るし、汚れるからだ。うちの親父もメガネで、ラーメン屋に入つたらすぐ外してしまふからよく知つてゐる。

「……そつか、色々大変だな」

答えを濁して、俺は由紀に話しかけるのをやめた。これ以上話すのがちょっと苦痛になつてゐた。由紀のせいとこつより、自己嫌悪に近い感情のせいだ。

そんな俺の心中を知つてか知らずか、今度は珍しく由紀から話しかけてきた。

「晃彦くんは、そういうの必要ないですよね」

「そういうのって……素を隠す道具、みたいの?」

「はい」

相変わらずの視線外し状態で、田の前のカウンターを見つめながら由紀がうなずいてゐる。

「うーん」

どういつ意味だろ? そんなに素で勝負してゐつもりはないけれど。それなりにかつこつけたり虚勢張つたりして生きているのは、そこらへん歩いてる男子高校生と一緒に思つ。

「そもそもメガネが必要じやないしなあ、田だけは昔からいいからごまかすつもりは無くてもそう取られるような考え方をしてしまつた。

「そういうことじゃありません」

と、初めて由紀が、会話の主導権を握つてきた。

ちょっとと感動したけど、すぐ慌てさせられることになる。

「晃彦くん、高校に入つてから、怖い人とかとも普通に話してゐし、綾華さんとも普通に話せてゐし、すごいなあつて思つてました」

おじおい。

「すごいつて……怖い人つたつてさ、別に犯罪集団じゃないんだし、綾華さんと話すのだつて都合上仕方なく……」

「仕方なく話してゐただ、といおうとした時。

「呼んだかい」

ぬつと綾華さんが由紀越しに顔を出す。まじでびっくり。

「うわあ

「うわあって心外だなあ。人のこと話しどこかその態度はどうなんだろうか、ねえ、渋谷くん」

表情が少ない由紀が珍しく驚いた顔をしていて、その由紀を至近距離から見つめて綾華さんがいつ。

「仕方なく話されたのか、私はなるほど。そうか」

嫌みつたらしく綾華さんがいう。顔は思いつきりの系。なまじきれいな顔をしているだけに、意地の悪い顔をしているとすぐみあがりそうになる。さつきの一件もあるし。

でも、こっちも高校入つて以来、さんざんおつかない人たちひとつき合わされてきた経緯がある。さつきの先輩みたいに本当にすぐみあがつてしまふのは愚策、下の下。

「話は最後まで聞きましたよ」

と切り返し、俺は口が動くままに軌道修正を行う。

「都合上仕方なく話してて、でも意外に話せる人だつて事がわかつたから、今じやけつこうう楽しくやれてる、そつつなげようとしてたんですよ」

「口からでまかせ、ともいづ。

「ほー」

綾華さんは頬杖をしながら疑わしげにこちらを見ているけれど、負けちやいかん。でまかせも、押し通せば真実になりうるのだよ。「だから、す」「くもなんともないよ。たまたま状況がそうなつたつてだけでさ。由紀だつてさ、綾華さんと普通に喋ってるじやんか」「そうね。最初はぎこちなかつたけど、今じや普通に話せてるね」綾華さんも乗つてきてくれた。たぶん、何の話かはわかつてないけれど。

由紀は、両脇の二人に見つめられるような感じになってしまい、ピンと背を伸ばしたままつむくという器用な姿勢になっていた。

「それは……綾華さんが素敵だから……」

「ほへ」

由紀の意外なセリフに綾華さんが間抜けな声を出した。頬杖がずれて、がくんつとなっている。

店内の暑さが原因ではないと思われる赤さになつた由紀の顔。「……綾華さん、憧れだったから……いっぱい話せるのが嬉しくて……」

「……」「ちょっと待ってください。」

汚い店内がいきなり百合の舞台ですか。

「あ、ああ、ありがとう」

あの綾華さんがうるたえている。快挙だ。史上空前の快挙だ。

綾華さんと一緒に仕事をしている、というだけで、嫉妬されたりする。

男ならまだわかる。でも、嫉視の大半は女子から来るのが理解できん。

「何でみんな地味なのと」

「あいつ」ときが綾華さんと一緒にいて相手してもらえるなんておかしい」

「綾華さんと同じ仕事について、ちょっと調子こじてんじやないの口ではないわにいにしても、目がはつきりそつといつていう。主に派手系の女子。

「綾華さんにはセレブな彼氏がいるんだからな、変な夢見てんじやねーぞ」

ラーメンをおいざれた翌日の朝、今まで口を聞いた事もないような、顔しか知らない同級生女子に面と向かっていわれたときは驚いた。

てか、引いた。

「同じ空気吸つてんのが生意氣なんだよ、調子くれてんじやねーぞ」明らかに、ラーメン屋にいったことが周囲にばれていて、そのことで批難されてるんだけれども。

「由紀の存在つて完全にシカトされてるよな」

友達と朝の一件を話しているうちに、綾華ファンの女子の視界には、まるで由紀が入らないことに気付いた。

「あいつ影薄いしな」

と、友達もいう。

「よく見りやきれいな顔してるし、男子人気もあるんだけど」

「そなん?」

俺が聞き返すと、友達はうそふうな顔をしてくる。

「あるに決まつてんだろ。素で聞き返してんじゃねーよ、女に興味ねーにしてもよ」

「別に無くはないぞ」

「知つてるか？ お前、一時ゲイ疑惑が持ち上がつてたんだぞ」

「……知つてるよ」

あまりに男子とだけつるみ、女子との接点がないままに過ぎてしまった俺には、すっかりガテン系の体格に育つてしまつたこともあって、マッチョナルシスト疑惑やゲイ疑惑がささやかれていた。

まあ、それもちょっと前のことで、ひたすら地味に生きたいと願つている俺の存在なんて、クラスの中でだつてそう重いものじゃなかつたから、噂話の寿命もじく短かつた。喜んでいいのか、凹むべきなのか。

「まあ、目立たないにしても、注目してる男子は多いよな」「ふーん」

「そんなものか。まあ、かわいいなあ、とは思つけれど。」

「でも、ああいう女の」

と、友達は視線を俺から外さずに親指のある方角に向ける。馬鹿笑いしながら下品に机の上に座り込んだりしている女子の一群。

「視界には入らないだろ。自分たちのはるか下に生息してる低級な生物ぐらいにしか思つてねーよ。おれたちも含めてな」

そりゃいくらなんでも自虐過ぎやしないかい、と思つたれど、口にはしない。低級、高級はともかく、別の世界に生きている人間だつてことには賛成だつたから。

で、そらにその翌日こ、三人でほこりをかぶりながら、文化祭用の備品チェックを行つたわけだ。

「なあ、これ終わんないじやね？」

という綾華さんの苦情を聞きながら。

チョックが終わり、片付け直し、作業が終わったのが午後八時過ぎ。

「ありえねー……」

綾華さん、完全にへばっている。体力は無いらしい。もつ滅らず口も叩けません、という顔で、生徒会室の長い机の上に寝転んでいる。

由紀の方も、手を洗つて生徒会室に戻つてきたときには、表情が完全に失われていた。本気で疲れると、顔の筋肉まで疲れ果てるものだ。

倉庫代わりの部屋の鍵を閉め、生徒会室に戻つて備品リストを完成させた俺が顔を上げると、机の上に仰向けになつている綾華さんも、椅子に座り込んで身じろぎもしない由紀も、頬りなげな蛍光灯の明かりの下で、疲労という字を全身にまとつたようなどんよりとした雰囲気の中に沈みこんでいた。

綾華さんの脚線美をそれとなく眺めながら、なんかエロイなあ、などと不埒なことを考えていた俺は、そんな自分の視線に気付かれるのは死んでも阻止しなければ、という観念に背を押され、声を出した。

「さあ、帰りましょ。今日も一日お疲れ様でした」

由紀が顔を上げる。意識が戻ってきた、という顔で田を一、三度しばたかせ、無表情なまま俺を見る。

綾華さんは無言のままだるそうに体を起こし、髪をかき上げた。半分寝ていたようで、田が淀んでいる。

「……ああ、お疲れ」

声まで淀んでいる。

意外すぎることに、この人がよく働いた。愚痴をこぼしつつ、八つ当たりしつつ、見た目からして明らかに体力の無い由紀の分まで働いた。

体力の点では一人とは比較にならない俺も、自分ではよく働いた

つもりだけれど、体力の無さを考えれば、綾華さんも、そして生真面目が服を着て歩いているような由紀も、きっと俺以上に働いていた。

「今日もラーメンいきます?」

疲れてはいるにしても、二人ほど体力が無いわけでもなく、バイトで重労働を当たり前にしていれば備品チェックなんて大した作業でもないわけで、俺はわりと平気だった。

だから何気なく自分の空腹を基準にそつこつてみたんだけれど、見事にふられてしまった。

「……吐くぞこのヤロウ」

「わたしも今日はちよっと……」

疲れすぎて食欲なんかからも出ないらしい。

「じゃあ、まっすぐ帰りますか。そろそろ鍵閉めないと、職員室も閉まっちゃ いそうだし」

生徒会室の鍵は職員管理だから、そろそろ返さないと苦情が出る。文化祭間近になればともかく、今の時期から遅くなつてもいい顔はされない。

「いいよ、今日はもうここで寝てくから」

綾華さん、また寝転びやがった。

「んなわけにや行かんでしょうが。帰りますよ」

付き合つてると調子に乗る、という気配がびんびんに伝わってきたから、俺は冷めた口調で返しながら立ち上がった。

由紀が、だるそうに立ち上がった。

「大丈夫? 帰れる?」

ふらふらしているから俺が尋ねると、かばんを持った由紀は、珍しくメガネの奥で微笑んだ。

「大丈夫、心配いりません」

どう見ても大丈夫という顔じゃないけれど、まあ、この子も家は近い。自転車で10分の俺よりさらに近い。電話すりやすっ飛んでくる家族もいる。

「なんなら親呼んどきなよ。余計なお世話だけぞ」

なぜ知っているかといふと、この前のラーメン屋の時、帰りが遅い娘を心配して携帯に電話をかけてきた由紀の親父さんが、俺たちが食べ終わって店を出た頃に、近所だとうのに車をかつ飛ばして駆けつけたからだ。

完璧な良家の子女モードの綾華さんが、華麗なほどの「挨拶で親父さんに事情説明してくれたおかげで、親父さん、すく安心していた。

その後ろで俺が噴き出したそのを必死でこらえていたことは内緒。ついでに、由紀が帰った後、思いつきり右太ももを蹴つ飛ばされて悶絶したのも内緒。実はそのあざが今もくつきり残っているのはまじで内緒。

「大丈夫です。ちゃんと歩いて帰れますから」

そういうながら、由紀は扉を開ける。俺もそれに続きながら、顔だけ振り向いていう。

「ほり、帰りますよ。本気で泊まる気なら、鍵閉めちゃいますから、先にトイレだけでも済ませといたほうがいいですよ」
結構ひどいことを、しつつといつている。

「ちょっとー」

綾華さん、完全にむくれた顔でのそのそと起き上がる。

「扱いひどくない？　由紀とのその差はなんなわけ？」

「手や脚が出てくる人と、そうでない人の違いでしょ。この前のある、痛かったなあ」

「あれはアキちゃんが悪かつたんでしょうが」

だるそうに机から下りると、綾華さんは髪を揺らしながら首をひねらせ、いかにも肩がこっていますという顔をした。

「まあ、ともかく、今日はお疲れ様でした。助かりました。ありがとうございました」

あまり長くこの人と舌戦が出来るほど上等な人間でもないという自覚くらいはあるので、俺は軽く頭を下げて、あいさつした。

綾華さんはかばんを持つて、胸元をきわどく開けた姿で扉に向かつてきながら、そんな俺を見てつぶやいた。

「別にあんたのためにやつたわけじゃないし」

「そりゃそうだ。」

「あんたは平気そうね。あたしたち散々こき使つといて」

「憎まれ口。疲れているからか、ニヤニヤしている顔もあまり明るくない。」

「以後、こき使わないように善処します」

「すげーやな感じなんだけど、政治家みたいで」

「そりゃ失礼、とりあえず出ましょよ」

綾華さんを誘導するように扉を出て、さっさと生徒会室を閉めてしまう。

「じゃ、俺はこれ返してから帰りますね。お疲れ様でした」鍵を振つて、俺はさつさと歩き出す。

この時の俺の気持ち。

なんとなく、二人から早く離れたかった。

いつまでも一緒にいたい、とか、どっちかといい雰囲気になれたら、とかいう感じは一切無かつた。

実のところ。

女慣れもしていなければ、まして相手が無敵な美人の綾華さんに、密やかな人気の美少女の由紀と来れば、俺が相手できるのも仕事があるうち。

用事が無くなつたら、正直、一緒にいるのはすげープレッシャー。自意識過剰なだけなんだろうし、失礼なかもしれないけれど、とにかく、その場から離れたかった。

「そう、俺は逃げ出した。」

「へたれでチキンな自分を守るために。」

だから。

職員室で生徒会室周辺の部屋の鍵束を返し、使用簿に名前を書き込んで、先生といくつか言葉を交わし、「まっすぐ帰れよ」といわれて解放され、生徒昇降口で靴を履き替え、外に出た時。

俺を待っていたらしき人影に声をかけられて、俺は本気で驚いた。

「うおおおおい」

現実にこういう場面でこういう声を出すやつがいるとは思つてもいなかつたけれど、いるんだな、ここだ。

「うわあっ」

叫ばれた方も驚いていた。

もう照明も消されてしまった昇降口外の暗がりに、背の高い女子がひとり立っていた。

「なんなんだよ、びびんだろ？」

綾華さんだつた。

「びびつたのはこっちですよ、んなところからこきなり声かけられたら」「こんないい女に声かけられてびびるって、ありえねーよ、失礼き

わまりねーだろ」

「暗闇からいきなり声かかつてびびんない方がおかしいですって」「ちつ、このびびりのへたれめ」

「俺はびびりでへたれですよ」

「うわ、さらつと認めやがつた、根性無いな」

「世間のすみつこで静かに暮らしていくのが夢の、ちつちやい男つすよ、俺は」

「どこがちつちやいんだっての、ガテン系のくせに」「元

ちょっと喋つていろいろうちじぢちらも落ち着いてきて、毒舌の吐き

合いになつてきた。

つい最近まで、想像もしなかつた。まさか、この人と言ひ合ひができるようになるなんて。

「どうしたんですか、さつきまで小指で押しただけでぶつ倒れそつだつた人が」

「こき使われて疲労困憊のかわいそうな美少女を、誰かが送りたいなあつて思つてるんじゃ ないかと思つて」

「へえ、そんな奇特な奴がこの学校にいるんですねえ」

「いないの？」

ありえないことに、綾華さんが俺を見上げるよつよにして首をかしげている。

恐ろしく可愛らしく。

この中途半端な暗さの中で、この人の周囲だけ淡く輝いている錯覚すら起きる。

でも、そこには自他共に認めるへたれ。

「いるんですか？」

鸚鵡返しは失礼極まりないけれど、からかわれているのにその気になってしまふよりよほどまし、という打算が、一瞬で頭をよぎっていた。

綾華さんは少しの間黙つて俺を見た後、ふつと笑った。

「なるほど、なかなかいい逃げつぶりだわ」

へたれを自称するだけあるね、と、綾華さんは続けながら歩き出した。なんとなく、俺も半歩遅れてついていく。

「送る送らないはどうでもいいんだけど」

綾華さんの足取りはそれほど軽くない。

「明日の予定、聞いてなかつたから」

「ああ、そういえば」

「あたしも色々忙しくってね。予定立たないと困るんだわ」「声が非常に冷たい気がするわけですが。

「明日は仕事は無しです。会計と話して、新規購入の件まとめるだけなんで」

「あたしは用無しか」

「一人いりや充分ですし。出ます?」

「冗談でしょ、んなめんどい事」

重いなりにすたすたと歩いて行く。

「てかさ」

綾華さんがポケットを探つた。

「いちいち会わないと連絡取れないんじゃ困るんだよな」

取り出したのは携帯。じゅらじゅらストラップをつけているイメ

一ジがあつたけれど、組紐のアンティークなストラップが一本、ぶら下がつてゐるだけだった。

「番号とメアドちょっとだい」

綾華さんが立ち止まる。俺も立ち止まる。

暗がりでも表情はわかる。綾華さん、今日一番の不機嫌顔だった。慌てて携帯を引っ張り出して、赤外線モードにする。

送信し終わり、お互いの携帯が番号を認識しあうと、綾華さんはパタンと携帯を閉じ、また歩き出した。

「……あんた、チャリ通でしょ。さつと帰んなよ」

「まあ、ここまで来たから、駅までは送るうかと」

「いいよ、彼氏呼んでるか？」

綾華さんの声がどこまでも冷たい。そのセリフに、俺もちょっと腹が立つた。

「……じゃあ、送つてもらおうなんて期待する意味ないですよね」

「だから、送る送らないはどうでもいいっていつただろ」

彼氏、といえば、噂の社会人の彼氏という奴だろう。セレブな彼氏、とかいつてたやつもいたな。

「そうですか」

俺なんか足元にも及ばない、この人にふさわしい男なんだろ。別に顔を見てやろうとこいつ氣も起きなかつたから、俺はからだの向きを変えた。

「遅くまでつき合わせてすいませんでした。この先は出来るだけ負担がかからなこよひにしますから、今日のところは勘弁して下れ。それじゃ」

向かって左手にある自転車置き場へ歩き出した俺の背中で、綾華さんの声がした。

「ああ、もう、そういうんじゃなくつてわあ」

イライラした声。といつても、自分に対するイライラだつてことくらいには、いくら俺でもすぐにわかつた。

「あなたたちと仕事をするの、嫌だとかじやないんだよ

俺は立ち止まつた。振り向かなかつたのは、なんとなく、綾華さん

に顔を見られるのが嫌だつたから。なぜかはわからない。

「あんたぐらいい、あたしにまともに向き合つてくる後輩なんていなかつたし、由紀もくそマジメなくせに憧れてるとかいつてくれちゃうし」

ほとんど、衝撃的といつて良かつた。俺にとつては、綾華さんみたいなスターが、いくら流れで一緒に仕事をすることになつてしまつたにしても、俺なんかの存在を受け入れるなんてことは、ありえないことだつた。

「一緒に仕事してや、一緒に疲れきつても、くだらない話しても、そういうのつて今まで無かつたから、結構楽しいんだよ」

さすがに俺は振り向いた。綾華さんは街灯の光を受けて、茶色い髪をきらきらと輝かせていた。表情は無表情に近いけれど、今までになく真摯だつた。少なくとも俺にはそう見えた。

「あたしも性格歪んでるから、むかつかせたんなら謝る。でも、喧嘩別れみたくなつて帰るの、嫌なんだ。次に話しへいじやんか」「絶句していた俺は、衝撃を受け止め損ねてくらべらしていただけど、何とか持ち直した。

「……俺も」

頭が止まりかけていて、俺は気の利いたことなんか口にする余裕がない。だから、出たのは素の言葉。

「綾華さんと仕事するの楽しいです。話してて楽しいです。喧嘩別れは嫌です」

綾華さんのほほが、ふつと柔らかくなつた。

「じゃあ、おんなじだ。喧嘩別れはやめとこつな」「はい」

多分、俺のほほも柔らかくなつていただろう。

何となく無言のまま、一人で見つめあつていた。

といつても、なにしろ中途半端に暗いから、しかもお互ひの距離があるから、情熱的な見つめあいにはならない。

そのうち、綾華さんが動いた。

「引き止めて悪かつたね。なんか仕事が入つたら、すぐ教えてね」「わかりました。」こちらこそ遅くまですいませんでした

「いっこなしでしょ、それ。リーダーはアキちゃんでも、あたしひつてチームなんだからさ」

綾華さんは手をひらひらさせながら、校門の外へと歩き出した。

「苦労も成果も、分け合つのがチームつてもんじゃない？」

その言葉が嬉しくなつて、俺は綾華さんの背中に向かつていつた。

「その言葉が聞けただけでも、この仕事引き受けて良かつたです」

綾華さんは振り返らず、相変わらず手だけひらひらさせていた。

「まあがんばろーゼー」

帰りの自転車をこぐ足が異常に軽かつたのは、きっと気のせいじやない。

朝から降り出した雨は、昼休みになつても上がりずに、小さな粒が根気よく地面を濡らし続けていた。

昼休みに体育館で汗まみれになつてバスケをする、というような青春の風景とは縁がない俺は、文化祭の準備が本格的に始まる前に訪れる最大の障害、中間テストの勉強なんて物をしていた。うちにいるとまず勉強なんぞしないから、せめて学校にいる間にどうにかしようとうとう、ささやかな足掻きだ。

ガリ勉に見られるのがいやで絶対学校では勉強しない、というような根性も無いし、俺がバイトで週末を潰していることは教室の誰もが知っているらしいから、むしろ同情の目で見られたりする。「休み時間で出来る勉強なんてたがが知れてるんだから、諦めろよ」「うつせー」

うつかり赤点なんぞ取つてしまふと、バイトの許可が下りなくなつてしまふから、これでも必死なわけだ。

国語系の学科は得意だし、詰め込みの記憶でどうにかなる科目は一夜漬けの山掛けでどうにかするにしても、数学や英語は多少積み重ねないと危ない。

弁当をかき込んだあと、4時間目の中の数学のノートをまとめ、例題を解こうと無い頭を必死で絞つていると、声がかかつた。

「晃彦、客だぞ」

視線を上げると友達が立つていて、教室後ろの扉を指していた。そのまま顔ごと目をすらすと、長い黒髪とメガネで似顔絵が描けそうな女子がいて、俺の方をじっと見ていた。

由紀だ。

友達は冷やかすでもなく、すぐに離れていた。たぶん、由紀が生徒会支給のファイルを持っていたからだ。

同じ待ち姿でも、相手が綾華さんなら大騒ぎになるんだろうな、

などと思いながら、俺は愛しい数学の問題を泣く泣く捨てて、立ち上がつた。

俺が近付いてくるのを見ると、由紀は扉から離れていった。ついでこい、といふことか。

廊下の隅、階段近くの窓際に立つた由紀は、改めて近くに立つた俺を見た。

見た、といつても、視線は合わせてくれない。相変わらず。じゃあどこを見ているかと云うと、たぶん俺のブレザーの上ボタンあたり。

まあ、体の向きすら俺から離していた頃と比べれば、ここ何日かでずいぶん距離は縮まつたものだ。そう思わないと哀しくなる。

「どうかした？ 仕事で間違いでもあつたっけ？」

できるだけ柔らかく話しかけてみる。妹あたりが聞いたら「おこい、きょっ」とでも云って逃げ出すような声だ。こいつのを猫なで声っていうのかもしれない。

由紀は無言のまま首を振つた。切りそろえた前髪まで揺れていますから、結構強い否定だ。

「あんま強く振るとメガネ飛ぶぞ」

思わず憎まれ口が出てしまつた。あ、しまつた、と俺が思う間もなく、由紀は「そんなわけないじやない」といづつ目で一瞬俺と視線を合わせ、すぐにまたうつむいた。

やりにくいくらいなんだぜ、まったく。

「今日は特に由紀に振る仕事は無いよ。会計の所に顔出して、新しい備品の購入枠とか打ち合わせるだけだから」

どうせ由紀の用事なんて限られているわけで、先回りしてしまつことにした。

俺がいうと、由紀はうつむいたまま小さくうなづき、それから意を決したように顔を上げた。

いつも俺と話していても表情がない由紀が、ちょっと固い顔つきで俺を見上げる。

「その打ち合わせ、わたしも同席していいですか？」

「え……うん、まあ、それはいいけど」

面食らってしまった。

由紀が自分の意志を伝えてきたのが初めてだったから。そもそも俺の目を見て話してきたのが初めてだったから。

「どうしてまた」

俺が尋ねると、由紀はまたうつむいてしまった。「よく見るときれいな顔をしている」といわれる由紀の顔を正面から観察するいい機会だったのに、面食らって動搖しているうちにまた顔が見えなくなってしまった。

由紀はちょっと言ことよどむ気配を見せてから、かろうじて聞こえる声でぼそぼそと話し始めた。

「わたしも仕事したいんです。いわれる仕事じゃなくて、自分でする仕事。晃彦くんみたいにはできないけど、せっかく任せてもらった仕事だし、一人でどんどん進めていく晃彦くんに感心してるだけじゃなくて、わたしからも仕事に取り組みたいなって思つて」

今までの由紀のセリフ全部合わせても足りないんじゃないかなってくらいの長ゼリフを口にし終えると、由紀はファイルを抱きしめるようにして大きくひとつ息をした。

「へえ、そりやすごいね」

俺は間抜けな返事をした。わざわざこんなつまらない仕事を、買つてまでしようという人間がいるとは思わなかつたし、由紀がそれを言ひ出すのはさらに意外だつた。しかも、こんな長ゼリフで。どうにも棒読みに感じられたのは、準備したセリフを一気に語りきつたからだろうか、と気付いたのは、その日の授業も終わり、会計担当の生徒会役員と話をした、その後だった。

だからこの時の俺は何も気付いていない。

「一緒に行くのは構わないよ。一人の方がメモし忘れとか少なくて済むだろうし」

うん、と由紀はうなずいている。

「放課後、在庫の表とかまとめたり生徒会室行くからや、またうちは教室来てよ」

「うん、ともうひとつ由紀がうなづく。

「表の『Pマーク』は渡すから、メモ係して。途中で職員室みて『Pマーク』もひらつか」

「さにいらつねずく由紀。視線も合わないし、俺に見えたのは由紀のつむじ。もう喋る気はないいらし。」

「んじゃあ、そういうことでよろしく」

「とこりと、それが切り上げのサインだと黙ったのか、由紀は最後のうなづきを返すと、ついつと一歩後ろに下がって、ぐるっと踵を返して歩いてと歩き出しちゃった。

俺は置いてけぼり。

去つて行く由紀の背中は小さくて、どこか急ぎ足だった。
会つのも嫌なら来なきやいこのに、と、俺はやけにひがみっぽくそれを見送っていた。

生徒会役員の中でも、決して花形とはいえない地味な役職が会計。会計自身の中でもその存在は地味らしく、せつかく人が約束を取り付けて、資料まとめて訪ねてやつたのに、すっぽかされそうになつた。約束をほぼ完璧に忘れ去つていたらしい。

「悪い悪い」

3年生だから受験生でもあり、中間テストを控えているから、色々と忙しいのだろう。にしても、忘れられれば、こつちとしちゃ腹も立つ。

いつまでたつても来ない会計に内心いらしていいた俺に気付いて、たまたま生徒会室に来ていた副会長が携帯で連絡を取つてくれるまで、会計の先輩は自習室として開放している空き教室にいたらしい。

「お、きれいにまとめたねえ。仕事が速くて助かるよ、他のところはまだろくな動いてもないからね」

「まあ、暇つすからね」

せいぜいきつくならないよう、穏やかに答えたつもり。顔だつてにこやか。

「君ら一人でやつたの？」

先輩は、俺のとなりにひつそりと座つてゐる由紀と見比べるようにしていった。

ええ、と答えかけて、先輩がいつてゐるのは資料まとめのことじやなくて、在庫チェックのことだと気付いて、いい直した。
「いや、綾……永野先輩も一緒でしたよ」

「へえ、永野が、ねえ」

先輩が目を丸くした。よほど意外だったのか。そりやそつだらうな。

「先代生徒会が管理いい加減だったからね、大変だつただろう」

「そりやもつ」「う」

「いつか片付けなきゃって会長なんかとも話してたんだけど、なかなか暇がなくてね」

「やる気が、だろ、と思つたけれど、もちろんいわない。」

「とりあえず、クラスごとの申請が来たら新規購入分の配分決めて行くけど、予算枠がある程度決まってるからさ、その中でうまく切り盛りしてくれるかな」

「枠内でさばいていくって事ですね？」

「足りなくなつたらいつて、とかいいたいところだけじね。この前、テニス部が全国行つちゃつたおかげで予備費が無くなつちゃつてるんだ」

「つてことは、後出しであれこれ準備してつていわれたとしても、その時点で予算使い切つてたらそこでアウト、と」

「そゆこと

めんどくさそうな話だ。

俺たちの仕事は、生徒会として「クラス」との出し物用に準備している備品を貸し出したり、管理すること。

貸し出すためには、何が必要なのかを申請してもらわないといけないけれど、どうせぎりぎりになつて「あれがない」「これがない」と始まるに決まっている。

プロとしてやっていて、直前になつて「機材がない」「材料がない」とほざいていたら、叱られるどころか首が危うくなる。バイト先の人々を見ていれば、段取りが大事だつてことがいやでもわかる。

でも高校生にそこまで望めないだろつ。別に大人ぶつたり偉そうに考えたりしているんじゃなく、俺もカケスさんたちの下でバイトなんかしてなきゃ、段取りの「だ」の字も理解出来て無かつただろうつて思うからだ。

「じゃあ早めにクラス担当に取りまとめしてもらつて、あとは上手くケチつてやって行くしかないですかね」

「やつて行くしかないだろうね」

「今あるもので何とか工夫してやつてもいいのが原則ってことだ」

「やうなるだらうなあ」

「その工夫も、一緒に考えるんですかね」

「思いつくんならそれもやつてあげないとだな」

「備品に関係してることは俺らで独自に判断していいんですか?」

「とこうと?」

「たとえば板だつたら切つたり貼つたりペイントしたり、ここまでは自由に使つてもいいかな、とか」

「ああ、任せせるよ。一応報告だけはしどいて」

「といつと……最終的なリストの更新と、あと必要なら報告書が始ま未書の提出つてところで手を打つてもらえますか?」

「それだけしてもらえれば完璧。お金つかう場面できつちり領収書上げてもらつて、ついでに収支報告もつけてもらえればこうと無しだね」

「出金簿みたいなのが、出来てるあります?」

「ある。生徒会のPCに入つてるから、後でプリントアウトして渡しつく。領収書とか入れる袋も準備しつく」

会計の先輩が、やる気のない生徒会の一員とは信じられないくらい話せる人で、ちょっとびっくりした。

後で聞いた話だと、この先輩、実家が町工場を経営しているらしい。商売している姿をずっと身近に見てきたから、生徒会程度の仕事なら、苦も無くこなせるといつ。

この間、由紀ははといつと、一言も喋ることなく、俺たちのぼんぼん進んで行く会話をひたすらメモつていた。一字一句逃さず、といふわけに行かないのは当然だけれど、かなり上手く要点をまとめている。成績はいい奴だけど、なるほど、ノートとるのも上手いんだろつた、と思わせる。

先輩も由紀も、それぞれ頼れる仕事仲間になりそつた。

思つていた以上に話がスムーズに運んだから、俺もかなり嬉しか

つたらしく、テンションが上がっているのが自覚できた。

この時点で、会う約束を思いつきり忘れられていたことなんか、頭から消えてしまっている。

「テストが終わればや、余韻を楽しむその他の連中も、だんだんその気になつていくと思うんだ。僕達みたいな立場の役目はさ、あいつらが本気で仕事始めるまでに、舞台を整えておくことだと想つんだよな」

先輩がいう。

「誰かがきつちり段取りしておかないと、上手くいかないだろ？ でもそれが出来るやつって、高校生じゃ限られるだろしさ」

俺が感じていたことをそのまま言葉にしてくれたから、この言葉も嬉しかった。

「僕は人を引っ張つて行くような力はないし、主役になれるタイプじゃないから。脇役としてしつかり主役になれる連中を支えてね、結果として楽しい文化祭になれば、それが最高つて思うんだ」

線の細い先輩は、そいつて笑つた。

高校生とは思えないほど、肩の力が抜けた大人の微笑だった。話が終わつて、別れ際、先輩が俺に言葉をかけてくれた。

「佐藤君、文化祭が終わつたら生徒会改選があるけどさ、僕たちの後を継いでみなよ。君みたいのがいないと、来期の生徒会が心配でしようがないんだ」

たぶん、ものすごい褒め言葉なんだろうと思つ。

気分良く打ち合わせが終わつて、生徒会室を出たのが5時過ぎくらい。

「お疲れ」

一緒に生徒会室を出た俺と由紀は、並んで歩き始めた。となりの

クラス同士だから、帰るにしても、書き取つてもらつたメモをまとめるにしても、どのみち途中までは一緒になる。

「メモまとめるの、今日じゃなくていいから。中間テスト終わつたらすぐ使えるようにしてもらえればいいし」

指示、らしき物を口にしたけれど、反応は無い。

というか、多分うなずいたんだろうけれど、わざわざゆっくり歩いているのに一歩遅れてついてくるから、振り返らないと見えやしない。

嫌われているという確信はないけれど、好かれてはいないんだろうなあ、というのはわかる気がした。

もてたこともなければ、いい男つて自信があるわけでもなく、ゲイ疑惑がささやかれた実績があるくらい女に縁がない生活を送つている俺としては、こういう空気、一気にテンション下がる。何となく黙つてしまい、そのまま、となりあつた教室が見えるところまで来た。

つい5分前からは考えられないくらいのローテンションになつた俺は、もう帰る気満々でいた。

帰宅部の俺に、文化祭の仕事以外に学校に用事なんか無かつたし、居残つて勉強する気分じゃなくなつていて。どうせうちに帰つたつて、飯食つてPCいじつて、風呂入つて寝るだけなんだけれど、この空氣に耐えているより100倍まし。

それじゃメモだけよろしく、今日もお疲れでした、なんていおうと口を開きかけた時、由紀の方が先に声を出した。

「晃彦くん」
びっくりした。

「はひ」

思わず立ち止まって直立不動。あほか。

由紀はいつものようにうつむいていて、しばらく何かいいたそうにファイルを両手でいじくりまわしていた。

そのうち、いいたいことがまとめたのか、それとも迷いを吹つ

切つたのか、ファイルを抱くようにして手を胸の前で組んだ。

あれ、なんか違う。

俺は違和感に襲われた。

嫌われていてると思つていた。好かれちゃいないだろつた、と思いつ込んでいた。

目の前にいる由紀は、そういう感じにはとても見えない。
錯覚だろ、と俺の中のへたれな自分が防衛線を張ろうとした時、
観測弾が由紀から放たれた。

「今日……前からいわなきゃつてずっと思つてたんですけど……い
いたいって気持ちに変わりました」

相手との距離を測るため、砲戦では観測用の発砲を行う。目標と
の距離を実際に砲弾を撃つことで測り、正確に射角などを修正して
から、一斉に砲撃を開始する。その一斉砲撃を「齊射」といつ。
などという軍事用語が頭を駆け巡った。

たぶん、珍しいくらいに俺の勘は冴え渡つていて、由紀の雰囲気
を正確に捉えていたんだと思う。

それを認めてしまう前に、由紀からの斉射が俺を撃つた。

「……わたし、晃彦くんが好きです」

巨大な徹甲弾が、大気を切り裂いて俺を粉々に撃ち碎いてくれた。

相変わらず視線は合わない。

うつむいている由紀の黒髪は、沈んで行く陽の光と蛍光灯の双方に染め上げられて、しつとりと紅くつやめいでいる。

徹甲弾の直撃を受けた俺は、生まれて初めての直撃弾の威力の前に呆然としていた。

……何をいつてるんだこの子は。

それこそありえないだろ、俺が好きとか。

なんか勘違いしちゃってるんじゃないのか？ ほら、会計と仕事の話してるとこ見てるついに、催眠状態みたくなって、ちょっと付き合いが出来た同級生が素敵に見えちゃったー、とか。

いや、俺が素敵に見えること自体おかしいだろ。メガネの度が合つてないんじやないのか？

てか、頭大丈夫か？ とりあえず正気取り戻しとけ？

いやいや、実はドッキリか罰ゲームとか。由紀がそういうのに乗るかどうかは別としてだな、ふつーに考えたらそれだよな。

動搖しまくって、でも動けないでいる俺。じつとうつむいたままファイルの前で手を組んでいる由紀。

開いている廊下の窓から、野球部のバットの音やサッカー部の怒鳴り声、近くの工場の機械の音が、まとまりもなく入ってくる。廊下に一人で突っ立っていると、試験期間直前の部活を上がりてきた同級生たちが横を通り過ぎて行く。俺たちの事なんか眼にも入れちゃいなかつたけれど、その話し声がすぐ近くを通り過ぎていって、やつと金縛りが解けた。

「と

口がからからに渴いていて、上手く言葉にならない。

うめくような俺の声に、ぴくっと由紀が肩を震わせる。

まるで俺がいじめているみたいじゃないか、怯えてるようになしか

見えないぞ。

「とりあえずせ、」ここで話もなんだかだし、学校出よつよ
どうにか言葉を絞り出す。

とにかく、間が欲しかったんだ。自分を取り戻す間が。

このままじや帰つてしまつ。

いつもの別れが積み重なるだけで、一步も前に進めない。

友達になる」とすら出来ずに、このまま距離を置かれて過ぐすのはつらいだけ。

自分で作つてゐる壁を壊して、気持ちを伝えなきや、何も変わらない。

早くしないと誰かにさらわれてしまつ。

62

そういひとらしく、どうも。

田舎のこと。外に出たつて、近くにカフェがあるわけでも、ファーストフードが軒を連ねてゐるわけでもなく、一人でお茶でも飲みながら話ができる場所なんて限られている。

その限られた場所に向かう道すがら、できるだけゆっくり歩いてゐる俺の横で、由紀がぼそぼそといふ。

聞こえるぎりぎりの小声だから、聞き逃さないように前かがみになりながら、由紀の声を耳で拾いつつ歩く。

「さらわれちゃうんだ、俺」

田的地、とつて二人で話せる場所として思い浮かんだ場所は、学校から歩いて10分ほどのところにある、国道沿いのファミレス、のとなりにある喫茶店。

「アミレスの方はうちの生徒もよく出入りしているけれど、アミレスが建つずっと前からそのとなりにある喫茶店は、昔ながらのたたずまいということもあって、あまり高校生は出入りしない。よく潰れないな」と思つくらい、客も多くはない。

その喫茶店が見えてきたあたりで、俺は苦笑しながらこいつた。笑うしかない、という感じ。

「カラスみたいにスーシと飛んできてスーシとやらつちやうわけ? 笑いに紛らわそと、下手くそな冗談を飛ばしたつもりだったけれど、由紀はうつむいたまま軽くうなずいた。

「どんなカラスだよ、物好きもここところだな」

心底そう思う。俺なんかわらつてつてどうするんだつての。バイト代狙いならまだ理解できるけれど。

由紀は俺の右隣を歩いていて、さらに右斜め前に視線を落としながら答えた。

「晃彦くん、人気ありますよ?」

「初耳だな、それ」

芸がない答えだけれど、事実初耳だったから仕方ない。

「高校入つてから、晃彦くん、変わりましたから」

「変わったか? まあ、バイトはじめて、体格は良くなつたと思つけど」

「そういうんじゃないです」

なぜか、由紀の口調が怒つていて、理不尽だ。

「するいです、はぐらかそりとしてる」

あげく、批難される俺。

「まあ、苦情やご批判は店内で承りますんで、どうぞ」

喫茶店の扉を開け、先に由紀を通す。

扉を開けたとたんに、コーヒーの香りに包まれて、ちょっと幸せな気分になつた。

俺はしょせんガキで、コーヒーの味なんかわかりやしないけれど、

家ではよくブラックコーヒーを飲んでいる口で、入れたてのコーヒーの芳香はちょっと他に代えがたいとも思っている。

これで少しは落ち着けた気がする。

「俺はブレンンドで。由紀は？」

座るなり注文する。とりあえず「コーヒーがあれば良くて、種類なんか選ぶ気になれなかつた。

後で思えば、かなりテンパつていたんだろう。

由紀は、テーブル席の俺の向かい側に座つて、おずおずとメニューに手を伸ばし、うつむき加減にじつと見つめていた。

喫茶店なんか慣れてないんだろう。

俺だつて慣れちゃいないけれど、相手が自分以上に場慣れしていない雰囲気だつたから、これも落ちつける要素になつた。

動転しつぱなしだつた俺の神経が、少しづつだけれど鎮まつていった。

「…………えっと……ワインナーコーヒー」

今時の高校生はそんなもん知らんぞ、といつ名前を口こなされても、驚きはしなかつた。

「…………って、ワインナーが乗つてたりはしないよね」

というべたなボケが出てきたのにはさすがに驚いたが。

ちなみに、濃いコーヒーにホイップを乗せたもののことで、ワインナーはかけらも入つてません、念のため。

メガネを取つた由紀のまつげの長さに、俺はちよつと感動していた。

この前、由紀はいつていた。

『素の自分を出すみたいで、人前でメガネ外すのが得意じゃないのつまり、ここでメガネを外したのは、素の自分を出したいという意思表示なんだろうか。

由紀が滅多に俺を見たりしないから、こっちは観察し放題だったりする。

髪が黒いからなおさら引き立つのか、由紀の肌は白い。

地味目の女子は自分を手入れするという発想が根底から欠けていたりして、よく見なくてもうつすらヒゲの「とき産毛に口元が覆われていたり、見事に男を萎え萎えにしてくれたりするけれど、そんな事もない。

化粧の気配はあるで無い。リップくらにはつけているようだけれど、色が付いているわけでもない。中学一年の我が妹のほうがよほど人工物まみれになつていて。

眉にわずかにかかるくらいの前髪はふわっとそろえられていて、あまり強くない二重の瞳と調和が取れている。

全体的につくりが細かい。纖細っていうのか。たとえば綾華さんのように、華麗なほどに整つているという感じじゃなく、小動物的というか、かわいらしいというか。

それなのに決して由紀がかわいい系の女に見えないのは、それを武器にしているとはとうてい思えない無愛想さのせいだろうな。あるいは、無表情。硬質な雰囲気があるんだな。秀才型独特の。なんて見ていたら、由紀が居心地悪そうにもぞもぞと動きながら、ちらつと俺を見た。

俺がじろじろ見ている、その視線がうつとうしかつたのか。

田を外しつつ、そういえば、と俺は思っていた。

さつき思い出したメガネを外すのがどうという話、あのすぐあと、由紀はラーメン屋の店内を百合の舞台に変える離れ業を演じていた。あれ？

由紀つて別に百合つてわけじゃないのか？

いや、本当に由紀が百合だなんて思つてたわけじゃないけれど。でもそうちだつたら面白いなあ、なんて無責任に考へてもいたわけで。などとつまらんことを俺が考へていると、今度は視線を外したまま微妙な顔でぼんやりし始めた俺が気になつたようで、由紀がじつと俺の喉元辺りを見つめている。

大した進化だ。さつきまではせいぜいブレザーの上のボタンだつたんだから。

「……あの」

またしても聞こえる限界ストレスの音量で、由紀が口を開く。

「……さつきの、忘れてくれていいいですから」

「……はい？」

今度は何をいい出す氣だらう、この子は。

由紀の白い肌が紅潮しているのがわかる。ついでにいうと、長いまつげが大半を占めているうつむき気味の目は、間違いなくあと少しで水浸しになる気配だった。

「好きとか、迷惑だつてわかつてます。ただ、伝えないと絶対後悔するつて思つて、勢いでいっぢやつただけですから」

声が震えていた。

まるで俺がいじめているみたいじゃないか。

そう思つた俺は、急に殴られたような衝撃でめまいすら感じていた。

みたいじゃねーだろ。この状況、完全に俺が由紀をいじめてる絵だつて。

決死の思いで（多分）告白して、はぐらかされて、なれない場所に連れ込まれたあげくに延々黙られてしまつていれば、そりや泣き

たくなるだね。

「ちょっと待つて」

俺は、意識して抑えた声を出した。一呼吸置いて、続ける。

「正直にこうよ。俺も、由紀に嫌われてるんじゃないかなって思つてたから、由紀を意識するとか、したこと無かつたんだよな」
すらすらとは、いえていない。由紀の細すぎるほど細い肩が、かすかに震えているのが見える。

「だから、好きとかいわれて、ちょっとわけわかんなくなつて、今も多分理解できてない。だから」

だから、の後が続かなくなつた、そのタイミングで、二人のテーブルに「コーヒー」が運ばれてきた。

俺は一旦話をやめ、由紀は店員に軽く一礼すると、また深くうつむいていた。

「コーヒーの湯気を唇に当て、用心深く小さく一口する。苦味とわずかな酸味、すっとするような刺激が、熱さに紛れて舌をくすぐる。

自分が何をどこまで話したかを考え、何がいったかったのかを考えてから、再開する。

「……ちょっと時間くれよ。そんなには待たせないから」

おそれらしく、テーブルの下で、由紀の手はぎゅっと握られているんだろう。ピンと伸びた肘が強張つている。

言葉が自由に出でこない。何をいつても由紀を泣かせそ�で、怖くて、半開きの口をパクパクさせて次の言葉を出そうとするんだけどれど、声なんか出てきやしない。

そのまま、由紀が、ふっと体の力を抜いた。

全身から出ていた張り詰めた雰囲気が、ちょっとだけ和らぐ。下を向いていた由紀が、ゆっくり顔を上げた。

泣きそうな瞳は変わらないけれど、表情は柔らかい微笑みになつていた。赤っぽい目をまづげで少し隠して、口もとをほじりぱせている。

相当でかい口径の精密射撃が俺の胸を撃ちぬいた。

「ずっと見てきましたけど……晃彦くんがこんなに困っているといふ、

初めて見ました」

「ずっと？ 文化祭の仕事が始まって一週間たつてないんだぞ？ そう思つたのが思いつきり顔に出たのか、由紀の笑顔が大きくなる。

「気付きました？」わたし、中学のときから見てましたよ？ 好きだよーって念送つたり」

「そ、それはうそだ」

思わず否定してしまった。だつて、いくらなんでもそんなに見られていたら気付くだろ？

男なんてどいつもこいつも自意識過剰で、俺なんかその日本代表はれるくらいかもしぬなくて、そんな俺が女の子に好意の由で見られて、調子に乗らないはずがない。

由紀は、信じがたいことに、吹き出していた。

「あはっ」

由紀が声を出して笑うところなんて、それこそ中学時代から見たことがない。小さい学校だったから、同級生の顔なんて一週間で学年全部覚えてしまうほどで、由紀が友達と話しているところや、行事でみんなと頑張っている姿なんかも見てきた。うつすら記憶もある。

でも、困ったような微笑か、穏やかな微笑つてのがせいぜい。笑うんだな、こいつも。

「うん、うそ」

だれだこいっは。

「晃彦くん、生真面目君ですよね、珍しいくらい。わたしにからかわれちゃうんですから」

「お前……いきなり本性出てきたな」

「だつて、晃彦くんの困り顔がすごかつたから」

「人のせいがよ」

「はい、晃彦くんのせいです。こんなに緊張してると、こんなに笑ってるのも」

笑つてゐるくせに、声が震えていた。ほんの少しだけど、それくらいわかる。

かわいい、と、腹の底から思つた。

胸がつまつた。

何かがこみ上げてくる気がした。

「中学の頃も、でも、いなあつて思つてたんですよ。それ以上じやなかつたけど」

気が付くと、由紀は俺と田を命わせていた。その瞳から、俺は逃げられなくなつていた。

「ここに入つてから、どんどん意識していつたんですよ。だつて、晃彦くん、ずるいくらい成長して行くんだもん」

「……するいつて」

「ずるいですよ。置いてきぼりにされたる気がして、ついやましくつて、気が付いたら好きになつてしましました。いつも田で追つてた」

「全然気付かなかつたけど」

「だつて気付かれないよつにしてましたし。絶対視線合わせなかつたし」

「なんだよそれ」

「怖かつたんです。気付かれたら、きっと氣味悪がられるつて」

由紀の声は大きくない。いきなりよく喋るよつになつたけれど、由紀は由紀だった。

「でも、たまたま実行委員で一緒になれて、最初の会議でとなりに座れた時、すごくすゞしく嬉しくつて、緊張しまくつちやつて、帰つてから思つたんです」

いつの間にか由紀は身を乗り出すよつにしていた。そして大きくもないテーブルを挟んで、ちょっと手を伸ばせばほどに触れられるくらいの距離。

息遣いすら感じ取れる距離。

「置いてきぼりになんかされてちゃダメだつて。追いつきたいくつ思つた。隣にいたいって、そばにいたいって」

わわやきに近い声が、俺の耳を占領した。他の音は何も聞こえなかつた。

「それがダメでも、自分から追いついていかなきやつて思いました。だから、いわなきやいけなかつたんです」

「……がんばつたんだな」

俺がやつとのことでそう返すと、由紀は首をかすかに振つた。
「がんばつてないです。いわなきやつて思つてるつうは何もいえませんでしたもん」

店に入つた時に出てきたお冷の中で、氷が音を立てた。由紀の目が一瞬伏せられて、また俺の目に向けられる。今まで見たことがない、強い瞳。

「でも今日は違いました。いいたいくつて、思つたんです。どうしてもいいたくなつたんです」

また、泣き出しそうな目になつていた。

気が付いたら、俺は右手を由紀のほほから耳の下あたりにすべらせていた。

由紀の目が大きく開かれて、わずかな間、全身に力が入つて、それから肩から順に力が抜けて、目が閉じられた。

一粒だけ、涙がこぼれた。

「休み?」

綾華さんは、取り巻きに囲まれながら足を組んで座り、さながら女王様だった。

うわんくわそーな視線に囲まれながら、俺はなんでこんなとこにこるのかといふ内心のボヤキを隠し、うなずいた。

「熱出しちゃったそうです」

昼休みの一年の教室の中で、綾華さんは五人の女子を従えて、サンドイッチや菓子パンを並べ、おしゃべりの最中だった。昼休みが始まると、パンを詰め込んですぐに一年の教室に向かった。

一年にとつて一年の教室に行くというだけでなかなかのプレッシャーなわけで、しかも訪ねる相手が綾華さんときているから、タイミングなんて考えていたらダメ。食べ終わって勢いで立ち上がったら、そのまま突撃。

「ふーん、病欠ならじょーがないか」

由紀のことだ。

昨日、あれからしばらくして俺たちは別れた。なにしろあそこの家は心配性だから、いつまでも一緒にとはいられない。

時間をくれ、といつてあるから、なにも結論は出でていなければ、別れるときには由紀らしいおとなしい笑顔を見せていた。

で、今朝、顔を見に隣のクラスに行つたら、病欠が判明。

「んじや、今日は仕事無しなわけね」

「そういうことです」

「メールくれりやそれで済むじやんか」

「じもつとも。でもできなかつたんですね。」

「携帯、忘れてきちゃつて」

「ダメじゃん」

まつたくです。

たぶん、由紀からも連絡が携帯に入っているだろ？。 じつにひ田に限って忘れるつてのは、どうこいつとなんだろ？。

「でも、会計と話はしたんでしょ？」

「しました。まだまとめてませんけど」

「早くまとめなよ。各クラス担当に渡す資料、早く作らなきゃいけないんでしょ」

「そりなんですけど、メモつてたの、由紀なん？」

「ああ、そうなんだ。由紀の復活待ちかあ」

「すいません、ゴミーしてもらつとけば良かつたんですけど」

「それは仕方ないでしょ。週明けにやれば、まだ間に合つだろ？」

「ここので別の声がわりこむ。

「すげー、綾華、マジで仕事してんだ」

「うそくせーとか思つてたけど」

「口々に、まわりのお姉さま方が騒ぎ始めた。」

「うつせーよ、あたしは仕事はマジメだつての」

綾華さんは照れるでもなく、むしろ堂々といい放つた。行事の仕事なんかマジメにやつてらんねー、とかいい出しそうな人だと、俺も前は思つていたけれど、今はこの人がどれだけ自分の責任に対しで真面目かはわかっている。

「彼が噂の子なんでしょう？」

と、一人のお姉さまが俺を見て「う」と、今度は俺に照準が。

「あー、綾華と仕事一緒になつたら、一年の女からぼこられたっていう

「誰が、いつ、ぼこられたと。」

「まじで？ かわいそー」

「ねー、こんなにかわいいのにさー」

「かわいいですと。何をどう見たらそーなるんだ。」

「今度いじめられたらお姉さんたちが守つてあげるからね」

「そーそー、いつでもおいでー」

「は、はあ」

完全に遊ばれているのがわかる。わかつても、五人の先輩に口々にいわれて、まともな神経を維持できるほど強くない。精神的にはどん引き。

「きれいな顔してんじゃんね」

「思つたー、焼けてるからワイルドっぽいけど、顔はきれいだよねー」

「これで小っちゃかつたら女装とかさせヒー」

「それいい、絶対かわいいよー」

「えー、ちょっとー、マジ好みなんだぞー」

「あんた彼氏いんじょうが」

「あんなんどうでもいいから、この子連れて歩きたいよー」

「うつわ、ガチ浮氣発言だよ、引くわ」

「美形は世界の宝だよ？ 大切に保護しなきやだよ？ 誰も保護しないんなら自分が保護するつて、むしろ偉くね？」

「その理屈、おかしいし」

勘弁してください、この空氣……近所の還暦迎えたおばちゃんたちくらいにしか「かわいい」だの「美形」だのいわれたためしがないんです。妹には「頑張って強く生きていってね」とかいわれてるんです。

俺が心の底からどん引きしている様子を見て、さつきから黙つて見ている綾華さんは、くすくすと笑つてゐる。

「ねーねー、携帯教えてよー」

「さつき忘れたつていつてたじやんか、なに聞いてんだよ」

「えー、持つてなくても、自分のは覚えてるでしょ、ふつつ」

「覚えてる?」

一斉に全員の目が俺の顔に集中する。

俺の早期警戒警報装置が、いち早く激震の気配を察知した。直下型地震の前兆を捉えた。

まずい。

地震のたとえが適当でないなら、これは凄まじい地雷原だ。内戦直後のカンボジアなんか田じゃないでぞ。一步でも間違えたら吹き飛ばされる。

教えちゃダメだ。」の人たち全員に教えたら、俺は無意味なメルの嵐に巻き込まれ、溺れ死ぬに決まっている。

「……いやあ、買つたばつかで……番号もメアドも覚えてないんです。」「めんなさい」

うそ、とはいきれない。買ったばかりのは事実。ただし、機種変更なので番号もメアドも変わってないし、どちらもばっちり覚えていい。

「えー」「覚えとけよー」

ブーリングの嵐。

ここでぐずぐずしていたら、メモに走り書きした番号なんぞ渡されかねないから、俺はすぐさま撤退することにした。

「それじゃ綾華さん、俺はこれで。月曜に仕事進められそ'うなら、また連絡します」

ペニリと大きく一礼して、周囲の声をぶつた切って、俺はそそくさと立ち去ろうとした。

「うん、わかった」

綾華さんは鷹揚にうなづくと、いくつ当たり前のようじ、自然に立ち上がった。俺の不自然なお辞儀とは正反対の、そこで立つことが脚本どおりとでもいうかのような、恐ろしく自然な動作。

「それからさ、各クラスに渡す書類なんだけど」

と、綾華さんは仕事の話を続けながら、歩き出そつといや、逃げ出そうとしていた俺に歩調を合わせ、進み始めた。それがあまりにもこちらのリズムと一致していたから、俺はむしろ綾華さんのペースに引っ張られるように歩き始めた。

「要是、クラスごとの企画をとつとと出してもらひつて、必要な資材があればそのリストを作りたいわけよね

「ええ、やつこつ」とです

「企画の管理までやるんだっけ？」

「ええ、むしろ本来はそっちがメインですし」

「じゃあさ、期限つけてさ、遅れたらペナルティがあるって書き込んでけば？」

「それは考えました。ついでに、教務主任あたりと掛け合ってみて、もし大丈夫なら、全校一齊に帰り前にでも時間とつてもうりつて、クラス企画のホームページをやってもらおうかと

「おお、すごいこと考えるね、あんた」

「生徒会長とか、生徒会担当の先生とかとも話してからですけど」

「その場には行きたいな、なんか面白そう」

綾華さんがわざかに前を歩くままで、俺たちは一年の校舎の外れまで来ていた。右手に生物室、左手に化学室、正面に物理室が並ぶ通称「理系三角地帯」。

綾華さんは勝手に化学室の扉を開けた。鍵はかかつてなくて、中には誰もいなかつた。

「ここ、昼休みは開放してるんだよね。試験勉強用に。誰も使ってないか、弁当部屋になっちゃつてるけど」

「はあ」

なんだろう、なんでこんな部屋に来たんだろう、なんかまざい発言があつたかなあ、などと考えながら、俺が生ぬるい返事をすると、がらがらと背もたれ無しの椅子を引っ張り出しながら、綾華さんが俺を見た。

「「ぐるーわん。あいつらに囲まれて、怖かったんじゃない？」
そういうで、にせりと笑う。

「あ」

と、俺は声を上げて、そのまま頭を下げた。

「ありがとうございました、ほんと、助かりました」
助けてくれたんだ。きっと、あまりにも俺が情けない顔をしていましたから。

「うん、素直でよろしい」

綾華さんは、相変わらず規格外な姿で、でもそれがとても似合つていて、恐ろしく綺麗だった。その姿で椅子にぺたりと座り、両足の間に手を置いて座面をつかんでいる。

笑顔に曇りがなくて、陰もなくて、さつきのにやりといつ顔から、すごく澄んだ笑顔になっていた。

この顔か、と俺は思った。この顔で、この人は女子の心すらつかむ校内のスターになつたんだ。

「あたしね、アキちゃんのこと知つてたよ」と、綾華さんは突然話を切り替える。

「どうかで聞いた名前だなあ、とは思つてたんだけどさ」

「まあ、この辺じやありふれてますけどね」

と俺が答えたのは、佐藤姓だけで一クラスは作れるほど校内に佐藤が多いから。綾華さんは足を組みながら首を振る。

「そういうんじゃなく。アキちゃんつてや、掛巣さんの秘蔵つ子とかいわれてない?」

「ああ……そつち筋ですか」

「そう、そつち筋」

恐るべし、カケスさんの伝説。未だに校内に影響力を残すか。娘の誕生日が近いからって、その話で三十分は引っ張るといつマイホームパパのくせに。

「ヤローーどもの噂になつてたの思い出したんだ。普段はびつ見てもおとなしいマジメ君のくせに、喧嘩は恐ろしく強いつて」

「それは大いなる誤解ですよ、勘違い。事実は結構しょぼいですよ」

「強いかどうかはどうでもいいのよ、この場合。大事なのは、一年三年のやんちゃどもが、アキちゃんに一皿置いてるらしこうてこと。たいしたものんじゃんか」

「一皿、ねえ」

そうなんだろうか。麻雀に呼ばれたり集会らしきものに誘われたりすることはあるけれど、たいていは明らかに人数集めの網に引っかかつただけっぽいんだが。

「その噂があつたから、あの子達もアキちゃんに興味ありありだったんだよ」

「なんですか? 綾華さんと仲良くするなつて同級生女子にいがこられたって噂らしいですけど」

「それもあるけどさ」

綾華さんは悪びれずにうなずいた。

「そうそう、それってどうなの？ ほんとに同級生の女子になにかされたわけ？」

聞かれたから、俺は自分が何をいわれたか、どんな田で見られているかを説明した。

綾華さんはくつきりとした一重の田で俺を見つめながら、笑み崩れる一步手前、という顔をしている。

「へえ、大変だねえ」

「その大変さの何割かは綾華さんのおかげなわけですが」

「あたしはそんなの知んないもーん」

ふいっと横を向いた綾華さんは、明らかに笑いをこらえている。そして顔を正面に戻して、臆面もなくいった。

「学園のアイドルと一人きりで話したりできるんだよ？ その程度、安いもんじやない？」

「自分でいいますか、それ」

思わず失笑してしまった。

「誰もいつてくんないから自分でいつてみた」

綾華さんも笑っている。

「確かにすごい人気ですけど。同性にあそこまで好かれるってのは、もう才能ですよね」

「やつぱりー？ あたしつて天才っぽいんだよねー、困っちゃうなー」

大げさに身振りをしている。もう、明らかに突っ込んでくれオーラが漂っている。

同級生なら盛大にスルーして逆ツツコミを待つところだけれど、そこまでこの先輩と距離が近付いていると自惚れるほど、俺は自信たっぷりに生きてない……

「調子の乗り方はいたつて普通でつまんないっすね」

……などと考えつつ、じうじうこき下ろしを口にしてしまったあた

りが、俺の悪いところだらうか。

「えー」

綾華さん、一気にふくれつらになる。

「その突っ込み、冷たくない? アキちゃんってあたしのこと嫌いなんじやないの?」

「とんでもない」

わざとらしく肩をすくめて、俺はせいぜいわざとらしく聞いて聞こえるように続けた。

「本当に嫌いな人に冷たいツッコミするなんて無粋なことはしませんよ。愛情と敬意あればこそ、冷たい突っ込みも出来るんです。親愛の情ですよ」

「ちょーうそくせー」

綾華さんはふくれつらのまま抗議している。その顔が、無表情でいるところ大人がびた美貌なのに、異様にかわいい。

「アキちゃんつてこの前のラーメン屋とかでも思つたけど、『まかすの上手すぎだよね』

「『まかしの人生歩んできますから』

「すげーむかつくんすけど」

「むかつかせてるんですけど、もちろん」

「うわつ、やな奴つ」

一人ともニヤニヤ笑つてゐる。変な空間。

「ところでアキちゃん

ど、綾華さんはニヤニヤしたままいつ

「彼女とかいないの?」

「なんですかいきなり」

「聞いてるのはこっち。お姉さんの質問に答えなさい」

「いないですよ。いふように見えないでしょつ

「うん、見えない」

失礼な。

「というのもだね、君。どうだらう、さつきのお姉さま方のどれか、

紹介したげよ「うじやないか

「は？」

素で聞き返してしまった。

「あんなんだけね、いい子ばっかだよ。ちゅうじ彼氏いないのばつかだし、かわいがつてもらえるぞ」

「はあ」

思いつきり不審がつてている声になってしまった。

「そう警戒するなつて。何も企んでないから」

「企んでる人が正直に企んでますつていうわきやないと思つんですが」

「いかんねえ、もつと人を信じないと。人生つまらなくなるぞ」

「その顔でいわれても説得力ないです、綾華さん」

綾華さんの顔は、どう見ても底から企みがちらちら田をのぞかせている。

「ああ、ひどいわ、あたしを少しも信頼してくれていのね」「今度は悲劇のヒロインですか。

「綾華、ショックで立ち直れないわ。悲観したあまり、眠れないままに夜の街をさ迷い歩いたあげく、うつかり深夜のファミレスでパフェなんか食べちゃつたりしそうだわ」

「ただの夜更かしでしょ、それ。つか、一キビ出るからやめた方がいいですよ」

「そのドライアイスのようなツツコミが快感に変わつたりしたら、あたし人間やめたほうがいいかもね」

「よくそういう大げさな言葉がぽんぽんと出てきますね」

半ば本気で感心していると、綾華さんも半ば感心したような声を出した。

「あんたもどこまでもクールでドライだよね。ここままであたし相手に萎縮しない後輩つて初めてだわ、まじで」

「恐れ入ります」

萎縮しないってんじゃないだろ、これは、と心の中でつぶやく。

かわいげがないだけだな、あるいは好かれる気が無いか。

そりや好かれた方がいいに決まつてゐるけれど、なにしろ素敵な彼氏持ちの上級生相手に、好かれようと努力してビクビクするなんて無駄もいいところだ。

どうせ俺ごときがこの人の友達やそれ以上に昇格する可能性なんかないんだから、仕事仲間でいるうちは、せいぜい地で勝負するしかない。かつこつける気も、必要以上の気を使つ氣もない、というのが正直なところ。

これだけの美人を相手にしようといつのだから、そのくらいの氣でいないと、心のバランスが取れない。

男は、美人を前にすると喋るのもつらくなつてしまつ生き物なのだ。女だって、いい男の前に立つたら、言葉を出すことすら難しくなるだろう？

「こりゃあの子らの手に負えるガキじゃないわ。しばらく付き合つて、あたしがみつちりとお姉さまとのかわり方つてのを調教してからじゃないと」

「調教つて……仕事はマジメにやりましょうね？」

「マジメにやるよ？ もうマジメつてのはあたしのためにある言葉だつてとこ、見せてあげるわ」

「何に対してもマジメかは別として、ですか」

「いい所ついてくるねー、さすがに」

「勘弁してくださいよ、ただでさえ同級生たくさん敵に回してゐるのに」

「気にすんな、ここに味方がいるだろ」

「なにかしら陥れようとしている、実に頼りがいのある仲間がいますね」

「悪意にとっちゃいかんよ、君」

「よくそれで人の事を『政治家みたいでむかつく』とかいえますよね、感心しますよ」

「対抗してるだけだもーん」

なんだか、心の底から楽しんでいるように見えて、いつまでもわくわくしてくれる。

気が合つてのは、こういう人との関わりの事をいつんだろうか。ここでチャイムがなって、舌戦終了。

「あら、残念。もうちょっとバカ話したかったんだけどな」

「いつちは疲労困憊ですよ」

最後の憎まれ口を叩くと、綾華さんは鮮やかに切り返してきた。

「うそつけ、めちゃめちゃ楽しかったくせに」

図星だったから、とつさに何もいえなかつた。綾華さんは、花が咲くような笑顔を見せた。

「やっぱアキちゃんといふと飽きないわ」

「……オヤジギャグ、じゃないですよね、まさか」

今度は綾華さんが黙る番だつた。

ラストにそんなつまらんギャグを平氣でいふとまなかなか深い人だ。

土曜日はバイト。

雨の中、カツパを着てひたすら肉体労働に励んだおかげで、恐ろしい量の汗をかいだ。雨に濡れてるんだか汗に濡れてるんだか、比喩じゃなくわからないくらいに濡れた。

家に帰つたころにはへろへろにくたびれた皮袋と化していて、とりあえずシャワーだけは浴びたあと、スポーツドリンクを一気にリットル飲み干すと、晩飯も食わずに寝入ってしまった。

起きると日曜日の早朝五時。起きるのが早いというより、寝たのが早すぎた。

あれだけ寝る前に飲んだのに、起きるとひどく喉が乾いていた。

あえて冷蔵庫には入れないでいるスポーツドリンクを飲む。

家族は全員寝ている。両親は子供に比べれば早起きだけれど、いくらなんでも日曜日に五時起きする趣味はない。妹はほっとけば昼過ぎまで寝ているし。

夕飯を食べていなことを思い出して、とりあえず何か食べようと台所を探つていると、冷凍した味噌にぎりを発見。解凍して食べる。たほど美味しいものじやないけど、海原雄山を目標しているわけじやないからオーケー。

それから一度自分の部屋に戻ると、携帯がちかちかと光っているのを見つけた。

開いてみると、メールが一件来ていた。

由紀からだつた。

時間は最初が土曜日の夕方七時^{11月}。一件目が九時頃。

『熱は下がりました。心配かけちゃってごめんなさい。知恵熱だつて父に笑われました。本当に熱だけが出て、風邪の症状も何もありませんでした。今、木曜日に書いたメモをまとめています。月曜日には渡せると思いますが』

一件目、絵文字ひとつ入っていないメール。女子高生の気配すら感じられない、由紀らしいといえば由紀らしいメールで、むしろ微笑ましいね。

これに気付かなかつたつてことは、俺が寝たのはその前とこうじとか。

二件目を開くと、ちょっと雰囲気が違つていた。

『木曜日のこと、やっぱり忘れてください』

というタイトルに、俺は思わず眉を寄せた。またなに言ひ出しゃがる。

『メールを送るのも迷惑なことだつてわかつてます。だから返信はいりません。ごめんなさい。晃彦くんの優しさに甘えて、調子に乗つてました。友達でいいなんてぜいたくもいいません。夢を見させてもらつただけで嬉しかつたです。ありがとうございました』

なに一人で暴走してんだ、こいつ。

由紀が考えた軌跡が、鈍い俺でもわかる気がする。つまり、一件目で返信が来なかつたから、それを待つているうちにどんどん悪い方向に考えてしまつて、拳銃の果てに大暴走。

七時に寝てしまつているなんて想像できるはずもないから、仕方が無いのかもしれないけれど、いくらなんでもそんな自己完結はどうだろ。

俺も悪いこととはいへ、ちょっと腹が立つた。

すぐにメールを打つ。

『おはよう。こんな時間にごめん。バイトで疲れて速攻寝ちゃつて、メールに気付かなかつた。つてか、暴走しすぎだし。迷惑だなんて誰がいつた？ わけわかんないこと書いてないで、このメールに気が付いたらコンマ五秒で電話しろ。携帯、力の限り握り締めて待つてるから、早くしないと壊れてつながらなくなるかもだぞ』

えらく上から物をいつている気がしたけれど、このくらい書かなないと連絡して来ない気がした。

そして、わざかに怯えてもいた。

「そのまま由紀とのことが終わってしまったら、俺はどうなるんだ
ね？」

いつくるかわからない由紀からのメールを待つ間、俺は外に出た。
うちの中でうるうるしていると、起きた後の家族から安眠妨害の説
教をくらうことになる。

秋の雨は上がっていて、空はつす曇といつぱん。日の出直前の
明るんできた空は朝焼けもなくて、どにか重い。なのに空気は澄ん
だ感じがする。

近所をぶらぶら歩きながら、ついひじりと由紀のことを考えていた。
告白されてしまった。

人生初。

相手が由紀。

悪い気はしないよな、やっぱ。というより、やっぱくらい嬉しい。
大したことない自分が、突然すごい男になつた気がする。
人に好きになつてもうつてことが、どれだけ嬉しいことか、ど
れだけ心を強くしてくれるか、今までわかつたつもりでいたけれど、
実感してみると次元が違う。想像なんかじゃ追いつかない。

どこを好きになつてくれたんだか知らないけれど、由紀みたいな
物好きも世の中にはいて、俺なんかのことを考えてあさつての方向
に突っ走つていたりする。

由紀にもいつたとおり、今まで由紀を恋愛の対象として見たこと
なんがあるはずも無かつた。そもそも接点が無かつたし、接点が出
来てからは嫌われていると思つていたし。

あの態度から、由紀の俺への想いを見抜けというほつが無理。

呼吸するように女を愛するやつならともかく、女とは縁がない暮
らしを続けてきた俺に、そのハードルは高すぎた。

俺は由紀をどう思つていいんだろう。

かわいい、と思つ。

よく見るときれい、なんてのは失礼な話で、顔さえ上げていれば、誰だつて由紀が美形だつてのはわかる。いつもいつもむいているのは、多分すゞくもつたいない。

好きといわれるまで意識しようとしたこともないし、視線すら合わせてもらつたことがなければ、この子のこと好きになつちやいけないつて無意識に敬遠してきた部分も、きっとあるんだろうと思う。

自分が傷つきたくないから。

じゃあ、嫌われてないどころか、好きといわれてしまつた今、由紀のことをどう思つてゐるか。

木曜の夜、俺は興奮していただけで、自分の心の中なんか見る余裕もなくつて、由紀と別れてから寝付くまで、付き合つたらどうしよう、とか、このまま結婚なんかしちゃつたりなんかして、とか、そんな風に突つ走つてゐ自分が急にみじめに思えたり、要するにパニックだつた。

金曜の夜は、熱を出して学校を休んだ由紀からメールも來ていなかつたことにちょっとショックを受けたり、携帯忘れてたくせに期待する方も馬鹿だよなと凹んだり、このまま月曜日まで何の連絡もなかつたら、やっぱりドッキリの可能性が高かつたりするのかなと悩んだり、やっぱり混乱していた。

土曜日は……それどころじゃなかつた。

そして今日。

暴走している由紀のメールを見て、俺は怯えを感じた。

失いたくない、と思っている自分がいる。そのことに気付いた。いつの間にか家からだいぶ離れた公園まで来ていた。時間は四十分ほど経つっていた。

やべ、帰るのめんたいじやんか、と思いつつ、来た道を引き返し始める。再び歩き出しながら、また考える。

ぐひゅぐひゅ考えずに、今、俺は、何を感じているか。

会いたい。

話したい。

触れたい。

抱きしめてみたい。

由紀の想いを確かめたい。

あの声が聞きたい。

泣きたいのか笑いたいのかわからない、俺を見るときのあの目が見たい。

由紀が心から幸せだつて笑つてるところが見てみたい。

俺はいつの間にか立ち止まっていた。

こんなにも、俺はあの子を欲しがつていてる。

俺なんかがそばにいて、由紀がそれで幸せに思つてくれるなら、俺にとってそれ以上幸せなことつて無い。

由紀が俺を思つてくれればくれるほど、俺は高められる気がする。ここであいつが「やつぱりごめんなさい」とかいってきたら、俺は立ち直れない自信がある。みつともないけれど、認めちまおう。少なくともすぐに立ち上がつてみせる強さは、俺には無い。

虚勢張つたつてしまふがないじゃないか、実際、一通目のメールで断られかけて腹を立てていたのは、認めたくないつていう、恐怖の裏返しでしかなかつたんだろうし。

人を好きになるつて、こないう感覚なのか。自分の全存在が、相手のほんのわずかな言動でものすごい勢いで揺さぶられたり、高められたり、どん底に突き落とされたり。

いや、まあ、あのメールはほんのわずかどころか、いきなりバンカーバスターぶちがまされるよつたもんだけど。

それはともかく、だ。

心を持つていかれた、と、立ち止まつたまま、俺は思つていた。

由紀の時間差攻撃。

三日も経つて、俺は由紀への恋を自覚させられた。

由紀に触れたときの、あの一粒の涙で、俺の心はとっくに由紀に

根こそぎ持つていかれてしまっていたんだ。

俺が相当怒つていいと思つたらしく。

『「じめ……なさい……』

聞き取れなごほじ小さな声で、由紀は電話越しにいきなり謝つていた。

「あやまらなくていいよ、おどかしちゃつて」「じめんな」
家に着く前、だから七時にはまだまだ遠い時間にかかつってきた電話は、そうして始まった。

「今起きたとこさ?」

『「……はー、メール見て、びっくりして、すぐかけました』
電話の向こうでは正座してゐるじやなかろつか。想像力のたくましい方ではないと思つんだが、ありありとその光景が田の前に浮かぶ氣がした。

「早起きだね。いつも休みの日でもこんなに早いの?..」

『「今朝はちょっと早く起きなきやいけなくて……こつもはこんなに早くはないですか』

「やうなんだ。俺もありえないくらい早く起きかけやつて。ありえないくらい早く寝たからだけど」

『「……じめんなさい』

「何で謝るんだよ」

失笑してしまった。

笑い声が伝わって、少し向こうの気配も柔らかくなつた気がする。

『「なんとなく、です』

「敬語もなんとなく?」

『「はい』

ただでさえ声が小さい方なのに、携帯を通すと外の雑音が逆の耳から入つてくるから、かなり聞き取りにくい。この「はい」という返事も、ぎりぎりで耳が捉えた音。

「Jの調子で会話していたら、聞き取るだけで疲れ果ててしまつから、俺はさつさと本題に入ることにした。もつと大きな声で、と要求するのは、もう少し由紀が俺に慣れてからでもいい気がする。「じゃあ、かけてもらってる電話で長く話してもなんだから、用件に入るね」

わずかにゆるみかけた由紀の雰囲気が、携帯越しにも固くなつたのがわかる。

「あんまり緊張しないで聞いてね、怒つてるわけじゃないんだから『……はい』

「その前に、脚、崩そうか。正座してるんでしょ」

「ちょっと力マをかけてみると、由紀が息を呑んだのがわかつた。『どうしてわかつたんですか？ 近くにいるんですか？』

「まさか。自分ちのすぐ前だよ。なんとなくそんな気がしただけ」由紀が自分の部屋でおどおどと窓の外をうががっている様子が由紀に見えるようで、俺はまた失笑してしまう。

「意外にわかりやすい子だね、謎めいた美少女ってことになつてるのはずなんだけど」

『……からかわないで下さい、用件つてなんですか』

「ちょっと怒つたらしい。それもかわいい。

なんて考えていると本氣で怒らせそつなので、慌てて軌道修正した。

「用件つていうか、昨日のメール、見てびっくりしたからさ。俺が思つたこと、早く伝えておこうと思つて」
『……はい』

由紀の声がさらに細くなる。

「とりあえず誤解しないで欲しいのはさ。俺、由紀からメールが来たら嬉しいよ。迷惑なんて思わなこよ。あんま自虐暴走しないでよ

『……迷惑じやないんですか？ ちょっと仕事が一緒になつたくらいで告白していく気持ち悪い女ですよ~』

「気持ち悪いつて思つてたら、あの日その場で断つてるよ

『……』

由紀、沈黙。ごくわずかに息遣いが伝わってくるけれど、氣のせいかかもしれない。携帯のノイズかもしれない。

「由紀がすごい勇気出して、告白してくれてさ、すこしく嬉しかったんだよ。誰かに好きになつてもらえるなんて、考えたことも無かつたから。その相手が由紀みたいな子でよかつた」

なんかクサイこといいはじめたぞ、俺。

「だからさ、勝手に終わらせるなよ。俺、まだ答えもいつてないじやんか。友達にもならなくていい、みたいな寂しい事いうなよ。そりや、俺は由紀に嫌われるもんだと思ってたから、今まで距離あり過ぎたかもしれないけどさ、好きつていつてもらえて、すこしく嬉しかったんだ、本当に」

いつているうちにマジになってきた。字面だとすらすらこいつて見るよつに見えるかもだけれど、口調はそれほど流暢じゃなかつたはず。

「Jの先は」

と、俺は一息入れてから、いつた。

「直接会つてからいいたいんだ。だから……今日、会えないかな」やつとのことで、俺は喉から言葉を絞り出した。
なにげに緊張していたらしい。携帯を持つ手が震えかかっていて、

口が渴いている。

少し沈黙。

携帯の向こうで、由紀が息を詰めている。

それから、押し殺したような息が漏れて、泣きそうな声がそれに続いた。

『……ごめんなさい』

視界が暗転したような気がした。

俺、振られている瞬間か？

頭が一気に沸騰しそうになる。朝の低血圧はどこかに吹き飛び、全身が熱くなつていて。

続く由紀の言葉は、俺の乏しい想像力を超えていた。

『……今日は会えないんです……すごく会いたいけど……これから出かけるの、親戚の結婚式があつて、家族みんなで出席しなきゃいけなくて』

「あ……ああ、そう、なんだ、そりや無理だよな、『ごめん』『…………ごめんなさい、先にいつておけばよかつたんですけど』

由紀の声が本当に涙声になりかけていた。

「祝い事じやしうがないよ、目一杯お祝いしてきてよ」

へららへらと笑いつつ、俺は血がスーツと下がつて行くのを感じていた。ほつとしたような、裏切られたような、なんか混乱した不思議な気分。

で、うちに帰つて、起きていた親父に「何してきたの」と問われ、「人生勉強」と答えて不可解な顔をされつつ、俺はリビングの椅子にへたりこんだ。

もう一日分の精氣を使い果たしたような気がしていた。

すげー空回り。あほみてー。

気が抜けて、体の力も抜けて、だらつとしていた。

だから、不意打ちのバイブで心臓が本氣でどうにかなるくらい驚いた。

着信あり。

あわててポケットから携帯を出して、画面を見る。

『永野綾華』

は？

考える余裕もなく、キーを押して耳に当てる。

「はい、佐藤です」

『あれ？ あんたなんで起きてんの？』

朝っぱらからけんか売つてるとか、この人は。

なにをやつてるんでしょうか、わたくしは。曇下がりの街を、なぜか他人の荷物を持つて歩いている自分がいた。

下北沢の決して広くない道を、人の波をぬうようにして歩いたり、狭い店内であちこち引っかかりながら移動したり、一時間もうろうろしていると、日頃そんなことは絶対にしない人間だけに、その疲労度は学校に行っている平日の比じゃ無い。

そもそも買い物にわざわざ都内に出てくるって発想が無いもんな。しかも下北沢。

「なに疲れてんの？ まだ一日は始まつたばっかりじゃん」

能天気な声を出して俺の背中をバシバシ叩いている人がいる。

「あなたは俺をうんざりさせる名人ですね」

「はあ？ こんな美少女とデートできるのに、うんざりとかいっちゃえるわけ？」

「いくらでもいいますよ、俺は」

綾華さんに決まっている。

ため息混じり、というよりため息九割の声で俺がい「う」と、久々の

買い物だという綾華さんは、ため息の成分ゼロの声で応じる。

「あーあー、聞こえなーい」

実際に楽しそうだ、俺をいじめているときのこの人は。

どうしてこの人と歩いているのか。

元凶はもちろん、早朝の電話。

『あれ？ あんたなんで起きてんの？』

「……じゃあ寝ますから、こきげんよう

『 ひひひひひひひひ、せっかくかけてんのに、いきなり切るなんじやない』

「 あのですね、綾華さん、たまたま起きてましたけどね、寝てて運悪くあなたの電話だと気付いたとして」

『 うふ』

「 出なかつたら明日からのいじめが倍増するわけですよね? 」

『 人聞きがわるいなあ、こじめてないよ、かわいがつてあげてるんじゃないか』

「 あ、すっげー一ヤ一ヤしてるのが見えるつ」

『 なんだよ、見てんのかよ、びっこんだてめつ』

「 お約束のボケ、ありがとうございます」

『 いえいえ、びっくりしました。ってか、突つ込んでからいえよ、そういうの』

朝からどうしてこうハイテンションなんだ、この人は。

つて、俺もか。

なんとなく似たような流れをつこさつきも体験したような気がしつつも、会話を続ける。

「 で、わざわざかわいげのない後輩に、こんな朝もはよから何のご用でしょうか」

『 んー、べつに用はないんだけどやー。アキちゃんがきつとあたしの声を聞きたがつてこるだらうと……』

ふむ。

五秒後に再度着信。

『 こらー！ 切るなー』

「 普通バイトがない休日なら完全に寝てる時間なんです。最低限のマナーでしょう。綾華さんはその辺に落ちてるバカな女子高生じゃないんだから、そのくらいわかるでしょ？ 」

実際、けつこう頭に来ていた。

ギャグ交じりに会話に付き合つていても、それはそれで良かつたんだけれど、綾華さんの俺に対する我がままっぷりがどんどん加速

していて、その聲音が一瞬で俺の怒りに火をつけてしまった。

俺の聲が異様に冷たかったのか、綾華さんともあろう人が、言葉をつまらせた。

『…………』めん、悪かつたよ』

なんとなくこいつまでばつが悪くなる。こきなり素直に謝るなよ。『ひからこそ、生意氣いつてすいませんでした』

『うーん……両成敗つてこと』

「はい、こいつてこいど」

『チャラね』

すぐに声が明るくなる。

由紀の後にこの人と話していると、その切り替えの速さと明るさに、救われる様な気持ちがする。

「で、朝から暇つぶしのお電話ですか？」

『ううん、暇つぶしほれから』

「はい?」

『今日ね、買い物行く約束してたんだけじか、相手の都合で昨日の夜に消えちゃったのね』

「俺に付き合へと」

『うん。話が早くて助かるわ』

「んじや 素早く却下で」

『えー、ちょっととは考えよーよー』

「たまの完全オフなんですからね、ひたすらだらだら過いしたいわけですよ」

『いかんよ、若いもんがそんな怠惰なことでは』

『どこのオジサンですか。綾華さんなら声かけりゃなんぼでも買い物友達なんて捕まるでしょう』

『ところがそうでもないのよ。みんな彼氏持ちでさ』

『それこそ彼氏さんと行つたらいいじゃないですか』

『その彼氏に約束破られたの』

『……彼氏の代わりに俺つてのはどうなんでしょう』

『あたしは気にならないよ?』

「俺は気しますよ。たぶん彼氏さんも」

『あー、それは大丈夫。あたしがいわなきやいいだけの話だし』

『いやだから俺が……』

『うん、知ったこっちゃないし』

この女。

『つていうか、彼氏いないっていつてた人がいたじゃないですか、金曜日に話にいった時』

『いたつけ?』

『そこそこ、都合よくすっとぼけないように』

『気のせいだよ。アキちゃん、その年でもう記憶障害?』

『どこまでもすととぼける気ですね』

『行くとこまで行くよ、今朝のあたしは』

「勝手に行つちゃつて下さつて結構ですけどね、お見送りはしますから」

『どうしてそう可愛げが無いかなえ、きみは「生まれつきです」』

正直、バカ話が楽しくなつてきている。あんなに別世界の人間だ
と思って敬遠していたのが嘘の様に。

『でね、下北沢に行くからね、往復の運賃くらいは準備してね
「人の話、聞いてます?』

『フルユニークロでもおかんファッションでもいいから、一応隠すものは隠してきてよ』

『本当に聞く気がないんですね』

『でもリュックはやめてよね、あれすぐ迷惑だから』

『あーもー本当に聞く気ねーよこの人』

『あんま早いと店空いてないけど、これから出る準備したり、着いてからちょっとお茶してたらすぐお昼近くになっちゃうでしょ』

『ハイハイソウデスネー』

『つてことだからよろしく。準備できたらメールしてね。多分駅集

命にすると思「うナビ』

「拒否権無しですか

『まさかそんなものが存在するとも…』

「……からでも思つていた俺が馬鹿でしたよ

『やーいやーいばーかばーか』

「それじゃまた月曜、お仕事で会いましょー

『あーあー、待つた待つた、『めんつてばー、一緒に行けよー、樂

しいよー?』

リズムよくぽんぽんと進む会話のテンポと、電話の向こうでくる
くると変わる声の表情の豊かさに、俺は思わず笑つてしまつた。

笑つた時点で俺の負け。

『あ、笑つたね?』

「はー、笑いました」

『負けは認める?』

「はいはい、認めますよ」

『じゃあ準備とメールよろしくね?』

「わかりました。適当に隠すもの隠して行きますよ」

『多少は気合入れてきなよ? しの超美少女と一緒に歩くつての忘
れんなよ?』

「自分でそこまでいえる性格の持ち主と歩くつてことは忘れられま
せんね」

『うーん、これがまた客観的事実つてやつだからなー』

『そこまでいえりや、もつ大したもんですよ。呆れてものもいえな
い』

『んじや黙つて集合場所おいで。その大した女とデートできる超絶

素晴らしい権利を君に与えてあげよ!』

『ぜんつぜんありがたくなさうだよね』

『とんでもない、この上ない名誉に体が震える思いですよ』

『よろしご。お昼割り勘にする気でいたけど、全額あなたのせい

にしてあげる』

「……聞き捨てならないセリフが聞こえたわけですが『まーまー、とにかく準備しなさいって。んじゃあたしも準備すっから。よろしくねーん』

そして今に至るわけ。

荷物持ちにくたびれ果てた俺が、よつやく座り込むのを許可されたのは、さらに電車で移動した新宿のカラオケ屋。

なんでカラオケ屋ごときのために新宿まで来なきやいけないのか、理解に苦しむのだけれど、いわれるがままについてきたのは俺。文句をいうのは遅すぎた。

「渋谷つていまいち好きじゃないんだよねー」

路線を選ぶ時に綾華さんがいつていたこと。そういうつ問題じゃない気がするんですよ、俺は。

「よつしゃ、歌うぞ」

と、入る前からやる気満々の綾華さんは、いい加減疲れ果てた腕をさすりながらへたり込んでいる俺の事なんか眼中にない様子で、さつさと曲を選ぶとさつさと歌い始めた。

選曲がすごかつた。

『歌舞伎町の女王』

椎名林檎の名曲。だけども。新宿だからこれってのはあまりに安直じゃなかろうか。

「セミの声を聞くたびに」

から始まるメロディ。

多分上手いんだろうなあ、とは思っていた。

こういう場合の上手さは、音程を外さないこと。せりひり、歌手のクセを完全に「ペー」すること。カラオケレベルの上手をつてそういう事でしょう？

でも、ちょっとこれは想像を超えていた。

綾華さん、いきなり歌い出しから自分の世界を開いてきた。

喉や口で音程をあやつる、上手いけど素人くさいカラオケ名人の歌い方じやなかつた。吐き出す空気の量や圧力で音程をあやつって、声量と音程のバランスで聞かせる、迫力のある歌い方。

腹式呼吸までできているらしく、喉を絞つて声を出す素人の歌い方とはかけ離れた歌い方だつた。

ちょっと待て、なんなんだこの人は。

綾華さんの普段の声は潤いのある落ち着いたアルトというところで、ちょっとと大人びた色氣がある、なんて表現してもいいと思う。それが、歌い始めた綾華さんの声は、明らかに今まで聴いたことがあるどんな声とも違つていて、上手いとか下手だと、そういうレベルじゃ無かつた。

圧倒された。一曲目から。

「今夜からはこの街で 娘のあたしが女王」

最後のファルセットまできつちり歌い上げて、綾華さんは静かにマイクを下ろした。

「す……すげっす」

素直に拍手していた。

「あらー？ やっぱりー？ あたしつて天才っぽくつしてさー」

わざとらしく胸を張つてみせる綾華さんは明らかに突つ込み待ちだつたけれど、そんな照れ隠しに付き合つ氣が無くなるくらい、この人の歌はすごかつた。

「いや、マジで天才かも」

本物のアーティストが目の前で歌つたら、もっと感動するんだろうか。それとも、この人はそういう人々と同レベルにあつたりするんじやなかろうか。なんという無敵超人。

俺が非常に素直に褒め称える拍手をしたせいか、綾華さんは急に態度を小さくした。

「あ、ああ、あのさ、素で褒めないでくんないかな、すごい恥ずかしいんだけど」

困つたような顔で笑いながら、俺からちょっと離れた所に小さくなつて座つた。

「いや、だつて、俺、カラオケでこんなに感動したの初めてですよ」「だからこ'うなつてば」

綾華さん、タッチパネルのリモコンを俺の方に突き出す。顔を思いつきり下げるけれど、多分赤くなっている。

「とつと選んで歌いやがれ」

「えー、歌いにくいですよ、あんなん聞かせられた後じゃ

「ばか、カラオケなんて乗りと勢いでしうが」

「俺なんかが歌うより、綾華さんが歌ってるの聞いてるほうがいいですって」

「いいから選べっての。命令だぞ、お姉さまの」

ぐりぐりと体にまで押し付けてくるから、仕方なく選曲を始める。といつても、歌えるレパートリーなんて限られているし、あんなの聞かされた後にまともな曲なんか選べるはずがないでしょ。乗りと勢い、という綾華さんの言葉に従つてみることにした。

『リングダリングダ』

もちろん、ヒットした当時の事なんか知らないけれど、ちょっと前に映画になつたのを見て、友達なんかともよく慣れながら歌つたりする曲。

ちんまり歌つてもつまんない曲だし、綾華さんもイントロからのりのりだつたから、思いつきりがなつて歌つてみた。

「ドブネズミみたいに 美しくなりたい」

の辺りで怒鳴つても仕方ないけれど、

「リングダリングダ」

の連呼が始まれば、後は勢い任せになるのみ。上手く歌おうつて曲じゃない。

歌い終わつたら疲れきつてへたつてしまつへりこぶちかますのが正解。

そのとおりに歌いきつて、軽い喉の痛みを感じながらシートにどさつと座り込むと、綾華さんが大はしゃぎで手を叩いている。

「なんだあ、歌えるんじやんかあ」

「綾華さんと比べんて下さじよ、空しくなるから」

「なにいつてんのよ、かつこよかつたよ」

綾華さんのテンションがいつも以上に高い。

俺ががなつてている間に素早く一曲ばかり入れていたようで、すぐ
に次の曲のイントロが始まっていたから、それ以上は褒め殺しには
ならなかつたけれど、この人に歌を褒められて嬉しくならないやつ
は多分いない。

俺も単純に嬉しくなつて、綾華さんの強力な歌声に包まれながら
次の曲を探すといつ、ちょっと体験できない幸運を味わつていた。
この日の綾華さんは、当然ながら私服。

ファツショソンってなに？ 食えるの？ という人生を送つている
俺にはよくわからないけれど、ブーツカットのジーンズにベージュ
のライダースジャケットなんて着ているから、背が高くてただでさ
えかっこいい系の人人が、なおさらかつこよくなつていて。
一緒に歩くのが嫌になるくらいに。

ジャケットの中はラインストーンが並んだ黒いチビ衿のポロシャ
ツで、ちょっととかがんだりすると背中が見えてぞきつとする。

何回か、ジーンズの後ろから下着が見えていたけれど、まあ、あ
れはそういうものなんだろう。見せてもいいですよ、と自己主張す
るようになにやら口ゴガが並んでいた。

それでも思わず見入つてしまい、あわてて視線をそらす辺りが、
俺も気の小さいムツツリだな、と自己嫌悪に陥らせてくれる。

そのジーンズに包まれた長い脚を組んで、ヒールが高い黒いパン
プスを見せて座つていると、どうしてこの人がおとなしく高校生な
んかやつていられるのかと疑問にすら思う。

それに比べて俺なんて。

同じジーンズでも俺のは某メーカーのありきたりのストレートジ
ーンズ、上に着ているのはかるうじてヨニクロではないものの、郊
外によくある量販店で買ったウェスタンシャツ。妹の見たてつての
が情けない。中はただのTシャツ。

それにニューバランスのスニーカーだからね。本当にこの人と歩
いてて良かつたのかね。犯罪じゃないんかね。

本来なら視線すら合わせることも許されない、カーストの最上層と最下層の人間が一緒に過ぐしている、という気がして、今日は荷物持ちをしながら、ずいぶんとひがみっぽくなつたりもした。

だいたい彼氏がいる人相手に、のこのこ誘われてついてくる辺りがどうしようもない。なにやつてんだ俺は。

そもそも、由紀のことはどうする気なんだ。

告白されて、会いたいだのこんなにも好きだだと考えておきながら、同じ日にこうしてはるか最上層カーストにおわすお方と席をともにし、あまつさえその美声を拝聴する機会に恵まれているこの状況。

嬉しい反面、楽しい反面。

心がちょっと黒いものに冒されていくのを、俺はカラオケのリモコンをいじりながら、ひどく浮ついた気持ちで眺めていた。そして、やけに長い一日は、まだ終わってはいない。

帰りが問題なんだ、という事に気付いたのが、カラオケもそろそろお開きというタイミング。

あと10分で2時間分が終わり、といつところで、「天城越え」を熱唱する綾華さんを置いてトイレに立った。

カラオケボックスの狭いトイレで小さい方を済ませ、手を洗う。その水の冷たさが不意に頭を刺激したようで、帰りのことが頭をよぎった。

あ。

もしかして、地元で綾華さんと一緒に姿を見られるのって、致命的にやばくないか？

ただでさえ、相手は綾華さんだ。うちの高校のアイドルで、彼氏持ちで、家は地元の名士。

俺がその辺うるさいしていたところで誰も気にもしないだろうけれど、綾華さんが彼氏以外の男とうるさいしていたら、田立つことこの上ない。

それに気付いた瞬間、水の冷たさもあってか、俺は寒気が勢いよく背中を駆け上がつて行くを感じた。

由紀。

狭い田舎のこと、絶対耳に入るはず。

今日は親戚の結婚式でいないにしても、あんな電話をしておいて、その日の内に綾華さんとデートしている男の話が耳に入つたら。

「好きつていつてもらえてすごく嬉しかった

「この先は、直接会つてからいいたいんだ

よくいうわ、このあほんだら！

激しく自分ツッコミしてから、俺はトイレの中でも頭を抱えた。

何やつてんだ俺は。ついつい綾華さんのペースにはまつて誘い出

されて、めぢやめぢや楽しんで。帰りのことも気付かずにのんきにカラオケなんぞ歌つてからに。

別にやましいことはしていない、つもりだけれど、そういうときはついてしまうにはあまりに節操がないこの状況。

これだから童貞君は！

ひとしきり悶絶したあと、俺は落ち着こうと深呼吸した。
とたんに、トイレのそれなりの異臭に襲われて、ぶはっと咳き込む。

あわてて廊下に飛び出して、たまたま通りかかったお姉さま方にじろじろ見られて、それで多少は血が上った頭がすつきりとした。とりあえず戻らないと。時間は待ってくれない。

俺が部屋に戻るうとすると、ちょうど綾華さんが出でてくるといつだつた。

「どんだけこもってんだよ、便秘くんか？」

二人分（ほとんど綾華さんの買い物袋だけれど）の荷物をどうにか持ち出そうとしたらしい綾華さんが、ぶーぶーと文句をいひ。

「追加料金払うんなら置いて帰つてもいいんだけどね」

ああ、それも手か、などといおうものなら殴られかねない空氣だから、大急ぎで駆け寄り、荷物を持つ。

「すんませんすんません」

平謝りした俺が荷物を持つと、それ以上追求するつもりも無かつたようで、綾華さんは元気に拳を宙に突き出した。

「さあ、まだちょっと歌い足りないけど、それなりに楽しかったし、次は腹巻くからね！」

「はい！？」

素で返してしまった。

「はいってなによ」

綾華さん、拳を突き出したまま俺を細くした田で見ている。

時間は確か現在6時近く。明日は学校。ここは新宿。電車で地元まで乗り換え含めて約1時間。

「えーっと、帰るんじゃなく?」

「あたしに空腹のまま帰れと?」

「やばい。食事そのものに疑問を持つたと思われると、空腹の苛立

ちをたたきつけられそうだ。

「……しょ、食事はいいんですけど、次は、とかおっしゃるつてことは、食事後もまだラウンジが控えてるつてことで?」

「嫌なの?」

目が細いんです。射るような視線なんです。怖いんです。

「いや……ただ、学生の本分は明日から再開される学校にまずは通うことではないかと愚考する次第なわけでございまして」

「まだ時間余裕でしょ。日付が変わる前に帰れれば全然大丈夫じゃん」

「ちょっと待った

反射的に手を上げてさえぎる。

「その考え方おかしいから」

「えー、なんですよー」

「きなり口を尖らせて可憐らしく声に切り替わっていく。いやいや、だまされんぞ。

「普通のマジメな高校生の発想に、午前様じやなきやオーケーとか無いでしょ」

「いつの時代の高校生だよ」

「時代関係無いですって。ちなみにうちには門限つて物もあるんで

すゼ、お嬢さん」

「まじで? おかしくない?」

「おかしくないから」

「まずい。この人はズレてる。いや、世間的には俺がズレているのかもしれないけれど、高校生が日付が変わるまで遊び回っていて怒られもしないような家庭環境に、俺は育つてない。

「そりや、社会人とかならそれでもいいんでしょうけれど、俺には

無理です」

無意識に、俺は地雷を踏んでいたのかもしれない。

綾華さんは社会人の彼氏がいて、そういう人と付き合つたりしていれば、午前様になることだってあるんだろう。そうでなくとも遊んでいる印象が強い人だから、うちみたいなくそマジメな家庭からは想像もできないような自由さで外出しているのかもしれない。

そんなふうな思い込みが、俺にこのセリフをいわせていた。

綾華さんは俺のセリフに一瞬目を細めると、真顔になつて5秒ほど反応しなかつた。

何かやばいこといつたのか、と俺が冷や汗混じりに思い始めたころ、綾華さんは憑き物が落ちたような透明な顔になつて、微笑んだ。

「……そうだね、そうなんだよね」

「……」

どう返していいものかわからない俺が立ち尽くしていると、綾華さんの澄み切つた笑顔が恐ろしくきれいに見えて、胸を驚掴みにされたような気がした。

「いやあ、アキちゃんといふと新しい発見があつていいねえ」

「……なんすか、それ」

「いいのいいの、こいつの話。それはそれとしてだ」

綾華さんは自己完結して歩き出す。

「今日はおとなしく帰るにしても、おなか空いたまま電車乗るの嫌だし、なんか食べて行こうよ。それもNG?」

声が明るかつたから、俺はとりあえずそれに乗つかることにした。何がなんだかわからなかつたけれど、綾華さんが機嫌を損ねていなければ、それでいい気がした。

「全然オッケーっす。お皿は割り勘だつたし、こいつも割り勘の約束だから、晩飯くらいはおごりますよ」

「おーっ、さすが勤労少年、こいつもおごりますよ、とかいわない少市民つぶりがすてき」

「まっすぐ帰ります?」

「「」になりますあああす」

綾華さん、スキップしてる。リアルでスキップなんて見たの、何年
ぶりだろ？。

「もしかして、由紀となんかあつた？」

いきなり核心を突かれて、口に入れたばかりの広島風お好み焼きを盛大に吹きそうになつた。

綾華さんと入つた、靖国通りからちょっと南に入った雑居ビルにあるお好み焼きやさんで、俺はさりげないつもりで「帰りはどうします？一緒に駅前なんか歩いてたら、ちょっとまずそうな気もしないではないんですけど」と話していた。

ちょっとと考えていた綾華さんが次に発したセリフが、冒頭のセリフ。綾華さん、あなたにはいつから読心機能が追加されたんですか。俺は口に入っている物を守るのが精一杯で、涙目になりながらどうにか強引に飲み込み、それから咳き込んだ。

綾華さんが対面の席で呆れている。

「大丈夫？」

大丈夫です、と答えかけて、見事にむせる。げつほげつほと何度もせきをしていると、綾華さんが水を入れたグラスを目の前に差し出してくれた。

ありがたいけれど、まだ早い。

ありがとう、の意味で手を軽く上げながら、大きく息を吸つて一度息を止め、思い切りせきをした。

そこでやっと落ち着いて、綾華さんが置いてくれた水を取り、慎重に口をつけた。

「今度こそ大丈夫？」

「大丈夫です、ありがとうございました」

「そんだけむせたら、さつきの質問の答えはいらないよ」

「ばればれですかね」

「ばればれですね」

綾華さんがにっこり笑つた。

「そつ、か、由紀は勇気を出したか」

洒落かな、と一瞬思つたが、そのつもりはないようで、次のセリフでまた綾華さんは驚かせてくれた。

「意外に早かつたわね」

「へ？」

意外に？

「告られたんでしょう？　由紀」

と聞かれて、思わず素直にうなずいてしまって、綾華さんはかえつてつまらなさそうな表情になつた。

「文化祭が終わる頃に言ひ出すのかなあ、とか思つてたけどや、いろんなに早い時期に告るとほ。案外手が早い子だつたのね」

「……つて、知つてたんですか」

「なにを」

「その、由紀が、俺のこと」

「ばればれでしょーが。てか、あんた、気付いて無かつたとか？」

綾華さんが由紀の様子から俺を好きになつていてを見抜いたのは、俺にとっては驚きだつたけれど、綾華さんにしてみれば、俺が由紀の気持ちに気付いていなかつた事の方が驚きだつたらしい。

「まじで？　うそでしょ？」

「いやあ、まつたく」

「あたしだましても得しないよ？」

「いや、だましてないし」

「そのにぶさつて犯罪的だよねえ、すごいわ、いや、ほんと」
素で驚いているらしい様子がむかつくわけですが。

「気付くわけないじゃないですか、あんなに避けられてたんだし」

「ありや避けてたんじやなくて、好きすぎて直視できなかつたんでしょ」

綾華さんの表現はストレートすぎてなかなかうなづけない。好きすぎて直視できないとか、そういうのってありえるんだろうか。いや、そんなようなことは由紀にいわれたけれど。

「だつて、俺なんかをそういう目で見る人間がいるって事自体、ありえないと思うし……」

「にふりっていうか、気付いてないんだね、あんたは」

綾華さんは感心したように、頬杖をつきながら俺を見ていく。

「気付いてない、と」と

恐る恐る、という感じで聞いてみると、綾華さんはひょっと首をかしげるようにしてから、頬杖を外した。

「あんた、自分で思つてるよりずっといい男よ。ちょっと直覚とかないと、まわりの女泣かすだけだよ」

「なんことこわれても」

綾華さんの声に冗談の気配なんか全然無くて、それが俺をかえつて困惑させた。

「俺、今まで女の子にもたこともないし、そもそも女の子と口きくことだつて滅多にないくらいで」

「関係ないでしょ、そんなの。それはあんたの周りの女に見る目がないのか、あんたがあまりに鈍くて気付いてないだけなのか、どちらにしろ、あたしの目がよっぽど腐つてなきや、あんたはいい男よ」
そんなこと断言されても、ねえ。

俺があたふたと困つているだけで、ろくに反応できなかつたのが苛立しかつたのか、綾華さんは続けた。

「ちょっと褒められたぐらいで動搖してんじゃないよ、ショーむな
い」

「す、すいません。てか、褒めてたんですね」

「けなしちゃいないでしょ」

「いや、褒めごろしかなあ、と」

「褒めごろしてどうすんのよ、おじいてくれるつていつての相手を。
それ以上何か求めて欲しいの？」

「いやいやいやいや」

慌てた振りをする。

つい最近まで、もてた経験も無ければ、バレンタインに妹と母親

以外からチョコをもらつた経験もない、哀しい青春を送つてきた男に、何を言い出すのだろう。俺はこの期に及んでも綾華さんの意図を探り出そうとか考えていた。

そんな俺に向かつて、綾華さんはとじめを刺すよつた言葉を叩き付けてきた。

「あたしだつて、あんたのこと好きだよ」

俺はこの言葉で完全停止した。

頭がフリーズした、とかいう問題じゃない。身動きが出来なくなつてしまっていた。

めまいがしそうなほど一気に血が頭に上り詰めて、視界が狭まる。綾華さんの胸元に固定した視線が動かせない。目なんか見た日には、多分、即死する。

そういう俺の様子を見て、自分の言葉が与えた衝撃を冷静に計つていたらしい綾華さんは、平然とした口調で俺の解凍にかかる。

「まあ、あたしは彼氏がいるし、あんたになびくことは無いにしてもさ。でも、嫌いなやつなら近付く氣にもならないし、好きでもないやつと一日遊んでられるほど忍耐強くもないわけ」

からうじてうなずく俺を見ながら、綾華さんは続ける。

「友達として好きとか、男として好きとか、そういうのって境界線曖昧だとあたしは思つてるのね。タイミング次第で変わるものなんだろうし、男女で友情が成立するかとか、あほかつて思つちゃう人だから」

この話はどこに行くのか、とはらはらしながら聞く。

「そんなの、女同士の友情だつて不变じゃないつてのに、今の時点で成立してゐる友情が永遠に続くと思う方が馬鹿だろつて話で」

それは納得できる気がする。

「だから、あんたのことを好きつて思つてるこの感情がどう変わって行くかはあたしにもわかんない。でもね、とりあえず今はね、弟分としてかわいがつてるのが楽しくてしようがないのね」

弟分として、という言葉に、俺は正直ほつとしていた。

「あたしがそういう後輩作ったのって初めてなのね。告つて来る後輩は掃いて捨てるほどいるけどさ」

「まあ、そうでしょうね」

思ひ当たる節はありますぜあるほどある。

「そういう子達じゃなく、あんたみたいな失礼極まりない小僧をかわいがつてるあたり、あんた自身にそれなりに魅力がなきや無理な話よ」

「……そなんでしょうか」

「まだ懐疑的かね、この子は」

綾華さんがついに苦笑した。

「だつて」と、俺はつい拗ねた声を出した。

「今の今まで、俺はモテない人生の裏街道を全力で突っ走つてたんですよ。いきなりそんなこといわれたって、はいそうですかと納得できるわけないでしょう」

「納得しろよ、あたしが素でいつてるんだから」

「無理です、いきなりは」

かたくなな俺の姿勢が笑えるらしく、綾華さんは苦笑といつより、にやにやという笑いになつてきた。

「で、そのもてないくんは、由紀の告白にどう答えたのかな?」

「……想像はついてるんじゃないですか?」

あえてカマをかけると、綾華さんはあっさりと口を開つた。

「保留中、そんなとこかな」

「正解、です」

この人はほんとにどこまで洞察力があるのだらう。俺が目を丸くしていると、綾華さんはニヤニヤ笑いをまた苦笑の形に変えた。

「だつてあたしと遊びに来てる時点でそう考えるのが自然でしょうが。オッケーしてりや来るわけないし、断つてたら人と遊ぶどこのじやない顔してるだらうし」

見事に見透かされているらしい。

「どうすんの?」

口元に微笑を浮かべたまま、優しい目をした綾華さんはポンと質問を落としてくる。ついこっちが拾つてしまつタイミングで。

俺は素直に答えていた。

「受けます」

それ以上の説明は、この人にはいらないだろう。

綾華さんはこりこりと笑つた。

「おめでとう」

綾華さんはさすがだった。

「一緒に帰つたらいい誤解されそつだしね。ビリセアキちゃんもそれが気になつて仕方ないんでしょ?」

そういうと、綾華さんは新宿から地元までの乗換駅で、一本遅らせて帰るからといつて手を振つた。

「俺が遅らせますつて」

「妙な氣を使うなよ、いいから行けつて」

額を小突かれてしまつた。俺が微妙な顔をして見送つていると、綾華さんはホーム横のトイレに姿を消していった。

「……ありがとうございました」

その背中に向かつて、俺は深く深くお辞儀をした。そうしたくなる、綾華さんの背中だった。

そうして、俺の長い一日は、ようやく終わりを迎ひつあった。この時は、そう思つていた。

立つたまま電車に揺られ、一人になつて、ようやく俺の神経は落ち着きを取り戻していった。

なんだかんかいつて綾華さんと一緒にの時には、常に昂ぶつていたんだろう。急に疲れがどつと出でてきた。

体力的なものじゃない。もひとつ、脳の奥から湧き出でてくるような疲れ。

綾華さんにお礼のメールを打つ。なんて書けばいいのか悩んでいふつに時間は過ぎて行く。

よつやく打ちおわり、送信しつつ、ふつ、と大きくため息をつくと、地元の駅に着く。

駅前のロータリーをつつきり、最初の交差点で曲がり、家への道をたどり始めた時、携帯が鳴つた。

綾華さんだろうか、と思って携帯を開くと、由紀からの電話だつ

た。

じょんと胸が動く。

携帯の画面の中に浮かび上がる「渋谷由紀」の字体をじょんと眺めてから、キーを押し、左耳に押し当てる。時計は9時過ぎを表示していた。

「はい、佐藤です」

ちょっと硬い声になっていたかもしれない。

『渋谷です』

聞こえるぎりぎりの声で、由紀が名乗っている。携帯を持つ左手の親指が、サイドキーを数度押して、音量を限界まで上げていた。

「こんばんは。お疲れ様」

まばらに通る車やバイクの音にかき消されない程度にじょんきりした声で、俺は携帯の向こうにいる由紀に話しかけた。

『こんばんは、お疲れ様です』

オウム返しに小さい声が聞こえてくる。

『こんな時間にじめんなさい。もう寝てましたか?』

「まだ。ていうか、外にいるし。聞こえるでしょ、車の音とか」

『あ、はい』

「どうだった、結婚式。楽しめた?」

『特に楽しくは……親戚が多いから、挨拶してひたひたに終わっちゃつた感じでした』

「そつか。花嫁さんはきれいだった?」

『ええ、きれいでした。写真もありますから、もしよろしければご覧下さい』

硬いなあ、この子は。いまどき、電話口でこんな敬語使える高校生っていうのかね。

ていうか、他の家の花嫁にまで興味はないわけで。「楽しみにしてく

と、適当に答えておいて、俺は口調もそのままに話を切り替える。

「で、どうしたの? 声でも聞きたくなつた?」

『冗談に聞こえる程度には声に笑いを含めたつもり。由紀はその笑いには反応して来なかつた。

『それもあります。でも、そりじゃないです』

「うん」

何がいいたいのか、なんとなくわかる気はしている。

今朝の電話の続きだろ？

『せつかく晃彦くんに誘つてももらえたのに、断つたのが気になつて

……』

「気にしなくていいのに。先約があつたんだからそつち優先でしょ」「それはそうですけど……』

「気にしないで。俺も今日はそれなりに忙しかつたし」

『そうだつたんですね、か』

「久しぶりに休日にネットにつながらない一日だつたよ」

『そうですか』

「結婚式つてやつぱ制服で出るの？ 振袖着てたりとかはしないんでしょ？」

多分、由紀には俺がかなり意地悪に思えていたんだらうと思つ。本題に入りかけて、逸らしている。

『あの……』

恐る恐る、とこゝを感じで由紀が話を切つてくれる。

「うん」

俺はこの時、少し後ろめたさがあつた。だって、由紀のことをほつたらかしにするみたいに、俺は綾華さんと一日ドートしていたわけだ。

由紀の細い声が、まるで俺を責めていたように聞こえていた。そんなわけはないのに。

『……』

電話の向こうから、由紀がためらつてゐるような息遣いが聞こえてきた、気がした。

『……』

どうした。がんばれ。俺は無言のままエールを送った。綾華さんの完璧超人っぷりをまざまざと見せつけられた一日の後だからか、変に余裕があつたのかもしない。

あるいは、罪悪感のような物が、どこか他人事のように思わせていたのかもしない。

由紀はそんな俺のことをどう感じていたんだろう。それとも、俺の内心を伺う余裕なんか無かつたんだろうか。

この電話をかけるのにも、相当勇気が必要だつたんだろう。でも、かけてしまつたものは、なんとか言葉を出さないといけない。

やつと、由紀は呼吸を整えた。

『……迷惑かもしれないし、失礼だとも思うんですけど……今から、会えませんか』

「え」

これはちょっと意外だった。

「大丈夫なの？」

なぜなら、由紀の家が厳格で、こんな時間に外出できるとは思えなかつたから。

『ごめんなさい、やつぱり迷惑ですよね、非常識でした、ごめんなさい』

「いや、そうじゃなくてさ」

由紀がいつものように暴走しかけたから、俺はあわてた。

「俺はいいんだよ、どうせ外にいるんだし。由紀の方が大丈夫なのがなつて」

『それは大丈夫です。父も母も疲れて早く床に入りましたし、他の家族もそれぞれ部屋に入りましたから』

「なんだ。でも、ばれたら大変でしょ？」

『やっぱり迷惑ですか？　迷惑ですよね？　ごめんなさい、私がおかしいんです』

「いや、だからね」

「この子は。

「大丈夫ならいいんだよ。でも無理はしちゃダメだよ、夜遅いのは確かになんだから」

『無理なんかじゃないです。いつまでも子供じゃないんですから』
「でも女の子だからさ。こくら田舎だっていつたって、危ないものは危ないわけで」

『あの、会えないならそれでいいんですけど、私が勝手に期待して勝手に盛り上がってるだけだから、晃彦くんに迷惑かけたくないし、わがままだつてわかってるから』

「こら」

ちょっと大きく声を出すと、スピーカー越しにも由紀が身を固くしたのがわかつた。

『そのすぐ暴走するのを何とかしなさい。可愛過ぎるから』

『……え』

我ながら恥ずかしいことをいい始めているのがわかるけれど、今さら止まれない。

「会えないとはいってないし、きみのわがままだとも思つてないよ。俺だつて会いたいし。声だつて、電話越しじゃ物足りないし」

由紀の息遣いが伝わってくる。押し殺してはいるけれど、わずかにもれてくる息の音の間隔は狭い。

「ちょうど外にいるんだし、会いに行くよ。ちょっと時間はかかるけど、待つてて」

『そ……そんな、私が行きます』

「何度もいわせないでね。こくら田舎でも女の子一人歩かせるわけにはいかないの。まして由紀みたいなかわいい子に来させるとかありえないから」

普段の俺なら絶対に口にしない「かわいい」という言葉がほいほい出てくる。

勢いつて怖いね。

「出来るだけ早く行く。近くになつたらこくら田舎から電話入れるから。待つてて」

『……はい』

由紀の短い返事に、涙の成分が混じっている気がしたのは、たぶん勘違いじゃなかつたと思うんだ。

こうして、俺の長い長い一日は、何度もかの仕切り直しを迎えた。

深いワイン色のワンピースの上に白いカーティガンを羽織った姿が、「ンビニの強い照明に浮かび上がっている。長い黒髪が濡れたように光っているけれど、まさか風呂上りじゃないだろうな。背を伸ばして、あごを引いて、両肘を抱くようにして立っているその姿は、もどか華奢だからかなげではあっても、電話の声のように弱々しい感じはしない。

俺が歩いている方向はちゅうじ死角らしく、すぐ近くに行くまで、由紀は気付かなかつた。

ちゅうと大きな声を出せば届く距離になつて、由紀が俺に気付いてくれた。ちゅうじ、声をかけよつかと手を上げかけたときだから、そのまま手を上げた。

「お待たせ」

「あ……じめんなさい」

「こきなつじめんなさいなんだ」

思わず笑つてしまつた。

「だつて、急に呼びつけたりしたから」

由紀は視線を合わせず、急におどおどして落ち着きなく俺の胸の高さで視線をさまよわせてこる。頭も揺れるから、メガネのフレームが照明を反射してきらきら光つている。

かわいらしさを出さうとしているのなら、ここに上田遣つのひとつも破裂させるんだるけれど、由紀の場合には本当におどおどしてしまつているらしく。

「その件はさつきの電話で解決したと思つてたけど

といつ俺と、田を合わせるどいるか、後ずさないとしている。本当にこの子は俺のことが好きなんだろうか。

「うん……じゃあ、ありがと」

落ち着き先を探して肩からかけたトートバッグにかかっていた両

手を離し、からだの前に重ねて丁寧にお辞儀した。

「それならいいよ」

もつ、笑うしかなくなつっていた俺がい「う」と、由紀は頭を上げながらやつと俺の顔を見た。俺はやつと由紀の顔が押めた。

風呂上り、ではないらしい。髪はきちんと乾いている。ほとんどの女子が羨望の眼差しを向けること間違ひ無しのまっすぐな髪が、風も無い夜の空気に触れてしつとりと輝いていた。

学校ではたいてい後ろで束ねているから、下ろしているのが新鮮だった。中学生の頃には何度も見た記憶もあつたけれど、高校に入つてからは見た記憶が無い。

白い顔は、実のところ、よく見えていない。目が悪いからじゃなく、逆光だから。由紀がコンビニを背にして立つていたから、暗い住宅街を背中にしている俺には、目がまだ明るさになれないせいもあるって、表情まではよく見えていない。その分由紀には俺の顔がよく見えただろう。

もつとも、由紀はすぐに顔を伏せてしまつていたけれど。

「移動とか」挨拶とかで疲れてるだろ。どこか、座れるところに行かない？」

まぶしくて目を細めながらいつと、由紀が小さくつづいた。

「じゃあ飲み物買つていこつよ」

俺がコンビニに入ると、由紀は一步遅れてついて来た。ペットボトルが置いてある一画に来て選んでいる時も、俺の視界に入つてこない。冷蔵庫の扉を閉めてレジに向かおうと振り返ると、さつと違う扉を開けてペットボトルを取り出し、やつぱり俺の後ろについた。本当に、本当にこの子は俺のことが好きなんでしょうか。不安になってきたんですけれど。

なんか以前より強力に警戒されてないか、という疑惑が大きくなつていく中、俺はせいぜいゆっくりと歩きながら、コンビニのすぐ後ろにある公園へ歩いていった。

由紀の家からは歩いて3分。学校からだと歩いて10分からな

い場所にある。小さな公園だけれど、滑り台と砂場と鉄棒があつて、北側に一本大きな桜の木がある。そのすぐ近くにベンチが設置されている。

「寒くない？ 大丈夫？」

と、座った直後に由紀に尋ねる。ちょうど隣に座りかけていた由紀は、ふるふると首を横に振った。俺がベンチのほぼ真ん中に座つたのに、由紀は一番端にちょっと腰掛けて、結界でも張るかのように、俺との間にトートバッグを置いている。

泣くやうにやぐらへ。

「で、や」

と、俺はちよつと間を置いてから口を開く。視線はまつすぐ前。隣に座る由紀の姿はほとんど見えない。

何をどう喋ればいいんだらう、と、ここに来るまでは色々と考えていた。

でも、じつして由紀と一緒に座つていると、考えていたのが馬鹿馬鹿しく感じる自分がいた。

告白しておいて、前よりよそよそしくなるつてどうなんだよ、という怒りにも似た感情がある一方で、でも自分が相手を好きな気持ちが相手にとって迷惑だつたらどうしよう、と考えすぎたあげく、そうなつてしまつてしまつているのだとしたら、それって相当かわいいよな、などと考えている自分がいる。

考えてきたセリフなんか捨てちまえ。今この気持ちをぶつけ、あとは由紀に任せればいいじゃんか。

「きみが俺のこと、どうしたいかは、よくわかんないけど」

視界の端に、由紀がピクンとからだを固くした様子が入つてくる。けど、放置。

「だつて、なんか今日はやたら壁を作られている気もするし、正直、じつして今会つてるのも、実はきみにとつては重荷だつたりするのかな、とか考えたりもするし」

由紀が慌てたように俺を見て首を振つてゐるのが目の端に見えた

けど、まだそっちは向かない。いいことにこうのが先。

「でも、俺も、まあ、恋愛経験とかあるわけじゃないし、自分が告白した立場だつたら、相手が回答して来てくれてないのござひ振舞えばいいのかとか、多分思いつかないだらうからさ」

持っていたペットボトルを由紀とは反対側、右側に置く。

「だから気持ちは伝えとく。俺、由紀が好きだよ」

さり。

こんなに簡単に出てこいもんなのかな、と思つくりこれいつと出た、好き、という言葉。

それから、俺はやつと由紀を見た。

由紀は、ベンチに浅く腰かけて、ピンと上半身を伸ばしている。手は脚の上にそろえてぎゅっと握られていて、斜めに向けた体から俺をまっすぐに見つめていた。

メガネの奥の瞳が丸くなつていて、コントラクトなら間違いなく外れている。いつもはきゅっと閉じられている脣は半開きになつていて、要するに、由紀は、呆然としていた。

「……と、こつても信じられないか」

そんなに驚かれるとは思つていなかつたから、こつちまで驚いた。俺が付け足すようにいつと、由紀は口をパクパクさせた。

「？」

首をかしげる。何がいいたいのかまではわからぬけれど、少なくとも酸素が足りなくてパクパクしているわけじゃないことくらいはわかるから、由紀の言葉を促そうとした。

そうしたら、由紀まで首をかしげた。

「いや、そうじゃなくて」

思わず突つ込んでしまつた。

それで呪縛がとされたのか、あるいは喉の奥にあつた形のない障害物が取れたのか、由紀はひとつ大きく頭を振ると、自分が置いたトートバッグを邪魔とばかりに膝の上に乗せ変え、乗り出すよつこしてきた。

「し、信じて、信じていいですか？」

言葉面にすると勢いよくいつているように見えるかも知れないけれど、実際は可聴範囲ストレスの細い声で、乗り出すよつこといつてもひどく控えめ。

ついでにいうと、大きく首を振ったときにメガネがずれている。それを直す気になれないくらい、由紀は俺に集中していた。

一途な目つて、こうこう田のことをいうんだろうな、と俺は思つた。うす暗い街灯の光しか届かないベンチの上で、由紀の瞳の底から光が湧き出しているように見えた。

後から考えれば、緊張と集中が高まりきっていた由紀の瞳孔が最高に開いていたことなんだろうけれど、もちろんそこまで考える余裕はこの時の俺には無い。

「信じてくれなきや……」

妙に、由紀のメガネのズレが気になった。

いいながら、多分俺はにやけていただろう。好意的に見れば優しい微笑み、悪意に取ればだらしない顔。

右手が自然に伸びていた。

じつと俺を見ている由紀の顔の横から、そつと手を近付けて、メガネのつるに触れる。

「……この距離が縮まんないよ」

するつとメガネが定位置に戻る。

「俺も好きでいい？」

ゆつくりと手を戻しながらいつ。

由紀が、視線を俺の目から外さずに両手を上げて、離れようと俺の右手に触れた。そのまま壊れ物を包み込むよつこする。

「……」

無言で右手を外し、メガネを取つてトートバッグの中に落とし、左手で俺の手を導いて、頬に当てた。

再び両手が俺の手を包み、手のひらに由紀の頬の体温としつとした肌の感覚が伝わってくる。

頬に当たた手をこつこつむすり元ひよじて、由紀がわざやいた。

「……ありがとう」

閉じた由紀の目から涙がこぼれる。

「なんか泣かせてばかりだね、おれ」

喫茶店でのことを思い出して俺がいつ。

由紀が目を閉じたまま、ふっと笑う。

「泣いてばかりです」

こっちの胸が音をたててしまいそうなほど、幸せそうな顔だった。もう、遠慮も何も無かった。

気がついたら、俺は由紀を抱きしめられた。

といつても、こんなに纖細な生き物をどう扱つていいかわかつていいから、恐る恐るという表現ぴったりの、肩を引き寄せて両腕で包む程度のもの。

由紀は両手を俺の胸につけて、額を首筋に押し当てるよじりしていた。

腕の中の細い肩も、胸元に感じる息も、いつの間にか当たつている膝も、どれも俺の全身をしびれさせる凶器だった。

右手で髪をなでる。

「……もう、変に距離取つたりしないでね。寂しいから」

本音が自然に出た。

胸で、由紀がうなずいた。伝わってくる息遣いで、苦笑しているのがわかった。

「でも、難しいかもしません。晃彦くんの前に出るとどうしても緊張しちゃうから」

わざやきが、甘く耳と心をくすぐる。

「もうなの?」

「は」

「どうして」

「……」

少しの沈黙の後、由紀は顔を上げた。

至近距離で視線がぶつかる。

「どうしようもなく好きだからです」

そういうて目を閉じた由紀の顔を、いつまでも眺めるよつた馬鹿な真似は、さすがにしなかった。

2秒後、俺は生まれて初めて、キスをした。

月曜日。

俺は少々呆然としていた。

何がって、お姉さま方登場。

朝、登校して、由紀と顔を合わせて、あまりの「」恥ずかしさで二人とも黙りこくるという展開を経験して、授業を受けて、昼休み。生れて初めて彼女を持つて、これからバラ色の人生を味わうはずの俺は、なぜか由紀を迎えて行くより先に、綾華さん」紹介のお姉さま方に囲まれていた。

「あきちゃんを守りに来たよー」

「はー?」

意外すぎる第一声に思わず聞き返すと、総勢4名のお姉さま方は、周囲の同級生が興味津々で聞き耳を立てる中、それを気にもしないで笑顔を見せた。

「ほら、綾華のおかげで女にぼーいられちゃつたついで「うじやない?」「哀れな下級生をわざわざ助けに来るとか、あたしたち超優しくない?」

「せっかくだからお皿くらこ付き合こなむこよ、この前は携帯の番号も聞けなかつたし」

「まさか断るとかそんな冷たい子じやないよね、あきちゃん」

今まで俺が関わり合ひになることもなかつた派手な上級生たちに囲まれ、俺は動搖しまくった。そりやそうでしょう。免疫なんか無いし。

「は、はあ」

俺は、皆様には失礼ながらドン引き。

でもそんな気配なんか、お姉さま方には何の障害にもならないようだ。

「ほらー、行くよー」

「え、どうした？」

「中庭。さつさと弁当持つてついてくるの」

お姉さま方は極めて強引。こっちの都合なんぞ考える余地すらないらしい。

断る理屈も思い浮かばず、助けを求めるかのように視線を泳がせた俺は、視界の端に最も見てはいけないものを見てしまつた気がして、思わず目を閉じた。

一呼吸置いて目を開け、その方向を見る。

視線の先に、由紀がいた。扉のすぐ近くからこちらをそつとぞきこんでいる。

その顔、無表情。

血の気が引いたような、いつも以上に白い顔をして、メガネの奥の瞳も色を感じさせない。氷のような気配。凍てつく波動。

背筋にぞつと寒気が走る。これは間違いないやばい。事情は分からなくとも、由紀は秒速30万キロメートルの速さで俺から身を引いていくに違いない。

「ちょっと待った」

思わず俺は叫んでいた。

俺を注視していた周りが驚く。

近くにいたお姉さま方はもつと驚く。

そして由紀は。

ぱっと背を向け、走り出していた。

「待てってのに！」

俺はお姉さま方を無視して走り出した。障害物が多くなる教室の中を強引に突破して、一気に廊下まで出ると、由紀の姿を田で追つより先に全力で走りだす。

探さないで正解だつたかもしぬ。ギリギリのタイミングで由紀は考えにくい方角に曲がっていた。自分のでもない、特に親しい友達がいるとも聞いていない教室の中に入っていた。

俺はそれはきっとフェイクで、俺が行き過ぎたらそもそも出ていくつもりに違いないと瞬時に踏んだ。

だから、俺はわざと行き過ぎて、別の扉からその教室に入った。由紀は俺が走り抜けていくのを窓から確認しようとしていたらしく、違う角度から俺が現れたことに気づくのが遅れた。

俺の方がわずかに発見が早い。その早さが勝敗を分けた。黙つたまま由紀を捕まえようとした俺に気づいて、由紀はあわてて逃げだそうとしたけれど、いくらなんでも運動や反射の分野で、俺が帰宅部の由紀に負けるはずがない。俺は背を向けようとする由紀の右腕をつかみ、逆の手で肩を押された。

由紀は必死で声をこらえながら、それでも俺から逃げ出そうとする。

「逃げることないだろ、ちょっと落ち着けよ」「みづ

できるだけ優しい声を出したつもりだ。ついでにつかんでいた腕や肩も即座に離し、どうしても低い由紀の視線の高さに、思い切り腰を落として俺の視線の高さを合わせた。

妹との長い付き合いの中で学んだことだ。視線が高いとそれだけで相手は威圧されるように感じて反発する。話を聞いてもらいたいなら、目の高さを合わせるのは必須。

「迎えに行こうと思つたら困まれちゃつたけど、大丈夫、あの人はちは大丈夫だから。な？」

息が切れそうになるのを強引に押しとどめて、俺は自分の限界に挑戦するくらいの努力で、小さくて柔らかい声を絞り出した。

実際にそう出せていたかどうかは分からぬ。全然知らないこのクラスでも、変な注目を浴びてしまつてはいるけれど、それも気にしているられるような場合じやない。

とにかく一秒でも早く由紀の心を開かせておかないと、多分また

心を開いてくれるのに恐ろしく膨大な時間と労力が必要になる。そんな気がして、俺の危機感を乱打してくれる。

由紀はメガネをかけた顔をうつむけたまま、しばらぐじつとしていた。

一瞬でも全力疾走した後に、じつと腰を落とした姿勢になるのは、じつはかなり辛かつたりする。俺がその姿勢に早くも耐えられなくなってきたあたりで、由紀は静かに顔を上げた。

俺とわずかに目が合う。

そしてすぐに下げられたけれど、それはほつむいたといつより、いつもの由紀らしい、長い時間目を合わせたがらない癖が出ただけだつたようだ。

「……ごめんなさい……」

「なんで謝るんだよ。由紀は悪くないよ」

思わず俺は伸びあがり、伸びあがりながらいった。

「さ、ご飯にしよう。一緒にいてくれるんでしょ？」

何事もなかつたように聞こえるよう、「俺は気楽な感じでいう。由紀は小さくうなづいてくれた。

……助かった。

弁当を取りに教室に戻ると、当然ながら注目の的になつた。野次馬の視線はまあいいんだけれど、いや、あんまり良くないけれどまあいいとして、まだいたお姉さま方の視線が痛い。

「あれえ、あたしたちつて今完全にしかとされちゃつた？」

「おかしいねえ、守つてあげよつとしてわざわざ来てあげたのに

「なんか私たち以外の女を追いかけて行つちやつたよこの子

「ちょっと許されなくね？」

口々にいう、その視線が完全に面白がつている。

「察してくださいよ」

俺はもうどうでもよくなつてきて、間違ひなく苦笑以外には見え

ないだろう顔をしながらいった。

「彼女いないんじゃなかつたつけ？」

「人がそういうから、面倒くさくなつた俺は、素直になつてしまつことにした。

「いませんでした、昨日までは」

「今日からはいるんだ」

「ええ、おかげさまで」

野次馬たちがどよめく。

ええい、散れ。散つてしまえ。

そんな俺の心の声が聞こえるはずもなく、野次馬たちはたちまちひそひそと噂話を始める。彼女いない歴イコール年齢だつた俺が、いきなり派手なお姉さまに囮まれるわ、彼女います宣言するわだから、そりや噂にもなるわな。

お姉さま方は、俺があまりに素直に認めたから、からかう気にならなかつたらしい。

「そりや残念」

「なんだー、できちやつたのかー」

「フリーだと思つたから優しくしてやつたのに、裏切られちやつたわね」

「まあしゃあない、妬くな妬くな」

口々にいながら、意外にも俺に絡むことなく教室から出て行こうとした。

「まあ」

と一人が俺を見ながらいう。

「その彼女に振られたらいつでもおいでの、お姉さまがじっくり慰めてあげるから」

恐らく、綾華さんと知り合つ前の俺がこんな会話の相手にされたら、舞い上がりつて身動き一つできなくなつていたと思う。

でも、俺も綾華さんと知り合い、色々珍しい経験をして、さらによ紀といろいろあつて、短い間でもそれなりに成長なんかしたりやつ

てたりしたのかもしねえ。

「そうならないようにします。ありがとうございます」といふ言葉が出た。

お姉さま方は、そういう俺の様子に、何かを感じたらしく、「がんばってねー」

「泣かすんじゃないぞ」

「ここまでしといて泣かしたらリンチしちゃ」

「天に代わってあたしらがたたき殺すつての」

何やら恐ろしいセリフを吐きながら、それでも笑顔で去つていった。

そして俺は。

野次馬たちの質問攻めにあつ前に、とっととその場を逃げ出ことにした。

お姉さま方の一件があり、あわてて弁当を持って由紀と待ち合っていた校庭近くの芝生に行くと、由紀は小さな弁当箱をひざの上に載せて、ちよこんと座つて待つていた。

今着いたばかりのはずなのに、今まで何時間も健気に待つていました的な雰囲気を感じるのは、由紀がそういう空氣を身にまとっているのか、それとも俺が負い田のようなものを感じているからなのか、謎。

俺が着くと、由紀はわずかに笑顔を見せ、それからうつむいた。まだお姉さま方の件をひきずつているのか、単に照れているだけなのか。俺にはまだそれがわかるほど由紀との経験がない。

「ごめん、待たせたね。俺も腹減った、さっさと食べちゃおつ」

肩と肩が触れ合うくらいに近付いて座ると、由紀の体がぴくんと揺れたのがわかる。

本当にこの子は俺のことが好きなんだよね？ 大丈夫だよね？ 自信持つていいんだよね？

俺の内心の葛藤に由紀が気付くはずもなく、気付かれたらそれはそれで怖いんだけれど、由紀は明らかに緊張した様子で弁当を開けている。

「こ」でいきなり自分の不安を説明しだすのもなんなので、俺は仕方なしに弁当を開けた。

「……ごめんなさい」

箸を出して京水菜のおひたしから手をつけようとしていた俺に、由紀がいきなり謝った。

今度は何でしょう。

思いつきり不安になりながら俺が由紀を見ると、至近距離でつむいていた由紀が、ぼそぼそと喋る。

「……本当は晃彦くんのお弁当も作ってきたかったんですけど、昨

田の夜はもつぱりじりえもできなかつたし、今朝はちよつと寝過ぎ
しかつて……」

由紀は肩を震わせている。

「べ、別にそれは……俺が頼んでたならともかく、謝る」とじゅな
いですな」

なぜそこで震える。泣いてたりとかしてたら手に負えないんです
けど。

俺はひどく動搖していたんだけど、それが伝わったかどうか。
由紀が顔を上げた。

「昨夜、すこくうれしかつたから……何かしたかったんですね、でも
できなくて悔しくて」

珍しく俺の目をまっすぐ見てそういう由紀の顔は、泣いている
よつな、微笑んでいるよつな、微妙な顔だつた。

俺のせいつちゃ俺のせいだけれど、でも俺のせいじゃないじ
ことがわかつたから、俺はほつとした。

「ああ、そういう……その気持ちだけでもうれしいよ」

思わず由紀の頭をなでていた。しまつた、と想つたのは、髪に手
が触れてから。つい、機嫌が微妙な位置にあるときの妹や従姉妹を
あやす場合の癖が出てしまつた。

一度触れてから手を引っ込めたらなおさら傷つくかと思つた俺は、
反射的に引っ込めようとした手を強引にそのままにして、なで続ける
ことにした。

「そんな風に考へてくれたのに、いきなりあるお姉さま方の光景
見りやそりや逃げ出したくなるのはわかるけど」

と、思わずなでてしまつたのをフォローしようとして、俺は自分
から派手に地雷原に踏み込んでいた。もちろん気付いたのは口に
した後。

馬鹿か俺はあああああああなぜ蒸し返すうううううううう
うううううう、と内心絶叫しつつも、突っ込んでしまつた以上、地
雷原から抜け出すにはひとつしか手がないこともわかつっていた。そ

う、方向だけは間違わず、突き抜けていくしかない。

どうせ、いずれ触れなければならなかつた話題。タイミング的にどうかとは思うが、こうなつてしまえば今行くしかない。

「あの人たちは綾華さんの友達だよ。彼女がいない俺を面白がつてからかつていただけ。由紀のこと説明したらあつさり引き下がつてくれた。だから大丈夫。綾華さんが友達にしてるくらいなんだから、わかるだろ?」

じつと身を固くして頭をなでられている由紀の顔は、俺からは見えない。でも、多分嫌がられていないことだけは何となくわかる。頭をなでられていて、ひたすら身を縮めていたら十中八九嫌がつている。でも、身を縮めつつも、こちらの手の動きにあわせて頭が前後に揺れるようなら大丈夫。それが妹や従姉妹との経験上学んだこと。

「由紀はもつと自信持つていいよ

といいつつ、俺は手を止めた。ちょうど由紀の首の辺りに手を当てるている。

由紀がゆっくり顔を上げ、俺を見る。ほほが上氣しているのがわかる。耳も赤い。色が白いから、血が透けていて、赤くなるとすぐわかる。

「生まれて初めて俺が好きになつた相手なんだから。大丈夫。由紀しか見てないよ」

後から考えると、よくまあそんな恥ずかしいセリフを平気な顔していえたもんだけれど、どうも必死になるとどんなくさい言葉でも平氣でいつてしまふ面の皮の厚さがあるらしい。

いわれた方の由紀は、メガネ越しにも目が潤んでいるのがわかつた。もともと潤んでいたのか、たつた今潤んだのかはわからないけれど、それがものすごく愛しく思えたのは確か。

「……」

由紀はしばらく何かいいたそうにしていたけれど、何もいわないまま、つい、と視線を切つた。

そして、そのまま俺にもたれかかった。

「おつと、これはお許しが出たってことか？ 胸に由紀の重さがかかる、髪からおそらくはコンディショナーと由紀自身の香りが混じつたものが鼻にかかり、俺は陶然とした。こいつあいいね。」

ひざに弁当が乗っている状況で抱きしめるわけにも行かず、俺はさつきまで由紀の頭をなでていた手で、肩を抱くよつにした。由紀は肩をきゅっとすぼめるよつにして、俺にくつついでいる。

「……ありがとうございます、すごくうれしいです」

「そりゃ良かった」

「もつと好きになっちゃいますけど、いいんですか？」

「というと？」

「私、もしかしたら怖い女かもされませんよ？ 他の女の子と話してるだけで刃物持ち出しちゃうとか

「スプラッターな恋愛できそうだね、それ」

「他の女の子と一緒に見ただけで、脅迫状書いちやつたりとか

「血染めの文字とかだつたらホラーだねえ」

「ストーカーになっちゃうかもしれません。毎日ジーっと部屋の外から監視しちやつたり」

「由紀の場合はたぶん門限に引っかかつて無理なんじゃなかろうか」「まじめに分析して突っ込まないでくださいよ」

「おお、空氣読んでなかつた、ネタかこれ」

多分初めて彼女とほんほん言葉の交換が出来ていた。それが嬉しかつたから、間違いなくこの瞬間の俺はにやけている。

由紀も、肩からいつの間にか力が抜けて、さつきとは違つ震えが肩から伝わってきた。由紀は、笑っていた。

「私、実際、すうごめんどうくさい女だと思います。自分でもわかっています」

笑いを納めた彼女がいつ。肩に力は入っていない。俺は黙つて聞く。

「みんなみたいに、明るく話なんかできません。さつきの先輩たちみたいに楽しくなんかできません。すぐ逃げちゃうし、調子に乗っちゃうし、『晃彦くんに気を使わせて何様な私』って思つけど、結局同じようなことしちゃうし」

俺は何もいわないまま、肩を抱く力を一瞬だけ強めた。聞いているよ、といつうなずきのつもり。

「自信なんか持てないです。地味だけが特徴の女なんて、晃彦くんには似合わないと思うし。でも」

由紀は、肩を抱く俺の手に自分の手を重ねた。

「晃彦くん、いつも私を褒めてくれるし、勇気もくれるから……」

由紀は一呼吸入れ、続けた。

「ちょっとだけ、自惚れてみます。晃彦くんの彼女なんだつて。晃彦くんに選んでもらえたのは私なんだぞつて」

「そうして」

嬉しくなつて、俺は由紀の頭、頭頂部より少し下がった耳の上辺りにキスをした。

「あ」

由紀が首をすくめる。

「ずるいよ、自分だけ」

と意外な抗議をしてくるから、抱いていた肩を離して一度体を起こし、逆の手であごに触れながら由紀の目を見た。

由紀はわずかに抵抗しそうになつたものの、ひざの上に弁当箱に邪魔された拳句、自分がたつた今「うぬぼれます」宣言したのを思い出したようで、おとなしく目を閉じた。

安心して、キスをした。

ごく短いキスだった。

もう終わり？ という気配を感じつつも体を離したのは、俺の方。気付いてしまつたからだ。唇が触れた瞬間に。

今は昼休み。

場所は校庭近くの芝生の上。

朝晩は多少寒い時期になつてゐるとはいへ、昼間はむしろ過ごしやすい季節。

そりやあ昼飯時にもなれば、人はたくさんいるわけですよ。

その中の何人が俺たちの存在を目に入れているかなんか知つたことじやないけれど、どう見てもこの光景はバカッフル全開。今の今までこんなシチュエーションに自分が置かれるなんて考えたこともない童貞君としては、この状況、気付いてしまえば恥ずかしいことこの上ない。

俺の雰囲気ではつと周囲の状況に気付いたらしく、完全に一人の世界、忘我の境地にいた俺たちは、いきなり現実世界に引き戻されることになった。

「」「怖いね、周りが見えなくなるのって」

と俺がいえば、

「「めんなさい、完全に忘れてた……」

と由紀が謝る。

何しろ恋愛経験が乏しい二人なので、これから先どれだけ恥をかくか、今から空恐ろしい気がする。

とりあえず今は、弁当を食べてしまつことに集中することにした。

という状況を、この人はじかに見ていたというから驚きだ。

「いやあ、人の目も気にせずいちやいぢやし始めたと思つたら、いきなり我に返つて弁当食べだすんだもん、初々しそぎてもう、おばちゃんは見てらんなかつたわよ」

放課後に文化祭実行委員として集まつたはずの綾華さんに、二人はげらげらと大笑いされてしまった。

「録画しとくんだつた！ しまつた！ せつかく携帯のメモリーカード買い換えたばつかなのに！ 綾華一生の不覚つ！」

「渡辺謙さんですかあなたは」

「お、独眼流正宗のネタを見抜くとは通だねえ」

「むしろ今の突つ込みでその反応が返つてくるあなたの年齢が聞きたい」

「17よ? ぴっちり17歳よ? せふんぢーんよ?」

「あーほんとにおばさんだよこの人」

「ちょっとー、由紀、じいつ生意氣すぎるんだけども、どうにかなんないの?」

「わ、私ですか」

「あんたでしょー、旦那の教育は奥さんの責任よ?」

「お、お、おく、」

「まだ結婚していないんですけどね、つーか付き合ってはじめて一日で教育の責任てどんだけシビアなんすか」

「女の甲斐性よ、男なんて付き合い始めた瞬間からその女に隸属するものなの。わかる?」

「その通りだとは思いますが、わざわざ由紀をこじるためだけにその表現選んでません?」

「あー、わかるづ?」

「由が語りますぜおばほん」

「だつてえ、由紀ちゃんつてば、恋が実つたらおつやれしへ可愛くなっちゃってるんだもん、いじらにや損でしょう」

「か、かわ、かわいく」

「落ち着け由紀、つーかこの人の表現にいちいち振り回されるな、

この人が喜ぶだけだ」

よりによつてこの人に目撃されるとは、

基本的には幸せなんだけれど、なんだか納得行かない氣もする俺だった。

文化祭実行委員の仕事の方は、ここに来て軌道に乗り始めた。

一番大きかつたのは、生徒指導主任の教師が俺たちの側についたこと。

「ここまで入念に準備したり計画持ち込んできた奴は久しぶりだ」
俺が別の交渉ごとで生徒会にかけあいに行っている間、生徒指導主任にかけあいに行つてくれたのは綾華さんだった。あたしの方が教師には頗利くでしょ、という理由だ。

そして、行つた先でそんな風に褒められて、

「しかもその相手がお前ときたら嬉しくてねえ」

と涙ぐまれたらしい。ちなみに生徒指導主任はこの前孫が生まれたばかりの新米おばあちゃんで、成績はいいが素行がよろしくない綾華さんとは色々あつたらしい。

「やつたのはあたしじゃないよ

と綾華さんがいうと、

「聞いてるよ、1年生と組んでやつてるんだって？ こういうのはチームプレイなんだ、誰かががんばってるだけじゃうまく動かない。お前もやるべきことをやつているからチームが動いているんだろう」といわれ、さらにチームプレイのことだけで8分間ほどお話が続いたらしい。

戻ってきたときには、今まで見た最大級の疲労困憊ぶりだった。

「もーあいつのところには行かん」

自分で行くといっておきながら、とは思つたけれど、俺も由紀も何もいわない。しつかり生徒指導主任をたらしこんで、こちらの計画以上の収穫を得ててくれた功労者なのだから。

まず、俺たちが管理することになつていた資材関係の貸出申請は、来週中に提出された分のみの受付にされるよう、生徒指導主任が請け合つてくれた。つまり、文化祭開催間際になつての駆け込み申請

は認めないと云ふことで、それだけこっちの資材管理や購入に伴う予算管理が楽になる。

これは生徒会の権限で決められることのようでいて、意外にそうでもないらしい。綾華さんがいうには「教師に泣きついてねじ込んでくる馬鹿が出るに決まってる」そうで、生徒指導主任にこれを認めさせるということは、そういう「馬鹿とそれにだまされるもつと馬鹿な教師」の出現を防げるらしい。

とはいっても、ぎりぎりまでがんばったところで「どうしても足りない！」となるところも出てくるだろう。それを救うための予備予算も、全体の予算の概算を綾華さんに持たせたのが良かったのか、「この枠内なら学校の予備費から出すよ」とお墨付きをもらつた。しかも、あえて吹っかけた概算要求そのままの金額で。

「ただし生徒会の会計には話を通しなさいよ」

と注が付いたそつだが、そこは大丈夫。なぜなら、その話を通すべく、俺は綾華さんに生徒指導主任を任せ、生徒会会計に直談判しに行つたのだから。

なぜか俺のことを気に入ってくれている生徒会会計氏は、俺たちの計画案を見ながら、「予備費が学校側から出れば助かるなあ」と簡単に承認してくれた。

「でも、生徒会費以外の資金を入れば、当然監査の対象になりますけれど」

一応、マイナス点もいつてみると、先輩はごく気軽に答えた。

「企業の外部監査じゃあるまいし、出納をえしつかりしてれば問題ないよ」

それに、と付け加える。

「僕が指摘する前から、監査の対象になることまでわかつてゐる奴が管理するんだ。何か問題があるのかい？」

やつぱりこの人は面白い、と思わせるに充分な、余裕のありすぎる先輩だった。

そして、生徒指導主任がこの件を請け合つたことによつて、自動

的に各クラスに、資材関係の申し込みやそれに先立つ出し物の計画案提出を急ぐよう、教師側から一斉に通知が出されることになった。正式にそうなったわけじゃないけれど、自分が担任しているクラスが万が一遅れでもしたら、生徒指導主任という校長・副校長に次ぐ実力者が認めた期限を破ることになる。非常にまずいわけだ、教師の立場的に。

「どこからこのアイディアを思いついた？ 僕はむしろそこに興味がある」

会計の先輩は真顔で聞いてきた。生徒会費以外の財源を導入するアイディアも、期限を守らせるために生徒指導主任を引き込もうというアイディアも、これまでの生徒会には無かつた発想だった。

「まだ交渉に行ってるだけで、成功してませんけれども」

そう、この話をしている時点ではまだ成功してない。でも、先輩には成功しようがすまいが関係ない。アイディアの源を知りたがった。

「3人です。3人で話してて、そういう話で盛り上がって」

「あの永野もか」

「永野もか、というより、あの人、がメインですよ。最初校長のところに乗り込むとか無茶いってましたけれど」

「そりゃ無茶だな。事なきれ主義が服着て歩いてるような爺さんだ。生徒指導主任に目をつけたのは見事だと思うぞ」

「ですかね」

「最良の人選だろう。それも永野が？」

「そうです。俺たちは生徒会担当しか頭に無かつたんですけど、綾華さんが自分で行くからこいつがいいとかいって」

「あいつがねえ」

先輩は遠い目になつた。上級生でもある先輩には、色々と綾華さんについての事件の記憶やまことしやかな噂話の記憶が積み重なつていて、感慨深いらしい。

「生徒会なんてのは、本気でやる奴が損をするようにできているん

だ。悲しいことに。でも、成果を出せば、それが人に認められなくても楽しかつたって自己完結できる奴にとつては、いい遊び場になると思う」「

自分がそうちだから、とはいわなかつたけれど、この先輩、どこまで大人なのか。俺たちの渾身のアイディアを容易に理解した上で認める度量といい、物事の捉え方の深さといい、とても高校生とは思えない。

それをいうと、先輩は苦笑していた。

「いずれお前も同じことをいわれることになりそうだな、苦労人くん」

苦労人呼ばわれられた俺だけれど、仕事は実に楽しかつた。

なにしろ、できたばかりのかわいい彼女と、できる経緯をしつかり見届けた上に祝福してくれる美人の先輩と、3人でわいわい仕事ができる。これで楽しくない男がいるわけがない。

が。

好事魔多し。

俺には幸運より、凶事の方がお似合いらしい。

人々の中に埋没して、個性らしい個性も無く、目立たず大人しくさえ生きていればいい、底辺を這いずり回るべき存在の俺が、いつちよまえに彼女なんぞ作つてバカツプルを楽しんでしまつた罰が下つたのかもしねりない。

まず起きたのは、事故。

資材申請が早くも行われ、教室内を区切るパーテーションとして使う大きなべニヤ板が貸し出されることになった。

そのクラスの担当と俺が、生徒会室の隣にある資材置き場からべニヤ板を運び出し、さらにそれを支える足になる金属板を取り出そ

うとしているときに、事故は起こつた。

まだ資材置き場には物があふれていて、これを数えるのに俺たち3人は死ぬ思いをしたわけだけれど、それらのうち必要なものだけを取り出そうとするとちょっと無理がある。

「あれを出してここをこう移動すれば出せるんじゃない？」

などとパズルゲームのような資材出しが必要になる。

それをやつっているうちに、誰が置いたかはわからないけれど、明らかに資材出しの動線上に、ペンキが入った小さな缶が置かれた。看板用のベニヤ板を一時的に出すべく、俺とクラス担当とが一緒に板を持ち上げ、移動を開始したとき、不運なクラス担当はそのペンキの缶に脚をとられた。

転ばないよう踏ん張った彼は、看板の板に思いつきり体重をかけてしまった。その片一方を持っていた俺に、当然ながら思いっきり加重がかかる。

クラス担当の「うおおおっ」という声は聞こえていたけれど、何が起きたまではわからないから、突然かかつてきた妙な加重に、俺は耐え切れなかつた。そのまま後ろに倒れこみそうになる。

そのままじや怪我をする、と判断したのか、俺の体は何も考えずにその板を投げ飛ばすようにして離していた。気が付いた時には俺は尻餅をついていた。

そこまではまあ良かつたんだけど、悪かつたのは、看板用のその板から俺の支えが消えたことで、クラス担当が派手にこけたことだつた。

その動きのおかげで看板用の板が飛び、資材置き場の扉の窓ガラスを割つてしまつた。

そのガラスが、俺のすぐ頭上。

ガラス片が飛び散り、大きな衝撃音と共に近くにいた女子の悲鳴が響き渡つた。

「そんな叫ばんでも……」

と思った俺だけれど、その叫び声はべつに大きな音に驚いたから

じゃないといふことに気付くまで、少々時間がかかった。

「佐藤、お前、大丈夫かよ」

「ええ、まあ、お尻は痛いっすけど」

「いや、そうじゃなくて」

「？」

本当にわかつていなかつたのだけれど、次の瞬間、なぜそんなことをいわれるのか理解できた。

落ちているガラス片で手など切らないように氣をつけながら立ち上がつた俺は、いきなり目に何かが入つてきてびっくりした。思わず何かが入つた右目を閉じ、下を向いて目に手を当て、そして開いている左目に「写つた光景を見て、すべてを悟つた。

血痕があつた。それもきわめて新鮮な。

さらにいえば、そいつは増えていた。ぽたぽたと、俺の頭から落ちていたんだ。

「あー……なるほど、こりやあ大丈夫には見えないわなあ」

本人はこういうとき意外に冷静だ。周りの方が大騒ぎしていた。

「頭は大げさに血が出るだけだから、大丈夫ですよ」と俺がいつたところで、誰も聞いちゃいない。

「保健室！ 保健室！」

「タンカ！ タンカ！」

「救急車！ 救急車！」

「先生呼べ！ 先生呼べ！」

なぜああいいうとき、人は短い言葉を2回繰り返すのだろう。不思議である。

「いや、そんな大げさな……自分で保健室行くから大丈夫ですって」

「いやあああああ」

「怪我してない奴が叫ぶんじゃないよ、うるさいなあ」

たぶん雰囲気に呑まれて叫ばずにいられなかつたらしい女子に思わず突っ込んだりもしたけれど、本当にこの場面、落ち着いているのが俺だけだつた。

これ以上パニックになられても損するのは俺だけなので……理不尽だが……俺はその場にいる全員を見捨てて、とつとと保健室に向かうこととした。後片付けなんぞ知るか、血痕なんぞ誰かが拭いとけ。

というタイミングで現れたのが、まさに絶妙なタイミングで現れてくれたのが、我が愛する姫君だった。

血だらけでずんずん歩いてくる俺の姿を、ちょうど別の仕事が終わって手伝いに来たらしい由紀が見つけた。

最初はメガネの奥の目と口をまん丸にして、次に出そうになつた悲鳴をとっせにこらえ、それから駆け寄つて抱きつこうとした。

俺は目で止めた。今抱きつかれたら、由紀の制服まで血だらけになる。

後の由紀がいうには「狩の後の肉食獣みたいな目で、近付いたら殺されると思」つたんだそうだ。目に血が入った後だから、たぶんまともに開いてない目で無理やり由紀を見ていたからだと思う。「私もあの時は泣きそうになつてしましましたけど、あの目を見たらそれを通り越してひきつけを起こしそうになりました」と

と付け加えてくれて、聞いていた綾華さんが腹痛を起こすほど大笑いしてくれていたけれど、まあ、それは大したことじやない。本当の事件はその後に起つた。

田舎の学校だから、怖いお兄さんなんて掃いて捨てて燃やしてもまだ出てくるほどいる。校内だけじゃない。学校の外に出れば、女子を狙っているのかただの暇つぶしなのか、車でその辺りを徘徊している怖いお兄さん方の姿は、それほど珍しい光景つてわけでもない。

俺の場合、なぜかそういう筋かそれに近い先輩方と付き合いがあるたり、そういう筋の先輩方が畏敬する方に可愛がられていたり、本人の意思に関係なくそういう方々と顔見知りなケースが多くなりました。

バイト先でお世話になっているカクスさんは、現役の不良たちにとつては伝説的な存在で、やくざの世界に進んでいればあるいは大立者になっていたかもしれない。今じゃただの子煩惱パパだけれど。その人に可愛がられているというだけで、俺はだいぶこの学校で生きやすかった。自分からは何もせず、単に親父の知り合いという縁だけでそんな風になってしまっている俺は、相当運がいいんだろう。

でも、別に俺がそういう社会での有名人かというとそんなことは無いわけで、同じ学校の先輩方の一部に「まあそんな奴もいる」という程度に覚えてもらっているという話。

頭に大きさな包帯を巻かてしまつた俺は、帰るのも気が重かつた。たぶん、大騒ぎされるに違いない。

過保護な親ではないけれど、さすがに帰ってきた息子が包帯巻きで帰つてきたら、人並みには驚くだろう。

あの後は大変だった。

学校側にしてみれば、遊んでいたというならともかく、校内で生

徒会の職務で動いている中での負傷だから、下手したら管理責任を問われる事態。俺が保健室にのこのこ歩いていつたら、たまたま通りかかった教師がこっちがびっくりするくらい大騒ぎしてくれた。

まずは病院へ、という話になつたけれど、自分でももう血が止まりかけているのがわかつてたから、傷は大したことがないだろうと高をくくつていた。保健教諭がすぐに傷の具合を見たけれど、さすがに場慣れしているだけあって、少しも騒がず、「なめときや治る。自分じゃなめられんだろうから彼女にでもなめてもらつとけ」という、高校生にいには少しきわどすぎる「冗談を飛ばしていた。

それでも大事をとつてとこうことで、教師側のたつての願いで、俺の頭にはおおげさな包帯が巻かれてしまつた。
「傷は大したことはないけれども、傷口が開くと出血が大きくなる。後始末も大変だし、化膿しないように注意も必要だ」
ということで、俺には傷口がふさがるまでの洗髪禁止令と、運動禁止令が下されてしまった。

運動禁止つて。

既に通学が充分な運動だと思つんですよ。丘の上にある学校を目指して自転車こぐつてこと自体が。

「なんとかしろ。傷がきれいにふさがればともかく、変に化膿なんかしてみろ。異臭はするわ痛みはひどいわ、もつといえ巴その辺りから毛が生えなくなるぞ」

それは大問題だ。怪我したのは右側頭部、思いつきり髪の中。別に目立つ場所じゃないけれど、自然に生えなくなるまでは生えていてもらわんと。

まあ、自分の不注意もあつての怪我なので文句はいえない。

「しばらく自転車以外で考えてみます」

自転車以外というと、歩くかバスか。ただ、田舎のこと。家からバス停が遠い上に本数が少ない。

電車、と都会人なら考えるんだろうけれど、残念ながらうちの高校と、家から近い駅の鉄道路線とは、接点がない。

車で送り迎えしてもうう当ても無いし。うちは両親共働きで、残念ながら兄や姉もない。

「本数少ないバスに頼るしかないか」

保健室から出た俺がため息をつくと、治療中ずっと保健室の隅にいた由紀が、俺の背中にくっついてきた。

いや、くつづくというほど大胆なことはしていない。

俺の制服のすそをつまんで、軽く引っ張っていた。その距離が非常に近いだけ。

「すごい心配しました」

「じめん、不注意だつたわ」

「怪我のこともあるんだけど……」

「？」

よくよく理由を聞いてみたら、怪我をした直後、俺にすさまじい形相で睨まれた時のことについているらしい。

いや、睨んだつもりは無いんだって。あれはそういうことになっちゃつただけであって。

そういう俺の想いは百も承知のようだ。

「事情はわかつても、あの日が怖かったのは事実ですから」と由紀は譲らない。怒っているというより、かまつてほしいだけにも見える。

そこでふと気付く。ああ、由紀はもう帰る時間が。

怪我をした時点で時間は5時を回っていた。保健室でじたごたとして、既に時計は6時を回っている。由紀はつい最近熱を出して寝込んだ前科があるから、家族が、特に父親がひどく心配していた。

門限は基本7時。

「早く帰らないと、その日より怖い人が待ってるんじゃないの？」

俺は何も考えずに、ただ頭に浮かんできたことをそのまま口にした。

とたんに、制服を強く引っ張られた。ぐいっと上半身が後ろに傾く。

「私は早く帰れってことですか？」

声が平板。あ、怒つてる。

「そういう意味じゃないよ」

できるだけ気楽そうに。フォローは限りなく早く、そして相手の先回りをしてこむ。

「これから長く付き合つていいくためには、周りから認められないところ。まずは由紀んちで一番怖そうな人からも信頼してもらえるようになないと」

さも思慮深く聞こえる発言だけれど、もちろん今考えて出てきたセリフ。

もつとも、うれじやない。いつから、「その通りだな」と自分でも納得できた。

「ずっと一緒にいたいなら、最初が肝心でしょ？」

いいつつ、由紀の手を握る。由紀は、手を握られた瞬間に体をぴくんと震わせ、それからつづむいて、俺が握る手をきゅっと握り返してきた。

「するこ……」

「へ？」

突然何を言い出すのか、俺が首をかしげると、由紀はつづみたまま俺の胸元辺りを見て、ぼそつとつぶやいた。

「そんなこといわれたら、帰りたくないなんてわがまま、いえなくなっちゃいます」

なにをかわいらしいことをつべづべいのはどうですかと聞いてたい。

送るといつたら、逆に怒られた。

結局今日は親父が迎えに来るまでの間、学校で待つことになったけれど、その間は暇だから途中くらい今まで由紀を送りつとした

ら、

「けが人は今日くらい大人しくしてなさい」

と怒られてしまつた。

その怒り方が妙にかわいらしかつたので、もつちよつと怒らせてみたかつたんだけど、多分それをいつたらじぱらく口をきいてくれなくなりそうだったから、諦めた。

で、待つてたわけだ。親父を。

携帯で話した時の親父の反応は、さすがに俺の親だつた。

『頭は大げさに血が出るからな。噴き出してるんでもなければ心配いらんよ』

俺と同じようなことをいつている。さらに続けて出たセリフが止めを刺した。

『母さんが見たら大騒ぎするだらうな。覚悟はしておけ』

親父も、俺の想像が見せた風景が同じように見えていたらしい。

『仕事が終わつて迎えに行けるのは8時過ぎになる。それまで待つていられるか』

『書類仕事がいくらでもあるし、やつてゐるうちにそのくらいになつちゃうと思うよ』

『学校はまだ閉まらないのか』

『受験組の自習室が9時までやつてるからね』

『わかつた、待つていろ』

実際に書類仕事をやつていると、時間が経つのは早かつた。

何枚カリリストや申請書の処理をしていくうちに時間が過ぎ、いつの間にか8時を回つていた。

今日は綾華さんはいない。生徒指導主任との談判が意外なほど体力を消耗させたようで、「今日帰つてもいい?」と珍しい申し出があつた。「もうやめるー」「むりー」とはいつても、「もつ帰るー」とはなかなかいわない人なのだ。

何しろ大功労者なので速やかにお帰しされた。

ただ、書類仕事に限つていえば、いない方がはかどるのも確か。

こんなものは黙々と一人でやるに限る。綾華さんがいふと漫才が始まつてちつとも前に進まない。

それでも8時を過ぎるとさすがに疲れてきたので、俺は片付けて帰り支度をしてしまつことにした。

親父が来るまでどれだけかかるかわからないけれど、なんとなく外にいることにした。深い理由は無くて、この日はすつきりと晴れた日だったから、外に出て風に当たつても気持ちいいかな、などと思つただけ。

昇降口から外に出ると、朝晩がすっかり涼しくなつた10月中旬、乾燥した風は適度に体温を奪つていて、気持ち良かつた。

ただ、時間が経つてくると、傷がじんじん痛んでくるのには参つた。傷が熱を持ち始めたようで、鼓動にあわせてずきずきと痛む。

一人で顔をしかめつつ、俺はぱらぱらと学校の敷地の周辺を歩くことにした。

「おい

と声をかけられたとき、俺は正面門から100メートルほど離れたところにある石碑を見ていた。

静かだけど重い車のエンジンノイズに紛れた呼びかけに、俺が振り返ると、目の前には、俺が10年バイトした金額を全部つぎ込んで買えないと思われる高級車と、左ハンドルであるがゆえに声をかけやすいところに座つているドライバーのお兄さん。

少なくとも見覚えのある人ではなかつたから、俺を呼んだのは人違いじゃないかと思つてまわりを見たけれど、残念なことに、この近辺にはそもそも人間が俺くらいしかいなかつた。

「お前だよ」

ドライバー氏は苛立つようになつた。

「俺ですか」

間の抜けた声だつただろう。自分でも思つたくらいだから、相手

にはずいぶん気が抜けた声に聞こえただけ。

「お前、佐藤晃彦か」

自分の名前を聞いた瞬間、俺はさすがに身の危険を感じた。普通、悪意でもなければ、わざわざ人の名前を確認してはこないものだろう。

違います、とすっとほけよつとも思つたけれど、それは即座に断念した。

助手席に、知つた顔がいた。

忘れもしない。

綾華さんと知り合つたばかりのとき、いきなり朝っぱらから人の目の前で指を突き立て、調子に乗るなといい放つたあの女。一回りや面倒な目に遭いそうだぞ、といぐら鈍い俺でも、勘付かざるを得なかつた。

この時、俺は明らかに機嫌が悪かった。

一日で色々仕事をこなして疲れていたし、何より、傷が痛む。徐々にいろいろしてきていた、というのがこの時の俺。

「少し顔を借りるぞ」

と左ハンドルの車の運転席から、ややすごむような口調でいわれたけれど、普段の俺ならびびつてすぐに従つていたと思つ。けれど、この時ばかりはそうはならなかつた。

疲れて頭が働かなかつたせいもあって、俺は鈍く返答しただけだつた。

「はい？」

その返事が出たのにもつと理由がある。

まずひとつ目。相手が、体格的には俺より線が細そつに見えたこと。男は常に、無意識のうちに相手の肉体的強健さを測つて自分と比較する生き物なのだ。

ふたつ目。男の態度がどう考えても俺に敵意むき出しだったこと。敵意を向けてくる相手に友好的になつてやらなきやいけないような規則も法もないし、俺は絶対平和主義者でもない。

三つ目。綾華さんとの仲を勝手に疑つて人を潰そうとした馬鹿女が隣にいたこと。そしてその女が意地悪そうな笑みを浮かべていたこと。

「何とぼけてんだ、ふざけんじやねえぞ」

年齢は20代半ばといつところか。大学生というにはちょっと世間ずれした感じがする。高校一年の小僧に喧嘩を売れる程度には若いらしい。

「はあ」

俺はさすきと痛む頭の傷を気にしつつ、気の抜けた返事を繰り返す。

それがますます相手の怒氣を誘つたようすで、運転席のドアが開いた。降りてくる氣らしい。

「ちよつとー、やり過ぎなこつに氣をつけよー」

車の中から癪に障る声がした。降りてくる男のやる氣満々な姿といい、物騒この上ない。普段の俺ならびびつて身動きが取れなくなつていただろうと思つ。

確かに身動きはとらなかつたけれど、理由は違う。確かに人の癖に、奇跡的ことに、この時の俺は迎え撃つ気満々だつたんだ。

「答えによつちやただじやすまつたない。覚悟して答えろよ」

男は俺を下から突き上げるよつた目で睨みつけた。身長は175センチくらいだろうか。俺より少し低いくらい。体格は俺とびつこいという感じに見える。立つてみると筋肉質な体つきが目立つ。

「はあ」

俺にはまともに答える氣もなかつたから、いい加減に声を出した。「お前、永野綾華とはどういう関係だ」

意外な名前、とは思わなかつた。

助手席に乗つて余裕かましている馬鹿女は、綾華さんがらみでしか記憶に残つていなかつて、むしろその名前が出てきて当然という氣がしていた。

「はあ？」

たぶん相手を刺激するだらうな、とはわかつていても、いろいろが募つていたから、そういう返事になる。

「答える」

相手はすゞんだ。ちよつと肩を揺らせば触れそくなぐらいに近付いている。脅し合ひ、虚勢の張り合いに慣れた人種の動作だと思つた。

「どうにづつて、先輩と後輩ですけれど」

「それにしちゃあ随分なれなれしくしてゐるそつじやねえか」

「そう見えますかね」

「じょけてんじゅねえ、綾華とお前が日曜に会つてゐのを見た奴がいるんだよ」

あ、と思つた。

やつぱり、見られていたんだ。

あの時は由紀のことしか頭に浮かばなかつたけれど、それ以外にも気にはべき人がいたらしい。

「この思考が顔に出たのか、男は低い声でいつた。

「心当たり、あるみたいじゃねえか」

「まさかとは思うけれど」

ど、俺はその男の言葉にかぶせるように大きな声を出した。
土木の現場で鍛えた……といふか鍛えないといつぱたかれるから
鍛えた声は、重機の轟音にかき消されない程度には大きくないと意味がない。車のアイドリング音程度じゃ俺の声は少しも覆えなかつた。

男の姿勢がややぐらつて。半歩、後ろに下がつた。

「あんた、綾華さんの彼氏じゃないよな」

そうでないことを祈る、くらいの感じでいつてみたんだけれど、

男は俺の言葉に、ぐつと一度息を飲んだ後、

「綾華を名前で呼ぶんじゅねえ」

とすごんできた。

俺はいい加減頭に血が上つていたから、明らかに自分より強そうな相手でもない限り、中途半端な脅しあはえつていらいらに火を注ぐだけだった。

「なんで名前も知らないような奴に」

俺はついつとあごを上げて、思い切り相手を見下した。同時に一步踏み出す。

「んなこといわれなきやならないんだ?」

男は異常に強気な俺の態度に、気圧されたらしい。思わず一歩引いた。

どう考へても素行が悪い先輩方や、不良と呼ばれることに何の違

和感も持たない人々と付き合つていると、いやでも「いつのときの対処法を知ることになる。頭に血が上つっていても、その知識は出てきた。

「ふざけるな！」

本気で相手を脅すときは低い声で。喧嘩を売るときはでかい声で。今出せる最大限の怒鳴り声が俺の口から出た。

男はまさかそんな展開になるなんて想像もしていなかつたりしく、思わずさらに後ずさり、自分の車に寄りかかる姿勢になつた。

ここで追い込むのはセオリーだ。余裕をとれてしまえば、相手を立ち直らせてしまう。

「綾華さんは、俺が好きな女のことで悩んでいたのを察してくれただけだ。やましいことなんか何もない」

一步、さらに一步と相手に詰め寄る。目は相手の目から絶対に外さない。

相手の顔が、さっきまでの怒りの形相から、戸惑い、恐れの表情に変わりつつある。

俺はさらに置みかけた。頭に上った血が勢いを加速させる。

「だいたい、それが人に物を聞く態度かよ」

ついに距離はゼロに近くなつた。のけぞるように車に寄りかかっている男に、のしかかるように視線を下ろす。

「くだらない女乗せていきがつてる割に礼儀を知らない奴だな。土方なめてると怪我じやすまないってこと、知らないわけじゃないだろうが」

「その辺にしといてやれ」

ポン、と肩に手がかかったのはその瞬間だった。

苛立ちが最高潮に達していた俺が、睨みつけるようにしてそっちを向くと、その先によく知つている顔があった。

「か、カケスさん」

カケスさんが、そこにいた。バイト先の社員であり、親父の友人であり、俺の喧嘩の師匠。いや、習つたつもりはないけれども。

「お前がたくましくなったのは嬉しいがな、何も学校の横で喧嘩することはないだろ。場所を考えるんだな」

視界の中に親父の姿もある。

「あんたも喧嘩を売るなら相手を見てからにするんだな」
なにやら陰気な顔をしたカケスさんは、俺の肩越しに相手を見た。
相手は、カケスさんことを知っているらしい。

「掛巣さん、なんであなたが」

「ん？」

カケスさんは目を細めるようにして相手を見た後、俺を押しのけるようにした。

俺はもう毒氣を抜かれてしまっていたし、そもそもカケスさん相手に怒りの発作を持続できるほど我也強くない。押されるままに横に移動した。

「なんだ？ 知り合いか？ 俺は知らんぞ？」

高校時代、あまりの凶暴さから近隣の不良たちを恐怖のどん底に叩き落したという、伝説の不良だ。カケスさんが知らなくても、相手が知つていてるということは充分ありえた。

現役時代から10年、多少横に広がったおかげで、たぶん迫力は以前にも増している。現場で一緒に働いているとただの気のいい兄さんだけれど、本気になつたらどれだけ恐ろしい人か、不良上がりが多い同業者から数々の伝説を聞かされている身としては、むしろ迫られている相手に同情すら感じる。

「どうした？」

親父が、苦笑しながら近付いてきた。

「なんかよくわかんない。いきなり脅された」

「俺にはどう見てもお前が脅しているようにしか思えなかつたがな」「流れ的にそうなつただけだよ」

「まあ、お前から誰かを脅す度胸は無いか」

「その通りです」

俺も苦笑した。苛立ちは、きれいさっぱり消えていた。

「晃彦は俺の弟分だぞ？ 大恩人の息子さんだぞ？ 晃彦にいいがかりつけるとか、俺に喧嘩売つてゐるようなもんだぞ？」

すべて疑問系で迫るカケスさん。横顔がにやけていふように見えるけれど、目も声もぜんぜん笑つてない。

怖すぎです。いやもうマジでちびりますって。

「何でカケスさんと一緒になの」

「あいつ以外は奥さんの実家にいるんだってさ。向こうの家の誰かが誕生日らしいんだけどな、女だけで宴会するから来るなとか何とかいわれたらしい」

「ああ、それで……」

陰気な顔をしていた理由がわかつた。愛娘にまで「パパは来ないで」とか何とかいわれてしまっていたに違いない。娘関係以外で陰気になることなんかまず考えられない人だ。

「恐ろしく暗い声で仕事の電話してくるから、理由聞いてみたらかわいそうになつてな。一人で飲みに行つてもつまらんだろうからつちに呼んだ」

「今日は泊まり？」

「に、なるだろうな」

こんな親父のどこがいいのか、中肉中骨でのほほんとしている顔つきしか記憶に残らないようなわが父を見つつ、カケスさんは親父のどこにああも惚れてるんだろう、と不思議な気分になつた。

『なんか、『ごめん』電話がかかってきたのは、親父が運転する車でカケスさんと共に帰宅した1時間くらい後のこと。

「どうしたんですか」

柄にもなく暗い声の主は綾華さん。電話といつても、パソコンの無料メツセンジヤーサービス。ヘッドレストマイクを使って話すんだけれど、両耳から音が聞こえるから、息遣いなんかが意外と生々しい。

『馬鹿が馬鹿なことして迷惑かけたよ』で綾華さんの口調は完全にため息交じりだった。

「迷惑つてほびじやないですけれど」

むしろカケスさんに脅し上げられて、最後の方は哀れを誘つた。

あの後、カケスさんはもう2分ほど相手をいじめていた。大した時間じやないようと思つたら、それは大間違いといつものです。あの人の視線を独占する2分間の長さつたらあなた。身動きもできない状態でうわごとのように「ごめんなさい」を連発する彼に、助け舟を出したのは親父だ。

「掛巣、もういいだろ？。それ以上やると自殺しかねんぞ」

親父の口調も大概気楽なものだつたけれど、カケスさんも大概だつた。

「してもらつても構いませんがね」

へつへつと笑い声交じりに応え、その間も相手から田を離さない。

「阿呆、お前のせいならともかく、この場合つちの息子も関係者になつちまうだらうが」

親父がいうと、カケスさんは盲点を突かれたとでもいいたげな顔になつた。

「ああ、なるほど。そりやいかんな」

そこでやつとカケスさんの体が彼から離れる。

一瞬、息をついた彼は、直後に今日一番の気を付けをすることになつた。カケスさんがずっと顔を近付けたからだ。

「……もう一度晃彦に絡むようなことがあれば、どうなるかはわかるよな？」

わざとらしく、ありきたりな脅し文句を口にするカケスさん。脅すときはわかりやすい表現に限る、というのもカケス理論。さらにもカケスさんは入念だった。事情なんかこれっぽっちも話していないのに、大体の背景は見た瞬間にわかつたらしい。

彼から体を離すと、運転席の扉を開け、そのまま乗り込んだ。

びっくりしたのは中の女だろう。ただでさえ、すぐ近くで自分を連れていた男が脅し上げられ、恐怖を味わっていたのに、その恐怖の対象が自分の『ぐぐぐく』近くまで来てしまったのだから。俺なら2秒で漏らすね。

「さてお嬢。お前、何者だ」

ぎし、と車が揺れる。運転席にかかったカケスさんの荷重が、サスペンションを沈ませた。

「あ、あたしはかんけいな」

「関係ないとかほざいたらひねり潰すから、それなりの覚悟で答えろよ？」

鬼だ。この人は鬼だ。

当然ながら、女は何も答えられなくなつた。カケスさんがどんな人か知らなくても、単純に、この人に凄まれれば怖い。まして小柄といつていい少女だ。

「どうせ外の男を焼きつけたか何かしたんだろうが、晃彦に何かいいたいことでもあるのか？」

女は恐怖に顔をゆがめたまま、ふるふると首を横に振つた。

「なら、そんなにびびる」たあない。今日は大人しく帰れ。そして
「一度と晃彦にかかるな」

カケスさんの警告、というより嫌がらせは堂に入っている。なら、
とこう前にタバコを取り出し、ゆっくりとしゃべりつつライターを
出し、火をつけた。そしていい終わると大きくタバコの煙を吸い込
み、女に向かつて盛大に吐き出した。

「わかるな？」

せきこむこともできず、女は首を今度は前後に振った。泣きそり
な顔になつていて。

「いい子だ」

カケスさんは大きな手で彼女の頭をぐりぐりとなでまわしてから、
悠々と運転席を降りた。

「わりいな、車内禁煙だったか？」

などと、立つのがやつとこう風情の男に声をかけ、それから俺
たちのところに戻ってきた。

「お待たせです」

「悪かつたね、收拾役なんぞさせてしまつて」

親父がいうと、カケスさんはタバコの煙を天に吐き出してから答
える。

「構いませんよ。今日の晩飯代にしたつて安いもんです」

そういうとにやつと笑つた。

ちなみに、帰ると、母親の反応は、心配されたほど大げさじゃな
かった。

包帯を巻いて帰ってきた俺の姿に面食らつてはいたけれど、親父
が「ごく当たり前のことのように怪我の説明をすると、大して反応も
せず、「髪が洗えなくても体は洗えるんでしょ？ 早くお風呂入つ
ちゃいなさい」と命じ、台所に入つていった。

カケスさんもいるし、夕飯作りが忙しくて、俺のことに構つてい

る余裕が無かつたのかもしない。あるいは、傷のじんじんとした痛みを無視して俺がへらへら笑っていたのも良かつたのかもしない。

『それ、一応あたしの彼氏つてことになつてゐる奴だわ。ほんと、迷惑かけて『めん』

「やつぱりやうでしたか」

『やつぱりつて、あの馬鹿をうこつてなかつたの』

「いや、名乗らせぬうかと思つたらカケスさんが来ちゃつたんで、それどいつもじやなくなつちやつたんですよ」

『もつね……あの馬鹿、死んじやえばいいのに』

「物騒ですね」

綾華さんの口調があまりに正面田な慨嘆だつたから、おれはちよつとばかりびびつた。

『なんかおびえたよくな顔してうちに来るから、何かと思えばあきちゃん脅しに行って返り討ちに遭つたとか……ありえねーだろ』

よほど腹が立つておいでの『』様子で、吐き捨てるよつとおつしゃつた。

「今もいるんですか？」

『追い返したわよ、たつた今』

「ああ、じゃあ帰したところで電話してきました」

『そういうこと。ほんと』『めんね』

『謝らないでください』よ、逆にひねりながら脅しまでかけりやつてるわけだし

『あんなの、脅す程度ならへりでもやつちつてよ』

『いやいや』

何でこんなに物騒なんだ、と思つ反面、少しも彼氏をかばおつとしないことによつとばかり不自然を感じないでもない。

『いいんですか？』彼氏、結構精神的にもきつかったと思いますけ

『

『いくらでも苦しめばいいよ、あんなのは綾華さんは盛大に突き放して見せた。

『しかも他の女、車に乗せてたんでしょう？』

『そこまで自分でいいましたか』

『吐かせたのよ』

力ケスさんに齧られた上に、自分の彼女にまで責められたわけか。ちょっと本氣で同情したくなつてきた。

『そいつがあたしとあきちゃんが日曜遊びに行つたこと、ちくつたんだつてさ』

「ははあ」

なるほど、そういうことか。

『そいつが何であたしの彼氏の連絡先知つてるのかが不思議だけど、まあそれはまた後で問い合わせるとしてだ』

「はい」

『またあれが行くような事があつたら、本氣で潰していいから』

「あれって彼氏さんですか？」

『そう。もう人間扱いする必要ないからね』

ひどいいわれようだ。

『それから、その女』

綾華さんの声がさらに棘を増した。

『誰だか知らないけど、ただで済むとは思わないでほしいわね』

電話越しにきいているからなおさらなのか、耳元に響く綾華さんの声が恐ろしい。

『あたしと仲良くしてるのが気に入らないとかほざいて、あきちゃんのこと勝手におどしておいて、あたしの彼氏つてことになつて奴の助手席に乗るとかありえないだろ』

『ありえませんなあ』

『絶対追い込むから。絶対追い込む』

『一回いった。この人は本気だ。』

「せひほどにしどいて下さいね。そういう奴はたぶん平氣で周囲も巻き込むから、関わつてもうくなことになりませんよ」

『あきちゃんは悔しくないの?』

「別に悔しくは……」

『いきなり脅されるとかわけわかんないでしょ? 悔しいでしょ? 悔しくはありませんよ。途中からこっちが脅す側になっちゃつてたし』

『でも迷惑だつたよね、本当に「めん』

綾華さんがまた謝つた。なんか、いつもの方が申し訳なくなつてきた。

「謝らないで下さい。俺より、彼氏さんの方を気にして下さいよ。精神的なダメージ、でかかつたと思いますよ」

俺がそういうと、綾華さんはいきなり爆弾を放り投げてきた。

『……いいよ、あんなの。もう別れるし』

「ちょっと待つて下さいよ、短気起こさないで」

『短気じやないよ、しばらく前からそのつもりでいたし』

「はい?』

思わず聞き返すと、綾華さんはふつと笑つた。

『ちようどいいわ。あの馬鹿切る決心が付いた』

この人はまた何をいい出すんだろうか。

ちょうどそのタイミングだつた。

俺の携帯が鳴り出した。

パソコンを置いているデスクの上にマナーモードのままで転がっている携帯が、ぶぶぶ、と音を立てている。

サブ液晶画面を見ると、由紀だつた。

俺は迷つた。この場合、どちらを優先させるべきか。怪我の心配からかけてきてくるだろう彼女か、爆弾発言を始めてしまつた先輩か。

その迷いは、ぐく短い時間しか続かなかつた。バイブの音が、綾華さんにも伝わつていたからだ。

『携帯鳴ってるでしょ。出なよ』

「ああ、まあ……」

『早く出なって。今日まではじとー』

やうこうと、綾華さんは逃げ出しそうにして、あつとこう間に通話を切ってしまった。

切られてしまった方は、とりあえずヘッドレストマイクを外し、携帯の通話ボタンを押した。

「はい」

『あ、晃彦くん……まだ起きてましたか?』

「うん、まだ大丈夫だよ」

『遅くにごめんなさい。怪我は痛みますか?』

「多少はね」

パソコンの画面を見ると、綾華さんはサインアウトしていた。

翌日、学校では様々に噂が飛び交っていてびっくつした。

聞く話聞く話が全部違う説になつていて、たとえば、俺の怪我は綾華さんの彼氏との喧嘩でできたものだとか、俺がカケスさんを使つて綾華さんの彼氏に追い込みをかけたとか、気に入らない女子を潰すためにやくざを雇つたとか、まあひどいわれようだ。

「お前、あの噂本当か？」

「あの噂ってどの噂だよ」

途中からうつされつてきて、俺はまともに相手をするのをやめていた。

俺が資材移動中の事故で怪我をした、といつ情報を得た連中の中には、陰謀説を探る者すらいた。

「お前、綾華さんの取り巻きに暗殺されかかったんだって？」「...」
話もここまで行けばいっそ面白い。

「怪我はただの事故

という正しい情報を聞くと、むじゅつまらなをせつていているのが微妙に腹立たしい。

拳句の果てに、職員室にまで呼び出された。昼休みのことだ。

「佐藤、噂はどこまで事実なんだ？」

担任に訊かれて、俺はうんざりにうんざりをかけた顔で答えた。

「怪我は事故、それ以外の噂話はほぼ事実無根ですよ」

綾華さんの彼氏との一件はもちろん伏せておく。

「一年のある女子が、お前に脅されたといって騒いでいるそだが
あの馬鹿女め。

「どの女子が知りませんけれど、ただでさえ怪我で頭が痛いのに、人を脅したりするわけないですよ」

思いつきりしらばつくれると、担任はうなづいていた。

「まあ、お前が人を脅すとか、ありえないわな」

じついうときに口頭の素行が物をいつ。

俺は確かに不良呼ばわりされる人々と多少付き合ひはあるし、喧嘩騒ぎに巻き込まれたこともあるけれど、全部受身。自分から問題行動を起こしたものなれば、そもそも目立つこともしてこなかつた。

バイトもきちんと届けを出してしているし、勤労少年ぶりは教師も知っている。といって、バイトのせいで成績が維持できませんでした、というほど成績も悪くはない。いや、別に良くはないけれども。

さりに、最近の文化祭実行委員の活動で、生徒指導主任からも高く評価を受けている身。

ついでにいえば、生徒会担当のうちの担任は、生徒会会計の先輩から俺の評価を聞いているらしい。あの先輩はなぜか俺を高く評価してくれているから、それも好材料になる。

一方で騒いでいる女は明らかに素行が悪いらしい。そりや想像は付くけれどね。

「だが、火の無いところに煙は立たずだ。今日のところはお前のいうところを信用するが、あまり妙な噂が立たんように身を慎め」

「そうします」

もちろんそうするつもり。

俺はビッグになつてやるつもりもなければ、人にいえない野望があるわけでもない。小市民として細々と生きていけるならそれに越したことはないわけで。

職員室から帰つてくるころには、噂もひと段落していた。

俺が怪我をした場面を見ていた人たちの証言が伝わったかららしい。

それに、担任があつさり俺を解放したところからも、どうも大した事件性はないらしいと判断されたらしかつた。

ワイドショーと同じで、事件性がないとなれば一気に興味を失つて追跡しなくなるのが、物見高い連中の噂話。俺が、例の齎しネタ

やカケスさんのことを見ていたから、脅された本人たち以外に目撃者もいなかつたらしいあの事件は、見事なほどに「ユースバリュー」を失つた。

由紀のこともあるかもしない。

休み時間になると、心配顔で由紀が俺のクラスに現れる。

由紀と俺が付き合いだしたことはあつさりと知られるようになつていて、せつかく付き合いだしたらいきなり彼氏つてほどでもないれどが大怪我するわをするわ、しかも彼氏が無責任な噂のネタに（実は事実はもつとひどかつたりもするわけだが）されるわ、悲劇のヒロイン的立場に祭り上げられてしまつた。

その由紀の前であまり物騒な噂話もできず、この地味な印象の割りによく見るとびっくりするほどの美少女でもある悲劇のヒロインの前では、そもそも俺にまつわる噂が駆け巡つてこと自体が遠い出来事のようになつていた。

意外なくらい、勝手に周囲が由紀を守るつもりしていた。

そうさせてしまう雰囲気が、由紀にはあるのかもしない。今までその威力を發揮する機会がなかつただけで。

ただ、一番気になる話が、そのままになつていて。

綾華さんの「別れる」という爆弾の一件だ。

この状況下で俺から綾華さんのところにいけるわけがない。綾華さんも俺のところには来なかつたし、メールも何も来なかつた。気になったところで、人の恋愛に口出しそうな気もなければ、出せるほど恋愛経験豊富なわけでも、人生の達人なわけでもない。気にするだけ無駄。

そんなことはわかっているけれど、昨夜のことがあつても無関係を決め込んでいられるほど大人でもない。気になるものは気になるでしょ、この場合。

「痛む？」

「はへ？」

由紀の心配そうな声に、間の抜けた返事をしたのは、放課後。自分の教室で、宿題をやつづけていた。

今日は文化祭の活動はなし。まだ各クラスや団体の企画はろくに上がってきていないし、書類関係は昨日でほぼやつづけてしまっている。

宿題は明日提出のもの。世界史のレポートが2本。うちに帰ると確実にやる気を失うから、多少居残つても学校でやつてしまつた方がはかどる。

「宿題が手に付かないみたいでしたから」

「ああ……痛みはないよ。ただ、痛み止め飲んでるから、ちょっとぼーっとはするかも」

薬を飲んでいるのは事実だけれど、もちろんそれだけでぼーっとしていたわけじゃない。

「無理しないで帰つた方が良くないですか？」

自分が痛むような顔をして、由紀は俺の顔をおずおずと見ている。視線はなかなか合わないけれど、照れて視線を外すより、心配で顔色を伺おうとする気持ちの方が勝るらしい。

ちきしじゅ、かわいいなあ。

「大丈夫。どうせ帰つたつてこれやんなきゃいけないんだし、一緒にだよ」

「無理はしないで下さいね」

そういうと、由紀は視線を落とした。俺がぼーっとしていの間も由紀はレポートを書き進めていて、どうも俺の分までまとめようとしている感じ。

「いいよ、そんなにしなくていいって」

「私ができることなんてこのくらいですから、やらせてください」
宿題を肩代わりして俺の負担を減らす、と決意しているらしい。
うーん、世界史もレポート書きも得意分野だから、むしろ俺のが

「一チ役じゃね？」などとも思つたけれど、由紀の決意に免じて、
じこせ黙つていることにする。頭がうまく働かないのも確かだし。

しばらくして、俺が自分なりに一本のレポートの内容を煮詰め、
レポート用紙に向かおうとしたころ、由紀がポツリとつぶやいた。

「……晃彦君、噂話、聞いたやつだ……」

俺はシャープペンを走らせていた右手を止めて、顔を上げる。
由紀が、思い詰めたように、顔を赤くして思い切りつむいた状
態になっていた。

「どんな？」

何を聞いたかわからなければ反応のしようもないのに、まずは訊
いてみる。

「……晃彦君が綾華さんとの彼氏さんと、綾華さんを奪って殴り
あつたって」

「あれ、そんな噂に変化したんだ。面白いね」

そうか、その流れの噂話が届いたわけだ、少なくとも由紀のクラ
スには。

「殴り合つてないよ。昨日は誰とも」

由紀が本気で噂を信じているとは思わないけれど、綾華さんがら
みで妙な噂になれば、絶対気にするだろう。俺と綾華さんの漫才を
日々直接聞いていただけに。

「帰り道で説明するよ」

と、俺は小声で告げた。こんな誰が見ているかわからない状態で、
あの話はしたくない。でも、由紀には話しておきたい。

由紀は小さくうなずいた。

それから、肩をすくめるよつじて小さくなり、ペリッと頭を下げ
た。

「「」みんなさー」

『ぐぐく小さな声。今度は何でしょ？』

俺が黙つて見ていると、由紀は顔を上げないまま、聞こえたがつ
きの声でポソリと付け加えた。

「晃彦君のこと、疑つたみたいでしたね。最悪な女ですね」「自虐に走らないでよ。聞いてる方がつらくなるから」

はつとしたように由紀が顔を上げる。俺は苦笑していた。

「由紀が噂を流したわけじゃあるまいし、謝るのは無し。ね

俺がいうと、由紀はまたうつむいて、静かにうなずいた。

長いストレートの髪が、由紀の動きにあわせてゆらゆらと揺れている。痛んだ様子もないきれいな髪が、蛍光灯の明かりにわずかなキュー・ティクルを反射させているのが、やけにきれいに見えた。

見覚えのある車、見覚えのある顔。

帰り道。

由紀と二人で学校を出て、校門から左に折れて50メートルほど進んだ先の交差点近く。

昨日見たばかりの車が路上に止まっていた。道の左側を歩いていて、対向車線の脇に止まっているから、運転席に座っているドライバーの顔も見える。もちろん、昨日見たばかりの顔があった。

なにやつてんだ、こいつ。

高校1年生にとつての20代男性ってのはかなり大人で、こいつ、なんて感想は普通は浮かんでもないものだけれど、この時、こいつという単語以外に浮かんでも来なかつた。

いきなり口を閉ざして無表情になつた俺に気付いて、俺の左側を寄り添うように歩いていた由紀が不安そうに見上げてくる。

「由紀、あれが昨日の騒ぎの原因」

とあごで指示示すと、由紀は不安そうな顔のままそちらを見た。視線の先では、男が運転席から降りてくるところだつた。明らかに俺の顔を見て動いている。

当然、俺は警戒する。

ドアを閉めると、男はこちらに歩いてきた。警戒心ぱりぱりで見つめている俺に、意外な姿が見えた。男が、俺に目礼していた。向こうがお辞儀したら反射的にお辞儀してしまつたのは、そういうところだけはきつちり躊躇られた人間の悲しいさが。

よく見てみると、彼は地味なチャコールグレーのスーツ姿で、グレーのネクタイも地味。ワイシャツは白。生真面目な営業マン、という感じで、昨夜とは別人みたいだつた。

「昨日はすまなかつた、どうかしていただんだ」

近付いてくるなりいきなり謝られ、俺は面食らつて言葉が出てこ

なかつた。

国道のそばの喫茶店、由紀に告白された日に一人で入ったあの喫茶店に、今度は三人で入っていた。

「広瀬」

と、彼は名乗った。

どう見ても金のかかる車に乗っている「広瀬」というところで、この辺りでは知らぬ者の無い企業グループの名前が思い浮かんだ。地方財閥というには少し規模が小さいかもしだれないので、この辺りで手広く商売している家に「広瀬」という名がある。

もはつた名刺を見て、納得した。会社名が「ヒロセシステムコンサルタンツ」、親父からも名前が聞いたことがある会社で、もともと土建業から始まり、運送業、ガソリンスタンド、半導体工場などに手を広げ、早くからコンピュータシステム開発にも力を入れていた広瀬グループの子会社。肩書きは専務となっているから、広瀬の分家の跡取りといふところか。

田舎だから、そういう情報は高校生ごときでも耳にしている。

「綾華からもずいぶん叱られたよ。悪かった」

「いや、まあ、あれはどうちもどつちだつたんで」

こうも素直に謝られてしまうと、落ち着かないことはなはだし。こっちには、なにしろカケスさん乱入というある意味負い目もある。ありや反則技もいいところだもんな。

「実は昨日、あれから綾華に会いに行つてね。でも叱られるだけ叱られたらすぐに追い出されてさ、それからは連絡も通じない」

今日は帰りの時間を見て綾華さんを待つていたらしい。でも、綾華さんはいつまで経つても現れず、そのうち俺が由紀と一緒に出てくるのを見つけたんだそうだ。

由紀のことも知っていた。

「綾華から聞いたよ。二人が付き合つてるって

由紀がうつむいている。初対面の相手だからだろう、と人は思うかもしれないけれど、俺には思いつきり照れているだけに見える。由紀は俺と付き合っていること自体が照れの素になるらしい。

仕事はいいんですか、と聞きそうになつたけれど、その口は引っ込めた。専務という肩書きは、仕事に支障さえなければ時間なんか自由に使えるご身分つてことだ。

「あんな小娘に乗せられて……馬鹿だと思つよ、自分でも『自嘲』、という言葉を全身で表現したら、今の広瀬さんのようになるんだろう。顔立ちは悪くないどころか素晴らしい出来なのに、自嘲の色が濃すぎて、疲れきつているように見える。

かなり濃いくまが浮かんでいて、よく見れば顔も脂っぽい。たぶん、あまり寝ていなんだ、この人は。

「最近、綾華とうまくいってなくてね。特に文化祭実行委員になってから、あいつが俺を露骨に避けるようになつて、君が原因じゃないかつていつってきたあの小娘の口車に乗せられてしまった」「もともと知り合いなんですか？」

「顔くらいはね。綾華のグループに近付きたがつてる子は多いけど、その中にいた奴だ」

彼女の底が割れてきた気がした。

「なんで広瀬さんに俺のことを告げ口したんでしょうね」

「君が気に入らなかつたといつていたけどね。ちょっとルックスが良くて、まぐれで喧嘩に勝つたくらいで調子こいてるとか何とか」「でも、普通、告げ口はともかく、一緒に車に一人では乗らないでしよう」

「俺に近付くのが綾華に近付く近道だと思ったんじゃないのか？あるいは、大人の男と一人になるつてのが刺激的に思えたかな」おそらく違う。

彼女は、綾華さんが好きなわけでも、広瀬さんが気になつたわけでもない。

学校のアイドル綾華さんに、地域の支配勢力・広瀬家。

そういう華々しいもの、権威や権力というものに惹かれているだけ。そうすることで自分が高められた気がするから。いや、本人は高められたと信じているんだろう。

だから、その権威や権力に無造作に近付こうとしている奴に嫉妬する。陥れるための陰謀くらいは企むだらう。あまりの浅知恵に、企まれた方はめまいすらするけれど。

広瀬さんは間違いなくもてる。そのモテ男と一人きりになるつてのは確かに刺激的だつただろうと思う。

でも、あんまり深くは考えてない。多少深く考えられる奴なら、綾華さんことを気にして、絶対一人きりでは車には乗らず、ましてでかい態度で助手席から「あんまりやりすぎないでよー」などと馬鹿な狎れた発言はしないはずだ。

軽蔑にすら値しない馬鹿女。

といつところで、俺の中の彼女への評価は確定。

「君が綾華に気があると聞いて、いてもたつてもいられなくなつて、綾華のつてで知り合つた子から君の行動を聞き出して、学校を出たらしさいことを聞いてすぐに学校に行つた。それが昨夜の状況だ」

広瀬さんはわざわざ解説してくれた。彼なりの誠意らしい。

「彼女がいるとまでは知らなかつたんだ」

「仕方ないですよ。できたばかりですし」

由紀は無言。たぶん、うつむいたまま再度照れている。そういう場合でもない氣はするけれど、口を挟まるのも何なのでとりあえずは放置しておく。

「知つていればあんなことはしなかつた。まして掛巣さんの弟分だなんて想像もつかなかつたから」

「ああ、カケスさんのことは気にしないで下さい。確かにあの人に散々世話にはなつてますけれど、あの人の性格上、弟分だからどうしても守るとか、無いですから」

口ではいうかも知れぬけれど、あの人の本音は、娘以外のために死ぬとか何の冗談だよ、というところにあるはず。

「だと助かるな。俺も高校生のこりは多少ぐれていたりもしたけれど、あの人の伝説はよく聞いたよ。あまり係わり合いにはなりたくない」

そりゃ わうでしょ「うよ。

「今はただの子煩惱パパです。昨日はたまたま不機嫌になるようなことがあって、タイミングが悪かつたんでしょう」

ざつと話を流しておぐ。

「俺も脅されて最初は頭にきましたけれど、もつそれも收まりました。あんま気にしないで下さい」

「気にするよ。高校生に圧倒されるような奴が企業経営とは笑わせる」

広瀬さんの自嘲が激しくなってきた。

「そりや、綾華も愛想尽かすよな、当然だ」

「広瀬さん、自虐的になつてもなんも問題は解決しませんよ

「わかつていてる。わかつていてもね」

というなり、広瀬さんは割と激しく田に頭をかき回した。それからふうつ吐息を吐き出し、続ける。

「不安なんだよ、綾華の気持ちが自分に向いていないんじゃないかなって」

思わず昨日のボイスチャットで別れ話が出ていたことをいいそうになつたけれど、ややこしくなりそうなので寸前で飲み込んだ。

「それで校門を張り番してまでの出待ちですか」

「それでもしないと、電話もつながらないんじや、あいつを捕まえられない」

広瀬さんはそこまで「一ヒー カップの中の濃い田の一ヒーをあおるよつにした。

「……高校生なんて、27の俺からしたら子供だよ」

27歳だったのか。綾華さんは10歳差くらいか。

「なのに、俺はその子供にこいつこもてあそばれて……男つてのはそういう生き物なのかな」

「まあ、どうなんでしょうね」

俺は適当にこまかしたけれど、内心では「一緒にするな」と思っていた。どうもこの人の行動といい言葉といい、年相応の成熟からは遠い気がしてきた。

「あいつはきれいだ。話していても楽しいし、あんないい女はいない。手離したくないんだよ」

「そうでしょうね」

「たまたま家同士の付き合いもあったから、あいつのこととは子供のころから知っている。あいつのことなら何でも知っていたんだ」

「そうなんですか？」

ひたすら相槌。もうも相槌男に徹して、聞き出せることは全部聞き出してしまおう。

「あいつが高校に入つてから付き合いつになつて、いろんな所に連れてつて、いろんな思い出を作つた。わがままもいっぱい聞いてやつたし、あいつの頼みならどんな無理でも聞いてきたつもりだ」「ええ」

「なのに最近、あいつは俺から離れようとしている。理由を聞いても答えない。電話すら出なくなつてきて、メールなんか返つても来ない。おかしいだろ？」「そうですね」

なんか疲れてきた。

隣の気配をうかがうと、由紀は広瀬さんの話を聞きつつも、俺の反応が気になつて仕方ないらしく、俺の呼吸の音まで聞き逃すまいと耳を澄ましているらしかつた。

面白いやつ。

「なんか……」

喫茶店を出てしばらく歩き、由紀の家への帰り道をたどり始めた頃、両手でかばんを持ちながらとこと歩いていた由紀がつぶやいた。

「恋愛つて怖いですね」

「どうして？」

由紀がしみじみと、「う、その口調がおかしくて、思わず聞き返した。

「だつて、あんな大人の人があんな風に我を失っちゃうんですよ」「まあ、ねえ」

あれは結構特殊な例じゃないだろうか、とも思つたけれど、なにしろ恋愛経験なんか無いに等しい人間だから、あまり物はいえない。「私もあんな風になるかもしれません」

「あんな風に？ 別れたくないって他人を巻き込むってこと？」

「それもありますし、相手の気持ちがわからなくて大騒ぎしてみたりとか」

由紀の顔を見てみると、意外にまじめな顔をしている。

「自分がどうなつちゃうかわからないです。たぶん、自分から告白するとか一生無いだらうなつて思つてたのに、しちゃつてみたりとかしますし」

「しちゃつたねえ」

「今でも不思議です。何あのタイミングで告白できたのか。恋愛つて、自分でも想像もつかないことをやらせてしまつ力があると思います」

「なるほどねえ」

思い当たる節はこっちにある。芝生でのキスの一件だって、勢いであそこまで行つてしまつた。周りが人であふれてるとか、全然

考えが及ばなかつた。

でも、と俺は返した。

「そうやつてありえない自分と出会つていいくのつてさ、雑な言い方かもしけないけれど、成長だよな。お互い高めあつていけたら、じたばたしたり失敗したりする甲斐もあるよね」

由紀は俺の顔をちょっと見上げた後、大きくうなづき、それからうつむいた。

今度はなんだろう。

結局会わなかつたな、と、帰つて晩御飯を食べて、部屋に戻つてから思つた。

綾華さんだ。

渦中の人物のはずで、彼女のおかげで色々と貴重な経験をさせていただいたわけだけれど、肝心な本人とまったく接触が無い。

確かに昨夜話したけれど、尻切れトンボで、肝心な話は何もしていない気がしていた。

いきなり別れるという話を人に放り投げておいて、投げっぱなしだ。投げられた方は受け止められもせず、中途半端に浮いているしかない。

別れたいという気持ちは、でも何となくわかる気がした。

の人には確かに大人の男性が似合つ。社会人の彼がいると聞いていたけれど、それも納得できていた。少なくとも俺たちみたいな年代の子供が相手じや、あの人はつまらないんじやないだろうか。無責任に大人と子供の中間を生きているような年代が相手じや、あの人の心は動かせないとと思う。しつかりと自分の足で立ち、奔放なところもある綾華さんを支えきれる力がある人じやないと、綾華さんの心は動かせない。

そして、広瀬さんは、年代や経済力は充分でも、ついでにルック

スでも充分でも、心の成熟度のようなものが足りていない気がする。

俺から見ても、広瀬さんは自立しきれていない感じがした。甘えが強い気がした。綾華さんに寄りかかっていて、支える力強さは感じなかつた。俺が女でもあの人にはついて行こうとは思えない。

男としてならなおさら。

カケスさんを知っている俺には、あの不良時代からの柄の悪さは差し引いたとしても、広瀬さんの頼りなさは物足りなさしか感じさせない。無責任な人だ、とすら思う。

それにしたつて、だ。

投げっぱなしは良くないだろ？

パソコンを立ち上げてみたけれど、綾華さんがサインインしていくる気配は無かつた。

どうももやもやする。

明日は実行委員の方で打ち合わせがある。会つたら何か話ができるだろ？いや、しないとな。

という俺の決意はあつさりと流れた。

綾華さんはいたし、仕事も一緒にしていたのだけれど、何しろ暇が無かつた。

「何でこんなに早く一気に集まるんだよ！」

来週中の提出、という話でまとめていたはずのクラス」との出しど物計画が、なぜかこの日、まだ木曜日なのに、やたらと集まってきた。

もうある程度話をまとめていたクラスが、生徒指導主任の鶴の一聲で計画の作成を進め、この日に一斉に提出してきたせいだ。

「あきちゃん、貸し出しは今日やつちやうわけにも行かないんでしょ」

「貸し出したところで、教室に置くわけにもできませんからね。部活の申請ならともかく、クラス単位の貸し出しは当田近くになつて

からじやないと

「じゃあどうすんの？ 仕分けだけしておくれ」と。」

「そうです。片つ端から付箋でも貼つていって、仕分けましょ。リストはできますから、そっちはそんなに時間かからないと思います。とりあえず昨日までに上がつてきてる分をやつとおまじょう」

「じゃああたしはそっちやるわ」

「お願いします。由紀と俺は書類のチェックをやめ。多分二つちの方が時間がかかる」

「企画書と貸出申請書ですね」

「うん。由紀は企画書のチェックをお願い。企画に図面が必要なのに出でないところが結構あるから、それは弾いて。で、図面の数量と企画書と申請書の数量が合つてるとかどうかのチェックをお願い」

「わかりました」

「俺は弾いた書類の大体のチェックをして、場合によつては図面作つちやうから。いちいち頼みに行くよりそっちの方が早そうだし」「仕事が早く進むのはありがたいし、今のうちにできるだけ多く処理できれば、土壇場になつて仕事量がパンクする恐怖からも逃れられる。

それはいいんだけど、物には程度つてもんがあるだろ」と思つわけだ。

別に今田全部やらなくともいい仕事のはずなんだけれど、そういうかないのは、お金が関わつてくるから。足りないものは早く注文しておかないと、後で足りなくなつたときに対応できくなるし、そもそも生徒会に申請するお金が足りなくなつてしまふ可能性がある。そうなつたら当然買い物もできず、資材の準備に穴が開く。

そして今日は木曜、今日中に注文する物リストを作つて会計に回さないと、発注が週をまたいでしまう。

今日できることは今日やって、足りないものはさつと注文リストに入れてしまつに限る。

とはいっても、量が量だった。だべつてだらだらやって、終わる

よつな仕事量じゃなかつた。

「仕分け終わつたよー」

「あ、綾華さん、じつちの申請書も上がつてますのでお願ひします」

「おこおこおい、由紀、あんた、あたしを殺す氣かい」

「じ、ごめんなさい、じゃあいいです」

「じ、良くないでしょ、あたしの脅しにコソマニ2秒で負けちゃだ

めでしよ」

「じ、ごめんなさい」

「謝んなくていいから。ほら、書類よこして」

「で、でも、私もやります」

「あんたは書類整理が先でしょ。あきちゃん、指示は?」

「えーっと、由紀はあと30秒そこで待つて。修正した図面が上がるから。プリンタ見てて、すぐ出す。出たらそのチェックね」

「といふことだそうだ。由紀、よろしく」

この会話だけ切り取ると由紀が仕事ができない子のようだけれど、やってる仕事量は大きい。俺が急かされるような展開になつてているけれど、これは予想外だった。俺の仕事が先に終わり、由紀がためてしまつた仕事を手分けして片付けよつと思つていたのに、とんでもなかつた。

成績がいいからといって、この手の事務仕事がうまいとはい一切れないはずなんだけれど、由紀の場合はいい切れた。早くて正確。人のミスを探したり、多少の間違いなら直してしまわなければいけない仕事で、いくつかチェックしたけれどミスが無い。

綾華さんは図面作りやその手のチェックなんか絶対やんない、と高らかに宣言した上で資材整理をやつている。いまだに巻かれている俺の頭の包帯が気になり、俺に資材置き場に入る機会など与える気が無いらしい。そしてこちらも仕事が速い。

背が高くてすつきりした体型の綾華さんは、どう見たつてをして腕力があるほうには見えなかつたけれど、この日は精密機械のよつな仕事振りを見せた。扱う資材に小物が多くつたせいもあるだらう

か。パー・テー・ションパネルのような大物は、今日は無い。

そんな風に3人で嵐のような仕事に立ち向かいつつ、過ごしていたら、あつという間に時間が経つていった。

結果として終わったからいいものの、時間は既に7時を回りつつとしていた。

由紀の門限が近付いていた。

「由紀、門限は？」

俺が訊くと、由紀はしばらく何の反応も示さなかつた。たぶん、集中が切れたとたんに疲れがどつと出で、頭が働いていないんだろう。

う。

そのまま一人で8秒間見つめ合ひ。

何の情熱もない見つめあいの後、由紀は自分がどんな状態にあるか思い出したらしく、時計を見てからぱつと立ち上がつた。

そして倒れこみそうになる。あわてて俺が体を支え、綾華さんがあきれた。

「疲れてるのに急に立ち上がつたら、立ちくらみするの当たり前だろ」

「由紀、立つのはゆつくりでいいから」

俺はくらんだままでいる由紀に言葉をかける。肩を支えているのだけれど、ずいぶん軽い。

「あきちゃん、由紀を家の前まで送り届けること。いますぐに。可能？」

「可能是可能ですけれど。でもここはここで戸締りとか「ちや」ちや面倒ですから、俺が戻つてくるまで留守番してもらつてもいいですか？」

「留守番はいいけど、あたしも帰りたいし。戸締りはあたしがしていくから、あきちゃんもそのまま帰りなよ」

「いいんですか？ 割と面倒ですよ」

「大丈夫よ、面倒つてだけで難しいわけじゃないんだから」

そんな会話があり、立ちくらみは治まつてもまだふらふらしてい

る感じがする由紀を家の手前まで送る任務が『えられた。』
というわけで。

俺は結局、綾華さんと、仕事以外の話はほぼする「ともなく、む
なしく帰ることになつた。

今週は激動の一週間だった、と自分でも思つ。

日曜日の綾華さんとの「トーク」、由紀への告白から始まって、色々と出来事が集中して起きてくれた。

おかげで気が休まることがなかつた気がする。

前の土曜日は雨の中での重労働、翌日の日曜は早朝から深夜まで動き回つていたし、月曜日は文化祭実行委員の仕事、火曜日には頭に怪我をした拳句につまらない脅迫騒ぎに巻き込まれた。水曜日は脅迫してきたはずの相手の愚痴を延々と聞かされるばかばかしい日を過ごし、木曜日は文化祭実行委員の方で恐ろしい量の仕事をこなした。

連日のことで、さすがに疲れていたらしい。

金曜日の朝、俺はひどい頭痛に襲われ、ベッドから起き出すのがつらくて仕方がなかつた。

「どうした、ひどい顔だな」

と親父がいうから、

「あなたの息子だしな」

と答えてやつたけれど、反論を食らつ前に体温計を押し付けられてしまつた。しかたなく測つてみれば、38度0分。

「残念、今日は外出禁止」

おかんから無情の宣告。

どうしても学校に行きたい、どごねるほど学校大好きっ子じやないの、大人しく寝ていることにした。

その前に、一応メールを打つておく。相手はまず由紀。それから友人何人かに同送信で熱で学校を休むとメールした。

返信は由紀が一番早かつた。

『発熱ですか!? 頭の怪我のこともあるから心配です。早く病院に行って、きちんと治して下さい』

相変わらず絵文字もないメールで、簡潔。

昨日は由紀も相当きつかったはずで、体は大丈夫かとメールを打ち返したら、またすぐに返ってきた。

『私は全然大丈夫です。晃彦くんは自分の体調のことだけを考えて下さい』

また簡潔なメールだった。

あいつらしいな、と思うと、女子高生のメールとは思えない文面も、妙に可愛く思える。恋愛で馬鹿になつてゐるからなのか、熱に浮かされているのか、微妙なところだ。

その後、迷つた末、綾華さんにもメールした。

実をいうと、出す気はなかつた。

一言でいってしまえば、綾華さんと関わるのが面倒くさくなつていた。

綾華さんのことは嫌いじゃないし、一緒にいたら楽しい人だけれど、彼氏のことといい、いきなり別れると爆弾を投げつけておいて放置状態のことといい、今は関わるのが正直面倒くさいという感情の方が先に立つ。

それでも、今日も文化祭実行委員の仕事があるし、多分俺がいないとあの仕事は回らない。今日はいつそ仕事は完全に休みにしてしまう方がいい気がしていた。

今日は熱で休むこと、仕事は今日は休みにすること、月曜日に行う予定の仕事を簡単にまとめてメールする。

もつとも、熱のおかげで頭がうまく動かず、大した内容でもないメールを打つのに時間がかかるてしまい、送信する頃には始業時間になつてしまつていた。

意外にもまったく遅刻というものをしない綾華さんは、とっくに教室について、授業を受け始めているだろう。

返信はあまり期待していなかつたし、むしろ来ないほうがいいな、という気分がある。体調に引きずられてそんな気分になつていたこともあるけれど、やっぱり俺には綾華さんことで振り回されるの

は負担が大きすぎた。

由紀とせつかく恋人同士になれた今、学園の憧れを一身に集めてしまったような格上の女性に、それを取り巻く人々まで相手に回して日々を過ごすのは、そういうことに情熱を感じてしまうようなタイプの人間でもない限り、きついものがある。

華麗な人間関係の中に身をおくるのは、俺には無理。

そういうのが好きな人もいるし、綾華さんに振り回されるなら自分が代わるといいだしそうな奴もすぐに何人か顔が浮かぶ。でも俺はそういう人種じゃない。

そして、すぐに眠ってしまった俺が、昼前に一度目を覚ました時、携帯には友人からのメールが何件か入っていたものの、綾華さんからは何の連絡もなかつた。

そんなもんかと、妙に安心したような、それはそれでさびしいような、変な気分になつたりした。

昼休みの時間帯、由紀から電話がかかってきて、怒られた。

『病院行つてないんですか？』

「疲れが出ただけだろうし、今日は様子見でいいかなって」

『ダメですよ、なんでそんなにのんきなんですか』

由紀が大げさすぎるんだよ、と思つたけれど、いえばすごい反論が来るだろうと思うからいわないでいた。

『今からでも開いてる病院はありますから、必ず行ってくださいね』由紀があんまりにも勢い良く怒るから、ついその気になつた。

うちは共働きだから家には誰もいない。財布と保険証に携帯、鍵をシザーズバッグに入れて、家を出た。その時点で体温は朝より上がつて38度5分。病院に付く頃にはもつと上がつているんだろうな、と思つた。

自転車をだらだらとこいで10分ほどの所にある内科医院で診察を受けた。じいさんばあさんばかりかと思ったら、意外にそんなこ

ともなかつた。じいさんばあさんは朝が早いから、昼までには診察を終えているもんだよ、とは、帰宅後にその話を聞いて答えた親父の弁。

診察結果は、親の見立てと変わらない。

「疲れで風邪を引いたんだろ? 薬で無理に熱を下げるに、消化のいいものを良く食べて大人しく寝ていなさい。すぐ良くなる」

ウイルス性の風邪の可能性もあるからと検査は受けたけれど、結果的には陰性だったらしい。

家に帰り着いたのが4時くらいで、まだ誰も帰宅していなかつた。鍵を開けて家に入り、食欲もわかないままにゼリー型の機能食を流し込み、スポーツドリンクをガブ飲みしてから、着替えてベッドに入つた。

寒気がひどかつた。頭痛の方は薬のおかげで大したことではない。鼻づまりもひどかつたけれど、不思議とのどはなんともなかつた。

なんとなく人恋しくなり、携帯をいじつたりもしたけれど、人恋しい割りに何もかもがうつとうしく感じるといつ、ひどく矛盾した気分になつてもいた。

たとえば由紀に電話をしたとして、たぶん由紀は喜んで俺の電話に応じてくれるんだろうけれど、その声は聞いていたくても、意味のある会話をしたり返事を返したりするのが、どうも面倒に思える。

ひどいわがままだとは思うけれど、病氣のときつてのは、ひどく淋しがるか、わがままになるかするものらしい。

この時の俺は人恋しさより面倒くさが勝つた。

結局電話もしなければ、他の人から来たメールにも一切返信せず、寝てしまつこととした。

そう、風邪のときなんぞは、寝て治すに限るのだ。

次に起きたのは、夜の8時ごろだった。

「晩御飯食べられそ'う?」

妹が呼びに来た。

「……食欲はないな」

「だよね。でも薬飲めないから、何か食べないと、特に仲が悪いわけじゃないから、病気の時くらいはお互に優しくなる。普段はさほど仲がいいようには見えないらしいけれど。」

「これ買つといったから飲みなよ。水分も取らなきゃダメだよ」

そういうて妹が出したのは、病院帰りにも飲んだゼリー型の機能食。気が合つというより、今時は定番なんだろう。

ただし、メーカー違い。俺が買つたのは某薬品メーカー系列のもの、妹が買つてくれたのはスーパーのプライベートブランド品。価格がだいぶ安い。

「ありがと」

これは気持ちがどうとかの問題じゃなく、妹の方が賢いんだろう。好意はありがたいので、素直に受け取ることにした。

「携帯鳴つてたけど、今日は電源切つた方が良くな?」

妹の言葉に携帯を見ると、ちかちか光っている。バイヴにしているから、寝ている間は気付かなかつたらしい。

「そうするわ」

「体拭いたら? シャワー浴びるだけでもきついでしょ」「そうだな……」

妹は着替えまで用意してくれていた。おかんの指図だらうけれど、これも素直にありがたかった。だいぶ汗をかいっていた。

正直にいえば、怪我をしている頭の方が、最近とともに洗つていなかから気持ち悪くて仕方ないのだが、この熱では洗いきる自信がない。シャワーは明日以降まで我慢した方が良さそうだった。

「体拭くなら、準備くらいしてるよ」

「そうしてもらえると助かるよ」

「私は拭いてあげないけど」

「そこまで頼まんよ、夫婦じやあるまいし」

「そうね、拭いてくれるつぽい人もいるんだし」「妹は立ち上がりながら爆弾発言をしてくれた。

俺はまだ彼女ができたなんてことは、ここには一言もこってないんだが。

「拭いてくれるつて、ここにいない奴にびつやつて拭かせるんだって」

由紀がここにいるはずもない。なにせ、門限を過ぎているから。ところが、妹はまったく別の文脈で喋っていたらしく、怪訝そうな顔をした。

「いるからこいつてるんじゃない」

「へ？」

「誰の話してるの？　まさかおにい、他にもそんな女がいるの？」
「ちょっと待て、どういう意味だそれ」

「どうこうして……あ、来たつぽい」

妹は立ち上がる。

部屋の外から、階段を上がってくる足音がする。それは聞き慣れた家族の足音ではなく、静かで、どこか慎重で、明らかに遠慮している足音だった。

「おにい起きてますよ。遠慮なく拭いちゃつてください」

「え、あたしが拭くの？」

やけに聞き覚えのある声がして、俺は発熱以外の原因でぐらぐらしてきた。

「触れるのもいやならその辺に置いて戻つてきていただければ、妹が部屋の外に出て行く。

「嫌つてことはないけど。あなた、面白い子ね」

「ありがとうござります。馬鹿な兄を持つと色々と学ぶことが多いんです」

「ちょっと待て、色々とちょっと待て」

思わず俺が口を出すのと、妹以外の声の主が顔を出すのが同時だつた。

「あら、元気そうね」

そこにいたのは、ありえないことに、この所の騒動の最大の原因、綾華さんだつた。

底が深い洗面器を持ち、私服で俺の部屋に入つてくる綾華さんの姿に、俺は今日最大級のめまいを感じていた。

「……元気そうに見えますか、そうですか」

「思つてたよりはつてことよ。そう嫌な顔しないの」「突然来ますか、それにしても」

「突然じやないよー。電話したしメールも入れたよ? あきちゃんが見てないだけじゃん」

携帯をチラツと見たけれど、手に取るのはやめた。たぶんウソはいつでない。確かに4時以降は携帯を見ていない。

「なんか色々と迷惑かけちゃつたからね。せめて見舞いくらいはしようかなつて。あたしつて健気じやない?」

「本物の健気は自分からいいませんて」

「ほら、文句いつてないで脱ぎなよ。拭いてあげるから」

綾華さんは黒いカットソーの上に紫の薄手のカーディガンを着て、下はスキニーのデニムパンツ。気取らない感じが近所のお姉さん然としていて、嫌味がない。

「自分で拭きますつて」

思わずかつとなつて、邪険な言い方をしたけれど、少なくとも顔の赤さはばれないだろ? なにしろ熱のおかげでもともと赤いはずだから。

「遠慮しなくてもいいんだからね? 妹さん公認なわけだし」

「あれはたぶん勘違い街道爆走中なだけっす」

「あたし、彼女さんつて思われちゃつたかなー」

綾華さんがベッドの下にちよこんと座りながら、手を胸の前で組む。わざとらしくかわいらしいポーズをとつたつもりらしいがむかつくほどかわいい。

「俺を訪ねて女が来るなんてこと自体初めてですかね、たぶんおかんも含めて耳ダンボで様子伺つてるでしょ? ゆう」

「あらあら、大変ね」

綾華さんはにつこりと笑いながらいった。

「とてもじゃないが目なんか合わせられないから、俺は無言でゼリーを手に取り、口をぶちぶちと回した。

やつぱりこの人はきれい過ぎる。鼻が全然利かないからわからないけれど、多分すこくい香りなんかさせちゃってるに違いない。

と考え、自分がどれだけ臭いかについての想像が働いてしまった。ただでさえ大汗をかいていることに加えて、火曜日の負傷以来まともに頭も洗っていない。

ゼリーを口に含む前に、それどころではなくなつてしまつて、俺は綾華さんを見れないままに口を開いた。

「……早く帰つてくださいよ、こんな臭い部屋にいてもしょうがないでしょ」

綾華さんはふつと笑つた。

「別に臭くないよ。大体あたしが何かを我慢してまで他人の部屋にいると思う？」

微妙な言い方だ。

以前の俺ならそのセリフを聞いたら納得していただろう。我慢するくらいなら、顔だけ出してとつとと帰るタイプの人だらうつて。でも、綾華さんはそういう風に見られがちなだけで、実のところは真面目で思いやりがある人だと知つてしまつてゐるから、始末に終えない。俺を安心させるためにそういうつてわかるから、そうですね、とはもういえない。

「……何しに来たんですか」

「何つて、お見舞いに」

「それだけでわざわざ俺の家の住所まで調べてきたんですか」

住所まで教えた記憶はない。来たということは、調べたんだろう。

「そんなどげどげしい声出さないの。病人なんだから、余計なこと考えないで寝てなさい」

「誰が考へさせてるんですか」

俺の声は自分でもわかるくらいにいらっしゃっていた。

「こきなり別れ話を人の前で切り出しておいて、その後は何の話もなしで、こっちがどれだけ振り回されたると思つてゐるんですか」

「それは……悪かつたと思つてゐる」

「そりや広瀬さんが俺のところに来たのは綾華さんのせいじゃないかもしだせんけれど、綾華さんと知り合わなければこんな騒ぎに巻き込まれることはなかつた」

俺は知らず知らずにいすぎていた。そして、そのことすら眞付いていなかつた。

反応が返つてこないから、ちらりと綾華さんの顔を見た。ひどく傷ついた顔をして、俺の手元をじっと見ていた。

待て。俺は今、何をいつた？

「……知り合つたのが間違つたか。そこまでいわれちゃうんだ、あたし」

あ、と思つたが、とっさにフォローするセリフが思い浮かばない。いつもなら「ンンマ5秒で出てくるはずの次の言葉が出てこない。

「嫌われたね。まあ、しようがないか。自業自得だしね」

「いや、そうじゃなくて」

「いっぱい迷惑かけちやつたね。ほんと、ごめん。もう一切関わらないよ」にするから、ここまでのことばは謝つておく

「そうじゃないんです」

「文化祭実行委員も、あきちゃんがいれば動くんだし、あたしが関わらなくても大丈夫でしょ。代わりの人手は手配しておくれから」

「綾華さん」

「そういうことでしょ？ 知り合つたのが間違いなんでしょ？ あたしつつてあきちゃんにとつて間違いなんでしょ？」

綾華さんが、どうぞの感情むき出しの田で俺を睨みつけってきた。言葉で畳み掛けられ、田線で縛られ、俺は口ひとつ動かせなくなってしまった。

しばらく、俺と綾華さんは睨み合いになつた。というか、俺は蛇の前の蛙で、一方的に睨まれてすくんでいたという方が正しい気が

する。

「……どうしたのよ」

綾華さんの絞り出すような声が静寂を破る。

「いつもの華麗な言い訳はどうしたのよ。『おかしてみなさいよ。かわしてみせなさいよ。それができないほど迷惑だった？』本音の本音で迷惑だった？」

目が赤い。泣く寸前という状態で、綾華さんは踏みとどまついた。それはプライドか、配慮か。ここにこれをいつてしまつのは、すがつているのか、最後のチャンスを与えたつもりなのか。俺はそこで綾華さんがさらに畳み掛けてくれたおかげで、呪縛が解けた。

「迷惑なわけないでしょ。間違いでもありませんよ。愚痴つただけでしょ。が。病人の愚痴なんか聞き流してくださいよ」

すかさず病氣のせいにする。

「振り回されたことは怒つてます。でもそんなのは友達付き合いでしょ。れば当たり前のお互い様ですし、気にしてませんよ。ただ、こつちは熱はあるわ頭は痛いわで余裕がないんです。多少口調はきつくなつちやつたかもしねないです。それは悪いと思つてます」

今度はこちらが畳み掛ける番だ。

冷静な俺ならここまでにしておいたはずだけれど、今日の俺は普通じやない。熱に浮かされたまま、歯止めも利かず、いいたいことをいつてしまえ、と半ばやけになつていた。

「でもね、いきなり別れ話を聞かれる身にもなつてくださいよ。しかも俺に思いつきり関係あるきっかけで。そんなん、俺に責任があるみたいに感じたつて無理はないでしょう。どれだけ負担になつたと思つてるんですか」

俺がこんなにむきになつて物をいうのは、少なくとも綾華さんに対する初めなはず。綾華さんから視線を切つていったから表情はわからないけれど、目の端に捉えた綾華さんは、床の上の小さな座布団にぺたんと座つたまま、背をピンと伸ばしてじっと動かさない

る。

「確かに、広瀬さんじゃあ綾華さんの彼氏にはきついなあって思いましたよ。その辺の女子高生つかまえとくには充分でも、綾華さんの相手が務まるほどの男じやない」

俺の声はだんだんトーンが落ちた。でかい声を出さなくとも、綾華さんが聞いてくれていることがわかつたから。声の調子を強くするのは、今日の俺にはやたら負担になる。

「なんであんなのと付き合つてんですか、綾華さんともあらう女が広瀬さんには絶対聞かせられない会話だ。

てか、高校生一年生の分際でどれだけ生意氣なことを。

綾華さんはゆっくりと息をひとつついてから答えた。

「彼だけが大人への扉を開いてくれたからよ」

声が湿り気を帯びているのは、さつき涙をこらえていた残滓だろうか。

「セックスの話じやないわよ？ 抱かれたから大人とか、処女なら子供とか、そういう意味じやなくて」

ドキッとした。そういうことを平氣で口に出していくのは、綾華さんの癖なんだろうか。それとも、女つてのは、相手に男を感じたりしてなければその程度は平氣でいえてしまつ生物なんだろうか。

「あたしの家つて旧家でさ。噂くらいは聞いてるでしょ？」

知つている。それこそ、地元では有名な家だ。広瀬家も有名だが、綾華さんの家、永野家に比べれば、ぱっと出の成り上がり。

「室町時代から続く旧家ですよね」

室町時代の中頃、この辺りを治めていた地頭一族が、幕府への謀反を理由に攻め滅ぼされる事件があつた。後の歴史から見ればごく小さな事件で、教科書にも載つていらないような事件。

実態は、室町幕府に謀反を理由に地方の地頭をいちいち攻め滅ぼすほどの力は無かつたから、有力守護大名同士の勢力争いに巻き込まれただけというのが正解らしい。

その後、しばらく騒乱の元になつていたこの土地に、様々な政争

の結果として、新たに地頭に立つたのが永野家だった。

その来歴はよくわかつていなければ、どうもこの辺りの出ではなく、京都近辺から流れてきた流浪の公家侍だつたらしい。

それから応仁の乱を経て時代は戦国に。有力戦国大名の旗の下に屈しつつ、永野家は巧妙に時代をすごしていった。でしゃばりす、しかし勇気を持つて。

やがて戦国時代が終焉し、安土桃山時代のひと時の平穏が訪れると、永野家は小田原北条氏の一配下としてその名簿に名を連ねるようになつていて。城持ちではないけれど、それに準ずる階級として、お目見えの資格は得ていたようだ。小田原北条氏支配下の領域で、ひとまずは貴族の地位を得ていたといつていい。

その後の豊臣秀吉による小田原攻めでは最後まで小田原城にこもつていたらしい。

本来落魄し歴史から消えそうなものだけれど、そこは地生えの地頭出身ということで、みずから武士たることを辞め、庄屋や名主といわれる階級に身を落とし、家を守り抜くことを決意したようだ。

徳川家康の江戸入府の際には、この辺り一帯の惣庄屋として名が残っているから、室町以来の地頭としてかなり地元に貢献していたんだろう。でなければ、いきなり「地頭は辞めた、庄屋になるから従え」とい出した所で、地元の百姓や地侍たちが従うはずがない。以降、江戸幕府の瓦解まで、永野家はこの辺りで一番大きな庄屋として、家を保ってきた。

維新以降の荒波にもまれ、家はその財産のほとんどを失った。特に第一次世界大戦後の農地解放で、永野家はほぼすべての土地を失つた。

それでも、衆院議員を出したり、県会議員を出し続けたり、土地の名士としての永野家の盛名はまだ衰えたわけじゃない。

土地を失つたとはい、それは農地の話。街場に持つていた多くの土地建物は永野家のものとしてあり続け、今も永野家最大の事業は不動産管理業だつたりする。

「べつに家の伝統に従えとか、躾が厳しくてぐれるとか、そういう
べたな話があるわけじゃないの。実際、父なんか、今は偉そうな顔
して県会議員なんかやってるけど、昔は役者になるとかいつてぶら
ぶらしてるだけのどら息子だったって、祖母が笑っているわ
綾華さんはぺたんと座つたまま、視線を落として喋つている。表
情はわからない。

「でもね、やつぱり人の目が厳しいってのはあるんだよ。どうして
もさ」

まあ、家が家だから注目はされるだろう。

「親戚はやたら多いし、私なんて永野家の本家の長女に生まれちゃ
つてるからさ、色々あるのよ、ややこしい話が。それこそね、ワイ
ドシヨーネタになるくらいの話が」

「……あるでしょうね」

「笑っちゃうような話、いっぱいあるわよ。この子は父の子です、
認知してくださいなんて女が駆け込んできたり」

「それ、笑い事なんですか」

「笑い事よ、結果的にはね。だつてDNA検査で明らかに違つ結果
が出たし」

「はあ」

「つまり、そういうあほな騒ぎが、ドラマの中じゃなく現実に起き
ちゃうような家なわけ」

そういう話とは縁が無い下々に生まれた身としては、ちょっと現
実感がない話ではある。

「男女同権とかいう時代になつたからさ、昔ならあたしなんか政略
結婚の武器になる程度のことで、せいぜい嫁入り修行に身を入れて
れば何したつて許される」身分だったんだろうけど、そもそもいかな
くて」

「跡取り、ですか」

「そう。うち、下に妹はいるけど、男の子がないのよ。父も一人
息子だから、父の跡を誰が継ぐかもめる気配がね、既にあるわけ」

綾華さんは顔を上げた。長く話しているうちに、涙は引っ込んだらしい。ちょっと皮肉っぽい笑顔を見せていた。

「祖父が死んだら、どうせ相続税でごそり持つてかれて、父の次の代なんて財産なんかほとんど残つてないはずなんだけど、それでも気になるのね」

「欲しがる人が多いつてことですか」

「んー、ちょっと違うかな。欲しつてより、誰かが余計に財産を相続するのが許せないというか。自分の権利が少ないので我慢できても、誰かが自分より大きく遺産相続しちゃうのが許せないのね」

「ははあ」

いやな話だ。なんつーみみっちい話だ。自分が努力したわけでもない、人の死によつて与えられる財産の分配で、自分の実入りどころか、他人の懐について嫉妬してくるとは。

「そういう人からしたらね、あたしなんて、どう育つかによつて自分たちの将来が決まる、危険極まりない物体よ」

「物体ですか」

「人間扱いしない節がちょくちょく見えたわね。特に小学生の頃なんかは」

早く婿を取つて男の子をえ産ませれば、あの子の役目は終わる。そういう空氣を感じじるようになつたのが小学校低学年の頃だとうから、酷な話だ。

「生殖器としての役割しか、期待されてないんだなつてのが、初潮前にわかつちゃうつてのもなかなか乙なものよ」

面白そうにいつているけれど、当時の綾華少女にとつては大事件だつたに違いない。性そのものが汚らわしいもの、恐ろしいものとしか思えないような年代に、自分自身がそれしか期待されていない存在だつたとしたら。

「男女平等なんて口ではいつておきながら、女の方がね、婿とつて男産めばお前なんか用無しだ、みたいなこと平氣でいつてたよ」

本當だとしたら、それをいつた女の性根の醜悪さは、聞いているだけで胸が悪くなつてくるレベルだ。

「そういう中で育てられるとね、外に出られなくなるのよ。実際の話じゃなく、精神的にね」

綾華さんの口調は淡々としていて、昔のことはもつ自分で割り切れているらしいことは伝わってくる。

「両親にも祖父母にも、色々なところに連れて行つてもらつたけれどね、家に帰ればわけわからん親戚連中やらなんやらがうようじてるわけよ。そういう連中はあたしに変な虫が付かなくつうにつて、近所中の男の子の家に行つては騒すわけ。お前の家の子が綾華に手なんか出してみると、この土地じや生きられんよつこしてやるやつて」

「小学生相手に?」

「小学生とその親相手に。そりゃあ浮くわよね、学校で」

「浮くでしょうね、盛大に」

なるほど、綾華さんが常に孤高の雰囲気を保つてるのは、本人の努力というより、周囲が孤高に仕立て上げてしまつていたんだ。

今時そんな理屈が世間で通るはずも無いけれど、そんな連中が周りにいる子に、我が子を近付かせる親なんかいるわけがない。

「そこに現れたのが広瀬なわけね」

その単語が出てきて、俺は自分たちが何の話をしていたか思い出した。別に永野家の旧家談を聞いていたわけではなく、綾華さんが広瀬さんと付き合っていた理由について聞いていた。

「10歳違うと、そもそも外の世界との付き合い方が、小学生なんかとは比べ物にならないのね。それがまず新鮮だつた。それから、あれは広瀬の甲板背負つてきていたから、いつてみれば婿候補の人として見られててさ。他の男たちほど牽制されてなかつたの」「自由に会えた?」

「自由ってほどじやないけど、家庭教師役も引き受けていたから、一番接点が多くつたわね」

「それが恋に、というわけですか

「というわけですよ」

綾華さんは苦笑している。

「ありがちでもね、大切だつたのよ。彼の目を通して、あたしは初めて世間を見れた気がしたの。彼にすがつて、初めてあたしは自由に外の空気を吸えた気がしたのね」

それが、綾華さんの「彼だけが大人への扉を開いてくれた」という言葉につながるのだろう。

「それで、外の世界イコール彼になつて。外の世界の魅力は彼の魅力に感じられたのよ

なるほど。そりや、魅力たっぷりに思えただろう。

「でも、あれも結局坊ちゃん育ちなのよ。苦労知らずで、世間の常識つて物を知らない。中学生になつたばかりの女の子をよ、普通日付が変わるまで連れまわして遊ぶ? しかも行き先が都内のクラブだつたりするのよ?」

「それは……まあ、しないでしょうね」

「それを悪気なくしちゃうのよ、あの坊ちゃんは。うちの家族も怒

ればいいのに、現代的な家族像とやらに逆らいたくないとかわけわからぬ理由で放置よ」

「なんですか、それ」

「うちの馬鹿親父が、友達みたいな関係が理想だとか馬鹿なこといつて放任したの。育児放棄だろつての」

綾華さんの話は完全に家族を突き放していく、言葉も平気で難しい言葉が出てくる。綾華さんなりに、自分というものを作り上げるために、読書したり考えたり、いろいろ努力してきたのかもしけない。

「母親は一族の嫁へのプレッシャーに負けて精神病一歩手前の有様だし、自分のせいでそうなるつてことに気付かない馬鹿な親父には、それを忠告してやれる人間もいないと来てるし」

綾華さんがぎゅっと手を握っている。口元の表情も恐ろしく固い。しばらく、そこで言葉が途切れた。

ふ、と綾華さんは息を吐いた。

「高校に入つてしまはうしたら、なんかもう、馬鹿馬鹿しくなっちゃつて。あんな男がファインセミみたいな顔であたしのこと抱いたり、あたしがどんなに叫んでも気付こうともしない親がいたり、いい加減馬鹿馬鹿しくてさ」

「ぐれましたか」

「ぐれましたよ。盛大にね」

どれだけ盛大にぐれたかは、去年のこの学校のことを知らないはずの俺たちでも、噂で聞いている。成績はいいのに、そして今では遅刻はしないわ生徒会活動に真面目に取り組むわで、文句の付け所がない優等生の癖に、綾華さんは今でも素行不良の生徒の代表格のように扱われている。

「ぐれても誰も助けてくれないことなんかわかつてたし、それまでの自分が馬鹿にしてた底辺の不良たちと同レベルになるなんて、あたし自身が耐えられなかつたから、ほどほどにしたけど」

「ほどほどにしてあのレベルですか」

「ほどほどにしてなければ、今頃は高校生じゃなくなつて、子供のひとりも生んでるんじゃない？」

大したことじやないよに、そりつと綾華さんは答えた。風邪で伏せつている身……伏せつているはずの身としては刺激が強い。

「友達にも恵まれたしね。あきちゃんも知つてゐあの子達、面白いでしょ」

「ああ、ええ、まあ」

言葉は濁したけれど、まあ、下級生をからかつていただけで、特に悪気は感じなかつたし、引き際も良かつた。

「あたしのうちのアホさとかわかつてくれた上で、あたしの捻じ曲がつた性格も受け入れてくれたし」

綾華さんの目が少し柔らかくなつた。この人が、の人たちにどれだけ心を許していいるか、多少わかる気がした。

「そこに現れたのが」

と、綾華さんは両肘を上げ、俺のベッドの上に乗せてきた。枕に背を預けて聞いていた俺のひざの辺りに、綾華さんの顔が来る。俺が不意の動きに緊張していると、綾華さんは両手で頬杖をついて、横目でちらりと俺を見た。

「あきちゃんだったのよ」

「は、はあ」

「最近の話だけね、結構あたしには大きな事件だったのよ

「えー、何かしでかしましたでしょうか」

「しでかしてないよ、そういうんじゃないくて」

綾華さんは笑つて、頬杖を一度外し、右手だけの頬杖になつて前を見た。俺から見ると、ひざの右辺りで頬杖を突いている綾華さんが、俺の左側の壁をじつと見つめている。

「あたしに色恋抜きで接してくる男がいるつてことが新鮮だつたのがひとつ。そりやそうよね、仕事でいきなり割り振られただけなんだし。でもね、偶然会つただけであたしに色目向けてきたり、いきなりキスしようとしたりする奴ばっかだつたから、そつじやないあ

あきちゃんが新鮮だったのね

「は、はあ」

話の次元が違すぎる気がした。いきなりキスとかありえないでしょ。てか、この人相手に恋愛しようとか、無理でしょ、普通。

「それとね、本当に育ちがいについていつのま、いつこうことをこうのかなつて思つたんだ」

「育ちはさほど良くは無いんじや……」

「経済力とかじやないよ、ちゃんと教育を受けて、いこことはいい、悪いことは悪いってちゃんと教わつてきてるんだろうなつて」

「はあ……」

その辺りはどうなんだろうか。まあ、人様に迷惑はかけない程度の躊躇は受けたんだろうけれど。

「この前のデートだつてそうだよ」

「はあ」

もう、気の抜けた返事しかできない。自分のことが話題になると、俺はどうも弱い。

「あれだけ一緒にいて、あたしがあれだけ油断してたら、今までの男ならホテル誘われてるね。てか、連れ込まれるわ」

「そんな大それたこと、できるわけないでしょ」

「それを大それたことと考えない馬鹿ばつかだつたのよ、あたしのまわりつて。しかも」

綾華さんはぺたんと腕を倒し、俺のひざに、布団越しに頭を乗せた。急に綾華さんの体温が伝わってきた気がして、俺は緊張する。

「あきちゃん、自分の家の門限の話したじやない」

「しましたっけ」

「したの。それがすごい新鮮で」

「いわれてみればしたような。確か、午前様じやなければ大丈夫でしそうというようなことをいられて、その考え方おかしいから、とかなんとかいったような記憶がある。

「ああ、世間の家庭つてのはこつなんだ、親にちゃんと愛されてる

子つてこうこう反応なんだつて思つたら、うれしくなつちやつてさ

「うれしいつて、なんでまた」

「そういうの、初めてだつたから。どいつもこいつも、親に反抗してりや一人前みたいなことしかいわなかつたのに」「偏つてますね、それも……」

「このいつ子と一緒にいたら、きっと幸せなんだろうな、とか思つちやつたのね」

綾華さんが、俺のひざの上でわずかに笑つた。

いきなり、話題が核心に触れた気がした。

「それまではわ、そういう真面目な子とか普通の子とか、全然興味なかつたし、親に愛されてきたような奴とは一緒にいられないと思つてたのにね」

熱を出して寝ていたはずの俺だけれど、それどころじゃなくなつてきた。全身が熱いのは、風邪のせいだけじゃない。

「それがあの時、すごいショック受けたの。あれ、あきちゃんつてあたしが今まで勝手に毛嫌いしてきた人種なのに、めちゃくちゃ居心地良くない？ つてさ」

何もいえずに身を固くして聞いていると、綾華さんが「リラックスして聞きなさいよ」とでもいうかのように、俺の脚を布団の上から軽く叩いた。ひざ上20センチの部位は、叩かれるとなかなかきわどい。

「それに気付いちやつたから大変よ。だつて、由紀があきちゃん狙いなのは見ててすぐわかつたし、ああいう打算なしで突つ走つちゃうタイプ、あたしも嫌いじゃないから、応援したくなつちやつたし」叩いた手をそのまま滑らせ、綾華さんは布団の上に置いていた俺の手をとつた。汗ばんでいる手を取られるのにはかなり抵抗があつたけれど、逆らえない。

「でもこんなにそばにいて居心地がいい男なんか初めてだつたから

……」

指を絡ませ、手を起こし、俺の右手と綾華さんの左手が、手のひ

らを合わせて指を絡ませる「恋人つなぎ」になつていた。熱っぽい俺の手には、綾華さんの手の冷たさが気持いい。

「由紀のものになつちやつたのは仕方ないから諦める。それは安心していいよ」

このセリフのときだけ、綾華さんは俺の目を見た。そしてすぐに視線はつないだ手に向かう。

「でも、こんなに一緒にいて気分がいい男がいるって知つちやつたら、そういうじゃない男となんか、もう付き合えないの」

綾華さんの指に力が入る。ぎゅっと握った手から伝わる体温は、俺にも握り返せといつていいようだった。

「だから広瀬と別れる気になつたの。本当は好きになつたことなんかなかつた人だけど、今まで離れる決心がつかなかつた」

俺が握り返すと、綾華さんは一瞬目を閉じた。ほのかに、綾華さんの頬に朱がさしたように見えたのは、たぶん熱に浮かされた俺の幻覚だつたに違いない。そういうことにしておく。

「……それももう終わり。今さらあの人とは一緒に歩けない。昨日、その話はしてきた」

ふつと笑う。

「別れるつてこと。今までありがとうつてこと。その話をするときはなんとか納得したようなことはいつてたけど、今日になつたらメールは来るわ電話はかけてくるわで、あんまりにもうさかつたから携帯の電源切つてやつたの」

握つた手をかすかに振るよつとして、その感触を確かめてくるようだつた。

「だからあきちゃんのお休みメールにも気付かなかつた。返すの遅くなつちやつたからすれ違つちやつたね。ごめん」

「それは別に……気にしてませんし」

「まだしばらくごたごたするんだるうつなつて思うけど。でも、もう馬鹿なことはできないかな。『普通』でいることの心地よさを知つちゃつたし、あきちゃんや由紀ともつと一緒にいたいし」

そこまでいつと、綾華さんは頭を起こした。手は握つたまま。

「ずいぶん長く喋つちゃつたね」

といわれ、時計を見ると、もう10時半になつていて。

「あきちゃんち的にこの時間帯は大丈夫な時間帯？」

「どちらかといえば、まあ、完全アウトの時間帯ですね」

「あら、失礼。それは一大事だわ」

といいつつ、手は離さない人。

「でも、別に誰も来なかつたわね」

「初めての事態に戸惑つてるんでしよう。俺のところに女が尋ねてくることも初めてなら、その相手がこんな超絶美人なんだから、そ

りや戸惑うでしょ？」「でも、何か間違いが起きてないかとか、気になるものじゃないの」「これだけ話し込んでたら、逆に気を使って割り込んでできませんよ、うちの家族は。壁薄いから、何かひたすら話してゐなつてことくら

いは伝わりますし」

といつてゐる間に、綾華さんは身を乗り出してきた。つないでいた手ほどき、その手を両手で包み込んで、自分の頬に当てた。「いいご家族ね。ほんとうに、君に会えてよかつた。こんな家族もいるんだってこと、見せてもらえただけでも幸せ」

綾華さんは俺の手を頬に当てたまま、じばらく目を閉じていた。そのうち、すっと手が離れた。
「病人にとんでもない長話をさせちゃつたね。『ごめん』

そういつて、座り直した。
「今日は帰る。来週からまたよろしくね」
恐ろしく整つた顔に浮かべた笑顔は非の打ち所がなかつた。
かえつて痛々しい気がしたけれど、それは俺が絶対にいつちやいけないセリフのような気がした。

見事に熱は上がった。そりやそうだ、病中の人間があんなに長話をして、しかもその内容が今まで経験したことがないほど緊張を強いるものだったんだから。

土曜日はほとんど寝て過ごした。熱は最高で39度を超えて、さすがに座薬で熱を抑えることになった。

「ばーか」

と妹は同情のかけらもなく、両親も微妙な表情を崩さない。たぶん、かなりの勢いで聞きたかったに違いない。「昨日の美人はなんだつたのか」、と。

教えてやらないことは全然なかつたんだけど、熱を出して寝込んでいる最中に、自分からその話を触れる気にはならない。そして両親も寝込んでいる息子に聞く気にはなれなかつたようで、汗だくになつてふうふういつている長男に、触らぬ神にたたりなしの方針で接しているらしかつた。

だから、日曜日になつて、熱はピークを超えたものの体調は全然戻つていらない息子のもとを、別の女が尋ねてきたことで、両親の困惑はさらに大きくなつたのだった。

「ごめんなさい、迷惑だとは思つたんですけど、来ちゃいました」

由紀だ。

あらかじめ俺には連絡があつたけれど、親にまで詳しく伝える元気がなかつたから、家族にとつては由紀の来訪は寝耳に水もいいところだつた。友達が見舞いに来る、としか知らない。

「ちょっとおにい、どうなつてんの？ 地球の未来は大丈夫なの？」天変地異でも起きないか、と心配しているらしい。余計なお世話だ。

何が家族を驚かせたかといって、綾華さんという超絶美形の次に、タイプはまるで違うにしても、明らかに俺の知り合いには不相応な

美人が来てしまったことだらう。

失礼な話だけれど、俺の家族は、そういう面での俺の力量をまったく評価していない。いや、自分でも評価したことがないんだから仕方ない話ではあるんだけれども。

妹の案内で部屋に上がった由紀は、のつけから「どうなつてんの？」だつたから、かなりびびつている。

「私、来ても良かつたんでしょつか」

「ほつとけ。由曜だからな、まだ寝てんだろ」

寝言だから気にするな、という意味でいつたんだけれど、通じたかどうか。

「たいそうなものを頂戴しまして」

とおかんが部屋に上がつてきたのはその直後で、由紀のために紅茶とケーキが出されている。ケーキなんてものを常備している家庭なはずがないから、これは今日の夫婦のおやつにと買つておいたものだらう。うちは両親とも甘い物好きだ。

「お気遣いなく」

としきりに恐縮している由紀は、手土産に結構値が張るお菓子と果物を持ってきらしい。

「病気の友達を見舞いに行くといつたらいっぱい持たされて

おかんが下がつてから、言い訳のように由紀がいう。

「病気の友達つて女友達のつもりで聞いてるんだよね？」

俺が聞くと、申し訳なさそうに由紀がうなずいた。

「彼がいますなんてなかなかいい出せなくて……」

そりやそうだらう。由紀と付き合つ覚悟は決めたけれど、あの過保護見え見えの親御さんにびづき合つか、風邪じゃなくても頭が痛い。

「体のほうはどうですか？」

「メールの通りだよ。熱は微熱まで下がつてるけれど、かなりだるい。関節痛もまだ残つてゐるな。でも病院からウイルス感染は陰性だつて連絡が来たから、まあ、明日は学校に出れるんじゃないかな」

「どうもやつは見えません……」

由紀が伏田がちにこいつ。よほど憔悴して見えたらしい。

「無理はしちゃダメです」

「無理はしないよ。無理してまで学校行きたいこいつてほんと学校大好きつ子じゃないし」

俺が答えると、由紀は何かいいたげにもぞもぞと組んだ手をひざの上で動かしてこる。

「なに?」

水を向けてみると、由紀は耳まで赤くなりながらこいつた。

「私は晃彦くんに会えないのは淋しいです」

何をこいつてやがる。俺はせっかく下がった熱がまた上がりそうになつた。いや、絶対上がつたね。

俺ががつくりしたように見えたのか、由紀はあわてた。

「ウソです、晃彦くんが無理する方がずっとつらいです」

「いやいやいやいや」

俺は首を振る。

「びりしてここのタイミングでやつも可愛こじとこえてしまつのかと……」

その言葉で由紀がやたら赤くなる。

「なんかもう、由紀は殺し文句の宝庫だね。びりべりするよ」

「そ、そんなことないです……」

「今会つてるんだから淋しくないだろ、とかとつれてこいえない俺もどうかと思つけど」

「こいつてくれてます、それ……」

「さりにこいつと、今の発言で熱上がつたから。びりしてくれるの」

「いめんなさい、いめんなさい」

「うつそー」

「やばい。めちゃくちや樂しい。」

「でも、うれしいよ。由紀がお見舞いに来てくれるのは予想外だから」

「やつぱり来ちゃ いけせんでしたよね」

「マイナス思考禁止」

「う……はー」

「勝手な思い込みだけれどね、なんか休日は家族一緒にじゃないとけない家族ルールがあつたり、ご両親が知つてゐる子じゃないと遊びになんか出られない空氣があつたりとか」

「何で知つてるんですか？　お話しましたっけ？」

由紀が本気で驚いている。

俺も驚いた。冗談で大げさにこいつたつもりだつたんだけれど。

「晃彦くんつて本当にエスパーみたいになんでもわかつちやうんですね」

由紀が田をあきらめさせて俺を見ている。

「いやあ、まあ、ねえ」

褒められていい場面なのかどうか。お付き合ひの先が思いやられる話ではある。

その後少しの間話していたけれど、そのまま、由紀が決然と背を伸ばして宣告した。

「さあ、寝てくださいね」

「へ？」

「へ、じゃないです。寝るんです」

勢いよく、俺の枕元に座り直した由紀は、枕をぽんぽんと叩いた。

「風邪は寝て治すものです。私と話し込んでじゃダメです」

珍しくきりつとした顔をしていて。どうやら、これがやりたくてわざわざ俺の家まで来たらしい。

病気の彼を寝かしつける彼女役。

横でそんなに張り切られたら寝付けないと思つんだが、と思いつ

つ、まあ、そんな仕草も可愛いと思つてしまつた俺はただの馬鹿だ。馬鹿はされるがままになつてしまえ。

「はい、かしこまりました」

ショボンとした振りをして、俺はもぞもぞと布団に入り直した。

由紀はその「ショボン」が非常に気になつたらしいけれど、それが俺のネタ振りなのがどうか判断に迷つた挙句、当初の見込み通り進めていくことにしたらしく。

「苦しくなつたらいつて下さいね。まだしばらぐ、そばにいますから」

といいながら、昨日の夜、あまりの気持ち悪さに無理を押して洗い、一応乾かしたけれど大爆発している俺の髪を優しくなでた。

そうか、こいつ、これがしたかつたんだな。薄目を開けて様子を見ると、由紀はこつちまで嬉しくなるくらい、油断しまくった顔で喜んでいた。

それだけ調子が良くないということなのか、そのまますぐ寝入つてしまつたらしい。

綾華さんのあの長話の記憶が生々しいのに由紀が来てくれて、いい気分転換になつていたのかもしれない。リラックスタイプして眠れた気がした。

目覚めも悪くなかった。熱が出て以来、ろくな寝起きじやなかつたのに、2時間ほどして起きたとき、ずいぶん気分が良かつた。すぐに意識がはつきりして、体を起こすと、由紀が俺の机に向かつていた。

俺が体を起こす気配に、由紀が振り返つた。

「起きました？」

窓からの日差しで一瞬メガネが光り、その奥の目が俺をまつすぐ見た。俺がいうとおりにしてすぐ眠つたからか、ずいぶんご機嫌らしい。

「うん、起きた」

「飲み物注ぎましょうね」

すぐにいすから立ち上がり、スポーツドリンクをコップに注ぐ。

「汗拭きましょうか？顔だけでも拭いておくと気分が晴れますよ」

「うん、拭く」

いつの間にか洗面器に水を張って、新聞紙を敷いた床の上に置いていた。準備良くその横にはポットがあつて、由紀はそこからお湯を注いでタオルを浸した。

ゆるいお湯で絞ったタオルは気持ち良かつた。由紀は自分が拭いてあげようと口論んでいたらしいけれど、そこまでしていいものかどうか一瞬悩んでいる隙にタオルを取り上げて、自分で拭いてしまつた。

恨めしそうな目で由紀が見ていたけれど、無視。そのままされたら、さすがにきつい。

「なにしてたの？」

拭き終わったタオルを渡しながら訊くと、由紀は少しジリ立腹のようで、微妙に冷たい声で答えた。

「ノートをまとめていました。晃彦くんのクラスのノートを借りてきてるんです」

「そんなの自分でやるよ」

「文化祭の仕事もあるし、来週はやること多いですから。私でできることは肩代わりします。体調が戻るまで」

「いいよ、そこまでやつてもらわなくても」

といつてから、俺は「やばいかな」と思つた。「余計なことをしちゃいました、ごめんなさい」と来るか、と警戒してしまつた。

由紀の反応は違つた。

「晃彦くんのまねをしてみたんです。先を読んで、勉強や仕事の段取りを付けたら、きっと少しでも楽になるんじゃないかなって」

それで卑屈な感じで俺の様子を伺つていたら、俺も「余計なことを」という気になつたかもしれない。でも、由紀の表情は穏やかだつた。自信にあふれている、とはいわないけれど、静かだった。卑屈さはなかつた。

「緊急避難です。普段ならしません。ノートは自分でまとめないと

頭に入りませんから。でも、こんな時くらいは、少し手抜きをして
もばちは当たらないと思います」

意外だった。

それが顔に出たのかどうか、由紀ははつまつてはにかんだ。

「晃彦くんは文化祭を背負つてますから、私で協力できることがあ
れば、晃彦くんに関わってる人たちみんなの力にもなれそうです。
それ、すごくうれしいんです」

「背負つてはいけれど。でも、その考え方はずごいな」
素直に感心した。

「それがうれしいって考えてくれるのが嬉しいよ」

由紀はますますつむいでいる。褒められ慣れていないからか、
耳まで赤くしているのがかわいい。

「私って目立たないですし、真面目くらいしか取り柄がないって思
われてるから、仕事を押し付けられることはあっても、自分から仕
事をして行くって、したことなかつたんです。だから、晃彦くんと
仕事できるのって、すごくうれしくて」

居場所を見つけたんだな。

不意に、そう思った。

期間限定だけれど、由紀は俺と一緒に仕事をする立場になつて、
そこに居場所を見つけたんだ。

俺の彼女つてのは描いておいても、自分の努力が誰かの支えにな
る、それは病中の俺であつてもいい、資材関係の手配を待つて
る各クラスでもいい、とにかく誰かの支えになつていて幸せを
感じているんだろう。

地味で目立たない立場にいるしかない小市民的學生にしか理解さ
れないだろうけれど、誰からも何も期待されてこなかつた人間つて、
そんなことで幸せになれる。自分もそつだつた（はずだ）からわか
る。

「……由紀」

俺はちょいちょいと由紀を手招きした。由紀はちよつと反応は遅

れたものの、いすから離れて俺の枕元に来た。そこにぺたんと座り、ベッド上の俺を見上げた。

「ありがとう。こんななんじや『ご褒美』にならないけれど」

といつて、俺は由紀の頭をなで始めた。

今日はなでられている由紀の顔がじっくり見える角度だった。由紀は、くすぐったそうな顔をした後、かすかに唇を開けて目を閉じた。なでられている頭に意識を集中しているらしいその顔が、凶暴に可愛らしい。こんなで喜んでくれるんだから、なんていい彼女だろうか。

やばい、俺、すげー幸せかもしない。

「お前、案外かわいそうな奴だよな」

俺は開口一番そういった。完全に上から目線で。

月曜日、朝、学校の昇降口で。

偶然会つたのは、綾華さんのことで俺を脅し、広瀬さんの車の助手席から俺を完全に馬鹿にした視線で見て、その後カケスさんに脅されていた女。名前を覚える気にもならない、その下卑た顔を見た瞬間、俺の理性はあっさりと消滅していた。

いわれた方は俺の顔を見て絶句している。

「憧れの綾華さんの彼氏に取り入つたまでは良かつたけれど、そこから先は崖っぷちもいい所じやないか」

「なんなんだよてめーは」

「口の利き方に気をつける。俺はお前がやつたことを許す気は無いんだからな」

身長は俺の方が30センチ高い。その俺がわざと見下ろすようになつたら、相手にとつてはかなりの威圧感だらう。

周囲が好奇の目で見始めたけれど、知つたことじやない。

「綾華さんはお前を潰す氣でいる。綾華さんにそんなことさせても仕方ないから、先に警告しといてやる。潰される前に逃げておけ」

女はまた絶句している。

「いいか。俺は警告してやつたぞ。疑つて破滅しようが、殺されようが、俺はもう知らん。好きにしろ」

「うだりいつて、俺は背中を向けた。
大した底意は無い。」

確かに腹の立つ顔だし、見なくて済むなら一生見なくていい顔だつたけれど、同じ学校にて、しかも同じ学年にあるということは、今後2年半近くは顔を見る機会が残されているということだ。
中途半端に区切つておくと後に引きずりそうで嫌だった。

だから、いつそ修復のしようがないくらい断絶しておきたかった。これでまだ何かいつてくるようなら大した根性だし、その時は俺の全身全靈をかけて潰すまで。これで何もいつてこなくなれば万歳三唱。

俺はお前を虫けら程度にしか思っていない。そう曰で伝えたつもりだ。

朝の光景はギャラリーが多かつたから、すぐにぱっと噂が広まつた。

何しろ噂の本人だから、どんな噂が流れているかはむしろわかりにくかつたけれど、気にはならなかつた。体調がまだ戻っていないから精神力なんて無いに等しかつたけれど、それを凌駕するくらい、腹が立つていた。

「お前、やっぱ怒らすと怖いな」

と、小学生時代からの友人がいう。

「顔色悪いからなおさらだる」

俺が笑つてみせると、どこまで本氣でいつてるのかわかんねえよ、といつて友人は苦笑した。

この話は上級生の素行の悪いお兄様方の耳にも入つたらしく、もともとあの女とそのグループは、綾華さんの威を借る狐のように思われて嫌う人間が多かつたこともあって、なぜかおおむね好評だった。

「ああいう女どもを脅すとか、結構できないもんだぞ」

「意外にいい度胸してるよな」

褒めてるのかけなしてるとかよくわからない言葉が、昼休みなどに怖いお兄様方からかけられた。

「女を脅した時点で最低人間だつていわれるかと思つてましたけれどね」

「相手によるだろ。あの馬鹿どもには誰かがいってやうなきゃいけなかつたしな」

「先輩方は?」

「やめろよ、女齧すと後が面倒だ」

「俺が面倒抱え込んだと」

「当事者だろ? 永野の絡みで色々あつたらしきじゃないか」

「ええ、まあ」

「なら、適役だろ。せいぜい怖がいつておけ。将来役に立つ

「何の将来に役立つんでしょうか」

「お前がこの学校シメるときにだよ」

「シメるとかありえないですから。つーかシメるとかありませんから」

「うぜえ、2回いうな」

男子どじんか、女子にも好評だつた。

「あきちゃーん、大活躍だつたんだつて?」

綾華さんのお友達の皆様まで」登場。

昼休み、由紀と一緒に弁当後の時間を中庭で廻りしていたのだけれど、次から次へ校内の実力者とされる方々の」来訪を受け、由紀なんか明らかに硬直している。

「なんでしょう」

「しつとしちゃつてー。あの小娘にがつんとかましたつて、すこい噂になつてたよー」

「なんか絡まれっぱなしじゃ面倒かなつて思つて、いいたい事いつただけですけれどね」

「それができんからみんな困つてたわけよ。いやあ、よくやつてくれた。さすが私たちのあきちゃん」

「どさくさに紛れてなにいつてんすか」

「君ならやつてくれると思つてたよ。」褒美にお姉さまたちの熱い抱擁とキスなんてどう?..」

「正氣ですか? まだ寝言には早いんじゃないですかね」

「いうねえ、さすが未来の番長」

「な、なんですか、そのあだ名は」

「だつてー、綾華の『もと』彼氏を脅して帰しちゃつたんでしょー

? あの人結構力ある人じやんかー」

「相手が大人だらうがびびらず返り討ちにするとか、意外にやるこ
と大胆だなつて評判ですぜ、だんな」

「ちょっと、やめてくれませんか、本気で頭痛くなつてきた」

「大丈夫? お姉さまが優しーく介抱してあげるわよ」

「ほんと勘弁してください、せつかく彼女できたばつかなのに、い
きなり失恋さす氣ですか」

由紀は硬直を通り越し、顔色は漂白されている。

「大丈夫よう、振られたらあたしたちが喜んで拾つてあげるつてば

「……だ……」

由紀が凍つた声を出した。

つられて、思わず場が凍りつく。

由紀はがんばった。もつ、由紀にしちゃありえないほどがんばっ
た。

「……ダメです……晃彦くんを奪わないで下さい……」

ぎゅっと両手を握り締め、メガネの奥の目をぎゅっと瞑つて、細
い肩にこれ以上力が入らないくらい力を込めて、ひとつこと。
その途端、周囲は大活況。

「いやあああああつ、可愛いつ」

「なにこの子、やばい」

「ねえねえ、抱きしめていい? 持ち帰つていい?」

「由紀ちゃんだつけ? あなた、お姉さん欲しくない? 欲しいよ
ね? 欲しいのね!」

おもちゃが俺から由紀に代わつたらしい。

「ちょっと、マジでおびえてますぜお姉さま方」

「それがいいつ」

「やばいやばい、これめっちゃ貴重品じゃね?」

「やばいやばい、これめっちゃ貴重品じゃね?」

「す」「このもの発見しちゃつたよ、これはもつ、可愛がつてあげるの
がお姉さんとしての義務だよね」

「てかもう持ち帰る。誰がなんとこおつが持ち帰る」

「誰が止められるんだ、こんなもん。

あまりの馬鹿騒ぎに周囲の田^たが注^のがれるけれど、もうひと、誰一人目を合わせようとしてない。

由紀は凍り付いて動けない。その由紀を囮^{いと}み、お姉さまのボルテージは上がりっぱなしだった。

「いや実力で引っこ抜いて逃げるしかないかな、と病み上がりには無謀な体力勝負を覚悟しかけた時、救世主が現れた。

こんな事態を認められる人間なんて、一人しかいるわけない。

「ほら、あんたたち、いい加減にしな。その子の心臓止める気か？」

苦笑しながら、綾華さん登場。

相変わらずの美形ぶりはもう描写する必要もないくらいで、「へ
然に俺の反対側の由紀の隣に割り込んで座った。

「ほんね由紀、じいつら加減つてものを知らないから」といながら、由紀の頭を抱くようにしてなで始めた。

「なによー、由紀ちゃん独占する気かー？」

「あたしが最初に見つけた子だよ。この子もあたしが好きなんだから、余計な手出しあしないで。ね、由紀」

最後に由紀に問いかけると、由紀はさすがに綾華さんの大ファンを宣言しただけあって、からうじてうなずけた。

「ずるーい、綾華が相手でもそれは許せない」

「世界の宝だよ、この子は。独占とかありえないし」

「お前らどんだけ由紀にべた惚れなんだよ」

綾華さんが噴き出した。

「あきちゃんには悪いけど、由紀ちゃんの方が大事」

「モーモー、あきちゃんとかも一^いビーでもいいしー」

「ひでーなおー」

思わず俺も噴き出す。

「なんなんすかそれ。ついにやつを褒めたくせに」

「それはそれー。これはこれー」

「あきちゃん、覚えとくといいわ、女心つてのは移ろいややすいんだなあ」

「あなたの心が移ろいやすいんでしょう、一緒にすな」

すかさず綾華さんが突っ込む。そして、

「とりあえず、由紀は本当にこの辺の苦手なんだから、ほじほじにしてあげな」

と由紀の頭を丁寧になでながらこいつと、お姉さま方は渋々あきらめた。

「ちえー、こんな素材、今世紀最高の発見だったのになー」

「すっげーつらい、すっげーつらい」

「かわいいっていつてただけじゃん」

「綾華するいよな、おいしいところ全部一人で持つてく氣だよ」
あきらめた、といつても、文句ぶーぶー。これもこの人たちなりの物の楽しみ方らしい、ということは、前回の来襲で学習しているから、いちいち気にしないことにする。

「体は大丈夫？ 結構げつそりした顔してるけど」

「熱は引きました。食欲がまだ戻りませんけれど」

「あんま無理しないでよ。今週は後半の方がきついんだから」

由紀の頭をなでながらいは綾華さんに、金曜の夜、痛々しいほど
の笑顔を見せて帰ったあの面影は無い。

流れから考えて、土日に広瀬さんやその周囲と何も無かつたとは
考えにくいんだけど、それも感じさせない。

「今週倒れたらさすがに恨むぞ」

「いやあ、有能な先輩がいるから安心して休んでいたれそうで……」

「ふざけんな、まじでいつてんの」

すかさず由紀をなでていた手が伸び、俺の頭を軽く小突いた。小
突く、というより、関西風の突っ込み。

「おお、未来の番長様になんてことを

お姉さま方が無責任に喜んでいる。

「なんだそれ」

初めてその表現を聞いたらしい綾華さんが笑つた。綾華さんのイ

メージどおりの、あでやかで曇りのない笑顔だった。

熱で奪われた体力つてのは、短期間でも相当なものだつたらしい。放課後まで体力が保たなかつた。

お昼休み、由紀と一人で弁当は食べたけれど、それが即回復にはつながらず、あの大騒ぎの中で結構疲れていたらしく、午後の授業が始まるとだるくて眠くて仕方がなかつた。

最後の授業はほとんどつづふしていた。保健室に行つて寝ていればよかつたのだけれど、風邪は校内でも流行つてゐらしく、午後になつた段階で一杯になつていた。

かといって、帰ろうにも足が無い。共働きの両親を、この程度のことでは呼び出すのも気が引けるし、タクシーを使って帰るという頭は最初から無い。だいたい、帰つても一人で寝てゐるだけでは気が滅入る。

「ちょっと、大丈夫？」

隣の席の女子が心配してくれたけれど、大丈夫と聞かれて「無理」とも答えられないだらう、この場合。

「死にはしないと思う、今日のうちは」

「明日死ぬのかよ」

「短い付き合いだつたな、今までありがとう」

「気分出しすぎだろ、早く帰つて寝なよ」

「そーするわ」

減らず口は風邪でも減らないもんだね、とその子は笑つていた。まったくだ。

すぐ立ち上がる氣にもならずにうだうだしてゐると、由紀が教室に入ってきた。

入つて来た時の顔は見ていないけれど、声をかけて来た様子を見ると、俺が机に伏しているのを見て驚いたらしい。

「晃彦くん、大丈夫ですか！？」

「すいぶん慌てた声を出していた。

「大丈夫だよー」

あからさまに力が入っていない声を出す。伏したままだから、何をいつてこるか由紀には聞き取れなかつたらし。

「どう見ても大丈夫じゃありません、早く帰りましょー」

「帰りたいのはやまやまなんだけどね」

俺は体を無理やり起こしながらこう。

「足が無い」

「迎えに来られる人はいませんか?」

「いないな、今の時間帯じゃ。無理すれば呼べるけれど、無理した

くないし」

そういうと、由紀は少し考えたようだつた。

そのうち、携帯を出した。

「……あ、綾華さん、由紀です」

俺を帰らせる件を話し出す。

綾華さんはまだ教室にいたらしく、休みについては了解といつて
いるらしい。

「私もわかる範囲で進められますし、仕事が完全に止まることはないと思います」

俺が采配しなくて済む仕事はこぐらでもある。今日はそれを終わらせていくことにしたようだ。

「すまないねえ、俺がこんな体なばかりに苦労かけちまつて」

俺はボケてみたが、タイミングがあまりにも悪かった。由紀は電話中だし、相手は綾華さんだ。話を中断してまで突っ込んでくれるはずがない。

「うーん、この間の読めなさも体調のせいだと思いたい。

「生徒会に集まっている書類はどうしたらいいですか?」

由紀は俺がいつたことはとりあえず無視することにしたようで、尋ねてきた。

「今日できるものだけもらってきて。それ以外は明日俺が処理する

よ

俺も無かつたことにして答える。

「で、もし何かわからないことがあつたら、今日は棚上げにじつて。今日中にどうしても必要つてことはないはずだから」「わかりました」

「つくりうなずいて、電話の話に戻る。

しばらく話していたけれど、その話はよく聞こえなかつた。耳には入つていたれど、言葉の意味が頭に入つてこない。我ながら重症だ。もしかしたらまた熱が上がつているのかも知れない。

綾華さんとの電話を終えた由紀は、俺に背を向け、小声で次の電話をかけ始める。

ただでさえ頭がぼーっとしているのに、由紀の小声なんか耳に捉えられるはずがない。何の電話か、誰が相手か、まるでわからない。そのうち、電話は終わつたようで、あまり焦点も合わない俺の目の前で、由紀がくるつと振り返つた。

「さあ、帰り支度しましそうね」

優しい声。もともと由紀は優しい声だけれど、わざとらしさが微塵もない、聞いていて思わず涙ぐみたくなるような声だった。

「荷物はまとまつてますか?」

「そもそも出してないから大丈夫」

「お弁当は入つてます?」

「なんかしまつたような気がする」

「立てますか? 無理しなくていいですよ

「無理はしないけど」

俺はゆっくり立ち上がりつた。勢いよく立とつとしてできなくはないけれど、立ちくらみを起こしてもみつともない。

「歩けますか?」

由紀が俺の腕をとつて支えよつとしたから、俺は笑つた。

「そんなんしなくても歩けるよ。歩けないくらじひどかったら、さすがに俺もとつぐに帰つてる」「

後で考えてみれば、由紀は付き添いを言い訳にして俺と腕を組んで歩いてみたかったのかもしれない。俺はそこまで考え付く余裕がなかったから、振りほどきはしなかったものの、仕方なく離れようとした由紀の手を止める」とまではしなかった。

「じゃあ、行きましょう」

由紀はそれでも気丈に背を伸ばし、俺の背にそっと手を当てた。
行くといつてもどこへ行くのか。足も無いのに。保健室か？ それともタクシー呼んじやった？

考えがまとまらないまま、由紀と一緒に校内を歩いていく。
体調が悪いとはいえ、そんなにひどくふらふらしているわけじゃないから、廊下を歩くのに不都合はない。足元が確かじやないほどひどければ、そもそも学校に来ていなかつただろう。

昇降口で靴を履き替え、外に出ると、由紀は俺を校門そばのバス停のベンチまで連れて行つた。

このバスに乗ると明後日の方向に行つてしまつから、今まで一切無縁の乗り物だった。

「ちょっとここで待ちましょ」

座りながら由紀がいう。何を待つんだろ。

由紀も自分からはあまり物をいわないし、俺も口を開くのが億劫だつたから、通り過ぎていく人の波を見つめているだけの、ひどく静かな感じがする時間が流れた。

といつても、そんなに長い時間が経つたわけじゃない。

しばらく待つていると、そのうち由紀がすっと立ち上がつた。

「お待たせしました」

由紀と腕を密着させながら座つているのが心地よくて、半分意識が飛びかけていた俺は、ほんやりと何を待つていたんだっけ、と思つた。

田の前に車が止まっていた。

見覚えがある。どこで、という思考より先に、映像が浮かんできた。由紀や綾華さんとの日々が始まつたばかりの夕方、ラーメン屋

でおじらされた日の光景。

あの時、見た車だ。由紀を迎えてすっ飛んできた車。綾華さんの華麗なご挨拶に恐縮していたのは誰だつただろう。

運転席から降りてきた人の顔を見て、俺はやつと驚いた。由紀の父親に間違いない。

以前、会話の中で聞いてはいた。由紀の家は代々の農家で、夕方は割合時間があるから迎えに来てくれることが多いと。

こんな時に彼氏デビューかよおい、と思つたりもしたけれど、なにしろ頭に濃い霧がかかってしまっている状態だから、あまり考えも覚悟もまとまらない内に立ち上がった。

渋谷のお父様は、俺を見るなり厳しい顔をするんじゃないかといつ予想を覆し、人の良さそうな顔に心配そうな表情を浮かべていた。

「大丈夫か」

今日何回目かのセリフを聞いたけれど、その声も人が良さそうな声。

「熱があるんじゃないのか

「多分そうだと思う。触つても熱いし」

「すぐ送ろう。病院じゃなくていいのか

俺の目をまっすぐに見てくるから、俺は思わず頭を深く下げた。

「帰れば薬もありますし、病院じゃなくて大丈夫です」

「娘から話は聞いている。乗りなさい」

そういうと、由紀のお父様は運転席に回った。その間に娘は後部座席のドアを開けている。

「晃彦くん、乗って下さい」

「いいのか?」

「もう呼んじやつてるんだから遠慮しないで下さい」

確かに今遠慮しても仕方がない。

「じゃあご好意に甘えてしまおつか……」

失礼します、と断りながら、国産高級セダンの後部座席に乗り込

む。

「だいぶお世話になつてゐるそつだけど、うちの娘は失礼なことは
しどらんかね」

乗るなりいわれたから身構えそうになつたけれど、残念ながらこの日一番体調が悪い時だったから、身構える気力がそもそも無い。「とんでもないです、今日もこうしてお世話になつてしまつて、由紀さんにはいつも感謝しています」「

如才ない挨拶をするのが精一杯だつた。

となりに由紀が乗り込み、車は動き出した。道は由紀が知つているから、指示を出している。

「前から君の話は聞いていたんだよ」

といわれたから、俺は思わず由紀の顔を見た。由紀は「なにいつてるのよ」とでもいいたげに口をパクパクさせていたけれど、空気を読まず、由紀のお父様は続ける。

「特に近頃はべた褒めでね。永野家のお嬢さんもそつだが、君たちの話をしている由紀が楽しそうでね、我が家じや君たちはすっかり有名人さ」

「……恐れ入ります」

まったく恐れ入る。由紀はついに言葉を発した。

「ちょっと父さん、そんなこと今いわなくていいでしょ」「父さんと呼んでるんだ。初めて聞いた。

「褒め言葉なんだからいいだろう。佐藤君の何がすごいといって、どんな相手とでも普通に話せて、仕事もバリバリできて、それでいて気取つたところが少しもない所だそうだ」「

「ちょっと！」

あ、本氣で怒り始めた。しかしお父様、まったく空氣を読まない。

「今まで会つたどの高校生より大人っぽいそうだが、確かに君にはそんな雰囲気がある。自分が大人だと思い込んでいきがつてているガキじゃない、だからといって子供の立場に甘えていい、そんな雰囲気だな」

このぼーっとした状態のガキを相手に、この人は何をいつているんだろう。

などと思っていると、由紀があきらめたようにため息をついた。

「こういう人だ、とでもいうかのように首を振る。

「何しろ言葉遣いが礼儀正しいじゃないか。近頃の高校生とは思えんよ。大したものだ」

お父様の口調に、俺は何かを感じた。でも、その何かがなかなかつかめない。頭がうまく回らない。

「そこ右」

きわめて短く、由紀が指示を出す。視線を動かすのも面倒になつてから見ていいけれど、まあ、由紀の表情は想像が付く。うんざり、というのだ。

「うちの娘はこんな子だろ？ 引っ込み思案でなかなか自分の気持ちを前に出さんから、君みたいな子にいい影響をもらえればそれに越したことはないと思ってるんだよ」

「悪かったわね」

ボソッと由紀がいう。親が相手ならこの程度の口は叩くらしい。というか、この子は結構自分の気持ちを前面に出しますぜ。どうか、時々びっくりするほど突っ走りますぜ。

忠告してあげたい気にもなつたけれど、これは口にすべきじやないだろう。だいたい、運転席に届くほどの声を上げるのが億劫だった。た。

「今度、うちにも遊びに来なさい。妻が君の顔を見たがっている」「この言葉で、俺は突然理解した。さつき感じたものは何か。

ああ、この人は自分を納得させようとしているんだ。

たぶん、俺が由紀の彼氏になった人間だと、この人は勘付いている。由紀がそれをいいたいけれどいえないでいることも勘付いている。そして、俺に対してもいいイメージを持つことで自分を納得させて、俺を迎えて、取り込もうとしている。

頭から拒否するより、頭から受け入れることを選んだんだ。

その方がダメージが少なくて済むから。

相手を受け入れた方が、娘にとつてもダメージが少ないと踏んだんだろう。

たとえば俺がつまらない奴だったら、一度受け入れた上で、そのつまらなさを娘にしつかり伝わるように暴いていけばいい。別れのにしても自分の決断の方がいいに決まっている。逆につまらない奴でなければ、さらに自分の思う方向に育てていけばいい。

その自信があるんだろう。

この人は大人だ。愛する娘に関わることですら客観的に見て、より良い方向に導こうとしている。

ほんの短い時間しかまだ会ってはいないけれど、この人は由紀の父親という以前に、懐の大きさというところで、充分尊敬に値する人に思えた。

「……ぜひ、お伺いします。由紀さんを育てたご両親なら、失礼な言い方ですけれど、お会いしていてとても楽しくなりそうですから」

熱のせいではなく、武者震いがする。意外なところに、意外なほど的人物がいた、という思い。カケスさんはまったくタイプが違うけれど、この人も多分、俺がついていきたいと思わせてくれる人だ。

「嬉しいことをいつてくれるじゃないか。由紀、文化祭が終わったらでかまわんから、セッティングしなさい」

風邪のおかげで、俺は思いもしない出会いを得られた。病気も、時によつてはなかなか悪くない。

なんて思つたりもしたけれど、やつぱり気が張つていたせいが、家についてから一気に疲れが出て、帰ってきた妹に「ちょっと、言い残すことがあるなら聞いておくよ」といわれてしまつような有様に成り果てていた。

病気はいかん。

不思議なもので、あれだけひどい体調だった月曜日、薬を飲んでもろくにものも食べずに寝込んだはずなのに、火曜の朝、俺の体調はすいぶん良くなってしまった。

「本調子には程遠いけれど、なんかそんなに気持ち悪くはないよ」起き出してきた俺を見て無言で体温計を突き出した母にいつ。体温も平熱だった。

「頑丈に産んだ自信はあるけれどね、こんな鉄人に育てた覚えもないわよ」

俺の減らず口は絶対この人の遺伝だ。でなきや教育の結果だ。「遺書書かせようかと思ったくらい昨日はひどかったのにね」

横からいつてくる妹も濃厚なDNAを感じさせる。

「俺ならあと一週間は寝込んでるな。本当に俺の子なんだろうな」と能天気に放言した親父は、最大の責任者だと思われる。

「あなたの子じゅなきゅこの平凡な顔は作成不可能でしょう」とは母。父は当然切り返す。

「お前、自分の顔鏡で見てからいえよ？ まるつきり複製じゃないか」

「目が腐ってるんじゅなきゅ、あなたこそ鏡見てきなさい。どれだけ濃い遺伝子よ」

別に喧嘩ではない。これが我が家の中普通。かくして俺の減らず口が誕生したわけだ。安心してくれ。どっちも確実に俺の親だよ。

学校に行くと変な顔をされた。

「お前……ゾンビか

「なんだそれ」

人の顔を見るなり、小学校からの連れがいう。

「昨日の顔色見たら今日は絶対休むと思つてたのに、何で明らかに昨日より元気なんだよ」

「知らないよ、起きたらこうだつたんだから」

「包帯も取れて完全復活じやないか、中間すつ飛ばして」

「すつ飛ばしてない、普通に回復しただけだろ。まだガーゼ張つてあるし」

「やっぱお前は怒らせないことにする。人間相手ならともかく、そういうじゃない奴に逆らつても仕方ないもんな」

「ボクは小市民だよ？ 人知れずひつそり生きていくんだから変ないいがかりはよしてくれないかなあ」

「うそ臭いにもほどがあるだろ」

実際、俺の評価というものが、文化祭実行委員になつて以来、だいぶ変わっている。

ちょっと前に喧嘩に巻き込まれて、危うく素行不良グループの一員に數えられそうになつたけれど、それは回避して、結局小市民の目立たない生徒の地位を回復してはづだつた。地味で、それほど目立つ個性があるわけでもなく、生徒が3人もいたら存在感が埋もれてしまうような存在。

それは悲しい存在かもしれないけれど、俺にとつては居心地が良くてそれなりに楽しい世界だつた。

それが、綾華さんとともに渡り合つて下級生がいるという噂でくつがえつた。その後のもうもうの事件で「こんなやつがこの学校にいたのか」的扱いを受けるよくなつた。とくに大人の評判が悪い人々から。

一方で、生徒会会計の先輩や、生徒会活動に多少でも関わっている教師たちに、面白い1年生がいるという評価も受けている。こちちは素直に喜んでおきたい。

それから、由紀と付き合つよくなつて、急に女子と口を利く回

数が増えた気がする。

「体の調子、もういいんだ」

「なんとかね」

「という話を、登校してから授業が始まるまでの間に3回、それぞれ別の女子と交わしている。

原因は何だろ?、と不思議に思つてみると、解答は綾華さんがくられた。

昨日、俺が帰つてから、由紀は学校に戻つて文化祭の仕事をしていた。綾華さんは由紀不在の間からずっと仕事に取り掛かっていて、昨日も結構遅くまでがんばってくれていたらしい。

3時間目と4時間目の間の休み時間、教室移動のついでがあつたようで、綾華さんは生徒会関連の書類を持ってくれた。

「放課後すぐに出して欲しいんだってさ。あたしたちじやよくわかんなかったから」

2年生が1年生の教室に入つてくることはあまりなく、まして来たのが綾華さんじや目立つことこの上ない。ただでさえ注目されやすい人が、この教室では完全にスター扱い。誰もが異常なくらいに綾華さんに注目している。

「そんなん

と、解答をくれた綾華さんは非常に明快だった。

「あんな静かな子と付き合つんだつてわかつたからでしょ」

体がでかい上に目立たず生きていこうとしていたからとつづきにくく、しかも交友関係が素行不良勢に傾いていたから（本人にその意識はないけれど）、女としては話しかけにくい人間だつたらしい。

「なるほど」

「じゃ、その書類よろしくね」

綾華さんは次の授業のこともあつたからさつさといなくなつた。

その後姿を見送つていた周囲が、綾華さんが扉を出て行った途端、俺を取り囲んだ。

「いいなあ、綾華さんとあんなに普通に喋れるんだ

「どうなの、綾華さんってなんか庶民とは話してくれないイメージがあるけど、そんなでもないの？」

「今一番綾華さんと仲がいいのって晃彦らしいじゃん」

みんな、綾華さんは雲の上の人だと思つていて。俺もつい最近までは別の世界の人だと思っていた口だから、人のことはいえない。「別に普通だよ。俺の場合はたまたまきっかけがあったからだけど、むしろ話しやすい人だよ。変に人を区別したり差別したりはしない人だし」

「あたしたちとかでも？」

「きつかけさえあればね。用もないのに愛想売つたりはしないけど、用がなくたつてファンですつていえば話くらいしてくれると思つくれどね」

「紹介してよ」

「それはダメ。自分から行くくらいの行動力は欲しがる人だと思つし」

今まで、同じクラスなのにほとんど喋つたことがない女子まで話しかけてくる。綾華さん効果はすさまじい。

昼休みはほとんど書類の処理に費やされた。由紀も手伝ってくれたけれど、たかが一日仕事から離れただけで、だいぶたまっている。自分が手がけて配布していたものが戻つてきている書類がほとんどだつたから、機械的に一気に処理していく。リストを見て照合したり、こちらで直せるミスなら直していったり、不明点には深く考え込みずにどんどん付箋を貼つていったり、生徒会や職員室に提出する書類には検印代わりのサインを書いていったり、別に難しい処理はしていない。

ただ、隣で見ている由紀には驚きの速度だったらしく、手伝いながら感心していた。

「やつぱりす」「こですね」

「面倒なことは棚上げして後回しにしてるからね。別にやじくもなんともないよ」

「このスピードをすぐくないとかいつたり、落ち込みます」「なんで?」

「私にはどうがんばっても無理です」

「得手不得手があるでしょ。俺は由紀みたいに綿密なチヨックはできないもん。ざつとやりてこくのは俺の得意、綿密さは由紀の得意、人それぞれだよ」

「そういう風にいえるのもす」「こと思います」

「由紀は俺がやることは何でもすぐ感じちゃつてるんじゃない? もしかして」

「もうかもしません」

由紀はあっさりと認めた。俺が書類から少し田を離して由紀を見ると、白い顔をわずかに上気させた由紀は、聞こえるきつぎりの小さな声でいう。

「惚れた弱みなので仕方ありません」

思わず書類を放り投げそうになつた。

いきなり何をいい出すか、こいつは。

引っ込み思案で大人しくて、なかなか自分の思いを口に出せない、というのが一般的な由紀のイメージだと思つけれど、どんなにもない。この前から、この子は結構いいたいことをはつきりとこづ。声は小さいけれど。

これは内弁慶というんじゃないだろうか。俺は由紀の思いに答えた瞬間から由紀にとっては他人ではなくなつたから、意外なくらいするつと思つていてることを口に出せるんじゃないだろうか。

「……ほんと、由紀は俺を何度も殺してくれるのか」

「えつ、変なことといいましたか?」

「変じやないけど、想像をはるかに超えてるのは確か」

「想像を超えてるのは晃彦くんも一緒に、私の想像なんて全然届

かないくらいすごいです」

「もういいよ、褒め合はは……仕事にならない」

呆れて、というより、これ以上由紀に褒められたら、勘違いしそうだった。俺つてすげー人間なんじゃね？ ど。

昼休みはそんなことで終わっていき、午後の授業を経て放課後になる。

放課後になると、いよいよ今日の本番といつ感じだ。

俺がいない一田間にたまり、今日また大量に発生したお金関連の仕事が、俺を出迎えた。資材購入には、歴代の生徒会が付き合つてきた業者と話を進めなければいけないけれど、生徒会の会計氏以外に話を通すとややこしくなりそうだったので、俺が最初から最後まで面倒を見てしまうことにしていた。

なにしろお金が発生することだから、本来は学校の事務が肩代わりしていく仕事なのだけれど、そうすると今度はがしがし予算が削られたり、ひとつひとつの購入資材に理由のコメントが必要になつたり、ややこしくはないけれどひどく面倒になる。

だから、会計氏や生徒会指導主任の担任を味方につけて、金額の枠内であれば自分で決済できるようにしていた。

自分で決済、ということは、責任が付いて回るということ。交渉から受け入れの段取り、使用後の保管場所の決定から所有者票の作成・貼付まで、やることはたくさんある。

業者に電話するのは完全に俺の仕事。

「私、しゃべれません……」

といつてその役から降りたのは由紀で、綾華さんには「あたしに数字の仕事をさせる気？」と逆に脅された。やりたくないといつているのではなく、やつたら責任は取れないよ、という押し付けっぽい理屈で押し通す気なのだろう。

俺だつてそういう電話に慣れているわけじゃないし、やりたくてやつているわけじゃないけれど、バイトで使い走りとしてあちこち走り回つたりお使いしたりしてきた経験は、無駄にはなつていない。

「しゃべらなくてもいい仕事がいっぱいあるから覚悟しといて」と由紀にいう俺の一番の仕事は、実はお金のことではなく、文化祭全体の資材が絡むことの段取りをつけて締切りを設け、それを守らせること。締切りがないと人間は動かない動物のようだから、守れそうな程度の締切りを設定し、それを軸に、直前になつたら警鐘を鳴らし、時間を迎えたら確認し、過ぎていたら催促し、協力が必要なら協力し、それでもできないようならこつちでやつてしまつ、そういう割り振りをしていくこと。

なんでも自分でやるのではなく、逆に自分以外の人間をどれだけ動かすかが大事になる。

特に自分の体調にどうも自信がもてないから、徹底的に人を使つていくことを考えないと、また寝込んだりしたらまわりにかける迷惑がすさまじいものになる。

力ヶスさんがよくいう事だけれど、仕事は段取りが8割。段取りさえできていれば、何も考えずに手足を動かしている内に、大方の仕事は片付く。

この頃になると、企画を早く上げないと資材を貸せないよ、とう俺たちの最初からの掛け声が浸透したようで、取り組みが遅いところでも出し物などの見通しが立つてきて、学校全体に文化祭を迎える雰囲気が出来上がってきていた。

文化祭の、ざわざわした、期待と焦りに満ちたような空気が出来上がってきていた。

こういう空気は嫌いじゃない。

「今年はずいぶん盛り上がりがあるな」

といったのは担任。

「取り掛かりが早かつたからかな、去年までとちょっと雰囲気が違うな。ぎりぎりにならないと、文化部以外の生徒はなかなか盛り上がらないもんだが、今回はクラス単位の盛り上がりがすごそうだ」「そんなもんですか」

去年の空気なんか俺が知っているはずがないから、話は一方通行。

「あたしもこじうこじう雰囲気って好きだなあ。みんなで寄つてたかって祭りを作つていいく感じ、わくわくするよね」

意外に素直な感想を口にしたのは綾華さん。

「不健全だつたり非合法だつたりする騒ぎのテンションも嫌いじゃないけど、こじう健全なテンションの高さつてのもいいよね」と、余計なことを付け加えてくれたけれど。

「お前たちの仕事が速いから助かるよ。校内の文化祭モードのスイッチを押してくれたようなもんだな」

生徒会指導主任でもある担任の評価は、俺たちにひどく高い。人に評価されたくて始めた仕事じゃないけれど、やつたことを評価されるのはやっぱり嬉しい。

「まだこれからが山場ですし、最悪のタイミングで倒れたりしないように気をつけます」

俺がそういうと、両隣にいる綾華さんと由紀が同時に深くうなづいた。俺が倒れて、まず直撃を食うのはこの二人なのだから当然だ。

まるで夢の中の出来事のようだったから、意識してそうしていたわけではないけれど、俺はやっぱり現実感がないままに無視していたことになる。

あれから何日か経った今でも、あの時間そのものが俺の中で消化しきれないままになつていて、棚上げになっていた。

綾華さんが俺の見舞いに来た件だ。もつといえど、その中で語られた様々な会話。

そして、握られた手の感触。

あの記憶のどこまでが現実で、どこまでが熱が見せた幻覚なのか、どこまでが信じられるもので、どこからが信じてはいけないものなのか、熱に浮かされていたのは間違いない事実だから、自分の中で整理ができなかつた。

その後に会つた綾華さんは、あのときの面影をまったく引きずらず、あんな話は無かつたかのようだつた。お互いに忙しすぎて仕事に没頭していたせいもあるのだろうけれど、あまりにも今までと変化がなさ過ぎた。綾華さんの態度も、会話の内容も。

仕事をしているときまでそのことに頭が占領される」とはなかつた。俺はそこまでの恋愛脳じゃないらしい。

ただ、門限がある由紀が帰り、仕事がひと段落して、もう帰ろうかというタイミングになつた夜の7時半過ぎくらい、棚上げにしていた記憶や感情が不意に浮かび上がつてくる。

綾華さんと一人きりになつてしまつタイミングがあるのが悪い。

各クラスの代表や生徒会役員と顔を合わせているうちは気にもならないけれど、扉のガラスがまだ割れたまま厚紙が張られている生徒会室で、俺が書類処理のためにパチパチとキーボードを打つている音と、パソコンのファンが回る音、もう真っ暗になつた外から聞こえてくる部活の声、それしか聞こえない生徒会室の中で、綾華さ

んが携帯をいじっているかすかなクリック音がやけに大きく聞こえる。

いつ、誰が入ってくるかわからない空間だからか、綾華さんは仕事以外のことでは一切口を開かなかつた。誰かがいれば冗談もいうし、俺と掛け合つたりもする。でも、一人になると、必要以外の口は叩かなかつた。

前ならそれで良かつた。

俺も学校のスター相手に無駄口叩くくらいなら自分の作業に没頭していたかつたし、綾華さんが俺相手に無駄口叩かないのはむしろ当然に思えた。なぜ、綾華さんともあろうものが、俺なんぞと喋らなければならぬのか。

ところが、その大スターが、あまりにも近くなりすぎた。どこまでが現実だったかあいまい、という厄介な状況ではあるにしても、綾華さんは病身の俺の手を握り、かなりきわどいことをいつている。こんなにそばにいて居心地がいい男なんか初めてだつたから。

その言葉が耳について離れない。

その後、綾華さんは「『普通』でいる」との心地よさを知っちゃつたし、あきちゃんや由紀ともうつと一緒にいたいし」ともいついた。

文脈から考えれば、綾華さんにとって俺がどうとこうより、普通というものに対する憧れを自分なりに認めることができた、と解釈もできる。でも、解釈の仕方によつては、俺を好きだといったようにも思えなくはない。

いやいや、それはないわ、と俺の理性は告げる。ありえないだろう。

ただ、記憶にもやがかかるつていて、自分の解釈に自信がもてないのが問題だつた。

それを考えたくないから仕事に没頭しようとするのだけれど、二人きりになってしまえばなかなかそもそも行かず、ついつい綾華さんにとらわれてしまう。

それでも仕事に没頭しようとした成果は上がつていて、見込みより早く処理ができている。休みもあつたし、そろそろ仕事を溜め込むかな、と予測していたのだけれど、意外にも溜めるどころか、いくつかの仕事を先行して始末してしまっている。

たとえば、各クラスの処理の合間にでもやろうと思つていた、後夜祭に使う資材の手配や、使い回しの計画など。全体の計画ができるからでもいいやと思つていたけれど、この段階でも作つて作れないことはなかつたもの。去年までのものだと不完全もいいところだつたから、新たに作り直した。結構そういう書類や計画が多い。

今まで現場の判断でどうにかしていたんだらう。それじゃダメだ、ちゃんと計画しなきや、なんて大声でいつて回るようないい子ちゃんでも、自分が正義と思えば周りの弱さや急けを許さない善人でもないから、それで別にかまわないと俺も思う。

それでも計画を作つたのは、単純に、そうでもしないときつかつたからだ。今日はなぜか綾華さんと一緒に部屋にいることが多く、その間、「仕事してまつせ」という顔で間を持たせたいといつ、ただそれだけの理由でばしばしとキーボードを打つていてうちに出来上がつてしまつた。

昼休みに仕事をしていた時、由紀がしきりに感心してくれていたけれど、放課後の仕事については褒められる理由は無い気がする。プリンタのモーターが静かな部屋の空気を震わせる。

書類が2枚、吐き出されてくる。伸びをしてそれを取り、眺める。これで間違いが無ければ、今日できることは一通り終わる。そしてざつと見たところ、間違いは見当たらなかつた。

さあ、仕事は終わつてしまつた。

綾華さんはまだ帰らない。

なぜ、携帯を打つているだけの綾華さんが生徒会室に残つているのか。

理由は知らない。知りたいし、できれば速やかにお帰りいただきたい気がするのだけれど、残念ながら訊ねる勇気がこの時の俺には

なかつた。

人を脅したり喧嘩を売ったりする機会に最近恵まれてしまい、おかげさまで「あいつは怒らせると怖い」だと「大人しい顔して実は陰の実力者かもしない」とか訳のわからない評価を得ている俺も、実態はこんなもの。小心、ここに極まれり。

綾華さんも綾華さんで、他の生徒がいなくなつた瞬間から一言もしゃべらず、さつき携帯を出すまでは、文化祭実行委員の本部から回ってきたプログラム案と詳細な計画書のチェックをしていた。赤ペンでしきりに書き込みを入れていたから、見るのは眞面目に見ていたのだろう。

それも一巡したようで、今はどうもメールをひたすら繰り返しているようだ。

俺は覚悟を決めた。このままうだうだしていても仕方がないし、いい加減腹も減つていて。病み上がりで胃も元気ではないけれど、減るものは減る。

「綾華さん」

呼びかけた声は氷点下の気配。こちらを見もせず、携帯を操る超高速の指使いがそこはかとなく俺の恐怖を演出してくれる。

「……なに」

綾華さんの声は氷点下の気配。こちらを見もせず、携帯を操る超高速の指使いがそこはかとなく俺の恐怖を演出してくれる。

「い、一応仕事は終わりました」

「ああ、そう」

身じろぎもせず、うなずきもせず、綾華さんは「ぐく短く答えた。メールによほど集中しているのか、それとも別の理由で俺に返事するものが鬱陶しいのか。ちらりとしか見ていないけれど、顔も強張っている気がした。

気にしていたら一ミリも身動きが取れなくなりそうだったから、俺は帰り支度をすることにした。まずはパソコンの電源を落とす。それからいい書類を整理し、ファイルに綴じるものは綴じ、クリア

ファイルに入れる物は入れ、未処理棚に戻すものは戻す。

俺がガチャガチャ動いて、棚の鍵も閉めて帰る準備が出来上がった頃、急に綾華さんがいすの上で大きく背伸びをした。

「うあああ、もう疲れたよー」

今までとは全然気配が違う、肩の力が抜けた声だった。

「あきちゃんもお疲れ」

「あ、え、はい、お疲れ様です」

「……どしたの？ あたし、どうかした？」

俺がかなり怪訝な顔をしていたようで、綾華さんまで怪訝そうな顔になる。

「いや、今日はずっと難しい顔をしていたなあ、と」

「ああ……色々、ね」

立ち上がりながら綾華さんはいう。

「広瀬と別れるって話、ちょっとともめててさ」

そういうながら苦笑している。

「広瀬が動き回ってるのかどうか知らないけど、あいつの知り合いからやたらメールとか電話とか来てて。返すの大変なんだ」

それでか。

俺は複雑だった。どう反応していいか、見当が付かない。

「いかんいかん、眉間にしわが寄つてたかな」

ぐりぐりと自分の眉間を揉んでいるけれど、もともと眉間にしわが寄っている顔つきでもないから、もちろんデモンストレーション。

「……まあ、荒っぽいことがないようにして下さいね。こじれるとあの人は大変そうな気がしますし」

「広瀬、こじれたらすごい勢いで復縁迫りそうね。あれは精神的に子供だからさ、自分がこうあるべきだと思うとあたしやみんなもそう考えて当然だと当たり前に思っちゃうばかだから」

本当に容赦がない。

この人は成績以上に頭がいいから、表現力がある。説得力があるだけ救いがあることもある。

「でも多分、あきちゃんには火は飛ばないと思つよ。なにしろバッ
クにすごいのがいるってみんな知つてるから」

「カケスさんですか」

「掛巣さんがあきちゃんの後見人だつてこと、すげい勢いで広がっ
てるから。どうもあきちゃんはそういうの鈍そうだけど、今でもあ

の人人が一声かけたら、百人単位で兵隊集まるわよ」

「知つてますよ、この辺りの土木業界でも有名人ですから」

本当にそうなのだ。

「なんなら」

と提案してみる。

「カケスさんに頼つてみたらどうです？　俺が紹介しなくたつて、
この前の一件もあるし、勝手に動き出さないとも限りませんが」

「いいわよ」

綾華さんは一笑に付す。

「別れ話くらい自分で始末つけるわ。いざとなれば、永野家ブラン
ドの威力もあるし」

思い出した。この人は地元最強の家の出だ。

何しろ田舎のこと。相手が社会人ならなおさら、永野家のネーム
バリューは効果的だ。何も知らない子供ならともかく、永野家を正
面きつて敵に回すことになれば、何かと不都合が出てくるこ
とは、広瀬さんにも、そしてその周辺の人たちにもすぐにわかるこ
とだ。

「別れた原因に納得いかない、みたいな話が多くてね。もともと好
きじやなかつたつていつてるのに」

携帯を器用に手の中でくるくる回しながら綾華さんいう。

「あきちゃんのせいだつて話は意外に出てこないのよ

「はあ」

何が出てくるかわからないから、最小限の返事。

「由紀のおかげね。あの子に感謝しなさい。あの子とラブラブな場
面が目撃されてるから、原因があんただとは気付かれないとんだから」

「……やっぱ原因って俺なんすか？」

思わず、踏み込んでしまった。

俺はいつも自分から地雷原に飛び込んでしまう。そのまま「あ」とだけ返しておけばいいものを。

綾華さんは、今さら何を、という顔で俺を見た。

「そういうてるでしょ？ 信じてないの？」

「信じてないんじゃなくて、信じられないんですよ。なんで俺なんかと接しててそういう話になっちゃったのか」

綾華さんは俺のセリフを聞くと、黙つて立ち上がった。立つていた俺のすぐ近くまで歩み寄つてくる。俺は身動きもできないうまく立つ立つっていた。

俺の目の前まで来ると、綾華さんは右手の人差し指をぐるぐると見せ付けるように振つてから、俺の胸に突き立てる仕草をした。「何度もいう。あんたはいい男なの。自分で気付いていないだけ」「ぐりぐりと胸骨が押される。痛いほどではないけれど、くすぐつたいといつレベルではなかつた。

「その自覚の無さはもう犯罪的ね。見てて腹立つてくれるわ」

「そりゃ……どうも」

気の利いた返事なんか浮かんでこない。綾華さんは指を降ろした。「腹立つたついでに、はつきりいうわ。どうも回りくどいにいかたすると逃げようとするみたいだから」

綾華さんのきれい過ぎる顔に、攻撃的な笑みが浮かんだ。

凄絶な、といつてもいいのかもしれない。寒気がするほど美しい、と思つてしまつた。

そして、爆弾を落とす。

「あたしは、あきちゃんが好き」

「あたしは、あきひやんが好き」

炸裂した爆弾の巨大さは、夢かとも思えた熱の最中の話し合いのときの比じやなかつた。手を握られたときだつて、ここまで衝撃は無かつたはずだ。

俺は口の中がからからに乾いていた。緊張で足が震えそうになる。とてつもないことが起きている。

「本当は、由紀なんかに渡しておくつもりも無いのよ。でもそれはそれであたしのプライドやポリシーが許さないから、由紀から奪うつもりはないわ。でも」

綾華さんの瞳がじつと俺の目を貫いている。目なんかそらせない。「好き。生まれて初めて、男を好きになつた

女性としては背が高い綾華さんは、由紀ほど視線の角度はない。まっすぐに射込まれる視線が、直接俺の脳に侵入してきそうだ。頬に差した血の色が、唇の赤さが、なにより俺の姿を映して動かない瞳の色が、俺を縛り付ける。

「話してて楽しい。一緒に歩いていると胸が痛くなる。ちょっと会えないだけで胸がざわざわする。遠くに見かけただけでどきどきする。会える予定があるのでわくわくする」

そこまでいようと、視線を外して下を向いた。

俺は自分が呼吸を忘れていたことにすら気付いていなかつた。息苦しさに思わず大きく息をついて、その音に自分でびっくりする。

そのびっくりに更なるびっくりが重なる。

綾華さんは、俺の両手を自分の両手で捕まえていた。由紀のそれより長い指が、俺の両手の中で動き、指と指が互い違いに結ばれた。「こうして手をつないだら、わかるでしょ？」

瞳が再び俺の目を射抜く。

わかりたくなかつたけれど、わかってしまった。

綾華さんの手から、震えが伝わってきた。細かく、不規則に、綾華さんは震えていた。

「こんなこと、初めてだわ。自分でも自分がどうなってるかわかんないの」

つないだ手はしつとりとしていた。汗がにじんでいた。緊張しているのか、冷たい。

そして、鼓動が伝わってくる。激しく、早く、大きな鼓動。

「広瀬に抱かれてるときだって、どんなに興奮していたって、こんなにどきどきしたりしなかったわ。人を好きになるってこういうことなかつて、初めてわかったの」

綾華さんの声が、俺の心を碎いていく。何も考えられなくなつていいく。綾華さんの鼓動が、俺の体を溶かしていく。

「あきちゃんのせいだよ。こんなもの、気付かなければ良かつたのに。気付かなければ、『ごまかしていられたのに』

胸が震える、という感覚。初めて命がけの喧嘩をする羽田になつたとき以来じゃないだろうか。

「もう『ごまかせない。あきちゃんを好きってことは』『ごまかせても、人を好きになる恐怖と快樂は、知つてしまえばもう『ごまかせないわ』そこまでいふと、綾華さんはそつと体を前にずらした。そこには俺の体がある。

綾華さんの髪が鼻先に来る。綾華さんは自分の額を俺の首筋に埋めるようにした。綾華さんの香りが濃密に俺の鼻腔を刺激する。

「触れるだけで意識が飛びそうになるのよ。あきちゃんの指で触れられたらつて思うだけで何も考えられなくなる

俺の指を確かめるように、握っていた手を離し、指先で俺の指を叩くように触れ、そして腕を上げる。

そのまま、綾華さんは俺の腕の隙間に手を差し込んで、俺の胸を抱いた。

綾華さんの細い体がしなやかに俺の体に密着する。

「こんな風に抱き合つてみたいって、あたしがどれだけ願つてたか、

わかる？」

柔らかすぎる胸が、ぐっと押し付けられている。片手が俺の後頭部の辺りをまさぐるようにしてくる。もつ片方の手は俺の背中をつかんでいる。

「あきちゃんの鈍感さは酷だよ」

そういうと、綾華さんはすっと頭を上げ、背を伸ばして、俺の首筋に噛み付くようにキスをした。

全身に走る衝撃。

髪の先まで電気が走ったような。

「……あたしがこんなに好きなのに、気付きもしないで由紀に走っちゃうした」

切ない声で、綾華さんは愚痴った。耳元でたしゃくから、その息が俺の感覚を麻痺させていく。

「自覚も無いくせにどんどんいい男になつていって、どんな詐欺だよ。ほんと、最低な男」

俺を抱く腕に力が入る。結構強い力で抱きしめられて、俺は息が詰まつた。

「悔しいから、せめて自覚は持つてよね。あんた、今、あたしも由紀もめるめになるくらいのいい男なの。優しさがいい男の条件だと勘違いしてるその辺の童貞少年とはレベルが違うの」

わざわざに毒を吐きつつ、綾華さんは俺の首筋にもう一度キスをする。

「……今のあたしが、一番したいことってなんだか、わかる？」

言葉と共に出てくる息のかけらが俺を熱くする。答える余裕なんかない。わずかに首を振る。綾華さんは俺の様子を伺いながら、ふふ、と笑った。

「あきちゃんを押し倒しちゃう」と。今すぐ。このまま脱がしちゃう。あたしも裸になつて、二人で抱き合つた。

綾華さんの腕から力が抜ける。

その体が俺から離れた。

体と体の距離は30センチくらい。

「しないけどね」

そういうで、ぐるりと背を向けた。

「そんなことしたら、あたし、自分が一生許せなくなる。自殺したつて足りなくなる。後悔することがわかつて突っ走るほど、あたし、馬鹿にはなれないんだよね」

綾華さんはそういうと、すっと離れていった。

体温が、遠くなつた。

触れ合つていた心も、離れた気がした。

とてもない寂しさの発作に襲われて、追いかけそうになつて、

俺はどどまつた。

綾華さんの背中が、俺に何かを求めていた。

それがわかつてしまつた。

綾華さんは、半分は俺に抱きしめられたがつてゐる。半分は、俺に拒絶されたがつてゐる。

気持ちを伝えた後、どろどろに溶け合いたい気持ちと、それを拒絶する気持ちとが、綾華さんの中でせめぎあつてゐる。

それを、綾華さんは俺にジャッジさせようとしていた。

細い肩だ、と思った。背中から腰にかけての曲線の頼りなさはどうだろうか。守つてあげなきゃいけないと本能が叫ぶ。守らせて欲しいと欲求が頭をもたげる。

蛍光灯の明かりの中にたたずんでいる綾華さんのシルエットがたまらなくいいとおしこ。

「……帰ろつ」

俺の声が生徒会室に響いた。

他人がいつているようだつた。

「途中まで送るよ。酷かもしれないけれど」

びくつと身を縮ませた綾華さんに、俺は声をかけていた。

「気持ち、もらつた。俺がどれだけその気持ちに震えたか、伝わったよね」

「わざかこうなずいたように見えた。

「綾華さんほどいい女、俺は知らない。あんな気持ちも「らつちやつたら、こつけこそ押し倒したいよ。抱き合いたいよ」

俺は机の上の荷物を手に取つた。

「でも、綾華さんがあんなに自分を裸にしたんだから、俺も自分を裸にする」

綾華さんの荷物も持つ。

「欲求だけでいつたらとつぐに綾華さんを押し倒してるとけど、でも、今の俺、由紀のものなんだ。理屈でも強がりでもないよ」

そのまま綾華さんの横を抜け、前に回る。

「由紀を裏切つたら、俺も自分を一生許さない。自殺したって足りなくなる。後悔するのがわかつても突つ走る馬鹿だけれど、今の俺が突つ走る方向は、綾華さんの方向じやない」

綾華さんが顔を伏せている。田は見えないけれど、涙の雲が落ちていいくのは見えた。

「綾華さんの強さも弱さも好き。多分、順番が違つてれば、俺の幸せは綾華さんの中についたんだろうと思つ。でも、そつじやない順番で巡り合つちゃつたんだ」

俺は両手に荷物を持つたまま、綾華さんに語りかけた。

「俺は由紀しか見ない。ごめん。一人一緒に無理だ」

「……当たり前だろ」

綾華さんが声絞り出し、そして。

俺の脚を思い切りよく蹴飛ばした。

「あいでつ」

蹴飛ばすというより、蹴つた足を振り抜く、見事なトウキックだつた。サッカー・ボールなら回転もせずにキーパー手前で沈み込むスパークリングだろ。

「由紀を不幸にするとか、んな選択したらその場で刺し殺してやる」「いだいいだいっつ

これが本氣で痛かつた。蹴られた左足が飛び、俺は両手の荷物を落とさなかつたのが奇跡と思えるほどにバランスを崩した。そのまま右足だけで一步飛びのき、崩れ落ちる。

「あんのこと大好きだけど、それと由紀の話とは別問題だわ。由紀泣かせたら本氣で殺しに行くからね

「充分殺されかかつとるわ！」

あまりの痛みに涙ぐみながら、俺は叫んだ。女子のキックでも、あれだけ豪快に振りぬかれたら、タイミング次第では骨まで逝つてしまつだろ。

俺があまりにじたばたと身悶えているので、ようやく綾華さんは自分の攻撃がどれだけクリティカルヒットだったか理解し始めらしい。

目尻の涙を指ではじきながら、ちょっと心配そうな顔をした。

「大丈夫？」

「つ……！」

返事もできない。息が詰まるほど痛かつた。

それがなぜか綾華さんの琴線に触れたようだ。

さつきまでの異常な雰囲気を自分の笑い声で吹き飛ばそうとするかのように、綾華さんは盛大に噴き出した。

「あつはは

笑い事じやない、とはいわなかつた。

あの泣き笑いの顔を見ていたら、いえるはずがないじゃないか。

脂汗を流しながら、俺は立ち上がつた。宣言どおり、俺は途中までは綾華さんを送つていかなければならぬ。

水曜日になるとだいぶ体力も戻ってきた。
精神的にも、気にかかりすぎるほどかかつていたことが一区切り
付いたから、本来やらなければいけないことに集中できるようにな
つていた。

由紀のおかげで休んでいた田のノートは出来上がっていたし、提
出物も何とか追いついた。

文化祭の仕事の方は、むしろ進みすぎているくらい。なにしろ昨
日は現実逃避のために異常な勢いで処理を進めて行ったから、翌水
曜日になつて改めて自分の仕事量を眺めて驚いたくらいだ。

仕事量はこれで減つていくかな、と思つていたけれど、考えが完
全に甘かつた。

放課後になつて、あらかじめ呼ばれていた職員室に行くと、担任
が腕を組んで待つていた。

「お前もうすうす気が付いていたとは思つんだけどな
担任が渋い顔をしていう。

「今年の生徒会執行部はどうもやる気が欠けている。プログラムと
計画書、見たか？」

「ちらりとですけど。まだよくは見てないです」

そういえば昨日、綾華さんが告白劇の前に見ていたなあ、と思ひ
返す。

「あれな、去年のをほとんどそのまま流用してんんだ」

「なんですか」

何か問題があるんだろうか、と俺は首をかしげた。担任は計画書
をいい加減にめぐりながら続ける。

「文化部も各クラスも、やることはそれぞれ去年とは違つ。使う資
材だつて、去年とはだいぶ違つていたはずだな

「ええ、まあ

違つてはいたけれど、そもそも書類が全然なつちゃいなくて、よくまあこれで回つたもんだと感心していたくらいだから、どこが違うかまでは考えていなかつた。そこまで考えていたら面倒さが倍増する。去年までのものは無視して一から作つてしまつた方が早かつた。

「今年はお前たちが早く動いてくれたおかげで企画が早く上がつたからな、計画書もそれなりに練れるはずなのに、この有様だ」

渡された資料を流し読みする。

担任のいいことがだんだんわかつてきた。

「ひどいですね……確かに」

誤字脱字の嵐、という所はまあいいとして、今年の各企画がほとんど頭に入つている俺からすると、計画書はずさんというレベルじやなかつた。本当にこれを作った奴は、各企画の書類を見ていたんだろうか。各企画のタイトルくらいしか直つていない。

「予算くらい直してくれないと、数字が全然合いませんよね」

「金のかかる部分ですらその状態だ。後は推して知るべしでな」

担任が深いため息をついた。

「突き返せばいいじゃないですか」

「本来ならそうすべきだろうな。でもな」

担任は頭が痛そうな顔をした。

「人がいない。突き返したところで、この手の仕事ができるのは会計くらいしかいない。だがこれを進学組のあいつ一人に任せるのはどう考へても酷だ」

「他の人はどうなんですか？ セクションごとに振り分ければ、個別には大した作業量じゃないでしょう」

「それを振り分けて作業を統括する人間がない。いつただろう、今年の生徒会はとにかくやる気がないんだ」

やる気がないのは知つていた。そもそも俺が綾華さんや由紀と一緒に仕事をすることに決まった日、綾華さんも由紀も、あまりにもやる気がない生徒会の会議進行にため息をついていた。俺も退屈で

仕方がない、由紀などはありえないほどつまご食パンマンを描いて俺の目を驚かせている。

「で、ここからが本題なんだが」

と、担任がいすの上で身じろぎをした段階で、次に出てくれるセリフの予想はついた。俺は右手を担任の前に出して制する。

「ちょっと待つて下さい」

「どうした」

「俺にその取りまとめをやつてくれとか、そういうのは無しですよ」「つれないなあ。そこまで読めるなら引き受けてくれないか」

案の定、そうだった。

「待つて下さいよ、俺は執行部役員どじろが、クラス委員ですらないんですよ。一番下つ端の実行委員です。何でそんな奴が責任者やらなきゃいけないんですか」

「決まっている。人がいないからだ」

担任は断言した。

「こままじや一步も前に進まん。いずれ時間が足りなくなつて、ぐだぐだの文化祭がいつちょ上がりだ。出納くらいは上手く行くさ。会計がきちんと手綱を握つているし、学校側の事務が介入して隨時監査したつていいんだからな。お小遣い制、ともいうが」

「事務の言いなりの買い物しかできない、計画も言ひなりで作成、というわけですか」

「生徒の自治なんてものは完全に失われる。困つたことこ、一度その前例が作られると、次回以降もその流れになる。来年から生徒会は権限のほとんどを学校側に取り込まれて、骨抜きになるわけだ」

「いいんじゃないですか？ それが時代の流れだと思えば」

「そとは行くか。少なくとも俺が生徒会担当の間にそんな流れにはさせんぞ」

担任はいろいろと指を動かしている。

「いいたいことはわかる。

担任が危惧していることはそのまま現実になるだろう。生徒の自治

なんて美しい言葉は、学校側にしてみれば手間と金ばかりかかって大した見返りもないこと。生徒自身が放棄してくれるのなら喜んで回収し、その分の資金と時間とエネルギーを進学率向上に投じた方が、学校の評価は上がるだろ？

受験料収入と生徒数の確保といつ、学校の至上命題にひとつでは素晴らしい知らせに違いない。

でも、そうすれば自由な文化祭なんてものは無くなる。下手をしたら、文化部の発表会のみを行う、形式だけの文化祭に思い切り縮小されたり、最悪は文化祭そのものの中止といふこともありえる。生徒がやりたがらないから。

経費も安上がりになるから。

進学率向上のため有効に使える時間が捻出できるから。

後押しする理屈なんかいくらでも出てくる。文化教育なんていう、生産性に関わらない教育に金を出すなんて、今の時代には合わない。そう考えれば、俺にだってあと二つ三つの理屈はすぐに思いつく。「各クラスの計画をまとめ上げて資材提供の流れをこれだけ早いうちに作つてみせたお前の実務能力は、職員の間でも評判になつてゐる。素人集団の中に、なぜか一人だけ熟練のプロがいたような、とかな」

「乗せようつたつてダメですよ。乗りませんよ」

「しかも生徒指導主任相手に予算の上積みを成功させるとか、前代未聞だぞ。それだけじゃない、執行部から予算執行権限の一部を委譲させたり、資材係の範疇をとつぐに超えて、文化祭の実行権限の過半を手中にしているつて、職員室じや豪腕官僚ばりの手腕だと評価されている」

「だから乗りませんつて。いくら上げても無駄ですよ」

俺はその線で押し切つた。

これ以上のこととは勘弁してもらいたいのが本音。仕事を抱えるのは疲れるということもあるけれど、それより、時間が取られてしまうのが痛い。

一応、これでも彼女持ちな俺。

いくら由紀との出会いのきっかけが文化祭の仕事だったとはいえ、だからといってそれにばかり関わっていてはせっかく手に入れた恋人の時間を味わう余裕もない。

由紀と普通の高校生らしく歩いてみたいし、手をつないで歩いてみたりもしたいし、仕事以外のことで中身の無い話をしてみたい。今までさえその時間がないといつのこと。

これ以上、仕事を抱え込むのは願い下げ。
と、思っていた。

担任の前から退出して、今日出さなければいけない資材を運び出すために資材室に入り、段ボール箱を廊下に運び出して一息ついたところで、それを取りに来るはずの一年生を待つていてる間に、由紀と話をしていた。

由紀はちょうど別件で三年生の教室に交渉に行ってきた帰りで、初めて最上級生のクラス委員と話し合いをしてきたばかりだったから、少し興奮していたらしい。

「あんなことを毎日していたなんて、晃彦くんす」「」

「あんなこと、というのは、文化祭で何かしらの企画を出したきたクラスの担当と話し合いをすること。

今日由紀がしてきた話し合いは、企画は出したもののまだ内容がはつきりしない三年のあるクラスに、早く企画を出し直さないと資材が足りなくなってしまいますよ、という催促。

「あれだけの仕事なのに、私、緊張しちゃって上手く話せなくて」というわりにちゃんと企画書を回収してきてるんだから立派なものだと思つけれど、由紀は俺が今までやつてきた交渉を見ているから、そのイメージと自分の交渉との差に驚いたらしい。

「交渉つて思つていたりずつと大変です」

「そんなことないよ、由紀だつてちゃんとできるじやん」

「晃彦くんが前からいってあつたからです。私は結局取りに行つただけですから」

「いやいや、あのクラスは俺は何もしてないよ。働きかけてたのは綾華さん」

そう、交渉ごとでは綾華さんが最強無敵だった。

はつきりいって、各クラスとの交渉では、綾華さんが最強。何しろ顔が広いし、あの人意外な（失礼）くらい論理的態度で迫つて、陥落しない相手はいなかつた。

俺が豪腕官僚呼ばわりされるなら、あの人は豪腕政治家だ。

俺が行つても話にならないようなクラスでも、あの人に行くと思議とまとまる。

俺に人徳が無いからだとか思つたりもしたけれど、違う。いや、俺に人徳が無いのは事実だけれど、それ以上に、綾華さんがすごい。「……そうだよな」

不意に俺は考え込んだ。いきなり目の前で腕を組んで考え始めた俺に、由紀は頭上に？マークを飛ばしていた。

取りまとめる人がいないと担任はいう。

単に仕事をするだけなら俺でもできなくはないけれど、人をまとめていくというのは実務能力とは関係がない。実務能力が褒められるのは嬉しいけれど、残念ながらそれだけで人はまとまらないだろう。

生徒会執行部を差し置いて、文化祭をまとめ上げて行こうと思つたら、実務能力がある人間をあごで使って、実務能力がない人間を力づくで従わせていく豪腕が必要になる。

いるじゃないか、適任者がいるじゃないか、適任者が。

でもちょっと待て。

あの人を推薦して、たとえばそれが通つたとしてだ。

俺、今までとは比べ物にならないくらいこき使われる羽目になるんじやないのか？

今でさえ仕事の量にひーひーいつてるのに、文化祭全体の取りまとめを実務的に管理していくなんて、考えただけでも恐ろしい。そして、あの人を推薦したら、多分俺はありえないほどいいようにこ

き使われる。

絶対そうなる。あの人人が今さら俺に遠慮なんかするはずがない。自分がどの仕事をすればいいかさえわからば、あの人人は自分なりに動いてくれるだらうけれど、そこにいたるまでの計画や企画は誰かがやらなければいけないし、あの人人が仕事をした後の実行や後始末も誰かがやらなければいけない。

そして間違いなくそれが全部俺に一度回つてくる。それを振り分けて、誰かにやらせて、管理をして、まとめて、後始末をするという作業が全部俺にかかるつくる。

俺がぶつぶつと考え込んでいるのを見ていた由紀は、相手をしてくれない俺に不機嫌になるかと思いきや、そうでもなかつた。
「……なんかすごいこと考へてます?」

「へ?」

俺が顔を上げると、由紀は顔を紅潮させて、ファイルを胸にじぎゅつと抱いた姿勢でわくわくした顔で俺を見上げていた。

「晃彦くんがそういう顔して考へてるときつて、次にすごいことしようとしてる気がします」

「いや、別に……」

何をいい出しますかお嬢さん。

「仕事してるときの晃彦くんの顔つて好きです、かつこいいです」「興奮して思わず出でてしまつた言葉らしく、いい切つてから恥ずかしくなつたようだ。はつとしたように周囲を見回し、真つ赤になつて顔を伏せた。耳どころか、首まで赤くなつていた。赤くなつていたのは多分俺も同じ。

これを計算でやつているとしたらこの女、ある意味綾華さんより恐ろしい。天然だとしたら、俺は一生勝てる気がしない。

「……すごいことつていうか、自爆ネタを考へてたんだけど」「どんなことですか?」

つづむいていた由紀が顔を上げる。真つ赤な顔だけれど、相変わらず田がきらつきらしている。

「ちょっとこの学校を乗っ取る計画をね

「それ、あたしも興味あるなー」

いきなり後ろから声がしたから思わず「うわあ」と叫んでしまった。

「なによ、あんたマジで人の呼びかけに驚くよね」

「心臓に悪い登場するからでしょう、いつもいつも」

綾華さんがいた。

「で、何よ、学校乗っ取るって」

昨日の告白でこの人の態度が微塵も変わるはずもなく、のことの気配など一ミリグラムも感じさせないのは、いつそ立派だった。

この人にも一生勝てる気がしない。

「俺が乗っ取るわけじゃないですけれどね」

俺は学校屈指の美女一人に囲まれるという奇跡を前に、自分の考えを話し始めた。

この二人に好きになつてもらえるとか。

俺、既に人生の運はすべて使い果たしたんじゃないだろうか。

運命の神から明日死ぬといわれても、思わず納得してしまいそうな気がする。

告白劇の前、綾華さんが文化祭の計画書にしきりに書き込みを入れていたのを見た記憶がある。

綾華さんが広瀬さんやその知り合いにメールを返し始める前のことだ。

赤ペンでしきりに書き込んだのは、自分たちがまとめたいた資料関係の書類や企画書から引っ張った情報だったところ。

どう考へてもあの計画書のまことに進められていつたら、自分たちがやつてきた仕事がぐちゃぐちゃにさせられる。綾華さんはそう思つたらしい。

「こ」は直す。「こ」はあきちゃんに振る。「こ」は由紀にがんばつてもらひう。「こ」は教師に甘える。

そんな書き込みだから、大雑把もいいところだけれど、書いてあることはいちいちまともだつた。細かな実務をやる気がさらさらないこともよくわかるけれど。

それを見て、一つの考へが浮かんだ。

「だからといつてだ」

生徒会室で高々と脚を組み上げ、さらに堂々たる腕組みで威を加えた綾華さんが、生徒会執行部、生徒会担当をしていくうちの担任、文化祭実行委員の面々を前に見得を切つた。

「あたしが文化祭を仕切るとか、あんた、頭おかしいんじゃないのか？」

綾華さんが「あんた」とは、俺のことだ。

綾華さんの正面に座つてゐるのが俺。その隣に座つてゐるのが担任。そしてずっと離れたところに生徒会長がいて、その隣に会計氏がいる。

「実行委員長は会長が兼任してゐるんだから、会長がやればいいだけでしょうが」

「正論ですけれど、現実的ではありません」

対する俺は「『と、綾華さんには負けるものの、大概態度のでかい一年である。

なにしろ、綾華さんと向かい合わせのパイプいすにどっかりと座りながら、長机に両肘を突いて手を組み、親指をあごに当てている。その体勢で相手を見据えているのだから、少なくとも永野綾華の正体を知っている一年生が取る態度じやない。

そして、この時、俺はある文化祭の計画書のひどさ、ずさんさについて、このでかい態度のまま指摘し倒した後だった。

一年の分際で、でかい態度でいいにいくことをずけずけと並べ立てた上、このままで文化祭は壊滅的なぐだぐだに陥るということを、数字で説明してみせた。

数字は俺が作った書類をちょちょいといじって作り直したもので、要するに予算。お金の話。これをいつの間にか握ってしまったおかげで忙しかった訳だけれど、その結果として、生徒会の首根っこをつかんでしまっていた。俺しか、お金の正確な動きを把握していないという、生徒会執行部にとつては致命的な事態に陥っていたのだ。そしてさらに致命的なことに、執行部は会計氏を除いて、その事に気付いていなかつた。

「先輩もご覧になつたはずですよね、計画書を。あのずさんで、どうぞご覧になりました？」

実は綾華さんもついさっきまで、生徒会提出の計画書を批判する急先鋒だった。俺よりよっぽどきつかつた。

この会議はそもそも正規のものじやない。予定されていなかつた会議で、この日の朝、急にメンバー全員に緊急ミーティングの開催が告知されて、開かれたものだ。もつとも、配布された計画書案があまりにもひどかつたから、大体のメンバーにはそれが原因だらうと見当はついていた。

ただ、こんなに大荒れの様相になるとは誰も予想していなかつたに違ひない。

「直せばいい話でしょ。あたしが仕切ると計画書と、何の関係があるのよ」

「大ありですよ、先輩。どう直していくにしろ、先輩の力がなければ話が前に進みません」

俺の態度に周囲がはらはらしているのが伝わってくる。

お互いに公衆の面前で毒舌を交わしている姿が目撃されていて、最近新密度を増していると噂されている二人だけれど、さすがに俺の態度は綾華さんの忍耐の限界点を超えているだろう。

綾華さんの目は明らかに殺氣立つていて、それが静かで威圧的な表情とあいまって、いかにも恐ろしい。多分気の弱い人間は既にこの部屋から逃げ出したくなっているはずだ。それをじつと見返している俺のでかい態度には、周囲の方がはらはらしていた。

「今必要とされているのは、役職でも経験でもありません。強烈なリーダーシップと高度な折衝能力です」

「あんたがやりやいいでしょ」

「俺には無理です。どちらも備わっていませんから」

「それだけしゃべれりゃ充分でしょうが。お馬鹿なあたしと違つてずいぶん頭も良さそうだし?」

「頭の出来はこの際関係ありませんし、俺もその点はあなたに期待していない」

「はあ?」

綾華さんが半分キレる。そりやまあそうだろうな。

遠い席で会長が痛そうな顔をしていて、担任も渋い顔をしていた。「たとえば俺が指示を出した場合と、あなたが指示を出した場合と、この方々はどうちのことを聞いてくれると思いますか?」

俺はわざとらしく身を起こして両手を広げ、部屋中の人々を指すようにした。綾華さんは不機嫌に口を閉じ、俺をじっと睨んでいる。「こんな生意気な一年のいう事を聞くくらいなら、かつては素行不良で鳴らした人でも、今のあなたについていこうとする人の方が多いはずです。俺が期待しているのはそこです」

「……」

「せりにいえ、あなたは、自身でおっしゃるほど馬鹿じゃない。論理的思考能力と説明能力は水準を遠く越えています」

我ながら偉そうなことをいつてこる。客観的には聞けたものじやないけれど、ここはぐつと我慢して続ける。したり顔で。

「この部屋にいる生徒の中でも随一でしょう。危機にある今期の文化祭を救い上げていくには、あなたくらいの個性と能力がトップに立たなければ、実現すらおぼつかない」というのが俺の意見です」

「……ずいぶん偉そうにほざくじゃないか、小僧」

綾華さんの、毒にまみれたような口調。なまじ美しい人なだけに、禍々しい口調になると恐ろしくどきつこ。

「一年のあたし二年の会長たちを差し置いて役職に付けといひ。実権を握れといひ。それを世間じやクーデターつていうんじやないのか。え？」

薔薇を背負つたような雰囲気でのセリフを口にしてくれるから、歴史ドラマでも見せられてこるような気になる。

「そう思つていただいて構いませんよ」

と返す俺も俺だけれど、なにしろ綾華さんとじや役者が違いすぎる。せいぜい中学生日記というところだ、と自覚するのも情けないけれど、周りからはどう見えているのか。部屋の隅で控えている由紀に、後で聞いてみようか。いや、客観的な意見を由紀に求めるのは間違つてるか。

「もつとも、当事者全員が会議室にいるんじや、クーデターといひ方は語弊がありますね。合法的に権力委譲を成し遂げようとしているわけです」

「難しい言葉を使えば賢しげに聞こえるとでも思つてゐるのか、小僧」「とんでもありません。ただ、どんな手段を用いてでも、誰かに権限を集中させて、独裁的に事を運ばない限り、文化祭の成功は望めません。それはあなたにもお分かりのはずです」

「緊急避難としての独裁？ どこかで聞いたような詭弁ね」

「事態が沈静化するまで独裁的権限を当局が掌握する、今だつて世界中で行われていることですよ。アメリカですら、ハリケーンや地震災害が起きれば、非常事態宣言下で民主的統治が一時停止されます」

「今がその非常事態つてこと?」

「そうです」

「大げさね、たかが文化祭の危機でしょ? 生徒の命が危機に陥つてるわけじゃないでしょ? ほっとけばいいじゃない。あたしの恥じやないわ」

「ええ、現生徒会執行部の恥です。あなたの恥じゃない」

俺が素直に認めてやると、生徒会執行部の面々は、会長ばかりに痛そうな顔をするか、むつとした顔した。俺は構わず続ける。

「でも、それを救う立場に立てると衆目一致した人間がそれに立ち向かわなければ、その人間の恥に代わってしまいます。あなたの恥にね」

「また詭弁。聞き飽きるわ」

綾華さんは露骨に嘲笑する。それも俺は構わず続ける。

「これでもかなり譲歩しているつもりなんですがね。こうして交渉しているだけでも

「偉そうに……どこが譲歩だ、聞いて呆れる」

「話し合いで解決しようとはしているじゃないですか。別にこんな面倒な手段、採らなくても良かつたんですよ

「……」

なんとなく俺のいいたいことは察したようで、綾華さんは秀麗な眉目に氷の気配を浮かべながら、俺を睨みつけた。

「生徒指導主任やその上の校長にまで話を通し、かつ生徒会執行部の承認さえ得てしまえば、一時的に生徒会の独裁的権限をあなたに一方的に押し付けることなんか簡単だったんです」

そういうて、俺は担任をチラッと見た。担任は深刻そうな顔をして黙っている。

実のところ、既に生徒指導主任には話が通っている。そして担任はそれを知っていた。

「でもそれじゃあまりに一方的ですから、衆議を決してのことだとあなたに理解していただける場を設けようと思つたんですよ」

「……それで緊急招集だったわけ」

「そうです」

すべての黒幕は俺だ、と宣言したことになる。

綾華さんはじつと黙つて俺を見ていたけれど、やがて組んでいた足先で、触れそうなほど近くにあつたいすを軽く蹴飛ばした。いすに座っていたのは執行部の役員をしている三年生の男子だったけれど、綾華さんの迫力におびえきつてしまつていて、その衝撃にも黙つて耐えていた。

「……どういうつもりだ、お前は。たかが実行委員の一年の分際で、生徒会を乗っ取る気か」

綾華さんの怒氣をこめた声。俺はあえて笑つて見せた。

「とんでもない。文化祭実行委員として、文化祭のことだけを考えれば、これ以外に手はないと思つただけですよ」

「この後の生徒会がどうなつてもか」

「どうせ改選です。文化祭が終われば現執行部は自動的に解散、選挙後の新体制に今後のことは任せねばいいでしょう。今は文化祭ことだけ考えればいいと思いますが」

「ここまで権道を用いて、悪例を残すだけだとは思わないのか」

「現執行部がしつかりさえしていれば、こんな非常手段が通る訳がないません。むしろここまで事態を悪化させた責任を追及したいくらいだ」

俺はそこまでいようと、執行部、特に会長に視線を飛ばした。喧嘩を売るとき同様の目で。

誰も、俺と目を合わせなかつた。

いや、一人だけ、真正面から俺の視線を受け止めた人がいた。

会計氏だった。

三年生で一番接觸が多かつた人、生徒会会計氏。

俺のことを早くから認めてくれていた人だけれど、この人はさすがだつた。会長の隣に座りながら事態の推移を見守り、ここに来て俺の本来の企図に気付いたようだ。余裕たっぷりの笑みを浮かべ、ひとつうなずいた。

やつぱりこの人には勝てない。そう思つたけれど、もちろん俺は顔には出さない。

「そろそろ」

と、会計氏が笑顔を消して発言した。

注目が一気に会計氏に移る。

「諦めたらどうだ、永野」

やる気がない執行部を一人で支えてきた人の発言だ。重みがある。綾華さんもこの人の発言には聞く価値があると思ったようで、高々と組んでいた脚を外した。

「僕も君が本気で取り組んでくれるなら最大限の協力をしよう。佐藤のいうとおり、ここまで事態になつてしまつたのは僕らの責任だ。お詫びの言葉もない」

悲痛なほどに、会計氏は率直だつた。

「受験生という立場はいい訳にもならないだろう。過去の先輩たちはそれでもやつてきたんだ」

会議の空氣が沈痛になる。会計氏が旧帝大系の難関を目指していることは有名な話だ。それがいい訳にもならないと自ら断罪した。「遅まきながら、文化祭成功のために動いていきたい。そのためには、まず体制から大きく変えていくのが一番だろう。非常時だ、多少の権道も許されるさ。目的のためにはあらゆる手段は正当化される、政治学の基本だ」

会計氏が俺の計画に乗ると宣言したことで、空氣は完全に入れ替わつた。

この殺伐とした会議が終わつてくれるなら、どんな結論が出てもいい、と思つた人間も多かつただろう。

「佐藤、黒幕としてこのクーデターを教唆した罪は償つてもいい。

当然だが」

会計氏は俺に厳しい視線を送ってきた。

怖い目だった。

俺は姿勢を正してうなずいた。何をいいだす気かは知らないけれど、ここまで事態を作り出した責任は取るつもりだ。どんな形でも。停学だろうがなんだろうがどんとこい、という、変なクソ度胸だけはあった。

会計氏はその俺の気配に苦笑したかったらしいけれど、そんなことはおぐびにも出さず、続けた。

「永野がリーダーとしての責任を負つてくれるなら、君には実務面すべての統括役になつてもらひ。会計分野から企画の取りまとめ、イベントの采配まで。今までとは桁違ひの仕事量になる。覚悟は出来ているか」

将軍役の綾華さんに対し、それを補佐し実務を統括する参謀長役を俺にやれというわけだ。

「……いいんですか、それで」

俺が注意深く反問すると、会計氏は秀才といふ言葉を形にしたような顔に強気な笑みを浮かべた。

「君以外の誰が永野の抑え役をやれるというんだ？ 実務面の統括というのは、実はそれが一番の役目になると思うんだけどね。僕は少なくともそんな役回りは『ごめんだ。みんなもそうだろう？』

会計氏が周囲を見渡すと、人々はあわててうなづいた。

「ということだ。これは引き受けてもらう。君に拒否権はない」

にやりと笑う会計氏に、俺は黙つて頭を下げた。

会計氏に屈したように見えるだろう。実際屈する気持ちだったんだから、そう取られて構わなかつた。

それにしても会計氏は凄かつた。ここからは、彼の独壇場になる。

「さて、

と会計氏は綾華さんを見た。綾華さんは会計氏を見つめたまま、無表情だった。どこまでも冷たいその顔は、そのまま美術館に展示できそうなほど美しく、気高い。学園のアイドルといわれたり、不良の女神といわれたりした人だけれど、この時の美しさは尋常じゃなかつた。

「外堀は埋まつた。後は君のやる気だけが問題だ、永野」
その美しさに気圧されもせずにいつてのけた会計氏も、すごい人だった。周囲の高校生とは格が違う。

「僕は以前の君なら、こんなことはいわない。無責任にもほどがあるからね、素行不良の君にすべての権限を譲ろうなんて」
まっすぐに綾華さんの目を見て揺るぎもしない。線の細い感じのする人だけれど、芯は強いにもほどがある。

「でも、僕は知っている。実行委員になつてからの君を。物事に対して君がどれだけ真摯で、人を惹きつける魅力があるか。君以外に適任はない。佐藤にいわれるまでもない」

綾華さんはついに目を閉じた。一度ほどいた腕をもう一度組み直し、きゅっと口元を結んだ。

会計氏も口を閉じた。

俺は当然何もいわない。

他の誰も何もいえず、室内はしんと静まり返つた。身動き一つ出来ないのは、動けばいすが音を立ててしまうからだ。

異常な緊張感の中で、多くの人が視線をさまよわせた。

綾華さんを見て、会計氏を見て、俺を見る。主要人物はこの三人に絞られ、他の人物には視線すら向けられない。ここで一番のV.I.Pは生徒会長のはずだけれど、この部屋では既に過去の人になつている。

やがて、綾華さんが目を開けた。長いまつげが物憂げに揺れる。組んでいた腕を再びほどいた。

会計氏がじっと見つめる。

綾華さんは一度俺の顔を見た。表情に変化がある。目に、力と決意がある。極限まで冷たかつた表情に、血の色が差していた。

俺は思わず立ち上がりかけたけれど自制し、じっと座つたまま、こくりとひとつうなずいた。

綾華さんは俺からないと視線を外し、立ち上がる。

「……条件は一つだけ」

玲瓏な声が部屋の空気を震わせる。

「聞こうか」

会計氏が綾華さんの声に応える。余裕たっぷりの、大人の声だった。

「この場にいる人たちの全面的協力。命令つていい方は嫌いですけど、指示は出しますから。どんな指示だらうが、従つてもらいますけど、それが受け入れられますか」

「受け入れられない奴がいたら今すぐここを出て行け」

会計氏のセリフは早くて激越だつた。意外なほど大きなその声に、首をすくませた人はいたけれど、出て行こうとする者はいなかつた。逆らえるような、会計氏の雰囲気じやなかつた。今まで感じたことが無い、威があつた。

「……ということだ、『新』実行委員長。よろしく頼む」

そういふと、会計氏は立ち上がつた。

「佐藤」

呼ばれた俺は立ち上がつた。

「君は実行委員会の副委員長であり、執行役だ。この祭りをまとめ上げて見せる。出来ないとはいわせない。やれ。命をかけろ」

「はい」

短く、でも大きく返事をした。この人は本当にすごい。場を完全に支配していた。

「というわけだ、みんな。僕はこの一人を力の限り支える。みんなも覚悟を決めてくれ」

立ち上がっている三人が周囲を見回す。

その場にいる誰もが、少なくともこの三人に従う以外に道はないことを悟つたらしい。

やがて、誰からともなく拍手が起きた。それはすぐに全員の拍手となり、生徒会室を満たした。

「助かりました」

開口一番、俺は会計氏に頭を下げた。

緊急ミーティングはあの後、一転して新実行委員会の業務振り分けの場になつた。

あらかじめ作つてあつたロードマップを配付して、俺が説明する。会計氏がそれに適宜突っ込みを入れ、綾華さんが振り分け先を指示する。

一気に事は回り始めた。

今までの沈滞していた空気がウソのように、生徒会室は活況を呈した。

「部門分けはこれからもどんどん変えていくわ。全体の状況はあきちゃんがまとめて、次の日にはみんながわかるように掲示しておいて。みんなそれを必ず確認して、どんな指示が出ても対応できるようにしておくこと。いいわね」

綾華さんのさばき方は見事で、三年も含めた全員が従つた。

それが終わつたのは6時前で、そこで一旦解散になつた。

「明日は放課後になり次第ここに集合。当田まであと10日も無いんだから、勢いで乗り切るわよ。いいね」

綾華さんの掛け声に、全員がそれぞれの表現で返事をした。

解散後、まだしばらく興奮冷めやらぬ人々の熱気の中で、各担

当がどんどん質問をぶつけてきた。何しろ全体像がわかっているのはこの時点では俺だけだったから、目が回るような忙しさだった。それも大体收拾が付いて、本格的に解散になつたのは7時ごろ。それから校外へ出て、俺、綾華さん、そして由紀が別の場所に移つた。

例の、国道沿いの喫茶店。

そしてその喫茶店には由紀のお父様もいた。あらかじめ遅くなりそうなことを連絡していた由紀が、その場に呼んでいた。由紀としては駐車場でちよつと待つていてもらつつもりだつたらしいけれど、そもそも行かないだろうという俺と綾華さんの言葉で、急遽同席してもらうことになった。

そして、俺たちが頼んだコーヒーや紅茶が席に回つたところで、会計氏が合流した。

会計氏が座つたところで、俺が頭を下げた、という流れ。

会計氏は苦笑いしていた。

「何が始まるかと思つたけど、まさかクーデターとはね。恐れ入つたよ」

「すみません、事前に相談できれば良かつたんですけれど」

俺が謝り、綾華さんも頭を下げた。

「猿芝居にまで付き合つてもらつちゃつて、ありがとひいざこました」

「永野まで謝らなくていいさ。どうせ、考えたのは佐藤なんだろう？」

「ええ、まあ」

頭をかいた。申し訳ない上に、この人は芝居を芝居とわかつた上で、これ以上にない乗り方をしてくれた。

「金森先生は知つていたのか？」

と、うちの担任の名前を出した。俺は首を振る。

「知りません。生徒指導主任は知つてますけれど、こういう策謀は知つてゐる人間が少なければ少ないほど成功するつていつて、内緒に」

「あの狸ならいいそうだな。孫が出来てもそういう茶田つ氣は失せないんだな」

そういうて笑つたのは、意外にも由紀パパ。実は生徒指導主任の教え子だという。

「新任当時から既に狸だったよ、あれは」

由紀パパは事情は良く知つていて。なにしろ、当事者たちが昨日話していた計画を、この人は由紀からすべて聞いている。

「なるほどね。でも、いいアイディアだ。組織を変えるには、上を変えるしかない。下がどんなに頑張つても限度があるからな」

「それをどうやって変えるか考えたんですけど、あんなのしか浮かびませんでした。会長には申し訳なかつたんですけど」

「いいや、あれだつて立候補してまでなつた地位を放置していたんだ、当然の報いだろ?」

会計氏は容赦が無い。

「むしろ、主任から強権発動してもらつた方が早く進んだだろ?」
わざわざあんな芝居まで打つてくれてありがたかった。あれで生徒の自主性の牙城は護れたんだからな」

「そこが問題だつたしね」

といつたのは綾華さん。

「あたしも教師からいわれてやるなんて、形だけでも嫌だし」

「という綾華さんの強い希望があつたんで、あの芝居を打つたんです」

「打てただけすごいよ。普通の高校生はああいう芝居は思いつかないし、思いついてもやらない。成功する訳ないからな」

下克上で構わない。要するに、言い出しつペが生徒で、引き受けの生徒で、あくまで生徒主体で起きたクーデターだったという事実が欲しかった。

「僕が反対に回つたらどうする気だつたんだ?」

「その時は仕方ないですから、先輩にリーダーになつてもらう計画でした」

「おいおい、待ってくれ」

会計氏が本気であわてた。俺の隣に座つて大人しくしている由紀が、それを見て嬉しそうに笑っている。

「その時はあたしが涙ながらの大演説を打つ予定だつたんですけどね。残念、見逃したね」

綾華さんもそういうながら愉快そうにけらけら笑つている。

「永野に泣かれちゃ断れないな……主任を落として予防線を張つて

おいて、俺まで視野に入れた三段構えの策か。やるな佐藤」

会計氏はため息をつきながらいった。俺は黙つて頭を下げる。何をいっても失礼になりそうだ。

「でもそれをすぐに理解できるのって凄いね」

綾華さんが手放しで褒めた。非常に珍しい。

会計氏は別に嬉しそうでもなく、追加で運ばれてきたコーヒーカップを手に取つた。

「自分では考えつけなかつた策だ。見抜いたからといつて偉いものでもないさ。とっさに芝居に乗れた自分の演技力には、我ながらちよつと感心したけど」

「かつこよかつたです、とっても」

昨日から目をきらきらさせっぱなしの由紀が褒めると、さすがに会計氏は嬉しそうだつた。打算が感じられないだけ、由紀の賞賛は素直に受け入れられるんだろう。でも、俺は知つている。

「とかいつて純粋そうに褒めてる由紀ですけどね、先輩が反対したらリーダーになつてもう策、出したのにいつですかね」

「ば、ばらしちゃうんですか」

由紀が一転してあわてる。綾華さんも暴露に乗つてきた。

「あたしがする予定だつた涙の演説、この子が原案だからね。かわいいからつてだまされちゃダメよ」

「ひ、ひどいです、綾華さんまで」

「事実だしー?」

「晃彦くんもひどいです、何となくいつただけなのに『採用!』と

が叫んで勝手に私の発案にしちゃつて

「事実だしー？」

綾華さんのまねをする。由紀が本氣で悔しがり、怒り出したから、あわててなだめる。

「あの話し合いに参加してたら誰でも思いつくことだよ。由紀が考え付かなくとも、結局はそうなつたって」

「なつただろうな」

とつまらなさそうにうなずいたのは、当の会計氏。

「僕がそこについても同じことを考えただろっ」

「それにも」

と綾華さんが強引に話の方向を変えたのも、これ以上由紀の機嫌を悪化させないためだろつ。

俺の余計な行動でお手間を取らせます。

「ずいぶん迫力あつたね。あたし、先輩があんなに凄い人だとは思わなかつたよ」

それは全面的に同感。「くくくとうなずくと、先輩は苦笑した。

「僕だつて思わなかつたさ。舞台が人を作るとかいうけど、まさか当事者になるとはね」

「もう高校生のノリじゃなかつたもんね。あきちゃんを睨み据えたあの視線つてばもう、大人の男つて感じで」

「やりやがつたなこの野郎つて思つてたからね。厳しい目に見えたとしたら、それはかなり本気が入つてる」

「うわあ、本氣で睨まれてたんだ、俺」

「怖かつた？」

綾華さんが嬉しそうに聞いてくる。人が怖がるのがそんなに嬉しいですか。そうですか。

「怖かつたです、かなり」

正直に答える。

「未来の番長をびびらせたんだから、たいしたもんだわ」

「ちょっと待て、その呼び方をするなとあれほど」

「しらなーい」

本当に楽しそうだ、綾華さん。

「すじいな、君らは」

と、由紀パパが不意にいつた。

全員が視線を由紀パパに送る。

由紀から見て俺の逆隣に座っている由紀パパは、温厚な顔に温厚な表情を浮かべていた。

「自分が高校生の頃のことを考えると、君らが途方もなく大人に見える」

いいながら、由紀の頭をなで始めた。

「この子もこうこう大人しい子だから、大した経験もしないまま卒業してしまうんじゃないかなと思つていて。どうも杞憂だつたらしい」

そういうと、笑う。

「君らがそばにいるなら、この子もいろんな経験ができるそうだ。安心したよ」

「……それ、どうなんでしょう」

と疑問を呈したのは綾華さん。

「普通、こういう事態に娘さんが出来くわしたら、逆に切り離そつとするのが親心ではないかと」

「安全に場所に置いておきたいって？ それは中学生までの話だろう」

由紀パパ、笑顔を崩さない。

「世間の裏なんて人間の感情が渦巻いている世界だ。その一端にも触れずに学校を出てしまつたら、いざ世間に放り出されて何が出来る？ 少なくとも君らの策は後ろ向きじゃない。ポジティブで建設的だ。その場面に立ち会つことが出来たんだ、幸せというべきだし」

由紀の頭をなでていた手を下ろす。

「そういう人間と親しくなれたということは、これからも色々な経験が出来るということだ。立ち直れないほどつらい日にも遭うかもしれないが、それもいい経験になる。高校つてのは、そういう経験

をするためにいくものだろ？」「

全員、大人の意見に一言も無かつた。この人がいふんだから、そ
うなんだろう。そう思わせる説得力があった。

「まあ、私の興味はむしろ、この子が佐藤君と同じまで進んでいる
のかにあるんだがね」

爆弾発言に、俺も由紀もどつさに反応できなかつた。いち早く反
応したのは綾華さん。

「あらおじ様、ご存じなくて？」

「それは僕も興味があるな」

「何乗つてるんですか、先輩まで！」

俺がどうにか突つ込むけれど、そんなもので止まるはずもない。
「わたくしはむしろおじ様が彼との関係を認めているかのようにお
っしゃる、その事に興味がござりますけれど」

綾華さんがいきなり超お嬢様モードに切り替わる。

こうなつたらもうダメだ。止まるはずがない。

由紀が青ざめていくのがわかる。でも対処のしようがない。
あきらめる由紀。

「認めるが、こんないい男、次にいつ由紀が捕まえられるかわから
ないしね」

「あら、理解のあるお父様でいらっしゃいますわね。ではわたくし
も誠意を持つてお答えいたしますわ」

「何の誠意だ何の」

「この男、実はこう見えて意外や意外、バカツブルを地で行く困り
者でございまして」

「困り者ってなんだよ」

「ほつ、詳しく聞こつか

会計氏もここぞとばかりに身を乗り出している。この人、実はこ
うやってどんな話にも乗つていくのが趣味なんじゃないのか。

44(前書き)

仕事の都合で1週間ほど休載します。申し訳ございませんが、再開をお待ちいただければ幸いです。

もともと、生徒会のやる気が無くても、校内の文化祭熱は高かつた。

何か出し物を準備しているクラスは当然盛り上がるし、文化部はここが活躍の場とばかりに気合が入っている。クラブ以外のバンドやアカペラグループも舞台が準備されていましたから当然の盛り上がりだつたし、早くから看板などが作られ始めていたから、ビジュアル的にも文化祭の雰囲気が出来始めていた。

盛り上がる雰囲気の中で、催行者であるはずの生徒会だけがむしろ孤立していたといつていい。

それが変わった。

生徒会長が失脚、代わって永野綾華というこの学校の顔ともいすべき女が新たに文化祭のトップに就いたという話題は、翌朝には校内を駆け巡っていた。

いくらなんでも知名度で俺が綾華さんに及ぶはずもなく、クーデター劇の配役は綾華さん、会長、会計氏ということになつていたけれど、綾華さんまで陥れてこの事態を作つた黒幕が俺だ、という話はまことしやかに流れてい、もともと綾華さんもクーデター劇の計画段階から中心人物だつたという話は当然極秘だつたから、俺には黒い噂が立つことになった。

腹黒い生意気な下級生に仕組まれたものの、最後には自ら文化祭を背負つて立つことを決めた学園のアイドル。

そのアイドルを陥れ、会長を失脚に追い込んだ学園の悪のフイクサー。

「フイクサーねえ、お前がねえ」

友達が感心している。

「どうせあれだろ、あまりに上にやる気が無いもんだから、ぶち切れ文句いつてる内に、引っ込みつかなくなつたんだろ」

俺を実際に知っている人間はそういう評価になるらしい。

「生徒指導主任や校長に話を通すとか、大ばらだろ?」

「まあ、なあ」

俺は笑つてとぼけたけれど、主任には話が通つていたし、こんな大事になるんだから、当然主任は校長にまで話を通してはいたはずだ。大ばらどころか、まったくの事実だ。でもいわない。いえるわけがない。

「永野先輩を立てるのはいいけどさ、後が怖いんじゃないの?」
と聞いてくる友達もいた。

「罵にはめて引き受けさせちゃったんでしょう? 報復とかさ」

「あの人は」と、一応弁護する。

「自分で引き受けたものの責任を他人にかぶせるようなまねはしないよ。どんな形でも、その人自身が受けるといつたんだ。そのことで俺が報復されたりとか、そんなちっちゃい人じゃない」

それどころか、クーデター計画の立案者の一人なわけだが。

聞いている方は感心していた。さすが永野先輩、などとつぶやいていた。

実はクーデター計画を最初に言い出した、あの由紀との廊下での会話に続いての話し合い。

場所は例の喫茶店だった。なぜかあそこは密談がしやすい。

その話し合いの場で、俺は多分これが企画倒れになるだろうと踏んでいた。というのも、「文化祭でトップを張るのは綾華さんしかいない」という発想から生まれたことなので、綾華さんが上に立つことに「うん」といわない限り、成立のしようがない。そして綾華さんがこれに乗つてくるなど、俺は想像もしていなかつた。

「よくまあそういう……」

最初はさほど具体的な計画があったわけじゃないけれど、生徒会執行部から根こそぎ権限を奪い去ってしまうクーデターという発想は、綾華さんを呆れさせた。

「せっかく校内は盛り上がってるのに、その勢いを生徒会がそぐとかりえないじゃですか」

「あたしはその発想がありえないと思つわよ」という話の流れから、綾華さんが引き受けないと断言するまで、わずか5分。

あまりの話の早さに、俺も由紀もぽかんとした。

「……なによ」

「いやあ……まさかこんな簡単に引を取るとほ思つてもみなかつたんで」

「なにいつてんのよ、考えた張本人が」

綾華さんは飄々とした態度で甘い「ヒーヒー」口をつけた。

「こんなことを思いついちゃいました、えへへ、で終わるんじゃないかと」

「終わらせてやつすんの。」の盛り上がりを大事にしたいんでしょう？」

「したいですよ。俺だつてこいつ祭りでみんな一緒に熱くなるっていうの、好きですし」

「あたしだつて好きだよ。上からの命令でやらされるのは嫌いだけど、みんなと一緒につて、結構好き」

「でもちょっと意外です」と、由紀がいう。

「私も、綾華さんはトップに立つとか絶対に引き受けないと思いました」

「うーん、まあ、そりゃそつか」

「なんで由紀がいうと納得するんすか」「そりや自分の胸に聞いてみなよ」

綾華さんがにやにやしながらいった。

思に当たる節ならこいつもあるから、反論せざる黙つてこる」とした。

「あたしはね

と、綾華さんはテーブルに肘を付いて俺と由紀を見比べるよつて話し始めた。

「田立つことが好きなわけじゃないし、トップに立つとか柄じゃないからしたくないの。でもね、やりたくないってのと、やるべきことのを、一緒に考へられるほど馬鹿でもなにつもつだわ」「きれいな顔に、さつきまでのにやにやは無い」。

「まわりを見る限り、まともに文化祭回せそうな奴なんて、あたしとあんたと由紀の三人組か、会計やつてる先輩くらいしか見当たらぬいじやんか。会計の先輩もあきちゃんも、誰がトップに立つたつて仕事はばりばり出来るだらうけど、あたしは無理。あたしがトップ譲つてもいい、こここの下なら働くつて思つたのは、あきちゃん、あんただけよ」

じつと田を見つめられながらそんなことをいわれたから、昨日の畠山の動きがよみがえつてきただくなつた。慌ててその心の沸き立ちを抑え込む。

「そしたらさ、客観的に見て、あたしがやるべきことって、上に立つちやうことだよね。あきちゃんはあたしの下がいこつてこんな計画持ち込んでくるわけだし、先輩は流れ次第でどうとも協力してくれるだろう」「……その通りだと思つま」「ええ

「そう思つたから、あきちゃんも計画立てたんでしょう？」「ええ」「じゃあ、まだ仕事がしたいなつて思つてる私としては、やめ」とはひとつなわけよ

テーブルから肘を上げて、綾華さんは背もたれに体を預ける。「クーデターにでも何でも乗つてやるわ。上に立てつていうなら立つ。自分の役割からは逃げない。そういう生き方をしたいって、決

めたから」

綾華さんの口調は力強かつた。

「それが大人つてもんでしょう？」

綾華さんが微笑んで、俺はすべてを理解した。

綾華さんは、大人になりきれない広瀬さんを捨てた。それは、自分の子供っぽさとの別れでもあつたんだろう。

大人の定義なんか俺は知らないけれど、少なくとも、自分が責任を負うべきと感じたら、そこから逃げ出さずに全力を尽くす覚悟を持てる事は、大人というもののひとつのかたちだ。

綾華さんは俺から見れば充分大人だけれど、ここぞ明らかにその上を行こうとしている。

「すごいです。あなたと知り合えて、本当に良かった」

俺は思わずそう口にしていた。

綾華さんは途端に胡散臭そうな顔をした。

「……なにそれ、気色悪い」

「いうに事欠いてなんてことを」

いきなり否定されたので反論したけれど、照れ隠しなのだらう。でも気色悪いはないとと思う。

「正直にいつただけですよ。綾華さんの下で働くなら、死力を尽くしますよ。本氣で」

「あたしも」

と、由紀が興奮した声で乗つてくる。ただし、相変わらず声そのものは小さい。

「出来ることなら何でもしたいです。綾華さんと働くの、凄く楽しいんです。自分が高められる気がするんです」

「おおげさだなあ」

由紀がいうと素直に照れる。なんなんだ。

「でも、そう思わせる力がある人だから、俺は上に立てたいんですよ。人をまとめ上げるカリスマって、こういうことだと思います。カリスマがある人じやなきや、今の文化祭は救い上げられない」

「受けた今になつて褒めたつて仕方ないでしょ」

綾華さんは顔やスタイルを褒められることには慣れていても、人格や才能を褒められるのには慣れていない。話を切ろうとした。

「まずはどうやって権力を奪うか。それから、権力を奪った後に何をするか。それを話し合いましょ」

照れ隠しなのか、本気でうざくなつて来たのかはわからないけれど、綾華さんがせつかくその気になつてくれたので、俺たちはそのまま悪謀に知恵を巡らすことにしてしまった。

生徒会クーデター計画はいつしてわざか40分ほどの話し合いで出来上がつた。

クーデター成功後の文化祭準備の進め方、ロードマップは、解散した後、家に帰つてから作つた。どう作ればいいかなんてわからないうから、力ケスさんによく清書を頼まれてはパソコンに打ち込んでいた、土木工事の工程管理図を参考にした。

何をすればいいかは、資材関係の書類を散々作っていた俺には多少わかる。それと去年の文化祭計画書を照らし合わせて、項目を挙げ、図面に書き起こしていく。線で結んだそれらに、それぞれの作業にかかる時間を書き込み、全体の行動予定を一枚の図面にしていく。

やつてみると楽しい作業だつたけれど、残念なことに時間がない。病み上がりの自分の体力にまだまだ自信が持てない時期だから、睡眠時間は最低限欲しいところで、それも考えて図面はぐく簡単なものにした。

もつとも、土木工事の工程表と比べれば文化祭の工程管理なんて大した量にはならない。それに時間的な予定表を線引きしてしまえば、ある程度全体は見通せる。

こんなにバイトの経験が役立つとは思つていなかつたから、なんでもやつてみるもんだなあ、と我ながら感心してしまつた。

それを引っさげ、さらに予算関係の書類に、自動生成のグラフなんぞをちょちょいと添えて見栄えを良くしたものをくつつけた物を準備し、翌日のクーデターに臨んだわけだ。

予算関係の書類をいじったものは、生徒会執行部がどれだけ文化祭のことを知らずにいたかという証拠として、えげつなく使わせてもらつた。

これも、工事の完工検査の時に役所に提出する書類を5分で改造したもの。

本当に、バイトなんてやっておくものだ。

こうして準備を整えた俺たちは、翌日のクーデターに見事成功することになる。

文化祭初日までの日々は、まさしく怒涛の展開だった。

「最近、ほとんど記憶ないのよね」

綾華さんがぐつたりしながらいったのはいつのことだったか。とにかく忙しかった。

休み時間はひたすら携帯や書類との格闘。放課後になれば校内中を駆けずり回った。

綾華さんもこの状況で上に立つてしまえば体力勝負だ。計画分野は俺と会計氏で引き受け、綾華さんは現場の人と化した。

たとえば体育館を使ってのイベントについては、設営の打ち合わせからリハーサルの手配、資材管理に安全管理、人の動きのチェック、許可書関係のチェックなど、ちょっと思いついただけでもどんどんやることが出てくる。

そんな中で、由紀が大活躍だった。

交渉」とは苦手な由紀だつたけれど、緻密なメモ取りやきれいなノート作りで俺を驚かせた由紀の才能は、綾華さんとペアを組ませて花開いた。

綾華さんは自分の予定を組んだり、渡された書類をチェックしたりということがどうも苦手らしかったけれど、由紀が完璧にフオローして見せた。綾華さんが神出鬼没の動きで人々を驚かせ、完璧な手配振りで職員にも脅威の高評価を植え付けた、その最大の功労者は、綾華さんの側近として常に張り付いていた秘書の由紀だろう。

「そうか、渋谷は秘書役がベストポジションだつたんだ」

最初は俺のアシスタントとして由紀を活かそうとしていた会計氏は、綾華さんのそばで生き生きと働いている由紀を見てひざを打つた。

「危うくあの才能を活かしきれなくなるところだった」

そういうて、由紀を自分の秘書にと引っ張つていった綾華さんの人を見る目をしきりに褒めていた会計氏。

ではこの人のベストポジションは何かというと。

「君はこれ。明日の6時までに提出ね。出来るはずだよ。ぎりぎり間に合う量しか渡してない」

人事だった。

色々な仕事があつて、色々な作業がある。そして、それに参加する人々も色々。

そういう状況で大切なのは、誰かが一元的に作業を割り振り、采配していくこと。

先輩はこの仕事や作業の割り振りが恐ろしく上手かつた。

俺がどんどん細かい計画を作ると、会計氏は関係者を一通り見回しながら素早く仕事を割り振つていく。この割り振つた仕事の戻り具合が、先輩の予測とぴたり一致するのだ。

「？」

それが凄いと俺がいうと、会計氏は首をかしげる。

「普通に考えればわかるだろ？？」

わからないから、普通は苦労する。誰がどの仕事をやればどのくらいで終わるか、そんなものが正確に予測できれば、立派に企業で管理職が勤まる。

俺はこの先輩のおかげで、企画の実行計画や資材回しの計画に集中できた。

現場の指揮は綾華さんが。その秘書は由紀が。人員配置や資材配置というロジスティクス面は会計氏が。そして計画や企画とその実施といった実務面は俺がそれぞれ担当し、この4人を中心とした組織がごくわずかなうちに整つた。

職員の一人がこの様子を見て作った言葉が、「永野幕府」。

それじゃいくらなんでもセンスがないだろうということ、「永野綾華と愉快な仲間たち」と名付けたのは会計氏だったけれど、残念ながら他の3人からは不評で、定着しなかった。安直にもほどがある、どうせひねるならきちんとひねりなさい、とわかるようなわからぬいような文句をいったのは綾華さん。

文化の日とその前日の一・二日間で行われる文化祭は、むりにその前日の前夜祭を実質的なスタートとしている。

前夜祭といつても夜やるわけじゃない。その日の放課後、明日から文化祭という雰囲気を盛り上げるために、生徒会主催で、文化部や各クラスの出し物の予告ステージが行われる。ここでの出来が後の2日間の客足を決めかねないから、どこの担当者も異常に気合が入っていることが多い。

それぞれの担当から企画は既に上がっていて、資材関係の手配も早くから出来上がっているところが多くなった分、内容を詰めていく時間が多く取れたようで、職員室から「いつも以上の気合だな」と声が上がるほど、前夜祭の企画が盛りだくさんになっていた。

そこで奪い合いになるのは時間。ステージ上にいられる時間もうだけれど、もちろん、準備にも時間は必要になる。さらに順番も重要。先に各クラスの発表、それから文化部の発表に移るのが恒例だけれど、その中でも発表順によつて差が出ることは容易に予想できる。後ろに行けば行くほど時間が押せ押せになり、飽きて帰ってしまう生徒も多いに違いない。

「厳正なる抽選で決めます」

順番決めで、たとえば去年は最後だったから今年はぜひ前半に、とか、所属部員数や実績から考えてうちが前半に来て当然、とかねじ込んでくる各文化部の担当者相手に、綾華さんは頑として譲らなかつた。

綾華さんが難しいとなると、特に見境のない三年生が由紀を狙つた。秘書役でいつも張り付いている由紀から口添えがあれば、まして陰の実力者である佐藤晃彦の彼女ともなれば、どうにかになるとでも思つたんだろう。

由紀は脅迫とも取れるくらいのねじ込みにあつと、即座に俺を呼んだ。初めから自分で対処しようとするな、と俺からも綾華さんからも散々いわれていたからだ。

俺がすっ飛んでいくと、諦めの悪い三年生が由紀を囲むよつこじ

ていた。

「何か御用でしようか」

俺が後ろから問いかけると、三年生は振り向いた。俺の顔を見るなり、びくつとする。

俺は自分では無表情でいたつもりだったけれど、由紀の田撃証言によると「明らかに殺意を感じた」そつだから、まあ、そういう田をしていたんだろう。

生徒会で上級生相手に大批判を行い、さらにクーデターを起こして実権を掌握したという俺の噂が、俺の見られ方を多少変えていたかもしれない。それまでは、喧嘩はある程度強いが無害で大人しい一年生だったのが、今はその気になれば誰にでも牙をむく恐ろしい一年生に変わってしまった。

「待て佐藤、まだ何もしてないぞ」

その三年生は明らかに余計なことをいった。もちろん、聞き逃して相手に逃げるチャンスを与えるなんてことはしない。

「まだ、ということは、何かする気だったんですね」

広瀬さんに脅されたときは喧嘩する気満々だったから大声を出したけれど、今日はその気はない。だから低い声を出した。脅す時は低い声で。カケスの法則。

「何をする気だつたか伺つてもよろしいですか」

にこりともせずにいい放つ俺に、三年生は逃げの一手だった。

「いや、ほんとに、なんでもないんだ。時間取らせたな、わるかつた」

いいつつ後ずさり、そのまま逃げ去ってしまった。

「何がしたかったんだ、あの人は」

俺が首をかしげると、そばに寄ってきた由紀が、俺の片手を取りながら苦笑した。

「こんなに怖い人が凄んできたら、普通逃げると思います」

「怖いか？」

きゅっと俺の指を握っている由紀にさらに首をかしげて見せると、

由紀はふふっと笑つた。

「私は怖くないです。でも、他の人が見たら怖いと思います」

「こんな奴のことが怖いかねえ」

俺がいうと、由紀は俺の指先を握つている手に力を込めた。

「自覚してください。晃彦くんは、もうこの学校のキーマンです。実力で学校の支配階級にのし上がった人です。そんな人ににらまれたら、いくら上級生でも怖いに決まっています」

「支配階級つて……文化祭の執行役がそんなに偉いかな」

「たつた一日で生徒会を壊滅させた張本人が、そんな甘い物の見方をしないで下れ!」いつもそうですが、晃彦くんは自分を過小評価してます

「そんなことない思うけどな」

そう感じつつ、なんか最近こんなことばっいわれてるな、と思つた。

自分自身の評価はともかく、やつてしまつたことについては多少大きく考えておいた方がいいのかもしれない。

綾華さんもこの一件は聞いていて、「何か対策を考えておこうか」とつぶやいていた。

これは、由紀を護るうとか、文化部の暴走を止めようとか、そんなちやちな意図じゃなかつた。そこまで文化部にさせてしまついたら、それは運営が悪いんだろうという考え方。

「制限時間を作ろう」

「ありますよ。持ち時間5分、舞台入れ替えは2分」

「徹底できていないから押すんでしょ? 徹底できてない制限なんてのは制限といわないので、ただの日安じゃんか」「そりやそうです」

「時間がきたら舞台の照明切つちゃいな。PAもカット。入れ替え時間がきたら準備が出来てようが出来てなかろうが照明オン。PAもオン」

PAとは音響のこと。前夜祭の会場になる講堂には、そのまま演

劇の舞台が作れる立派な照明・音響設備がある。

「緞帳はどうします?」

「時間かかるから上げっぱなし。決まってるでしょ」

綾華さんは判断が早い。

「それはそれで文化部から抗議が来ないか? 完成度が下がるとかなんとか」

会計氏が聞くと、綾華さんは断言した。

「いわせない。見てるほうはハブーニングも込みで楽しめるじゃない。だいたい、この程度の制限も守れない発表つて、部活動としてどうなの? まともじゃないよね?」

「こもつとも。

「あたしから通達出すわ。制限時間を観客にもわかるように表示したいけど、出来る?」

「えーっと……時間を表示する……アナウンスじゃダメですか」

「舞台の声を邪魔しちゃいけないでしょ。ああ、でも、時間切れ寸前になつたらそれっぽいBGM流すのはいいね。ビジュアルは無理?」

「んー……なんか考えます」

「よろしく」

リーダーの綾華さんから次から次へとアイディアが出る。俺の仕事はそれを現実化していくこと。

「綾華さん、吹奏楽部からリハーサル見に来ないのかと連絡が」

「ああ、行く行く」

由紀の仕事は綾華さんの動きと時間を管理して、効率的に回していくこと。

「先輩、OHPでたとえばPPTの画面つて投射出来ますか?」

「ああ、USB対応のが1台余つてたはずだな。電源はひとつでもなる。何に映す?」

「白布があれば、ホワイトボードでも出してそれにかぶせちゃえば、舞台の端にも置けますよね」

「白布とホワイトボードな。それも準備できる。手配しておいた
会計氏の仕事は資材や道具関係を手配し、使い回しまで考えて準
備していくこと。

役割がはっきりしてこなから、仕事をしてこてわくわくするへり
い、どんどん回っていく。

何の利益もない、ただ疲れるだけの仕事と思つていたけれど、仕
事をしてること 자체が楽しくなるなんて思にもしなかった。

偶然集まつただけの文化祭実行委員が、ここまで一体になれるな
んて思いもしなかった。

俺は多分、綾華さんや由紀という女性に出合えたことだけじゃな
く、ものすごく幸せな経験をしていく。

文化祭本番までの日々は恐ろしいまでの忙しさの中であつたところ
間に過ぎて行つたけれど、密度が最高に濃くて、疲れることすら樂
しことも思える、短い人生の中で一番面白い時間を過ごしていった。

「申し訳ありませんでした」

ずらりとそろつた文化祭実行委員会新執行部が、といつても4人だけれど、生徒会長を前に一斉に頭を下げた。

日付は少しさかのぼって、クーデターの翌日のこと。

場所は人気のない会議室。会長だけがいすに座り、4人がその前に並んでいる。

仕事を始める前に、俺たちはまずやらなければならないことがありました。

思いつきり屈辱と恥を与えてしまった相手、生徒会長に、まずは謝ることだった。

許してもらいうのが目的じゃない。そんなに虫のいい考えは、いくらなんでも持てない。会長を失脚させておいて、一度謝つたくらいで許されるなら、世界はずいぶん生きやすくて平和な世の中になつているに違いない。

これは儀式だった。新たに自分たちの体制が走り出すためにはどうしても必要な儀式だった。これを済ませておかないと後悔する。綾華さんをトップに、頭を下げた4人をして、会長はじばらく無言だった。

生徒会長は、「目立ちたいから会長になつた」という噂がほとんど事実として伝わっているタイプの人物。去年の会長選では派手なパフォーマンスで話題をさらつたというけれど、確かに目立つタイプのルックス。

最初のうちはそれでも頑張っていたらしい。会計氏も側近として彼を支えていた。

それが、年度が替わって新入生を受け入れる頃には、あまり生徒会に興味を示さなくなってしまったという。

報われない仕事が多かつたからだろう、と、会計氏はあまり理由

については話してくれなかつたけれど、生徒会内部で人間関係が荒れたことがあつて、それで嫌気が差したらしい。

会長はしばらく黙つていた後、会計氏に向か合つた。

「……お前が裏切るとは思わなかつたよ」

静かな声だつた。怒つている声でも、戸惑つている声でもなかつた。

会計氏は俺たちに付き合つて頭を下してくれたけれど、こひらこも戸惑いの様子はなかつた。

「裏切つたつもりはない。前にもいつていただろつ。好きにやらせもらひうつて」

淡々と答える。

「僕は生徒会を第一に考える。君をどう支えるかはその後に来る」とで、生徒会と君の言動が対立するなら迷わず生徒会を取る。その条件で生徒会に残つたはずだ

「……そうだつたな」

会長は軽くうなずいた。

「長い間生徒会を預けつぱなしにしていたのは俺だ。お前に裏切られたとか、思う方が間違いだつたな」

意外に、あつさりと自分の非を認めた。自覚はあつたらしい。

「それでも僕は君が戻つてきてくれることを願つていた。去年の選挙の時、僕が会計に立候補したのは、この地位が一番君を効果的に支えられると思つたからだ」

綾華さんも由紀も、そして俺も、二人の間に何があつたかは知らない。詳しくは教えてくれなかつたから。ただ、一言では表現しきれない何かがあつたのはわかるし、そこに深く食い下がつていく気にもならなかつた。

会長は座つたまま脚を組み、会計氏を見上げた。

「俺はまがい物だ。会長なんて呼ばれて最初は喜んでたけど、仕事はお前の方が出来るし、俺がいなくても生徒会は回つていいく。そのまがい物を今まで支えてくれたお前に、俺から何かいえると思うか

？」

「立場を奪つたのは確かだからね。生徒会会計としては裏切つたつもりはないけど、一人の人間としてはお前に同情もするし、悪かつたとも思つていいよ」

会計氏はそういうと、綾華さんに視線を送つた。

「永野が出てこなければ、それでも僕は君を最大限に使おうとしていたと思う。でも、今の生徒会に一番足りなかつた物が、目の前に現れたんだ。お前にこだわる理由は無くなつたんだ」

「足りなかつたもの？」

「今あるものをぶち壊しても何かを完成させようとする、やる気だよ」

会計氏のその言葉に、会長は答えなかつた。答えられなかつたようにも見える。

しばらくして、会長が口を開いた。

「いつからだ？ 計画が始まつたのは」

「昨日、あの場だよ」

会計氏は相変わらず静かに答えた。

「この3人にしたつて、一昨日考へ付いたらしいしね。僕は彼らに乗つただけさ」

「佐藤」

会長が俺を見る。反射的に背を伸ばした。

「お前が黒幕つてことになつていたな。事実か」

「事実です」

簡潔に答える。

「生徒指導主任辺りに乗せられてのことじゃないんだな」

「主任は知つてはいましたけれど、関わつていません。俺たちの暴走です」

いつもとちがい、べげりと訳をし始められるほど胸は良くなつた。会長はその俺の態度にひとつなずいてみせた。

「永野」

今度は会長の目が綾華さんに向けられる。綾華さんはすうつと背を伸ばしたまま、肩の力が抜けた声で「はい」と答える。

「引き受けたからには最後までやり通してくれるんだろうな」「もちろん」

綾華さんの答えも短い。ただ、声の表情が穏やかだった。喧嘩を売ろうなんて気配は少しもないし、おびえもない。さすが、としかいじょうがない。

「……なら、いい」

会長はふっとため息をついた。

「あの場で俺は圧倒された。その時点で俺は終わりだよ。会長の資格はない。すべてお前たちに任せる」

その会長が、今、壇上にいる。

文化祭の開会宣言。

全校生徒が一度校庭に集まり、開会式が開かれる。短い開会式の中、会長の開会宣言ですべてが開始される。

開会宣言を誰がやるかで、実行委員の中でも意見が分かれた場面があつた。

俺が急遽作り直した計画書の中で、開会宣言は生徒会長の役目になっていた。それに、一部の実行委員が囁み付いた。

というのも、俺たちがクーデターを起こしたせいか、生徒会執行部から実権を奪った以上、執行部の人間には文化祭に関わって欲しくない、と考える人間もいた。

クーデターを実行した俺や綾華さんより、なぜかそれについてこようとする生徒の方が過激なことをいう。

ちょっと前に読んだ本にも同じようなことがあった。幕末維新の時期を描いた小説だつたけれど、長州藩過激派のリーダーだつた高杉晋作や桂小五郎より、その下について追随していた若者の方が、言動は過激で、ついには幕府や薩摩藩と対立し壊滅する悲劇に遭つた。

俺や綾華さんがクーデター劇のときに繰り広げた舌戦やら何やらが、一部の実行委員にはずいぶん格好良く見えたらしい。自分もそうなりたい、と考えるのはまあいいとして、よほど過激な行動に見えたようで、その過激さに憧れてくれて、過激こそ正義と突っ走るうとする者がいた。

やたら難しい表現を使つたがるものその現われだろうな。

「永野がやるべきだろ。開会宣言は旧権力の象徴者が行うべきじゃない。実効権力の象徴として永野がやるべきだ」

2年の男子の実行委員が言い出した時、俺はげんなりした。この人の物言いが苦手で、恥ずかしくなることがある。

「まして文化祭執行の遅延を招いた体制の旧弊を代表する人物の宣言など、聞くに堪えん」

聞くに堪えんのはあんたの演説だよ、と思つても口に出せるはずもなく、俺は黙つていた。別に俺に直接いつていたんじゃなく、計画書を見て生徒会室でわめいていただけだつたから。

その俺の無反応さが気に入らなかつたようで、その2年生はさらに対声になつた。

「彼らが自らの責任を放棄したが故に生じたこの事態に対し、彼らがどう責任を取つた？ 我々が権限を強制的に委譲させるまで何もせずにいた彼らが、開会宣言を行うなど僭越もはなはだしい」

彼が「我々」と表現した辺りでちょっと腹が立つたけれど、それでも俺は付き合わなかつた。

それがさらに彼の口に火をつけた。俺が反応しないのが面白くないのか、逆に俺が反応しないのは論破されるのを嫌つて逃げたと判断して得意になつていたのか。

確かにクーデターの黒幕といわれる俺に論戦で勝つたら、さぞ氣

持ちいいだろ？

「我々が実効権限を持つているという事実は文化祭の歴史に銘記されるべきだ。無氣力体质の執行部を生んだ責任を断罪するためにも、我々の勝利は喧伝され称揚されて然るべきだろ？」「誰の勝利だつて？」

そのタイミングで、綾華さんが入ってきた。

2年生は興奮した状態のまま続けた。

「生徒会執行部に対する我々新勢力の勝利だよ、永野」

綾華さんはそのセリフが終わつた瞬間、持つていた空のファイルを彼に思い切り投げつけていた。

ファイルが見事に腹部に当たつた2年生が、驚きのあまり「おおおっ」と叫んだ、その語尾に重ねて綾華さんが怒鳴つていた。

「あんなもんを勝利とかほざいてる勘違い野郎は今すぐ出て行け！二度と面見せんな！」

大激怒。

みんな唖然としている。

「しかも我々の勝利だ？ てめえが何をした？ 他人の尻馬に乗つてでかい面するとか、どんだけ増長してんだタ！」 あたしとあきちゃんと由紀が考えて実行したんだ、勝手に自分の手柄にしてんじやねえよ、キモイにも程があんだろ」

綾華さんの怒りは簡単には收まらず、しりもちをついて真っ青になつてている2年生男子にさらに罵詈雑言が飛んだ。

「こいつ、他に何をほざいていやがつた？ 知つてる奴、報告しな」鋭い綾華さんの声が飛び、たいていこういうときに相手になつてきた俺が不機嫌に黙つているから、仕方なく誰かが答えた。

「開会宣言は綾華さんがやるべきだと……」

「……てめえ、なに座つてんだ！ とつとと失せろー、この世から消えちまえ！」

綾華さんがさらに噴火した。机の上にあつた紙パックのりんごジュースが飛び、頭に当たりそうになつたそれをぎりぎりで2年生が

避けた。綾華さんがステップを踏むようにしてそいつに蹴りを飛ばす。さすがにそれは避けようがなくて、肩を思い切り蹴飛ばされた彼は悲鳴を上げた。

さすがにこれ以上やつたらまずい。

俺は立ち上がり、軽く綾華さんの肩を叩いた。

「彼と心中する気ですか？ もういいでしょ？」

彼に対する暴行のかどで綾華さんが文化祭実行委員長から外されても困る。

ひと暴れしてすつきりしたのか、綾華さんは素直に手を引いた。ただ、暴れっぱなしで自口解決されても困る。

「どうしたんです、今日は」

暴れたら暴れたで、周囲にフォローしておいてもらわないと、わがままな暴君という印象になってしまつ。それでは困る。

綾華さんは俺の眉間にしわを寄せている顔を見て、ちよつとひるんだらしい。

「ど、どーもしないわよ」

微妙に動搖していた。

「ただ」

と綾華さんが続け、その場にいる誰もがその声に集中した。

「あたしたちは勝ち負けで文化祭負ってるわけじゃないでしょ。文化祭の成功のためだけにあんな事件起こしたのよ。偉そうなセリフは成功してからでしょ」

綾華さんのセリフは、率直でわかりやすい。もっとも、口調がちよつと言い訳がましいのが減点。それでも、綾華さんは続けた。

「それに、開会宣言は生徒会長にしてもらわないといけないわ。はじめでしょ。生徒会の代表は選挙で選ばれた会長だわ。あたしたちは会長から仕事を任せただけじゃない」

「その通りです」

俺が応じた。

「その程度もわからない人に怒るのは当然ですけれど、でも程度も

考えて下さいね

「わ、わかつたわよ」

周囲にも伝わっただろう。俺たちは馬鹿なことをして権限を奪つたけれど、だからこそ筋は通さないといけない。妙な増長なんかしている暇はないんだ。

綾華さんのいうとおりだ。成功してなんぼである。

そんな事件もあつたから、会長の開会宣言は、感無量だった。

「我々生徒会は、ぎりぎりまで体制を整えられずに皆さんにして迷惑をおかけしました。だからこそ、今日と明日の文化祭は、皆さんに心から楽しんでもらえればと願っています。それでは、ここに、第46回文化祭の開会を宣言します」

俺たちの文化祭が、今、始まった。

始まつてしまえば、あまり俺の役割はない。

計画書どおりにことが運ぶなんてありえないし、様々なトラブルは発生する。それを素早く解決していくのは俺たちの仕事だけれど、現場レベルで何かが起きてもたいていは会計氏が即座に解決してしまうし、喧嘩などのトラブルは綾華さんの独壇場だった。綾華さんに付いて回る由紀は忙しさの極地だつたけれど、俺は本部に統括役として詰めていなければならなかつたから、イベントや出し物にも参加できず、生徒会室でぼんやりと座つてゐるだけだつた。

仕事といえば、トラブルが起きた報告が届いたら、その近くにいる誰かに仕事を振つていくだけ。

そのために、校舎の図面の上にカラーマグネットを置いている。マグネットは人間。名前が書いてあつて、誰がどこにいるか、報告があるたびに動かしていく。一目で把握できるようこ、昨日の夜に作つた。

「屋台用のガスが意外に早く無くなりそうです」

という連絡が入れば、資材集積所と化している体育館裏にいる会計氏に連絡。発注が必要なら俺が業者に電話をするけれど、その辺りの準備はさすがに会計氏のこと、万全だつたから、発注という話まで進む例がなかつた。

『予定より余りそうなクラスがあるから動かそう。僕から連絡を入れる』

といわれてしまえば、そのことを資材リストに書き込んで俺の仕事は終わり。

非常につまらん。

一緒に詰めているのは実行委員会の仲間たちか担任、他の教員といったところだけれど、俺以外は詰めっぱなしというわけじゃない。完全留守番役というのは俺だけだから入れ替えるがある。

扉の外に出て行く人々がうらやましくて仕方ない。非常時に対応できるように、幹部クラスの誰か一人は犠牲にならなければいけないとはいえ、自分がそれになつてみると、外が非常に楽しそうな騒ぎなだけにつらい。なるほど、天照大神も岩戸から出てくるはずだ。

「あきちゃんが忙しくなるような文化祭じゃダメなんでしょう？」

といったのは、ごく短時間だけ部屋に来て、俺の愚痴を聞いた綾華さんの言葉。

まったくその通りで、計画屋、企画屋の俺としては、昨日までの準備の段階ですべての仕事が完成していなければならなかつた。俺が今頃じたばたしていたら、文化祭実行委員会の執行役としては失敗ということ。

暇をもてあまして淋しい思いをしているくらいがちょうどいい。などと思つてゐるそばから、楽しそうにイベントに参加している連中からどんどん写真つきのメールが送られてくる。嫌がらせに違いない、とひがんでも仕方がない。各イベントの様子がわかるように画像や動画を送るよつて指示を出したのは俺自身。大墓穴。

俺や他の留守番役のもとに一斉に連絡が入り、携帯メールががんがん入つてきたのは、暁が過ぎた頃だらうか。

内容はまったく同じもので、毎年恒例のものだつた。

『暴走族が来た!』

何しろ田舎のこと。まだ暴走族が生き残つてゐるし、それと内容がどう違うのか素人にはわかりにくい集団もいる。

昔ほどではなくなつたといふけれど、うちの高校にもその集団に属している奴がいない訳じやないし、よほど硬派を気取つていらない限り、高校の文化祭なんてイベントは、彼らにとつては適度な娯楽のひとつだつた。

來るのがわかつていれば対応できそなもののだけれど、全面開放

じやないにしろある程度は一般の人も入れている文化祭で、周辺道路を全面封鎖するわけにも行かないし、警察だつてわざわざ人数をさいてはくれない。

学校側も、体育教師などを中心に対策チームを組んでいるけれど、人數的にも限界がある。

「無駄に刺激しないで下さい。しばらくはスルーとして下さい」

すぐに俺は指示を飛ばした。

「今どの辺で何をしているか、観察報告だけ送つて下さい」

さらに由紀に電話をつなぐ。

「由紀、わかつてゐるね。絶対に綾華さんを抑えて、暴走族に綾華さんを近づけるんじゃない」

『わかつてます、全力で止めます』

その手の人々と付き合いがないわけじゃない綾華さんは、今回必ずターゲットになつてゐる。なにしろ、近在では知られた名家の御曹司と別れたばかりの超絶美少女だ。噂は当然仕入れていると見るべきで、綾華さんの姿を見かけたら、当然のよつと声をかけるだろう。

誰が綾華さんに声をかけようが自由だけれど、綾華さんがまた暴れだと面倒になる。そして、文化祭の雰囲気を確實に壊すだらう暴走族やそれに類する人々なんてものは、綾華さんにとって許せる存在じゃない。

真正面から行かれたら、ただではすまないだろ？

俺は念のため会計氏にも連絡を入れた。

会計氏は校庭ど真ん中のイベントに資材搬入のために出ていて、暴走族騒ぎには気付いていなかつたけれど、俺の話にすぐ反応してくれた。

『まことに。僕も監視に付こうか』

『お願いします』

それからおもむろにひとつメモリを呼び出す。通話ボタンを押すと、相手はすぐ出てくれた。

暴走族やそれに類する集団は、総勢で40名ほどに達していたらしいけれど、見事に消えた。

電話一本で。

学校側はひどく不思議がっていたれど、ちゃんと理由はある。

備えあれば憂いなし。

俺だつて何の対策も考えなかつたわけじゃなし、むしろそれを考えるのが俺の仕事だつたわけで。

「わざわざありがとうございました」

俺は久々に生徒会室の外に出て、今は校内で一番の料理人がいると評判の、料理研究同好会のレストランに設けられた特別席にいた。なにしろ一番人気の模擬店だから、そんな席が取れるはずがないんだけれど、これは特例。このためにあらかじめ同好会に話は通してあつたし、店の場所選びや資材提供では裏から手を回し、便宜を图つていたから、俺が呼んだゲストは大して待つこともなくその席に通された。

「なに、評判どおりの飯が食えて大満足さ。なあ、佳苗」
小さな娘を連れて幸せなパパが目の前にいる。

カケスさんだ。

俺は究極の秘密兵器、核弾頭を仕込んでいたわけだ。

「今日は平日だからまあいいとして、明日はどうする気だ？ 明日の方がああいう連中の集まりもいいだろうに」

どう見ても休日のいいパパだ。平日なのに休みなのは、休日しか工事が出来ないところで仕事をした代休を利用して協力してくれていたから。

「それはそれで考えてあります。協力者もいましたしね」

「そうか。まあ、お前がそういうなら大丈夫なんだろうな」

カケスさんはそういうと、一度とその話題は出さなかつた。愛す

る佳苗ちゃんの前で殺伐とした話題には触れたくなかったのかもしれない。

この人の威力は実に絶大だった。

学校の周囲をゆっくり車やバイクで流し、女子生徒や若い女性教師に声をかけたり、男子生徒を脅しつけたり、グループ同士のいがみ合いを持ち込んでいきがつたりガンをくれあつたりしていった暴走族やヤンキーの類は、カケスさんが娘を連れて駅から歩いてくると、ぎょっとして互いに顔を見合させていた。

カケスさんは彼らと直接触れ合う気はなかつたようで、平然と無視して学校に入ったけれど、一度だけ、彼の存在に気付かずに、しつこく女子生徒をナンパしようとしていたヤンキーの目の前を通過するとき、

「命が惜しけりやほどほどにしておけよ、兄ちゃん」
ぼそつとつぶやいただけだという。反射的に「ああ？」とガンを飛ばして振り向いたヤンキーはその場に凍り付いていたというから、むしろ同情してやりたくなる。

「今日は料理研究同好会だけじゃなく、3年女子有志によるスイーツ専門店からもどつておきを手配します。佳苗ちゃんがタルト好きってのは前に聞いてましたからね」

そういうて俺が出したのは、あらかじめ3年生のお菓子好きが集まって出店計画していたグループからの献上品。こちらも俺が密かに調達面で優遇していく、カケスさん親子用のお菓子を出して欲しいというお願ひも、二つ返事で引き受けてくれた。

その話をすると、カケスさんは笑い出した。

「お前、ほんとに業界向きだよ」

「そうですか？」

怪訝な顔で問い合わせると、カケスさんはおいしそうにタルトを食べている娘さんの顔を幸せそうに眺めながらいった。

「接待の下準備をあらかじめ済ませてきながらヤンキー対策とか、そこまで段取りできる高校生がそうそういてたまるかよ。うちの業

界に限らず、そういう奴が一人現場にいるだけで仕事が上手く回るんだ。いいぞ、その調子で行け」

「はあ、がんばります」

情熱が欠けた返事になつたのは、褒められるようなことをしたとは思えなかつたからだ。少なくとも、裏で手を回して段取りを進めるとか、高校生らしからぬ悪辣な行為といわれても仕方がない気がする。

「そうじゃないさ」

とカケスさんはいう。

「結果がすべてだよ。なにも法に反してゐわけじゃない。取りまとめてるのは力技が必要なときがある。間違わずに使う力つてのは、結果さえ良ければ、悪事にはならないんだよ。使わずに結果が悪ければ、力を使わなかつたことを責められるんだしな」

なにか似たようなことを会計氏がいつっていた氣もする。

「永野家のお嬢ちゃんを頭に担ぎ上げたんだって？」

「ええ、まあ。てか、綾華さんを知つてるんですか？」

「知らんわきやないだろう。本人は知らんが、永野家を知らんでこの土地で仕事が出来ると思うのか？」

「……最近までは知りませんでしたけれど、出来なさそうですね」

「できねえよ。それに評判くらいは聞いてる。親父よりよほど政治家として出来が良さそうだつてな」

「綾華さんの親父さんがどうかは知りませんけれど、出来がいいのは確かですよ。誰も逆らえないし、それでいてちゃんと話は聞くし、人をぐいぐい引っ張つていく力があります。女子高生にしどくのがもつたいたいくらいです」

「お前がそこまでいふんだから大したものだな」

カケスさんは感心している。

「日頃いろんな現場でいろんな大人を見るお前だ。どうも同じ高校生がガキに見えて仕方ないんじゃないかと思つてたが」

図星ですカケスさん。俺の悪いところつすよ、それ。見え見えで

すかそうですか。

「そういうお前がそこまでいうんだから、永野のお嬢も大したもんだな」

その大したお嬢を振つてしまつといつ、史上まれに見る暴挙を仕出かした奴が目の前にいるわけですがね。いや、色々事情があつてのことだ、俺がそれで調子に乗つてるとかいうことは多分ないんじやないかと思いますけれども。

などといえるわけもなく、黙つてうなずいておいた。佳苗ちゃんがタルトを食べ終え、話が終わつてしまつたせいもある。

「さあ、佳苗、今度は何を見よつか。晃彦兄ちゃんにお勧めを聞いてみようか」

力ケスさんが溺愛する佳苗ちゃんは確かにかわいい。奥さんが相当な美人だからか、来年から小学生という年齢で、恐ろしく整った顔立ちが見て取れる。成長したら凄いことになるかもしない。

その佳苗ちゃんが、力ケスさんの言葉にこくりとうなづく。

「そうだな、今からなら職員代表の落語が見ものだけれど、佳苗ちゃんには難しいかな。そうだ、被服部の展示が面白いよ。佳苗ちゃんが将来着てみたくなるような服もあるかもしけれない」

「よし、佳苗、行ってみるか。晃彦、どっちだ」

「出て左の渡り廊下を行つた先です。表示もありますからすぐわかります」

ちなみに次の日、文化祭最終日にして世間的には文化の日になん
キー対策として準備していたのは。

「父さん、その格好……」

真っ青な顔をした由紀が引きまくる中、父さんと呼ばれたスーツ
姿の人物は苦笑いしていた。

「久々に着たからどうもサイズが、なあ」

由紀パパ。確かにサイズが合っていない。無理に止めたジャケットのボタンがはききれそうになっている。

「……ジャケット脱いで。脇に抱えておけばどうにかなるでしょ」

小声で父に詰め寄る由紀に、気弱で地味なメガネ少女の印象はな
い。凄みのある田で無表情に見上げるその顔、ちと怖い。

「おいおい、いくらなんでもこの時期に上を脱いだら寒いだろ？」

由紀パパは華麗に視線を受け流している。内弁慶気味の由紀だから、意外に家の中ではあんな顔をショッちゅうしているのかもしれない。慣れているか、よほどの鈍感じやなきや、あの攻撃は流しきれない。

でも、この人じゃどう考えたってヤンキー対策にはならない。普通の農家だし。

でも、ここは田舎。力のある農家でもある由紀パパのネットワー
ク、なめちゃいかんのだよ。

日本の農家はたいてい政治的にも経済的にも非力で悲劇的な存在として捉えられがちだけど、それはマスコミや農協が作ったイメージ。その方が自分たちにとつて都合がいいから。農家もその方が色々と得だからそのイメージに乗つかっている。

実際そういう立場が弱い農家もたくさんあるけれど、由紀パパはそっちの側じゃない。
どういう側かといふと。

「渋谷さん、久々に来てみましたがけれども、いいもんですね、若人の息吹というものが感じられて」

「近頃の若者には情熱が感じられんと思つてましたが、なかなかどうして」「

おじ様おば様方ご一行。

その中に、綾華さんがいる。

永野家の嫡流として、地元の名士に顔が知られている綾華さんが接待役に最適ということ俺が当て込んだんだけれど、スーパーお嬢様モードに入っている綾華さんの大人あしらいは天才的だ。

「近頃の若者なんてくくりは無意味ですわ。今この瞬間に輝いている彼らを見てあげて下さい。そのために皆様をご招待させていただきました」

大人受けする純真そうな笑顔を振りまく綾華さんは、たぶん心中で俺を呪つているに違いない。時々飛んでくる視線がぐさぐさ突き刺さる。後で引き受けますから今はどうかおじ様おば様方をどうぞよろしく。

この方々、どういう面子かといえば、地元選出県会議員をはじめとする地元名士の方々。近隣農家の若手（高校生の娘がいるような農家は若手もいいところらしい）の顔役である由紀パパが動けば、こういう面子を呼び出すことも出来なくはない。さらに、文化祭のまとめ役が永野家のお嬢だと触れ回つておけば、そのお嬢と顔をつないでおこうと動く政治家だつている。

実は、この提案は由紀パパからのもの。俺からしたらとてもありがたいこの提案で、綾華さんはあまりいい顔はしなかつたけれど、「これをしておけばヤンキー被害が無くて済みます。ついでに学校側の評価まで上がれば、校長辺りも文句はないでしょう。協力して下さい」と俺がいうと、渋々納得してくれた。

ヤンキーたちもこの土地で生きている以上、色々しがらみがある。そのしがらみが嫌で暴れたりしているわけだけれど、政治家や地元

の有力者たちにまともに刃向かつて生きていけると本気で思つてゐる奴はそつ多くないし、県会議員クラスが何人も集まるとなれば、警察も動く。

制服、私服の警官が学校周辺をそれとなく警戒している気配には、一般的の生徒よりヤンキーたちの方が敏感。しかも、交通警察じやなく、警備警察が動いているとなると、ヤンキーで歯が立つ相手じやない。街の不良じよとき、どんな罪名でも簡単にしょつ引いて排除できる連中だ。

ヤンキー避けにこゝれほど便利な存在もない。わざわざ警察に協力を要請しなくても向こうから来てくれるのだから実にありがたい。綾華さんもそれがわかるから、渋々とはいえすぐに納得してくれた。

もつとも、会計氏にこゝそりいわれてゐる。

「……佐藤、外部の政治家を引き込んで後ろ盾にして、「ひちひち」や裏で動いていた事実を正当化しようとしているだろう」

図星ですぜだんな。こいつも見え見えですかそうですか。

「……妙な揚げ足取られて当曰に身動き取れなくなるのも困りますからね。保険です」

「なにか動きがあるのか」

「生徒指導主任の存在が煙たくて、かわいがられてるらしく俺たちが不正を働けば、それをネタに主任の権威に泥を引っ掛けられるつて考えてそうな教師だっていますしね」

「政治家がいれば少なくとも当曰にそれはできないか」

「後でどうなるかがわかりません。当曰、成功のまま終わりさえすればいいんです。ついでに、綾華さんや由紀、あなたに泥をかぶせもしません。すべては俺の責任でやつてこる」とだ

「かつこつけんじやない」

会計氏は俺の頭を軽くはたいた。

「泥くらい僕だってかぶつてやる。泥はここまでで押しとどめる。

それにもしても」

と、会計氏はため息をついていた。

「これを思いついて、あまつさえ実行に移すお前の頭と力が僕は恐ろしいよ。大した奴だ」

「そうですか？ まわりが勝手にお膳立てしてくれるところに乗つかつてるだけですけれど」

「ばらばらに起こっている事実をつなぎ合させて、すべてを文化祭の成功に結び付けていいてるじゃないか。永野の実行力も凄いが、君の調整力も大したものだ」

「そんなもんですかね」

褒められるのに慣れていないから、俺はごによごによと濁した。
「あまり自分を過小評価するな。でかい面をされても腹立たしいが、過小評価されると色々裏があるんじゃないかと疑いたくなるのが人情つてもんだ」

「はあ、気をつけます」

間の抜けた返事をすると会計氏は笑っていたけれど、そういうところも確かにあるんだろうなあ、と思つたし、最近同じようなセリフをやけに身近な人々から何度も聞いていたから、ちょっと今は自分が成長できたりしてるのがもな、と考えることにした。

でも、所詮俺は高校生になつてまだ一年もたつてない小僧なわけで。

仕事の方は、色々な人を巻き込んだおかげで上手く回っていた。
事前の段取りを入念に行つっていたおかげで、本番当日にはほとんど生徒会室から出る必要がないくらい暇で、俺が暇ということは、段取りが上手くいっていたという証拠になる。

その仕事に追われていたせいで、俺は多分一番大事なことを見落としていた。

仕事上のペアとしても、先輩後輩としても、綾華さんと由紀はパートナクトなペアだった。それぞれが足りないとこを補い合うと

どこの完璧超人だという仕事振りを發揮したし、どちらも相手のことが大好きだから関係も上手くいっていた。

俺がいなければ、の話だ。

でも、俺はいるわけで、お互にとつてその存在は絶対に無視できなかつた。

そして俺は自分を過小評価する癖があつたから、そのことも過小評価して、取るに足りない問題だと思っていた。

恋愛なんて経験もなければ想像すら出来ずにいた。その俺がいきなり一人の女性から好かれるという奇跡に恵まれて、舞い上がりてもいたし、浮かれてもいたし、仕事に追われるクソ忙しさにかまけてしまつていた部分も大きかつた。

だから、綾華さんの告白が終わつて、足を思い切り蹴られたところで、すべての問題は解決したと思つていた。

二人の間にどんな会話があつたか、その場にいなかつた俺にはわからない。

一日目の午後、文化部の発表もメインイベントを迎えて、文化祭の盛り上がりは最高潮に達していた。

一番忙しくなるはずのこの時間、いきなり、一人と連絡が取れなくなつた。

『おい、何が起きているんだ』

会計氏から連絡が来たとき、俺はパニックに陥つていた。

綾華さんがやるべき仕事はたくさんある。実行委員長としていくつものイベントの審査員に任命されていたり、生徒会主催イベントの仕切りをしたり、まだ何人か残つていて地元名士たちの相手をしたり、綾華さんでなければ勤まらない仕事がある。

由紀も、綾華さんの秘書としてやるべきことは山ほどある。俺より全然忙しいはずだ。なにしろ綾華さんの行動予定を完全に把握し

ているのは由紀だけで、どの仕事がどれだけ進んでいるかを把握しているのも由紀だけだった。

二人が同時に消えたら、文化祭は最後の最後で崩壊する。

何度も何度も、一人の携帯を呼び出そうとした。でも、どちらも応答なし。

実行委員会のネットワークで検索も開始したけれど、あらゆる場所で「見た」という証言は取れても、「見える」という表現は一つも無かつた。

あの二人がいなくなる。

なにしろ、あの二人だ。強烈極まる存在感の綾華さんと、その陰になりながら不思議と存在を無視できない由紀。どちらも美少女。話題の人物。

悪い想像しか出来ないとしても、誰も俺を責めないはずだ。

「なんだよ、出でくれよ！」

俺は十何度もかの携帯連絡が空振りに終わると、思わず携帯を投げつけそうになった。

それを止めたのは、ちょうどそのタイミングで生徒会室に戻ってきた会計氏だった。

「やめろ佐藤、お前が取り乱して何になる」

低い声で俺の腕を押された会計氏の目は、少しも甘くなかった。「何がが起きているのはわかるが、お前が取り乱したところで問題は何も解決しないぞ。落ち着け」

いつていることはもつともだったから、俺は反発はしない。頭が沸騰したまま、それでも何とか息を吸い、吐き、携帯を握り締めたまま腕を下ろした。

「もともと永野も渋谷も、お前が立てた計画に従つて動いていたんだ。とりあえずその穴を埋められるのはお前の指示と判断だけだ。二人のことは一通り処置をしてからにしてくれ」

「あんた……」

俺はパニックから立ち直っていない。沸騰した頭のまま、会計氏

が何をいつているのか理解できず、つっかかった。

「二人が消えたってのに、んな悠長なこと、よくいつてられるな」「頭を冷やせ」

「つるせえよ、あんたがやりやいいだろ、もとはあんたたちの代の文化祭だろうが、俺は一人を探しに……」

最後まで言い切ることは出来なかつた。

俺は、左頬を殴られていた。

殴つたのは、目の前で俺を厳しい目で見ていた会計氏。暴力沙汰からは、由紀と同じくらい縁遠く思えていたひと。

「落ち着けといつている」

凄まじい眼力だった。俺は思わず立ちすくんだ。左頬の衝撃は脳の反対側まで達し、重い振動で頭がぐらぐらしていただけれど、頬の痛みも頭の鈍痛も、会計氏の目の力に消し飛ばされた。

「今の貴様が動いたところで見つかるものも見つかるものか。まずはやることをやれ。一人のことは貴様以外の全員で探す。いいな」貴様、などという表現をまともに使う人間を初めて見てしまった。いや、俺が使わせたんだ。

頬の痛みと過激な表現で、多少は俺も目が覚めた。

「……ミス・ダンディコンテスト審査員は生徒会執行部から一人代役に出てもらいます。演劇部のゲストは辞退、至急部長に連絡を入れてください。最悪、生徒会長に代役をお願いできるように手配を。地元名士の相手役は先輩がお願いします、サポート役に実行委員の女子を一人連れて行ってください」

矢継ぎ早に指示を出す。会計氏は「わかつた」と短く答えると、どすん、と俺の背中を平手打ちした。

「落ち着いてさえいればお前は大丈夫だ。まずはお前が冷静でいること、それがすべての状況を解決する一番の近道だ。いいな」会計氏のメガネの奥の目が強く光る。

何が起きているかわからないけれど、少なくとも、信頼できる仲間がいてくれる。

確かに、取り乱したところで何が解決するわけでもない。

落ち着け。

会計氏は俺の顔を少し見た後、視線を切つて声を張り上げた。

「さあ、馬鹿な大人どもをだましに行くぞ。僕と一緒に行こうとう奇特な女子はいなか」

俺が取り乱して凍りつきかけた空気が、会計氏の声で解凍された。実行委員長と秘書が消えるという非常事態に、にわかに生徒会室は騒がしくなった。それぞれが自分の仕事以外に何が出来るかを探し始めていた。

「業務の振り分けは佐藤の指示に従え。それから、永野と渋谷だが、思いつく限りの人数に動員をかけて、一気に探し出せ。時間との勝負だ、手段は問わない」

会計氏が部屋を出ながらいい置いた言葉。

緊急事態発生、とばかりに、生徒会室の緊張が高まる。そのすべての視線が、俺に集中していた。

俺は次々に指示を出しながら、まずはこれに集中することにした。少なくともここにいる人々は、綾華さんや由紀がいない穴を少しでも埋めようとしている。ここにいない人々の何人かは、必死で一人を探してくれている。

俺一人でじたばたするよりずつといい。

俺は俺の責任を、捜索隊には捜索隊の責任を。それでいい。

さっさと仕分けを終えて自分で探しに行けるまでは、まず文化祭実行委員会副委員長の職務を優先させる。その間に一人が見つかればよし、見つかなければそれはその時のこと。

それで行くことにした。

49 (前書き)

最終回まで一気に書を上げてしましましたので、連続投稿です。

一人はすぐに見つかった。

連絡が来たのは、あらかた指示も出し終えて、一人がいなくとも文化祭終了まで突っ走れる状態になつた頃だった。

『永野先輩と渋谷さんは一緒です』

一年の実行委員から俺の携帯に連絡が入つた。俺は仕事に専念する時間が少しでも取れたからか、冷静になれていた、と思う。

『生徒会室に向かうそうです』

「わかった。ありがとう」

なんで俺に敬語なんだろう、という疑問を持ちつつ、通話を切る。同時にメールを打つ。一人が見つかること、捜索隊は直ちに解散し自分の持ち場に戻ること、そのメッセージをメールリストで一気に飛ばす。

『見つかったか』

すぐに会計氏から電話が入つた。

『生徒会室に一人で来るそうです』

『無事なんだな』

『無事です。ヤンキーなんかとは関係ないようですね』

『なら良かつた。こつちは大人の相手を続行する。後は頼んだ』

『よろしくお願ひします』

手短に通話を切ると、その後も續々と連絡が入つてくる。急に態勢が変わつたから、指示がないと動けない人が多く出ていた。電話の相手だけじゃなく、別の留守番要員にかかるてきた電話にも答え、留守番要員自身の質問にも答え、俺はやたら忙しかつた。

この時の俺の判断力は、後から考えても異常だつた。

とにかく色々な判断が求められていたけれど、片つ端から答えていた。

パニックになつたのはほんの数分前のこと。それがとても信じられない。

れないような俺の指示ぶりに、この時一緒にいた実行委員たちは、後に、綾華さんと由紀と会計氏の三人が乗り移っていたようだったと表現した。

俺としては、もうやれることを徹底的にやる以外にないわけで、ここまで文化祭を引っ張ってきて、悪辣なこともやって、とてもじゃないけどもう一度やれといわれても絶対に出来ないような仕事をしてきた。

ここでひっくり返されるわけにはいかない。三人分だろうが四人分だろうが、出来る限りのことはやる決意だった。

「もう資材がどうこういう段階じゃないだろから、体育館裏の要員は後夜祭準備に回つて下さい。指示は後夜祭担当に出してもらつて」

「校内アナウンスで後夜祭の誘導と火気の取り扱いについて注意を促して下さい。案内メッセージは予定通りで」

「巡回班はそろそろ準備を。人がそろつていなくても構いません、現地集合で回つて下さい。チェックリストを忘れないように」

「演劇部の最終公演が始まる頃です。開演したら誘導スタッフはそのまま各クラスの火気機材の回収作業に回つて下さい」

「職員室に伝達、迷子の捜索状況を詳細に伝えて、指示を仰いで下さい」

「巡回班に追加指示を。各クラス単位で持つている領収書の類も回収して下さい。ここで渡さなければ自腹ですよと。どこまで経費で扱えるかはリストを見てください。わからなければ連絡下さい」

「どんどん指示を出していく。そばに一人スタッフを置いて、電話の応対をさせたり、俺の指示をメモせたりしていたのだけれど、事後、彼らは「自分が何をやっているかわからなくなるくらい忙しかった」「あんなに早く指示が出てくると一人がかりでも追いつかなかつた」と語ったそうだ。

確かにあの時の俺はちょっと凄かった。

たぶん、それこそあんなまねは一度と出来ないと思う。

そんな大騒ぎの最中に、綾華さんと由紀が生徒会室に戻ってきた。
俺はしばらく相手をしなかつた。

完全に無視していた。

わざとそうしたわけじゃない。仕事を優先したら、正直一人のことに構つていて余裕なんか1グラムも存在しない。

「喧嘩？ 数で押しきつてください。まわりのスタッフをそこに集めますから、喧嘩してる連中をまとめて袋叩きにして構いません。佐藤晃彦が責任を持ちます」

「クレーマーですか。うちの生徒ですか？ 外部ですか？ 外部なら、職員に振つて下さい。構いません、生徒がケツ持てる話じゃないでしょう」

「特別教室棟の配置が薄くなっています。誘導係が足りません。遊んでいるスタッフはすぐに仕事に戻つてください」

一人の姿すら視界に入れず、俺は指示を出しまくっていた。手元にどんどんメモが飛んでくる。それをすぐに処理し、次のメモに取り掛かる。

そんな状態が10分も続いた。

ようやく生徒会室が落ち着きを取り戻したのは、綾華さん、由紀、会計氏の上席三人が一気に抜けて出来た穴をふさぎきつた、その証拠だった。

あまりに集中していたせいか、俺はめまいを起こした。

立つたまま指示を出し続けていた俺は、なんとか机に両手をついたりして体を支えていたけれど、ある程度めどが付いて気が抜けた瞬間、目の前が真っ暗になつた。

あ、やばい。

かろうじて目の端に入つたままで手をかけ、感覚だけで座りうとする。

何とかそれには成功したようだつたけれど、自分がどんな状態になつているか、わからなかつた。

多分、座つたんだろうと思う。机に腕を乗せて上体を支えたつも

りだけれど、よくわからない。

ぐるぐると世界が回る感覚の中で、俺は、そういえば一人が帰つてきてたんだったな、なんで一人がここにいるんだっけ、などと考えにもなっていないとを考えていた。

ようやくまともに頭が動くようになったのはどれくらい経つてからのことだろうか。

気が付くと、俺の体を支えるよつとして由紀が抱きついていて、その体が不規則に揺れていた。

「ごめんなさい……ごめんなさい」

時々つぶやいているのが耳元に聞こえてくる。顔を見なくとも、泣いているのがわかつた。

「……どうしたの？」

由紀の頭をなでようと腕を上げ、それが由紀の頭に届くより先に、やつと見えるようになつた視界の中心に、綾華さんが凝然と立ちつくしている姿が入ってきた。

綾華さんは無表情だつたけれど、その目が、今まで見たことがないほど暗かつた。

「ここまできたら」

と、誰かが声をかけてきた。見ると、例のクーデター以降、俺たち新実行委員会指導部のメンバーとして一緒に働いてきた2年生スタッフだった。

「あとは計画通りに運んでいくだけだ。配置換えが上手くいくつれるから、もう多少のことじゃ君の判断も必要なくなつている。俺たちに任せてもらつていよいよ」

「……そういうわけにも行かないでしょ」

「そういうわけにいつてもらいたいんだけどね。なにしろ空気が重過ぎる」

スタッフはそういうて苦笑した。

綾華さんはそっぽを向いた。由紀は抱きついていた姿勢をぱつと戻し、俺から離れた。泣き顔を隠すように俺に背を向ける。

「……なるほど、重いですかね」

「重い、重い」

どう見ても、一人が突然消えたり、生徒会室にどろどろした空気を持ち込んだ原因は、俺にあると見て間違いなさそうな雰囲気だった。

綾華さんが俺に告白した経緯を知らない人々でも、この二人に何か問題が起きていることだけは感じ取れた。

俺は。

由紀が泣いているのも、綾華さんが暗い目をしているのも、気に入らなかつた。

俺の知らないところでなにやつてんだよ一人とも。

あからさまではないにしても、生徒会室のいる誰もが、事情は知りたいけれど係わり合いにはなりたくないという態度になつてゐる。ここは、三人で出て行くのが正解なんだらつめまいは治まつていた。

俺は立ち上がつた。

「……おいで、由紀」

背を向けていた由紀の背に手を当てる。そつと押すと、由紀は抵抗しなかつた。俺が歩き出した方向に、一緒に歩き出す。

「綾華さん、行きましょう

少し離れたところであさつての方向を見ていた綾華さんにも声をかける。綾華さんは顔をうつむけて一瞬考えるような仕草をしたけれど、すぐにそのまま歩き出した。後ろから付いてくるつもりらしい。

文化祭の期間中、俺たちは校内各所の鍵を預かっていた。本当は会計氏が預かっていたのだけれど、大人対策を頼んだあの時に、鍵束をそのまま渡されている。実行委員の取りまとめ役が鍵くらい持

つていないと、イベントも何もできなくなってしまう。

その鍵束を使って、普段は閉鎖されている校舎の屋上に出た。

文化祭初日の昨日は、ここで科学部が気球を上げる実演をしたり、夕方には天体観測の実演をしたりで大騒ぎだったけれど、今日は予定は入っていない。鍵を開けて扉の外に出ると、秋晴れの空が出迎えてくれた。

屋上の給水塔の脇にコンクリートブロックがある。もう少し前の季節なら、日陰にならないそのブロックに座ろうなんて思わないけれど、11月の日差しはもう沈みかけている。

「もう寒くなつてきそうだけれど」

といつて俺が座ると、由紀は素直に俺の右隣に腰を下ろした。後からついてきた綾華さんは、給水塔の柱に寄りかかるようにして立つた。陰の中に入り、俺から見て左側に立つている。日向側からだと、もう薄暗くなり始めているから顔色がやや見えにくい。

「それで……」

俺は正面に顔を向けていた。

「何が起きてるのか、説明してもらひます？　匕首でもこいからまず由紀を見る。

由紀は俺の隣で背を伸ばして顔だけを伏せていたけれど、俺の言葉に顔を上げ、綾華さんのほうをちらりと気にした。

その視線に誘われるようにして綾華さんを見る。

綾華さんは、腕組みして立つたまま、じつと俺たちの足元の辺りを見つめている。

「なんでもないよ

低い声で、綾華さんがいった。暗い顔は少しも変化がない。

「それで納得するども？」

俺はあまり気分のいい体調ではなかつたけれど、おかげで肩の力や気負いは抜けていた。綾華さんの態度に腹も立たなかつたし、別に問い合わせる気も無かつた。少し食い下がつて、まだ説明する気が無いようだったら、おとなしく引き下がるつもりでいた。

なぜといわれても困る。事情はともかく、少なくとも俺にすまないという気持ちがあることだけは、二人の顔を見ればわかる。なんかもう、それで充分な気がしていた。

多分、話し始めるとしたら由紀だと思っていた。一人きりになつてからかな、なんて思っていた。

だから、綾華さんの方から声がしたのには、少し驚いた。

「……あたしが悪いんだよね」

連続投稿2話目です。

「由紀に嫉妬したんだ。馬鹿だと思つたが、嫉妬しちゃつたんだよ」

綾華さんは暗い目のままつぶやくよつこしていった。風が弱かつたからからうじて聞こえた。

「あんたのこと、すゞしく信頼してるのが伝わつてくるんだよ。言葉の端々からさ。耐えられなくなつた」

由紀が身じろぎする。触れるか触れないかの距離にあつた由紀の左手が、そつと俺の右ひざに置かれる。

「だから、全部いつた。あんたが好きだつてこと、彼氏と別れたこと、あんたに思いを伝えたこと、それできつちり振られたつてこと」俺は正直、呆然としていたと思う。

綾華さんは俺の顔をちら見したあと、組んでいた腕をほどいて、片手で髪をかきあげた。

「こうだけいつちゃえば、あたしはすつきりするし、気持ちの整理もつくし。つまらない嫉妬で由紀と一緒にいる間中いらっしゃることもなくなるだらうつて思つたんだけど」

由紀が、俺の右ひざの上に置いていた手にきゅっと力を入れた。

「こいつ、それ聞いてなにいい出したと思つ~、あんたなら想像つくんじゃない?」

皮肉っぽい笑み。

残念なことに、大体想像はついてしまつた。熱くなつていた右ひざの感覚が、俺にそれをいうなと伝えてくる気もしたけれど、綾華さんの顔は、中途半端な答えを出したら容赦しない、といつているように思えた。

あんた、あきちゃんの隣に座るんだつたら、それなりのものを見せてみなさいよ。

綾華さんの目が、由紀にそう訴えている。これから始まる断罪、

それをやめに受けたかで、綾華さんは自分のこれからを決めようとしている。

「……俺を譲るとでもいいましたか。自分が消えればいいことでも」

「晃彦くん……」

由紀の涙混じりの声。

「あはっ」

綾華さんがはじけるように笑った。

「お見事！ 消えればいいってところまで当てるのがさすがね」自分を過小評価する癖がある人間は、自分がらみで何かが起きれば、すぐに自分が消えればいいと考えてしまつもんだ。そんなの、俺だってそうなんだから、俺以上にその癖がひどい由紀がそう考えないはずがない。

綾華さんにはわからないだろ？

「そこまで理解されてるのよ。愛されてるのよ。何が不満なのよ。消える？」冗談でしょ、それじゃ完全にあたしが悪者じゃない

低い声で、綾華さんは由紀を連打する。

「あんたのは自分を守ろうとしているだけだわ。自分が悲劇のヒロインになればそれで場が納まる、もう自分を攻撃してくる者もいなくなる、消えてしまえばつらいことも無くなる、そういうことでしょ」

由紀はじつと耐えていた。俺の右ひざをつかみながら、うつむいて、じつと耐えていた。耳をふさいだとはしなかつた。逃げ出せなかつた。

「あたしは振られたのよ。あきちゃんに選ばれたのはあんたなのよ。そのあんたがあきちゃんは諦めます、私は消えてなくなります、ふざけんじやないわよ。自分を選んだ男を放り出してあたしに拾わせようつていうの？ ずいぶん傲慢な言い草よね、それ。どんだけ上から田線なんだよ」

俺は綾華さんを止めなかつた。

打たれているのは由紀だけれど、一番傷付いているのは綾華さん

だ。

そしてこの傷は、途中で打ちやめてしまえば、残る。

いつも激しく切り裂いてしまった方が治りが早い傷もある。

「あたしがどんだけ苦労してあきちゃんを諦めたか、あんたにわかるの？　あんたがそばにいるなら諦められるつて、自分を納得させられるまでのあたしの苦しみがあんたにわかるの？　そのあんたに、あきちゃんを譲られるとか、どんだけ屈辱だと思つてんの？　あんた、傲慢にもほどがあるだろ」

綾華さんの声は低いままだつたけれど、涙混じりになつてきたのがわかる。

「あたしが今、ここで、あきちゃんに抱きつくて、あたしを選んでつていつたらどうなるかわかるか？」

綾華さんはそれまで寄りかかっていた鉄柱から離れた。腕を組み直してゆっくり歩き、俺たちの前に仁王立ちした。

俺の顔を見て、暗い目そのまま口元だけを笑みの形にゆがめた。

「ここつ、由紀をかばうよ。あたしを絶対に選ばない。拒絶するに決まつてる。そういう奴だよ。だから好きになつたんだ」

由紀は、いつの間にか顔を上げていた。涙をこぼしながら、いつになく強い顔で綾華さんを見上げていた。

「憎たらしこほど頭いいせに鈍感で、鈍感なくせに人の心すばば読んだ、どつちなんだよつてこつちが混乱してゐるうちに心の中に入つてくるんだ」

そうこうと、綾華さんは俺の足先を軽く蹴つた。

「策略家のくせにまつすぐで、正直で……手に負えねえよ、こんな奴」

聞いているだけだとどんな完璧超人なんだ俺は、という感じだけれど、黙つて聞く。

「で、あんたは、今もさつやつてあきちゃんの隣に座つてる。それつてさ、あたしに譲る気なんかこれっぽっちも無いことじやんか」

由紀はまだ顔を上げ続けていた。そして、よつやけに口笛を出した。

「……譲りません……譲れません……」

詰まつた声は聞き取りにくかった。そして、いい終わると大きくしゃくりあげた。

それがきつかけのよつこ、由紀はいつになく大きなはつきりした声でいった。

「私が弱いから、綾華さんにいわれてとつさに気弱なことばかりいつちやいましたけど、私は晃彦くんを誰にも譲りません。もつと強くなつて、晃彦くんが誰よりも好きな自分に負けないよつになります」

「意味わかんないよ、頭悪いあたしにもわかるよつこいつてくんない？」

腕組みして女王立ちしている綾華さんは、女王の風格で由紀に迫る。

ついに由紀は立ち上がった。

小さな肩は、いつの間にか、細いなりの強さを漂わせていた。

「私は晃彦くんが好きな自分に負けてばかりいました。好きな気持ちだけが大きくて、どうしたらいいかわからなくて、そんな気持ち、無かつたことにしちゃつた方が楽だとすら思つてました」

二人の対決に、俺の立ち入る隙はなかつた。

「でも、綾華さんに馬鹿なこといつて気付きました。どうして自分の気持ちに正直になれないんだろうって。晃彦くんが好きな自分に負け続けて、それで晃彦くんを失つて、それで誰が一番つらいのかつて」

「あんたでしょ。まさかあきちゃんだとでもいつ気？」

「自分です。そんなこといいません。自分が一番つらいです。それに耐えてちゃいけないつて気付きました」

「気付いてどうするの。自分のわがまま通せば幸せになれるとも思つたわけ」

「わがままなんかじゃありません。だって、晃彦くん、私のことを選んでくれました」

「」で一人が俺を見た。どきりとしたけれど、へらへら笑える場面でもないから、黙つたままうなずいた。そのまま続けて、と伝えたり。

「綾華さんと何があつても、関係ないです。私と晃彦くんがお互いてどつ思つてるかが大事なんです。そんなことも気付かないでおろおろしていた自分が馬鹿みたいですね」

「……」

綾華さんが黙つた。黙つたまま、腕を組んでじつと由紀を見つめている。

「何も知らないで晃彦くんと一緒にいられる幸せに浸つてた自分ももつと馬鹿だと思います。でも、何があつたか知つてしまつたときに、自分から引き下がろうとした自分が最強の馬鹿です。死んじやえればいいです、そんな奴」

由紀のセリフとも思えない、強い表現がどんどん出てくる。

「だからそんな奴はここで殺しちゃいます」

そこで言葉をひとつ区切り、由紀は大きく息を吸つた。声に、もう涙の成分はない。

「私は、晃彦くんが好きです。晃彦くんが私のことを好きといつてくれた、その何十倍も何百倍も好きです。綾華さんが晃彦くんを好きな気持ちになんか絶対に負けません。そのこと、私自身が認めなかつたら、何もかもウソになっちゃう」

綾華さんは腕組みしたままの姿勢で由紀を見つめていたけれど、もうその目は暗くなかった。むしろそれは。

「私、消えません。譲りません。綾華さんがどこまでも晃彦くんのことで争つというなら、どこまでも戦います。綾華さんのこと大好きだけど、これだけは絶対です」

「よくいうじゃないの」

大化けしたライバルの成長を喜ぶ敵方の大物のよつな……といつ

たら失礼かもしぬないけれど、いつそ爽快なほど、綾華さんの立ち姿は凜々しかつた。

「さつきまでひざを抱えて泣いてた小娘がよく吼えたわ。大したもんだわ」「

赤い日差しの中で、綾華さんは腕組みをほどいた。誰もが校内一と認める美貌は、笑顔の時以上に、強気な眉間に鋭気をたたえた表情の時に光り輝く。

「そこまでいえるなら安心だわ。いえないようなら、どうせそのうち誰かに奪われちゃうんだろうから、先にあたしが奪うところだけれど」「

そういうながら、綾華さんは手を差し伸べた。

由紀はじつと綾華さんを見つめたまま、その手を取った。握手するのか、と、由紀は思ったのだろうし、俺もそう思つた。

でも、相手は綾華さんだ。まともに行くはずがなかつた。

取つたばかりの手をぐつと引き、綾華さんは戸惑つ由紀を力いっぱい抱きしめた。

「あんた、あたしが好きになるくらいいい女よ？ 大丈夫、自信持ちなさい。その内、あきちゃんが持て余すくらいのすこい女になれるから」

そして、抱いてた腕のうち右腕だけを伸ばし、俺を手招きした。何を始める氣かはわからないけれど、ここで戸惑つっていても仕方がないので立ち上がつた。

綾華さんの白くて長い指を取ると、綾華さんは俺の指を引いて、抱き合つ二人の横に導いた。

「もとはといえば、ぜえええんぶあんたのせいね。わかってるわよね」「

「え、あ、え、いや

俺はどもつた。今さら綾華さんに氣後れしたからでも、怯えたからでもない。確かに俺が原因かもしれないけれど、全部俺のせいといわれると非常に反論したくなる。

「あんたのせいなの！ こんないい女一人も振り回しといて、自分がいい男だつて自覚がない馬鹿のおかげで、どんだけこっちが苦労したと思つてんのよ…」

綾華さんが怒鳴る。由紀がこらえきれずにくすくす笑つてゐるのが肩から読み取れて、俺は抵抗する気を失つた。

「へえへえ、そいつあ悪うござんしたね」

「わかつたらあたしたちに謝りなさい」

「どうもすいませ……」

「言葉じやなくて！ ふつづくここまで導かれたらわかんだろ！」

空いている右手がすかさず俺の胸にクリーンヒットする。

「ごふつと息が詰まる。相変わらず加減を知らない人だ。

俺が身を折つて苦しんでいるのを見て、どうやらまた自分がやりすぎたらしいことに気付いた綾華さんは、心配するより先に、自分が左腕に抱いていた由紀と顔を見合せた。

そして、二人で笑い出した。

ついさつきから笑いをこらえていた由紀は、今まで一番明るい笑い声を上げた。綾華さんは豪快に笑い飛ばしている。

「……どんだけサドだよあんたちは……」

「あんたがちんたらしてるとからでしょ」

「でしょ」

由紀までが可愛らしく綾華さんの尻馬に乗つてくる。

綾華さんが一人になつたようだ。

俺は未来が少々……だいぶ恐ろしくなつてきたけれど、今はまあ、喜んでおくべきなんだろうな、とぼんやり思った。

思いつつ立ち上がり、一人の前につと、そのまま抱き合つてゐる二人を丸ごと抱きしめた。

「……げふん」

「……決まんない男ねえ、そこでセキ?」

「誰のせいですか……げふつ」

「大丈夫ですか？ 痛みますか？」

「なんかもう胸も心も痛みっぱなしですわ」「痛みも感じないようにしてやろうつか」

「抱きしめられてる最中にそういうことがあります?」

「しおらしいあたしに何の魅力があるの?」「そんなことをそんな真顔で言われてもねえ

「でも……たしかに……」

「由紀、あんた、納得しそぎだから」

「納得してやれ由紀、お前にいわれるのがなんだかんだってこのひと一番堪えるんだ」

「あきちゃん、あんたどこまで生意氣になるつもり? 潰すよ?

本気で潰すよ?」

「だから抱きしめられてる最中に……」「ここまで色気がない三人だった。

5.1 (前書き)

連続投稿3話目です。
次が最終回です。

文化祭の最中にいきなり消えた俺たちを、誰も探さなかつたのは、あまりにも直前の様子が尋常じやなかつたからだろう。

ついでにいえば、何かが起きている気配を察した会計氏が、大人たちの接待を生徒会長に任せて本部に戻つてきたからである。「あいつらのことだ、ちょっと時間をやれば平氣な顔して戻つてくる。中途半端に戻つてこられるより解決してからの方がいい、今は時間を与えてやつてくれ。その間の面倒は僕が見るさ」

「そういつたはいいけれど、と会計氏は笑つた。

「実際まとめ始めたら、やることないんだよな。佐藤が全部指示出した後だから、やることついていつも終わりまで監視してただけ。つまらないにもほどがある、勢い込んで戻つてきたのに

「すいませんでした」

俺が謝ると、俺の後ろで綾華さんと由紀が小さくなつて一緒に頭を下げていた。

「謝らなくていいぞ、やることやつた上でのことだ」「あたしは……やることやつてなかつたから……」「そうだな、永野はいけないな。渋谷もだ」「ごめんなさい……」

「まあいいぞ。ぎりぎり間に合つたんだからな」

「そういうと、会計氏は立ち上がつた。

「最後に責任は取つてもらつ。来い」

会計氏がずんずん歩いていった先は、後夜祭の会場だった。

文化祭を締めくくる後夜祭は、すべての出し物が終わつたあと、生徒会長による閉会宣言と共に始まる。

よくファイアーストームを囲んでフォークダンス、なんて場面がドラマやアニメで流れたりするけれど、残念ながら我が校ではそれは無理。条例で禁止されている。役所の馬鹿。

校庭に設置されたメインステージは、直前までバンドライブが行われていた。それが終わって、今は人気投票の集計が行われている。集計が済んだら閉会式が始まり、その中でいくつかの人気投票の順位が発表され、発表後に閉会宣言。その後、人気投票トップのバンドがアンコールライブを行い、吹奏楽部が校歌とその年の文化祭テーマ曲を演奏して解散となる。

ちなみに今年の文化祭テーマ曲はQueenの「Who Wants to Live Forever」。いつたい誰がこんな選曲をしたのか謎。いや、いい曲だけどさ。

俺たちが会場入りしたのは、ちょうど閉会式が始まる直前だった。実行委員の元締めとしては、本来は本部である生徒会室に最後まで残つて、吹奏楽部の演奏が終わって解散となるまでは全体の監視を行つておるべきだったけれど、今さらそんなことをいえる立場でもない。

実は、吹奏楽部の演奏にまで規制がかかる。街の騒音条例で、休日の野外演奏は6時までとされている。それを計算に入れて運営しなければならないわけだ。

俺はこのタイミングを計るために色々と調整してきていた。俺の計画によれば閉会式は5時きっかりに開始。閉会式そのものは5時20分に終わり、続いてバンドのアンコールライブ。それが入れ替えも含めて5時40分に終わり、最後の入れ替え5分で吹奏楽部がステージ入り。ラスト15分で校歌からテーマ曲になだれ込み盛り上げて終了、会長の「本当に終了」宣言で幕を引く、という流れになっていた。

これは代々続く流れでもあるけれど、毎年ぐだぐだになりやすい部分もある。

特にバンドが時間を守らず、いつまでもステージに張り付いて台

無しにするパターンが多いらしい。

それをあらかじめ聞いていた俺は、タイムキーパー役に最強の布陣をもつてする計画を立てていた。

右袖に綾華さん。

左袖に会計氏。

いつたい誰が逆らえるだろう。

バンド演奏が始まる頃まではこの一人に出番はないから、まだ準備には早いくらいだけれど、確かにこの一人が会場入りする必要はある。俺と由紀が余計なだけだ。

俺がそんなことを考えたくらいだから、後ろをテクテクついてきた綾華さんも、由紀も、会計氏が計画通りことを進めるためにここにきたと思ったに違いない。

ところが、会計氏の思惑はまるで違った。

というより、俺たちは最後の最後で、これまで陥れる一方だった周囲の策略に陥れられた。

閉会式が始まる。

ステージにスポットが入り、壇上中央に会長が立った。

「みんな、お疲れ様でした！ 今年はいつも以上に盛り上がりつたと思います。楽しかった！？」

会長のあたりに、集まっていた生徒や関係者が一斉に反応した。珍しいくらいに、校庭中が揺れるような盛り上がりだった。

「すごいな、今年は……そんなに乐しかったか！」

会長がさりにあおると、マイクを向けられた観衆たちは腕を上げて反応した。結構行事にはしらけたところがある学校だけれど、今日のノリは異常だった。

こんなに盛り上がるとは思っていなかつた俺は、ステージ脇で思わず震えた。

ぞくぞくした。

これだけ盛り上がる舞台の運営に関われたんだ、という事実が、俺を震わせた。

思わず涙ぐむくらいに衝撃を受けた。

俺は由紀の手を握っていた。

色々あつたけれど、本当に色々あつたけれど、最後の最後まで色々あつたけれど、裏方として自分の限界に挑戦するような仕事をして、ここまでたどり着いた。途中、由紀に告白されたり、綾華さんに告白されたり、ありえないことが降りかかりすぎておかしくなりそうだったけれど、俺はこの盛り上がりを、少しでも裏から支えることが出来たはずだつた。

その俺の隣で、由紀も、「うわあ」と声を上げながら、俺の手を強く握り返してきた。舞台裏だから実際に盛り上がっている姿は見えないけれど、それでも、音圧で体が浮き上がりそうな、足踏みや拍手混じりの大音響。誰もがステージに向けて声を上げているから、その袖にいれば、まるで自分たちに声がぶつかってくるような錯覚に陥る。

近くに綾華さんがいれば、三人でまた抱き合つていたかもしだい。

そういうえばどこにいるんだろう、綾華さんは。そう思つて目を凝らすと、なぜか逆側の袖について、会計氏と一緒になにやら興奮しながら手を叩いている。

いやいや、あんた、立ち位置こっちだ。こっちでタイムキーパー やるんとちやうんかい。

と思つたけれど、まあ、ここまでできたらそんな小さいことはどうでもいい気がした。一人で並んでバンド連中に時間を守らせねばいい。

微妙な違和感を感じてもいたけれど、俺はすぐに忘れた。

会長のパフォーマンスはすぐに終わっていて、次は各出し物の人気投票結果の発表。

「さあ、売店系人気投票第一位は……2年D組！　おめでとう！」

観衆の一画で歓声が爆発している。

そのたびに、聞いているこっちの背が震えた。自分が受けている歓声でも拍手でもないのに、なんだろう、この感動は。

自分たちが作り上げたんだ、という感動だろうか。ここまでのか労がこれで報われたという感動。

それだけじゃないだろう。

好きな人が隣にいて、一緒に感動してくれて、しかも一緒に作り上げてきた実行委員の人たちもまわりにたくさんいて、同じように感動して声を上げたりしていた。

自分が、誰かと一緒に何かが出来たということ。

目立たない生徒として中学生時代も高校入学当初も過ごし、人の輪に加わって何かをするということとは縁遠い生活だった。部活に入つていなかつたからなおさらだつた。

形になる何かを、誰かと一緒に作り上げるなんてこと、したこと

がなかつた。

今、この瞬間を作り上げることが出来た。俺は、この瞬間のため

に働いてきたんだ。みんなと。

そう思つたら、戦慄も止まらないし、手を握り返してくる由紀の存在がいとおしくてたまらなくなるし、大変なことになつてきた。

俺は、全身で感動していたんだ。

でも、それで終わるほど、会計氏の策は甘くなかった。

「ちょっと駆け足だけど、これまでの発表が終わりました。さあ、ここで、最後を飾るにふさわしい人にステージに上がつてもらいます」

会長のこの言葉は、台本にはないセリフ。

「みんなも知つてるとと思うけど、この文化祭、途中から実行委員長と指導部が変わりました。不甲斐ない俺たちを見ていた下級生たちが、俺たちに代わつて文化祭を盛り上げてくれました。この文化祭を作つた奴らです」

俺は感動が一気に覚めていくのを感じた。

やりやがった！

俺は思わず逆袖にいる会計氏を睨みつけた。

会計氏はこっちのことなどまるで無視していた。とにかく、実行委員の顔である綾華さんを舞台に出すのが先決というわけで、こっちなんか気にしてる余裕があるはずもない。

なるほど、だから綾華さんを自分の近くに置いていたのか。舞台上に素早く上げるには自分が押し出す以外にないと考えて。

感じていた違和感は策略の証だった。でも、あれでこれを見抜け

というのはいくらなんでも無理がある。

俺が近くにいると綾華さんは俺を隠れ蓑にして逃げる。それを防ぐために離した上で、会計氏はこれまで築いてきた信頼関係を総動員して綾華さんを壇上に上げるつもりだ。

「やるなあ、先輩」

俺は思わず口にして、それから、笑った。

由紀も笑っている。頬を赤くして、興奮している。

俺たちは実行委員やステージスタッフに押された。抵抗する氣にもならなかつた。したところで強引に持つていかれるだろうし、スタッフたちがみんな笑顔だつたから、もう、抵抗なんか出来るはずがなかつた。

たぶん、同時にステージに足をかけた綾華さんも、同じ気持ちだつただろう。ばちっとステージ両端で視線がぶつかつたとき、俺たちは同時に苦笑していた。

やられたね。

ええ、やられちゃいましたよ。

今までやられちゃいました。

三人、それに会計氏がステージ中央に引っ張り出された。

学校で準備できる程度だからたかが知れているはずのスポットが、ものすごくまぶしく感じた。そして、どこから沸いて出たのかと不思議なほどに集まつた人の波。

「さあ、みんな拍手を！ クーデターで俺たち生徒会を根っこからひっくり返した挙句、しらけ切るはずの文化祭をここまで盛り上げた真犯人、新実行委員長の永野に秘書の渋谷、そして影のフィクサー佐藤だ！」

ここで会計氏の名前が挙がらない時点で、誰が仕組んだことか丸わかり。

しかも会計氏、自分でワイヤレスマイクまで持つての『登場だ。

「他にもたくさんのスタッフに支えられて、僕たちの文化祭はこんなにも盛り上りました。スタッフみんなに拍手を！」

会計氏が叫ぶようにい、マイクを観衆に向けると、嵐のようないいよな拍手と歓声に会場の空気が震えた。

「……これで俺たちは心置きなく生徒会を次の代に引き継げます……とかいったら、きれいな終わり方なんだろうけど、そもそもいかないよな」

会長が意味ありげに会計氏に笑いかける。

会計氏も、突き出していたマイクを戻して会長の隣に並び、こくりこくりとうなずいている。

「いかないな。なんせ、どんな奴が僕たちの跡を継いでくれるのか、心配で仕方ないよ」

「また俺みたいのが会長になつたら最悪だぜ？」

「お前、それを自分でいうか？ その通りだけじゃ」

「おい、ちょっとはフォローしろよ、親友だろ？」

「は？ 親友？ 誰が？」

会計氏の突つ込みで絶句した会長は、本気でしょほんとしていた。この辺りの漫才は台本無しの素の会話らしい。その様子がわかつている三年生たちは大うけだった。

「とにかくだ、僕たちの跡を継いでくれる奴が誰なのか、ここではつきりさせておけば、安心して受験勉強にも取り組めるつてもんでしょう。だよな、三年のみんな」

会計氏が観衆に振ると、三年生が一斉にわあわあと反応した。

すじく嫌な予感がしたようで、明らかに綾華さんの腰が引けている。

まあ、この流れで自分が会長に推されないとか思っているとしたら、綾華さんの頭の構造を疑うところだ。

確かに文化祭の途中で由紀と口論になつたり、その末に行方不明になつてくれたりした訳だけれど、そこまでの文化祭を作り上げたのは綾華さんだ。俺が計画を作ったり、会計氏が実行者として奮闘したりしていたとしても、それはすべてまとめ役として上に立つた綾華さんの功績になる。組織つてのはそつあるべきで、この組織の上に立てたのは綾華さんだけだった。

スポットを浴びて輝く綾華さんのふわふわした髪。

俺は、由紀と改めて手をつないだ。

由紀はステージ上で手をつながれるとは思つていなかつたらしく驚いていたけれど、それでも、次の瞬間には強く握り返してきただ。

そのまま、二人ですつと綾華さんの背後に回つた。綾華さんはスポットの強い光と、司会の急展開に慌てていて、こつちの動きには気付いていない。

「ちょっと例はないだろうけど、どうせしばらくしたら生徒会選挙もあることだし、俺たち旧執行部の遺言を発表しきたいと思います」

「会長、そして僕、会計が皆様にお勧めする物件は、もちろん……」「永野綾華でーすっ！」

一人が同時に綾華さんを前に出そつと手をかけようとした。

一瞬前に、綾華さんはすつと上体を下げ、その手を逃れようとした。

そのまま身を翻していれば、多分逃げ切れたんだろう。

でも、俺たちがいた。

ぐるっと身を返そつとした、そのタイミングで俺たちが綾華さんを抱きとめた。

「あ、あんたらー。」

「綾華さん、降りちゃダメです」

由紀が叫んだ。

「どうか、叫ばないと近距離でも声が通らないくらいに歓声がすこかつた。」

だから俺も叫んだ。

「あんた以外の誰が俺を止められると思ってるんだー。」

どうせ話の流れ上、俺も生徒会役員入りだ。なら、従う相手は俺が選ぶ。そして、そんな相手、ひとりしかいないだろ。

綾華さんはこの時、俺のセリフを聞いて諦めが付いたらしい。

「そりやお互い様だろー！」

そう叫んで、綾華さんは前に出た。

学園のアイドルが、一身にスポットを浴び、一気に場の空気を支配した。

会計氏のマイクをひつたぐり、綾華さんは吼えた。

「みんな聞け！　この学校の未来、私が請け負った！　選挙では投票よろしくー！」

最終回です。

春。
入学式。

桜が遅れていた今年は、入学式にまだ花びらがたくさん残っていた。

会場を埋める新入生の群れの中に、生徒会執行部の役員たちが勢ぞろいしていた。

新入生を迎える在校生代表として、腕章をかけた新三年生、新二年生たちが、ずらりと並ぶ。

去年はこの光景を、ただ見ているだけの人間だったんだけどなあ。まさか自分がここに並ぶとはね。

俺の腕には、副会長の文字がぶら下がっている。

正確には、俺の役職は副会長兼会計。執行部の心臓部を握る役職。既に「新執行部の軍師」という敬称で祭り上げられている。なんだかねえ。

俺の隣で上気した顔を正面に向けて立っているのが、書記の由紀。執行部の議事録を担当する役職だけれど、みんなは「会長秘書」と呼んでいる。

今、会場では在校生からの歓迎の挨拶が行われている。

もちろん、代表は生徒会長。

「皆さんを迎えて、我が校の在校生は、期待に胸を昂ぶらせています」

俺と担任が書き上げた文章を読んでいるのは、学園のアイドルから「女帝」に格上げされ、名実共に学園の顔となつた綾華さん。

その美貌は輝かんばかりで、この人は大舞台になればなるほど輝く、見事な素材だつた。たかがいち学校の会長職にしておぐのがもつたないほど、綾華さんの存在感は強大だつた。一体、このひと以外が会長になる未来なんてありえたんだろうか、とすら思える。それを見ている新入生たちの顔。明らかに陶酔しているじやない

か。この人が一声かけたら、こいつら全員反政府クーデターにだつて身を投じるんじゃなかろうか。

カリスマ、というものがどういうものか、今ここに来て綾華さんを見てみりや、一発で納得できるはずだ。

「綾華さん的人気、すごいですよ」

入学式からしばらくたった日、教室で一緒にいると、由紀がいつた。

「だろうなあ」

今年は同じクラスになれたから、いつも一緒にいられるのがありがたい。

「ど的一年生に聞いても会長、会長って」

「由紀も美人秘書とかいわれてすっかり名人だぞ」

「そんな、そんなのはウソです」

自分が有名人になるのは絶対にありえないことと固く信じている由紀は激しく否定するけれど、聞いている連中は内心思つていてる違ひない。

自覚無さ過ぎだろ。

俺もそう思う。

「晃彦くんだつて有名人ですよ、女帝を支える軍師とか、騎士とか」「ちょっと待て、なんだその騎士って」

「晃彦くんがかっこいいから、そう思つたんじゃないですか？」

由紀がからかうように口にした。

実のところ、意外に由紀が嫉妬深いことが判明していた。だからこそ同じクラスになつたのが嬉しかった。四六時中見ていられる環境なら、多少は嫉妬から逃れられると思つたからだ。

あ、こいつ、下級生に嫉妬してやがる。

「かつこいかどうかは知らんけど、騎士つてのは勘弁してくれだ

な。こいつ恥ずかしい」

「じゃあ私のこともいわないで下さい」

「お互い、いいつこなしつてことで」

「はい」

短く返事をして、由紀は微笑んだ。

文化祭から、由紀は変わった。

それまでは目立たないようにと「ことだけ」を考えて生きているような生徒だったけれど、文化祭明けの由紀は、別人とはいわないまでも、自分という存在を隠すことはなくなつた。

自分が自分が、と前に出ることはない。それは性格上無理。でも、自分のいいたいことはそれなりにいえるようになつたし、声も少しだけど大きくなつた。友達も増えた。

それでも、俺のことだけを見てくれているのが嬉しかつた。少しくらい嫉妬深くたつて、むしろ楽しい。

とかいうことを平然と考えてしまつ辺りが「バカッフル脳」なんだそうだ。

俺も変わつたといわれる。

自分ではもちろんよくわからぬけれど、迫力が身に付いたんだそうな。

元々背は大きい方だし、高校に入つてからも5センチ伸びたから、そのせいなんじゃないの？　と当人は思うんだけれど、誰もうなづいてくれない。

確かに、学校で喧嘩を売つてくる人間はいなくなつた。俺も売らないから平和。売られたつて買う気なんかないんだけれど、売つたら最後、人生破滅するまで徹底的に追い込まれる、というイメージが付いているらしい。

待て。

ちょっと待て。

そういう俺と、小柄というほど小さくもない由紀が並んで歩いていると、非常に目立つらしい。学園のベストカップル、などという、

僭越にもほどがある称号をいただいてしまい、戸惑つて……。

「学園のベストカップルさん、哀れなおばちゃんになにか食い物を惠んでくれんかね」

「うわあっ」

突然後ろから声がかかって、二人ともびっくりした。

「どうしてあなたはそういう、人が驚く間合いで入ってくるのが極上にうまいんですか？」

「知らんわ、あんたらが勝手に驚いてるだけじゃん」

綾華さんが背後にいた。

「お弁当ないのよ。ついでに飲み物買つぐらーしかお金もないのよ。哀れだと思わん？」

とてもカリスマ会長とは思えない、どんよりした空気をまとって、綾華さんは俺の背中をぐいぐいと押した。だけ、といつことらしい。抵抗するだけ無駄だと、散々今まで思い知られてきているから、俺は不承不承立ち上がる。行儀悪くいすをまたいで、綾華さんはどっかりと座つた。

由紀が目配せしていく。何かを察している気配だ。

ああ、愚痴りたいのか、この人は。

綾華さんが愚痴るといったら、話題はひとつしかない。ついでに、愚痴る相手は由紀に限る。俺が相手していると、綾華さんはだんだん腹を立ててくることがあるからだ。

愚痴の原因になっている人と、なぜかかぶるらしい。

「どうしたんですか綾華さん、また何かやらかしたんですか、あの

人」

由紀がひざを触れさせてるようにして尋ねると、綾華さんはどんよりもやもやした空氣をあたりに発散しながらうなずいた。

「あたしに黙つてサークル入つて、新歓コンパで酔いつぶれたつて

「まあ、大学生ですし、ねえ」

「それで介抱して自宅まで送ったのが先輩女子2名だつてのよ？

信じられる？ しかも気が付いたら雑魚寝してたとか、信じらんな

いわよ！」

ぐああつと吼える綾華さんの声を背に、俺は教室をそっと出た。

そう、綾華さんには大学生の彼氏がいる。

俺との失恋以来「もう恋なんて出来ないわあ」と嫌味つたらしく俺の耳元でささやく日々を、ちょっととの間だけ続けたあと、この人は次の恋を見つけた。

携帯でその相手の番号を呼び出し、かけてみる。

『……佐藤か』

「先輩、大丈夫ですか？」

『……一日酔いでな……あまり大丈夫じゃない』

「こつちはもつと大丈夫じゃない状況になつてますが」

『……綾華か』

「吼えてるの聞こえます？」

『聞きたくはないけど、まあ、想像はつく』

会計氏。

この一人がくつつくとは予想外だつたけれど、くつついでみるとこれが絶妙にはまつた。静かだけれど包容力もある、なによりこの年にしては考え方が大人な会計氏と、お子ちゃん相手に恋愛なんて死んでも嫌と考えている綾華さんの波長は、不思議なほど一致した。ただ、綾華さんは好きになつた相手と彼氏彼女になるのが初めての経験だつたから、それまでの恋愛経験がかえつて邪魔をして、どう振舞えばいいかわからない場面が多い。

「素直になりやいいのにねえ、あの人も」

『お前からいつてやつてくれ、渋谷からでもいい』

「無理つすよ。あの状態になつたらもう遅いですつて。後で迎えに来てください、甘い物のひとつも準備しといて下さいね」

今回は会計氏が悪い。確かに、女一人と雑魚寝はいからんでしょう。

自覚はあるようで、会計氏もその件については何もいわなかつた。あとで盛大に謝ろうと算段しているに違いない。

そして会計氏は俺と綾華さんの間に何があつたかも知つている。

綾華さんが話し、俺も話した。由紀も話している。それぞれの立場の話を聞いて、それでもなお、俺たち全員と付き合いを続けてくれているこの先輩は、やっぱり大人だった。

『とりあえずこの時間帯は任せる。今日は生徒会の集まりはあるのか』

「偶然ですが、あります」

『5時過ぎには迎えにいける。それまで頼むよ』

『了解。貸しにしちゃいますぜ、だんな』

『お前に貸しとか怖すぎるんだがな』

諦めたような会計氏の声は、俺の笑いを誘った。

何かが起ころるたびに、俺たちは小さい祈りを繰り返していたと思う。

その積み重ねが今を形作っている。

偶然が重なって出会った俺たちは、それぞれの小さな祈りを繰り返して、こんな未来を作つていった。

たとえば由紀との関係も、日々の小さな祈りが導いてくれたことだと思つ。

出合つたばかりの頃、由紀は俺と田も含わせてくれなかつた。それはもちろん、由紀の方にも理由はあつたけれど、俺としては祈るしかなかつた。今度会うときはまともにしゃべれますよつ。

綾華さんとの関係だつてそうだ。

俺と由紀と綾華さん、三者が文化祭最終日に劇的な仲直りをしたあと、俺は祈つた。この人が不幸になつてるなんておかしい。神様とやらは何をしていやがる。少しでも神のプライドがあるなら、ひとつと綾華さんを幸せにしてみせる。いや、幸せにしてあげ下さい。

由紀だって祈り、願つただろう。多分、信心がまったくない俺よ

りはるかに熱心に。

その感情が綾華さんにも伝わったからじゃ、綾華さんはあれからも俺たちを気にかけてくれたし、愚痴り相手にもしてくれているんだろう。

愚痴はまあほどほどにしてくれた方がいいけれども。

そうやって祈りが重なつて出来た今に、俺は生きている。

まだまだこれから先は長い。副会長としても、高校生としても、綾華さんの後輩としても、由紀の彼氏としても。

でも、多分、俺は人より恵まれている。素直にそう思つ。

なら、恵まれているなりに、それに溺れるんじゃない、もっといい世界を自分の周りに広げていけるようにしていこうって、きっと大切なことなんぢやないかと思つ。

由紀がいて、隣で笑つてくれると今。

……いや、たつた今は綾華さんに取られてるけれども。

その今、幸せだなつて思う、その思いを、ちょっとでもまわりに還元していけたら。

祈りを、自分のものだけじゃなく、外の世界にも出せていくたら。生徒会執行部の心臓部を握つてる今、俺に出来ることつて結構あるはずだった。それを存分に使い切つて、俺は誰かの小さな祈りを、願いを、わずかでもかなえられるように生きて行きたい。

そんな風に思えるのが、実は一番幸せなんだうな、と、ふと思つたりもした。

「由紀、あきちゃん、うちのぼんくらが来たから一緒に帰ろう。徹底的におじりすから」

「綾華、頼むから多少は手加減を……」

「先輩、それは無理つてもんですわ。諦めまじょうや」

「晃彦くん、いきなり降参ですか」

「由紀なら諦めずに交渉できるか?」

「無理です。それは無理です」

「渋谷に無理なら僕にはなお無理だな」

「ぐだぐだいってないで行くよ。車で来てるんでしょう。早く早く」

「佐藤、僕の骨は拾ってくれよな」

「由紀と一人でせつせと拾いますよ。ほら、早く行かないとまた怒られますよ」

もうずいぶん長くなってきた日の光が、俺たちを照りしている。

由紀と手をつないだ。

由紀は黒い髪を風にそよそよとなびかせながら、にっこりと微笑み返してくれた。

「行こう、晃彦くん」

少し甘えの入った声が、たまらなく心地良い。

「好きだよ、由紀」

思わずつぶやいた。

「え？」

由紀がもう一度俺を見たけれど、別に聞かせるためにいったわけじゃない。思わず出ただけの一言だから、俺はつないだ手を引いた。

「なんでもない、行こう」

視線の先に、先輩と会えて実は嬉しくてたまらないのが見え見えな綾華さんの姿がある。

その幸せな姿を好きな人と一緒に見ていられる幸せを感じながら、二人一緒に歩き始めた。

52（後書き）

「愛読ありがとうございました。ぜひ感想などお聞かせ下さい。読まれた方の声が一番の励みです。ちょっと付け足しの話など書いた後、新作に入つて行きたいと考えています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5946c/>

小さな祈り

2011年7月23日03時21分発行